

---

# くろやみ国の女王

やまく

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

くろやみ国の女王

### 【Nコード】

N89110

### 【作者名】

やまく

### 【あらすじ】

いきなり「統治してください」ってアンタ・・・殴るわよ？ 家を焼かれ殺されかけ、恋人とも離れ離れになってしまったファム。助けてくれた銀色の精霊に案内され、彼女は地の果ての国の女王となる。

現在は毎週日曜日に【本編】もしくは【番外編】を更新しています。詳しくは活動報告をご覧ください。

## 序幕（前書き）

さわりです。

## 序幕

火の跡がまだ熱をもっているようだった。

包帯を巻いていない方の手で触れると、肌の感覚はなかった。

「どうぞ、こちらです」

「ちゃんと跡は残らないのよね？」

暗がりの中、先を歩く相手に向かって声を投げかけた。

「もちろんです。ついでお気に召さない箇所を整形する事も出来ますが」

「結構よ。それでも自分を気に入っているの。さあ、治療室へ案内して」

見た目も変わらない。何も変わらない。けれど私はここで新たに生まれかわるのね。

明けられた扉の先の、人工的な明かりが目についた。そして、暖かく優しい姿が脳裏によぎった。

そんな時間は経ってないはずなのに、ひどく懐かしく感じた。

「さようなら」

一筋の涙をふりはらい、彼女は一步を踏み出した。

## 序幕（後書き）

自分にハツパかけるつもりで書いて載せましたです。  
ハッピーエンドなファンタジーを予定しています。

## 転がり込んで来た銀色と炎 1

それは二日前のこと。

その時はとんでもない事でも、後になって考えてみれば、ただの始まりに過ぎなかったというのは良くある話。

なにがどう転ぶかなんて、誰にだってわからない。私にだってわからない。

「国をひとつ治めませんか？」

「はあ？」

いきなりそんな事を言われたら、誰だって冗談だと思っわ。

新手を越えてひねりすぎたキャッチセールスなんて、誰もひっかからない。怪しすぎるので無視して通り過ぎた。

バイトを終えて帰り道、まだいた。路地の角によりそって、じつとりとこちらを見ている。

「あのう…国を…どうかと…そのう」

「いまだきもつとマシな話し方があるでしょうに。アンタ野良精霊？ 私になにか用？」

最初の勢いもなく、もじもじしている相手は精霊だった。成人男性ほどの身長に、すすけた外套とこれまたボロいシヨールで頭を隠している。

言葉を喋るほどに高度なタイプがこんな街のど真ん中にいて、よく捕獲されなかったものだわ。

「ワタシが精霊とわかるのですね、流石は国主さま」

そんな変な格好で平気で街中にいるのって、大抵精霊なんだけどね。

「国主ってどういうことよ？ とりあえずアンタうち来なさい。ここだとどこかの精霊マニア貴族に捕まるわよ」

人目もあるので、さつさと後をついてきなさいと先に歩き出す。

「つ、捕まるとどうなるのですか？」

「詐欺みたいな契約に縛られて使役されるか、分解されて人工精霊に改造されるんじゃない？」

「ひい！」

… ホントよく無事だったわね、コイツ。

「ここが国主さまのおうちですか」

「そうよ、平民階級の区画の二階建ての家。愛すべきマイホームよ。そして両親が幼い頃に死んでしまった私の唯一の居場所。」

「さつさと入んなさい」

ほいほい他人を入れはしないけれど、「精霊にはやさしく」というのが我が家の家訓なので、野良精霊を一階の食堂に案内した。野良は緊張しているのか、座ると縮こまって大人しくなってしまった。

私は自分用にハーブティーを淹れて野良精霊の向かいに座った。

「なにか食べる？ あとそのシヨール汚いから外してくれない？」

「し、失礼しました。食べ物… 結構です」

慌てて取り外されたボロシヨールの中から出て来たのは銀色だった。銀髪に、銀色の目しかついていない仮面がついている。仮面の鼻と口に穴がない以上、人間であるはずがない。

「銀色なんて初めて見たわ。それにアンタ、顔が無いなんてかなり古い精霊なのね」

「ありがとうございます…」

この意味不明な返答はまさしく精霊ね。

「で、私になんの用なの？」

「あの…あなたにワタシの国を統治して頂きたいのです。もう、土地の気脈が流れなくなつて随分と経ち、崩壊の一手手前なんです」

「…まったく話がみえないわ。それってどこの国よ」

「かつては暗病国あんびよこくと呼ばれていました」

「めちゃくちや陰気くさい名前ね…」

とつくに滅びた国の、頭が飛んじやつた生き残り精霊かもしれないわ。私がどう説得して追い返そうかと考え始めたときに、玄関の呼び鈴が鳴った。

「ああ！ もうヴィルがくる時間だった！ アンタここにいていいから、続きは後でね！」

慌てて私は部屋に行き、鏡で顔を確認（決めメイクではないのはこの際仕方ない）、お気に入りのワンピースに着替えて玄関に走る。食堂の銀色はもう視界に入らない。

「ヴィル！」

「こんばんはファム、ちょっと早くきてしまいましたか？」

「ううん、待ってたわ！さ、行きましよう」

ヴィルの腕に抱きついて外へ向かう。

「おや、今日はあなたのお家に入れてくれないのですか？楽しみにしていたのに」

「外でご飯を食いたい気分なの！五番街に気になるお店があるのよ」



「またお酒が充実した居酒屋ですか？」

「そうよ。あなたの得意な高級酒は無いけど。嫌かしら？」

笑顔で言うと、彼はくすぐったそうに笑いかえしてくれた。私は彼のこのやさしい笑顔が大好きだった。

「いいですよ。また貴女のとっておきの飲み方を教えてください」  
この時はヴィルと笑いあえるだけで私は幸せだった。ただそれだけでよくて、それ以上のものなんて欲しいと思っていなかった。

それから美味しいお酒と美味しいご飯を食べて、笑いあって、夜の街を手をつないで歩いて…

「あなたにもつと触れてもいいですか…？」

かすれた声で耳元にささやかれて、私はどきまぎしながらうなずいた。

今考えるとそこへ向かって誘導されていたとしか思えないタイミングで遭遇した高級ホテルで、私たちは夢のようなひとときを過ごした。

「次は五日後に迎えに行きますから、絶対に家にいてくださいね」  
そう言ってヴィルは私の手にやさしく唇を落とし、仕事があるからと先に帰った。

一人残った私は幸せな気持ちに浸りながら身支度をして、高級ホテルを出た所で軍警察に捕まった。

## 転がり込んで来た銀色と炎 1（後書き）

話のペース早いかな？

ひとつの話をどれくらいの数にするか、さぐりさぐりです。

分かりにくい部分などあれば改善＆文章の追加をしますので、ご意見お待ちしています。

11 / 16 : 誤字修正

11 / 25 : 単語微修正

## 転がり込んで来た銀色と炎 2

連れて行かれた先は警察の建物ではなく、大貴族のものと思われる大きなお屋敷だった。

そこで表情も言葉もない軍の警察隊に囲まれて、見知らぬ貴族の中年男性が私を待っていた。金の刺しゅうの入った豪華な上着、でも黒い布で紋章の部分は隠されていた。

「君は今ヴィル氏とつき合っているのかね？」

「そうです…彼に、何かあったんですか？」

私がそう言うのと中年男性は鼻で笑った。相手を見下す、嫌な笑い方だった。

「何も無い…いや、これからあると言っべきか…。おじょうさん、君は彼がどの階級にいる者か知らんようだな」

知らない。私はヴィルが何者なのか知らなかった。

街で偶然知り合って、いつも街で待ち合わせたり、家に迎えに来てもらって会っていた。

幸せすぎて、知らうとも思わなかった。

「知らないのなら知らんままでよろしい。だが事情があつてね、君と別れたいと言って私に頼んで来たんだ」

言われた事の衝撃よりも、まず先に涙が出た。静かに、傷から溢れ出る血のように。

目の前にいる中年男性は明らかに上級貴族だった。言う事にどれ

だけ真実が含まれていようと、とにかく私に彼と縁を切れと言っていることは理解出来た。

「かれと…ヴィルと話をさせて下さい。それで納得できれば、彼の元を去ります」

枯れた声で言いながら更に涙があふれた。靴のつま先に雫が落ちる音が聴こえた。けれど、齒を食いしばって目線は相手から外さなかった。

脳裏には（「五日後に迎えに行きますから、絶対に家にいてくださいね」）という、数時間前に聞いたばかりの彼の声が蘇った。

「残念ながらそれはできない。彼はもう君とは会わないと言っているんだ」

中年男性は例の笑い方をした。私は直感的に相手が嘘をついている事を知った。

私にはまったく勝ち目が無かった。今ここで反発すれば、脅しという名の危害が襲ってくる可能性が高い。私にも、彼にも。

「わかりました。もう会いません。それが彼のためになるのなら」「ものわかりが良くて助かるよ。しかしこの街にいる以上、どこかではったり会うかもしれないね」

目の前の中年男…もういいや、中年デブオヤジは、にやついた顔のまま召使いを呼び、封筒を握らせて来た。私は気色の悪さに手を振り払いたいのを我慢し、震えた。

「手切れ金と、立ち退き金、それに国を出る旅券もサービスしておいた。君はまだ若いんだからどこへでもいくといい」

優しい口調でえらい侮辱をくれたものね。

私はそれから一言も発さずに、家に帰った。分厚い封筒を持って。家に帰ると銀色の野良精霊はいなかった。

やはり勘違いだったのねと、一息ついて、封筒を食卓の上に置き

っぱなして、甘いハーブティーを飲んで、井戸に顔を洗いに行った。それから部屋着に着替えて、一眠りしようとベッドに入っただけで、どまるで寝付けなかった。

もやもやとしたものがまとまらなくて、結局起きて日に焼けた壁紙を眺めていると、窓の外に金色の小鳥が飛んでいた。ヴィルの精霊だわ！

急いで窓をあけると、金色の小鳥は足で掴んでいた小箱を私の膝の上に落とした。空けてみると、黒い石がはめこまれたペンダントと、手紙が入っていた。

“愛しいファム

このペンダントをいつも身につけていてください。危険から貴女を守ってくれるまじないをかけてあります。どうか無事で。五日後に待っていて下さい。絶対に迎えに行きます。あなたのヴィルより”

嬉しくって、涙が出て来た。彼は知っている。そして私を案じていてくれる。金色の小鳥が飛び去らないように押さえつけながら、私はあわててヴィルに返事を書いた。

“大好きなヴィル

ペンダントをありがとう！知らない貴族のおじさんと会ったわ。五日後に会うのは危ないかもしれないわ。あなたの身の回りにも危険が迫っているかもしれない。お願いだから気をつけて！愛するファムより”

慌てて書き上げた手紙と、身につけていた指輪をハンカチでくる

んでキスをひとつ落とし、金色の小鳥に持たせた。

「押さえつけてごめんね、急いでたの。また荷物運んでね」

頭を軽くなでると気持ち良さそうに目を細めて、金色の小鳥は開いたままの窓から飛び立って行った。

それから私は動き回った。

まずバイト先の花屋に行き、五日間のお休みを貰って、帰り道にパンやチーズに卵、干し野菜などの保存のきく食べ物を買い込む。

それから家じゅうの大事なものをかき集めて、もしも早くにヴィルが来てくれた時にいつでも出かけられるよう、準備をした。

ひととおり思いつくことをやってしまっ、とっておきのジャムをパンに塗ったものと、買ってきたプリン、バニラを効かせたホットミルクでお腹を満たして、これまたとっておきのエッセンシャルオイルでボディマッサージに精をだした。

そしてベッドで深く眠った。

ヴィルがくれたペンダントを握りしめながら。

## 転がり込んで来た銀色と炎 2（後書き）

まだまだ前哨戦。  
導入部分です。

描写が少ないのも前哨戦で導入部分だからです。  
（キリッ

### 転がり込んで来た銀色と炎 3

最悪の寝起きだった。

まずは騒がしいな、と思い、目を開けると全てが真っ赤だった。そして煙。

「火事だー!!」

外からの声に、うちが燃えているのだと気付いた。

「中に人はいるか!？」

「っ!!」

慌てて叫ぼうとして、思いっきり煙を吸ってしまった。喉が切れるようなひどい咳き込みに耐えていると、また外から声が聞こえた。「この家の若い娘はもう逃げ出している。このまま燃え尽きても平気だろう」

私はここにいるわよ! 何言ってるのよ!

「でも万一ということも…、そ、それに、延焼もあります! はやく消火を!」

それからまたあちこちで炎が盛んになり、外の声は聴こえなくなってしまうた。

私は急いで一階へ降りた。

意外な事に、一階の方がまだ燃えている部分が少なかった。

慌ててまとめていた荷物を肩掛けの鞆に詰め込んで、私は裏口から外へ飛び出した。

裏庭は無事で、私が大事に育てていた花達も無事だった。思わずほっとした瞬間に、それはやってきた。



「あぶない!!」

声に驚いて見ると二日前に見た銀色の精霊だった。

「うしろです!」

振り向くと、炎に包まれた家の二階が崩れてくる瞬間だった。

「…さま、国主さま、国主さま!」

「うん…」

「分かりますか?体に痛みを感じますか?」

「ん…」

「国主さま! しっかり! 体の感覚はありますか!?」

わんわんと響く声に目を開ければ、ボロシヨールをかぶった銀色精霊の人間味の無い顔がドアップに迫っていた。私を抱きかかえてくれているみたいだった。

「痛いわ、体の右側全部が」

「ちよつと間に合いませんでした。歩きますか?」

このズレっぷりが…ホント、精霊ね…

「なんとか…、うつく、歩くわ…」

足は折れてないみたい。立ってみたけれど三步ほどで倒れかけて、銀色精霊に抱き抱えられた。

「街の救急隊がすぐそこまで来ていますよ。呼んできます」

「おね、がい…」

裏庭の奥の方に座らされて、銀色の精霊は家の表へ向かっていった。

ぼんやりした頭で見下ろすと、体の右半身がひどく焼けただれて  
いるのが見えた。服なのか皮膚なのか分からないけれど、赤くて黒  
い…どろっとして…

「いたか」

見上げると、相手は救急隊ではなく絶望だった。

軍警察の制服。うつすら笑う男達。その後ろには焼け落ちていく  
マイホーム。

アンタ達が私の家を焼いたのね。

「しぶとく生き延びたのか。悪いが、息の根を止めさせてもらっ  
た。ああ、さようなら」

「殺さないで。死体は見たくないの」  
私は言った。

「見ずに済むさ。すぐにな」

さようなら、我が家

「アンタの国に行くわ。だから私に死体を見せないで」

「一体何を言っている？」

虚をつかれた顔をした制服の男達の背後にいる、銀色が答えた。

「かしこまりました。殺しません」

銀色の両手は鋭く変形して長い刃物のようになっていて、今にも  
目の前の人間の首を刈ろうとしていた。

「な、なんだこいつ！」

振り向いた制服の男達は人間ではないと気付いて動揺していた。

「ですが、かわりに」

銀色はそう言って、右手の指先をさらに細く、針のように変形さ

せて素早く動かした。

男達は次々と倒れていった。

「脳幹に細工をしました。これでこの場所での記憶を封じました」

「なかなか出来るじゃない。見直したわ」

私は引きつる痛みに耐えながら、こちらへ向かって歩いてくる銀色の精霊に向かって微笑んだ。

「アンタの国、私の怪我治せる？」

「もちろんですとも。リハビリひとつせずに済みます。皺ひとつ残りません」

精霊の言う事はどこまでその通りなのか、いまいちあてにできないのよね

銀色の精霊は私を抱えたまま、左手の指先を針のように細くして、私の首筋に突き刺した。

「一時的に痛みの感覚を止めました。いそぎましょう」

「待って、ペンダント……」

ヴィルがくれた、お守りが見あたらなかった。

「先ほど二階で何かの光の術が発動していました。おそらくそれでしょう。国主さまが火につつまれても無事だったのはそれのおかげです」

そっか…もう役目を果たしてくれたのね。

役に立たなくても手元にあって欲しかったけれど、探す余裕もないわね…

「追っ手がくるかもしれない。急ぐわよ」

「はい国主さま」

「ファムよ、そう呼んでちょうだい」

### 転がり込んで来た銀色と炎 3（後書き）

ガイドラインを読んで、怪我の描写ちょっと抑えました。

もろもろの設定やキャラクターの外見などについては、もう少ししたら出てきます。

11/17 誤字修正

## 地の果てと曇り空 1

銀色の精霊は、焼け出された私と私の荷物を抱えて建物の屋根の上をひた走っていた。

なんでもない時にはこのリスのようにしなやかで、すばやい動きは楽しめたかもしれないけれど、今はいつ傷み止めが切れるかドキドキしながら大人しくしていた。

「これ、どこに向かっているの？」

「街の外です。そこに転移門を設置しました」

昨日いなかったのはそれが…

「じゃあちよつと寝るわ…門までついたら起こしてちょうだい」

「はい、ファムさま」

一度、街の外壁付近で異様に空高く飛び上がった気がするけど、眠くて覚えてないわ。

「ファムさま、着きました。転移門の前です」

目を開けると、丘の上だった。

私が寝ているあいだに銀色のが応急手当をしてくれたらしく、焼けただれた私の右足と右腕は包帯がきつちりと巻かれていた。痛みもかゆみも感じないけれど、感覚もない。右腕は動かない。

立ち上がって周りを見ると、さっきまでいた街はおろか、街を含めた都市全体が見渡せる場所だった。私が育った区画も見える。あ、

うちの火事の煙も…

しばらく風に吹かれながらその光景を目に焼き付ける。

「さあ、私を連れていきなさい」

もうどこへだって行行ってやるわよ。

ファムと銀色の精霊が街から消えて半日後…

ファムが会った中年男性、れっきとした貴族でナールデン公爵と  
いうのだが、彼は今汗をかきながら情報を集めていた。

「む、娘の生死はどうなったんだ？病院には運ばれてないんだろう  
？」

「部下達の意識が戻らない事には…。しかし火災現場に大量の血痕  
がみつかったそうで、おそらくは…」

「うつむ、ひとまず失踪扱いにしておくか…。あの方が気付いて調べ  
始めるまえに書類は全て燃やしておくように！」

「それは興味深い、なんの書類ですか？」

「それはおまえ…ひつ…。あなた様は」

「あなたを拘束します。全て教えていただきますよ」

近衛兵達がナールデン公爵を取り囲んだ。

「連れて行きなさい。そうです、次は軍警察へ向かいます。すぐに  
です」

丘のふもとには小さなほこらがあつた。旅人がちよつと拝むかする程度の、白い岩を組んだ粗野なものだつた。

「これは妖精のほこらなんです。これの裏に転移門を作りました」  
「妖精つて…アンタ知り合いなの？」

「昨日話しをつけました。場所をお借りしているだけですよ」  
妖精は見た事ないのよね。いつか会つてみたいわ。

ほこらの裏の地面には、手のひら大の白いすべすべした石が埋められていて、表面には複雑な文様が彫刻されていた。

銀色はしゃがんで文様の一部をさらさらと指でなぞると、立ち上がつて私と荷物を両腕に抱え上げた。

「ではしばらく目を閉じていて下さい。転移に慣れないうちはこれを齧<sup>かじ</sup>つていて下さい。いきます」

銀色の精霊が差し出して来たものは濃い緑色をした葉っぱだつた。慌てて目を閉じてくわえてみる。

「まっず！　につがいし辛いし、土みたいだし、なによこれ！」

「着きました」

「えっ」

目を開けるとそこは地の果てだつた。

見渡す限りかさついた大地。枯れているのかしおれているのか分からない草がまばらに生えている。空は土気色した雲に覆われ、青



みがかった風が吹いている。灰色の世界だった。

「あ、あつという間なのね。さっきの葉っぱは何だったの？」

「はい。先ほどの葉を噛むことによって、人間の意識を集中させ、転移の失敗率を減らすことができます」

不味さに意識を集中させるって…誰が考えついたのかしら。腹立つわね。

「それではファムさま、まずは体の治療をしましょう」

そう言って銀色の精霊は私と荷物を両腕に抱えたまますたと歩いて行った。

行く先に視線を巡らせると、巨大な鉄鉱石の固まりのようなものがどーんと建っていた。

「我々が向かっているのがファムさまに座して頂く王城です」

「優雅さのかけらも無い無骨な建物ね。広そうなのは楽しみだけど」

「城の中には他の国では失われた過去の文明の遺物や、施設が沢山保管されています。それであれだけの大きさがあるのです。地上142階と、地下にも500階ほどあります」

「すごいよね…ホントここだよ…」

城の入り口にはあらたな精霊が立っていた。

背格好は私を連れて来たのと似ていたけれど、ボロボロではない、神官のように布で全身を覆うような、変わった服を来ていた。顔も布がぐるぐる巻かれている。色はくすんだ白と銀だった。

「やあ、おかえり。見事連れて来てくれたね。そして国主さま、ようこそ」

「ただいま戻りました」

「どうもごきげんよう、さあ細かい挨拶は後回しにして、さっさと私の怪我を治療してくれないかしら」

「これは…どうされたのかな」

布で巻かれた顔でも一応見えているらしく、銀色の精霊その2は私の様子に驚いていた。

そういえば、一度も鏡を見ていなかったわ。私の顔、どんな事になっっているのかしら。

「出発直前に火事にあわれました。ぼろぼろになってしまったので体組織を崩さないよう、包帯で固定しています。半身の痛覚も止めています」

「それは大変だ。すぐ実験室…いやいや、治療室へ行きましょう」

「痛覚を止めての転移門の影響も確かめてみましょう」

「そうだね、記録を取って検証してみよう」

こいつら…ちゃんと治療してくれるのか不安になって来た…。

## 地の果てと曇り空 1（後書き）

そして序幕のシーンにつながるのです。

「お加減はいかがですか」

「ええ、けっこうよ。腕も足もうごくようになったわ。ところでこのジュース、味が変なんだけど」

治療室に案内されて、私は怪我の治療中。

といつても痛みも苦痛もなくて、

変な光を浴びせられたり、

変な音のする箱の中に入れられたり、

変な水槽に入れられてプチプチ音がする細かな泡に包まれたりと、不思議なものばかり。

そして泡からでてみると、何故か着ていたぼろぼろの服がなくなり、火傷してただれている箇所は一面に泡が固まってくつついていった。洗い流したかったけれど、この泡が火傷した皮膚を作り替えてくれているらしい。

泡がとれるまでのあいだ、寝椅子の上で毛布にくるまって大人しくしていると、私を連れて来た方の精霊がグラスに入ったオレンジ色のジュースを持って来てくれた。

「これはいま再生されている肉体のために必要な成分が入っていますので、普通のものとはちよつと違う味なのです。あのピッチャー分すべて飲み干して下さいね」

見ると、寝椅子の横のテーブルの上にガラスのピッチャーがあり、バケツ一杯分はありそうな量のジュースが入っていた。

「うえー、舌がおかしくなりそうだわ」

「ファムさまの怪我についてですが、呼吸器官の炎症と広範囲の火傷と打撲、右腕は裂傷と数力所の骨折、さらに足の指も三本ほど骨折していました」

「よく死ななかったものねえ」

足の指、折れてたのね。歩けたから気付かなかったわ

「あと半日もすれば全て元の通りになりますよ、ファムさま」

元の通りになんてならないわよ。心の傷はまだどくどくいつて血が流れてる。

グイル、どうしているかしら。

でも、もう帰れない。帰ればまた中年オヤジに呼ばれ、今度こそ殺される。

マイホームは消し炭になっちゃった。

ほろりと、また涙がこぼれ落ちた。

そして、怒りがこみあげてきた。

ふざけるんじゃないわよ！

私が一体何したって言うのよ！好きな男とただじゃやない！なのになんであんな蔑まれた目で見られて、家に火までつけられて！

大人しく引き下がってろっての？バカじゃないの？

私だっていっぱしの女よ？学も才能もない、平民だけど！なめんじゃないわよ！

国のひとつやふたつ、繁栄させてやるうじやないの！腹が立ったら、ふつつつと気力が蘇って来たわ！

「やってやるわよ！ 女王さまだか女帝だかしらないけど、なつてやるわよ！」

私は叫びながら立ち上がった。

目の前の銀色の精霊たちは嬉しそうに手を叩く。

「その意気ですファムさま」

「それで、ここは一体どこなのよ！」

…結論からいうと、私はこの国を知っていた。  
暗病国という不気味な名まえは知らなかったけど。

それは子供の頃にきかされた昔話にでてきた、闇の国。  
子供が悪さをすると、連れていかれ、

病気になった大人が最後、連れて行かれ、

悪い精霊が沢山いて、太陽が大地を照らすことがない、この世の  
最果て。

物語に出てくるほとんどの悪役や怪物が生まれたといわれる国。

そう言い伝えられてきた、幻の国。

「大昔は栄えていたんです。でも瘴気が渦巻いて生き物はどんどん減って行っただんです。精霊も随分減って、いま稼働しているのはワタシたちだけになってしまいました」

「悪い印象と存在だけが世界に伝わって残っているのね…」

こんなになんにも無いのに国だなんて…

「しかも、国民ゼロ…」

「えーと、二つほどあちこち放浪しながら生活している集団が確認されています」

それは国民というより原住民と呼ぶんじゃないの？

### 地の果てと曇り空 3

「国民どころかまともに生物も住めない土地で…それでどう統治しろつてのよ。私、神でも聖人でもないわよ！」

「大丈夫です。この役目はファムさまにしか出来ません」  
えらい自信ね。

銀色の精霊達に案内されたのはかなり広い部屋だった。

「こちらが王の間になります」

「大きな市場が開けそうね」

天井を見上げると、すごく高くて、なにか細かな装飾がされているけど、よく見えない。

内装はすべて同じ暗い色の大理石で作られているけど、良く磨かれて光っているのであんまり陰気くさくない。

感じるのは、荘厳さと静けさと、生気の無さ。

「大きな窓が沢山あるのはいいことね。晴れたら気持ち良さそう」

「ここ700年ほど毎日曇りです」

「…」

「ファムさま、こちらにどうぞ」

見ると、部屋の奥の壁際が三段ほど高くなっていて、その中心に椅子があった。

部屋と同じ素材で出来ていて、まるで床から生えているようだった。

ゆっくりと王座に座つてみると、全身がほわつと暖かくなるような感じがした。

「これでこの国の国主、王として認められました」  
顔を布で巻いた銀色の精霊が言った。

「え、いまだで終わり？ あっけないのね」

「認定されなければ座った瞬間にシヨックで気絶します」  
顔が仮面で覆われた銀色の精霊がしれつと言った。

「アンタ達、よくも説明無しで座らせてくれたわね…」

「即位おめでとunggございます」

これからこんな風にイラツとさせられ続けるのかしら、私。  
しかも、いまだに裸に毛布一枚のままなんですけど。

「これでこの国は瘴気が払われ、荒れた大地も復活するのです」

私は窓から空を見上げた。どんよりとした曇り空のままだった。

「払われてないみたいよ？」

「時間をかけて行われます。そのためにも、ファムさまには一日の大半をこの王座、最低でも王の間で過ごしていただきます」

「なんでよ？」

「この王の間はこの土地の瘴気を害のないものに変換し、王座に座る者がそれを昇華する仕組みを持っています。ファムさまの体はこの天地万物の気脈にとっても柔軟に出来てるのでこれに対応出来るのです」

「はあ、ソウナノデスカ」

うん。よくわからないわ。

「これについてはそのうち実践をとおして理解していただきますしよ  
う」

「そうですね」



あ、コイツら説明投げたわね

私が空腹を訴えたので、話の続きは食事をしながらということになった。

といっても私一人が食べてるだけなんだけど。

王の間ほどではないけれど、これまた市場が開けそうな広さの食堂に案内されて、具無しコンソメスープと、私の荷物に入っていたパンとチーズを食べる。たぶん昼ご飯ね、これは。

ちなみに服は治療が終わるまであきらめたわ

「己の体の命脈だけでなく、気脈までも自由に扱える人間というのは本来ありえないのですが、時々生まれるのです」

「そんな事ができるなんて初めて知ったわ。聞くけど、時々生まれるなら他にも声かけた人いるんじゃない？」

私がスープを一口すすって言うと、

「声をかけてもまともに相手してもらえず、ちゃんと話を聞いてくれた方はこの500年でファムさまだけでした。ファムさまはおやさしい方です」

仮面をつけた銀色その1（私を連れて来た方ね）が嬉しそうに言った。

あれでも500年頑張った結果なのね…アンタ

「しかもこの国と適合する属性の方はなかなかいないのです。その点、ファムさまはばっちりです」

顔に布を巻いた銀色その2（城で待っていた方）が私を指差した。行儀悪いわよそれ。

「見事な闇色の髪で」

「黒髪って、やっぱり闇とかなのね…」

たいして気にしてこなかったけど、珍しいのよね。黒髪。私自身は目立てるから気に入っているけど。

「はい。ちなみに我々は闇の精霊です。人は属性色がそのまま体に出ますが、精霊は性質と反対の色が現れるのです」

「ややこしいわねえ」

「じゃあ、説明をまとめちゃうと、この国は土地とお城があるだけで、ほとんど国として成立していない状態。そこに私が国主となって王の間でこの国の瘴気を払うってわけね」

「ご飯を食べて元気が出たので、今まで聞いた内容をまとめることができましたわ」

「おおまかにまとめるとそうなります。あの王座に座られた瞬間から、すでにこの国はファムさまのものとなっています」

「私の好きにしていってこと？」

「そうです。過去の兵器を使えば世界に覇をとなえることもできますし、世界一の財を築くこともできますよ」

「なにそれ、世界を支配したって管理が大変じゃない。兵器なんて無骨だし、街も店もないんだからお金も必要ないわ」

私の望みは、ここが私のマイホームになることよ。

「でもそうね、せつかく生まれ変わるのだから、新しく名前をつけるわ」

闇の国と、それに似合う黒髪の女王！ あたらしい門出よ！

「この国はこれから『くろやみ国』よ！ ちなみに、“くろやみ”は国字表記の“黒闇”を使わないでちょうだいね」

「どうしてですか？」

「そのほうが可愛いじゃない」

「……」

国旗は黒いつちぢなんてどうかしら？

### 地の果てと曇り空 3 (後書き)

ファムさん、悪ノリ開始。

国の名は漢字(「国字」表記が一般的なのです・・・)

2010/11/25 誤字修正

2011/05/30 数字表記修正

## 精霊と国土 1

「アンタ達は個別に名前あるの？」

銀色の精霊たちはお互いに顔を見合わせた後、

「精霊同士でのよび名はありますが… といいます」

と、銀色その2が答えた。名前を発音してくれたらしいんだけど、私には聞き取れなかったわ。

「じゃあ私の配下として、人間に発音出来る名前を貰ってくれない？」

「はい」

「よろこんで」

私は精霊達をしばらく眺めて、名前を決めた。

「まず私をここに連れて来た方がレーヘン」

「はい」

レーヘンがうなずいた。

「私を出迎えた方がベウォルクト」

「わかりました」

ベウォルクトがお辞儀をした。

「じゃあレーヘンとベウォルクト、これからよろしくね」

そう言って私が両手を差し出すと、レーヘンとベウォルクトはおずおずと握手してくれた。

あら、もしかして王さまが配下に握手求めるのって変だったかしら？

「ずっと気になっていたんですが、ファムさまは精霊についてお詳しいですね。ワタシをひと目で精霊と見抜かれましたし」

レーヘンが言った。

「うちによく現れたのよ、精霊。だからいろいろ慣れちゃって。両親が精霊関係の仕事をしていたらしいの。二人とも私が子供の頃に死んじゃったから詳しくは知らないけど」

そのうち調べようかと思っていたけれど、全部燃えちゃったわ。

「だから属性とかのあんまり真面目な知識はないの」

まあ人間と言葉を交わせる精霊のほとんどがすつとぼけた性格してるってくらいは知ってたけれどね…。

「ねえ、アンタ達人間の姿にはなれないの？ 仮面と布巻いた顔じや人形を相手している気分になるわ」

ベウォルクトがちよつと考えてから答えた。

「じつはこの布の下は人間の姿なんです…大昔の人物の模造ですが」

「え、そうだったんですか？」

レーヘンが驚いた。

アンタも知らなかったの

「もしかしてベウォルクトの方が年上なの？」

「我々には年齢の概念はあまりないのですが…そうですね、ワタクシの方がかなり古いです」

聞けば、ベウォルクトは数千年単位で、レーヘンは千年ちよつとだそうよ。

私がこの国の最年少ね。

ちなみに19歳よ。

「ワタクシは大昔の尊敬していた王の姿を借りています。ですが人の体はメンテナンスが面倒なので、こうして保存布で覆っているのです。もしご覧になりたいのでしたら、数日お待ち下さい。準備しますので」

「今その布の下はどんな状態なのよ？」

「ずっと放置していたので色々溶けて癒着してます」

聞かなきゃ良かったわ…

「レーヘンは？」

「ワタシは持っています。人間と同じ外見を持つには、人間の手伝いが必要なのですが、ワタシが生まれた時はすでにこの国にはほとんど国民がいませんでした」

ちよつとうつむき加減でレーヘンが言った。

「ファムさま、レーヘンの姿を創ってみませんか？ 王座での力の使い方の練習として」

ベウォルクトが突然言い出した。

「ワタシは実験台ですか。よろこんで！」

なんで実験台で喜ぶのかしら…

「では王座に座り、大まかで結構ですのでイメージして下さい。あとは王の間が補正してくれます。言葉に出すとさらに具体的になりますよ」

「わかったわ。ちなみに、アンタの希望はある？」

私がレーヘンに尋ねると、レーヘンは両手を握りあわせて祈るように言った。

「はい！ どうか筋肉隆々で、大熊と見間違えるような雄々しい猛者の姿に」

「却下！」

「どうしてですか！」

「そんなの、むさくるしいじゃないの！ はい、決めましたー。細身の体格で銀髪が似合う、顔の綺麗な青年！」

「わっ」

私がそう宣言すると、レーヘンの全身が一気に黒くなり、それが溶け消えるようにして新しい姿が現れた。

肩先にかかる程度の流れるような銀の髪、中性的な輪郭にすらりとした鼻梁と薄い唇。白くきめ細かな肌。そして銀のまつげにふち取られた、うつすらと青みがかった灰色の瞳。穏やかな月夜を思わせる美しい青年が現れた。

「んーいい出来。この顔なら側にいるだけで良い癒しになるわ」

私にここにこしながら近寄って頬をなでると、レーヘンは眉間に皺をよせてこっちを睨んできた。

「どうして猛者はだめなんですか……」

落ち込んだ声を出す。それもまたイイ。



精霊と国土 1（後書き）

レーヘン＝雨

ベウォルクト＝曇り

です。オランダ語。

今まででてきた人名や爵位も同じくです。

精霊と国土 2 (前書き)

いまだ建国初日

窓の外が暗くなって来て、私は王の居室に案内された。

ずっと曇り空だからいまいち夜になった気がしないわね。

ベッドの上で持って来た荷物の中にあった、花柄ワンピースを見て、私はある事を思いついたので早速ベウオルクトに相談してみた。どうしてベウオルクトなのかというと、なんとなくこっちの方がまともな返答してくれそうだったから

「花ですか」

「そう。うちの焼け跡から花を持って来たら、植える場所ってあるかしら？」

怪我をしてあまり覚えてないけれど、裏庭の花達は無事だったはず。青空も夕日もないんだから、花があればちょっとは楽しい気持ちになるかもしれないわ

「外の土で育てるのはまだ無理ですが、城内に植物栽培施設がありますから、そちらで育てる事ができますね」

と、ベウオルクトが言ってくれた。よかった！

「それならばワタシが行ってきましょう」

あら、いたのレーヘン。

「そうだね、こういう事はレーヘンだけで行った方が早いし、確実ですよ」

「じゃあレーヘン、お願い、一株だけでもいいの。無事に生き残っていて、まだ花の咲いてない苗だけでいいから、根のまわりの土ごと掘り返して持って来て欲しいの」

「わかりました。ファムさまにもらったこの姿がさっそく役にたちますね」

そ、そうね！本当はただ私の目の保養のための姿なんだけどね

「でも髪は隠していったほうがいいわ。銀髪は目立つもの」

「そうですね」

レーヘンは頭をひと振りすると、あっというまに黒髪になった。

「短時間でしたら色をかえられます。ファムさまと同じ色にしてみました」

レーヘンの綺麗な顔はさっきまでほとんど無表情だったのに、もう表情をつくるのに慣れて来たらしく、目元が微笑んでいる。

ああ、良い顔には何色も似合うのねえ

「これなら親戚の者が花を引き取りに来たって言えるわね。いいこと？まず知らない人について行かない。誰かに何をきかれても答えちゃだめよ。とにかく苗をとって来てくれるだけでいいの」

「わかりました。優先すべきは花の苗を確保すること。寄り道しない。知らない人にはついて行かない。それからえーと…」

私が言った内容を指を折りながら数える姿をみていると、なんだか初めてのお使いに子供をだす親の気分になってきたわ…

ヴィルへの手紙も頼みたかったけれど、また今度にしておきましよう。

焼け跡となり、廃墟と化した家の裏庭に黒い髪の男がいた。

「何をしている」

「あ、こんにちは」

男は振り向いた。十人が見たら十人が振り返るような、稀に見る端正な顔立ちをしていた。

「黒い髪という事は、彼女の親類か何かですか？」

「ええっと、そうなのです」

どこか遠くを見ながら男が答えた。

「実は花の苗を貰いに来ました。このまま枯れてしまうのはもったいないので」

「そうですね、花のことはかわらないですが、実はこの家がもう二度と誰にも踏み荒らされる事がないよう、場に強い結界を張っていったんですが、どうやって入りました？」

「それはどうも、すみません。普通に足で入りましたよ」

「それではいくつか質問があります。おまえは何者だ」

数時間後、レーヘンがぼろぼろの姿で花の苗をカゴ一杯に抱えて帰ってきたので驚いた。

「どうしたのその格好！ そんなに苗を持って来るの大変だったの？」

「いえ、苗は簡単だったんですけど、怖い人に襲われまして」

よく見るとぼろぼろなのは服だけで、レーヘン自体には怪我はないようだった。

「やだなにそれ、私が無駄に綺麗な顔にしちゃったのがよくなかったのかも。ごめんなさい」

「いえ、いいんです。ちゃんと苗も秘密も守り抜けましたし」

「そう、それならよかったわ」

わりと平和な街だと思っていたのに、危ない人がいるのね。

精霊と国土 2 (後書き)

レーヘンはおつかい中に二回答えちゃいました。

11/25 誤字修正

昨日はくろやみ国、というかお城の中を案内してもらったわ

なんとこのお城、中に列車が走っているのよ！ 縦にも横にも走ってるらしいの。どんだけ広いのよここは。

「建物の中に列車が走ってるなんて！」

「エレベーターとも言ってますけど、ファムさまには列車の方がわかりやすいそうですね。歩いていると何日もかかりますから、こういった移動方法があちこちにあるんです」

列車を操作しながらレーヘンが言った。

「私本物の列車なんて乗った事なかったわ！これってどうやって動いているの？」

「旧時代と同じ電力です。この城にはいくつか発電施設があり、王の即位とともに現在ほぼ全てが稼働中です。発電方法はまずタービンを…」

ベウオルクトの説明は私には難しかったので、

「今日は見るだけにして、後日勉強して頂きましょう」という事になったわ。

ほかにもお城の動力やらについて見学しながら説明を受けたけれど、私の知らない単語が多すぎてよくわからなかったわ。

それから移動中に薄いガラスのまな板のようなものを渡された。

「この画面に服飾品の画像が出ますので、欲しいと思ったものが出て来たら絵に触れてください」

「寸法は治療時に測っていますから、どれもファムさまのサイズですよ」



レーヘンやベウオルクトに説明を受けながら言われた通りにガラス板に出てくる絵を触って、欲しい服を選ぶと、駅に着いた時に本物が手渡された。なんでも、選んだ画像を即座に知って、その通りに服や靴を作ってくれる部屋があるらしいの。

手持ちの服もほとんど無かったから、これは嬉しかったわ。憧れのレースたつぷりのドレスなんか、挑戦しちやおうかしら

夜は大浴場に案内してもらったの

王の居室にも浴室があるのだけど、同じ階に大浴場があって、熱いお風呂や水風呂、泡が出たり、良い匂いがするものだったり、とっても楽しいの。ベウオルクトがお肌が綺麗になる入浴法を色々教えてくれたわ。

それにしても、発電機を動かすのも、服を作るのも、風呂や部屋の掃除も、誰がしているのかしら

「すべて全自動です」

…ぜんじどうってなにかしら？

この日はとても楽しかったのだけど、後になって思い返すと自分の能天気ぶりに腹が立つ日になった。

そして今日。

昨日ベウオルクトとレーヘンが用意してくれたご飯があまりにも酷かったから、今日から自分で作る事にしたわ

毎食とも塩味のビスケット三枚と具無しコンソメスープって、どこの修道院なのよここは！

台所はどこ、食材はどこよ。

王さまになったのにご飯も自由にならないなんて！

案内されたのは全て金属で出来た調理場で、まったく使われた様

子が無かった。

ベウオルクトとレーヘンがどこからか小瓶や箱に入った調味料や食材らしきものを沢山持つて来てくれたので、ひとまず私がわかるものだけ残して、あとは棚にしまう。

「この箱にこの粉とこの粉と、この液体を入れるとパンができます」  
パンは自分で焼かなくていいみたいね

「パンが焼けるまでにスープを作りたいわ」  
具になりそうな物を味見してみたけど、薬っぽかったり変わった味の物が多かった。

「あんまりおいしくないのね。こっちはぱさぱさしてるし」

「合成食品は風味よりも栄養ですから。そちらはフリーズドライ食品ですから、水で戻して食べるんですよ」

レーヘンがそう言って、袋に書いてある表記を読み上げてくれた。  
「ごうせい？ ふりーずどらい？？ なんだかわからないけど、スープに使えるようなものを鍋に入れてくわよ」

「お茶の葉と食器ですね？ 探してきます」

レーヘンがまた探しに行き、私はぐつぐつと煮込まれている鍋の中を覗みながら自分の状況を整理してみた。

レーヘンと街で遭遇した日の夜にヴィルと会う。帰り道に中年オヤジ貴族に連行される。…これが一日目ね。

朝に帰宅してヴィルに手紙をかく。その日の深夜に家が火事になり、レーヘンに助け出される。…これが二日目。

くろやみ国に移動する前に日が昇っていたから、この時点でレーヘンに会って三日目で、くろやみ国での初日。怪我の治療を受けて、夜にレーヘンに花の苗を取って来てもらった。

昨日は一日城の中にいた。これが四日目。

「つまり、今日はレーヘンに会って五日目、私がこの国に来てから三日目というこね」

最後に会った時、ヴィルは「五日後に」と言った。つまりは、六日目。

明日は、ヴィルと約束した日。

家には帰れないけれど、なんとかしてヴィルに会いに行きたい。せめて私が無事だと伝えたい。

「違いますよ。この国に来て四日目です」

振り返ると、荷物を抱えたレーヘンがきよとした表情で私を見ていた。

「…四日目って?」

私は背後にずっと立っていたベウォルクトを見た。布に包まれていてもその顔は私を見ようとしていない。

レーヘンに視線を戻すと、何か思い出したらしくて、これまた目が泳いで、震えていた。

とおっても拳動不審だわ。

「…どういふことか説明しなさい」

…ちよっとお尋ねしたいんですけど

私がこの国に来て、何日経っているの?

### 精霊と国土 3 (後書き)

設定作り込みすぎて、自分の首を絞めないよう気をつけたい今日この頃です。

11/26：改行と語彙と後書き追加

## 消えない思いと見つからない答え 1

「実は治療器に入られているあいだに少々時間が経っていました…」  
私が掴みかかって脅すと、ベウオルクトはようやく喋った。  
レーヘンが食器を抱えたまま震える、かたかたという音が聴こえてくる。

「…！　そう言う事は本人にちゃんと伝えなさいよ！」

私が治療室に入っているあいだに、何故か一日余分に時間が過ぎていたそうよ。

「数百年ぶりに治療器を動かしたので、ちょっと誤作動がありました…」

「あんまり具体的に聞きたくないけれど、それでどうなったのよ」

「ファムさまの怪我が酷かったために治療ではなく、治療器が誤作動を起こして分解処理されそうになりました。なのでいったん治療器を停止させ、復旧作業にかかっていました。ちなみにその間ファムさまには眠っていただきました」

えらく簡単な調子で言うわね…

「よく…生きてたわね私…」

「ええ本当に」

レーヘン、そこで同意しないでちょうだい。

調理室にはパンが焼けるいい香りが漂っていたけれど、私の心はそれに和むどころではなかった。

ヴィルと会う約束をした五日後は、今日じゃないの！

「私、街に戻るわ」

ヴィルが待っているかもしれないと思うと、いても立ってもいられなくなった。

私が調理室を出て行こうとすると、戸口にベウオルクトが立ちふさがった。

「それはできません」

「どうしてよ！　ちゃんと用事が済めばちゃんと帰ってくるわ！」

「この国の王になるということは特殊なのです。ファムさまは王になられてまだ間もありません。体はこの地の瘴気を受け入れ始めたばかりです。いま城外に出してしまうと体内の命脈が狂う可能性があります。どうか体がなじむまでお待ち下さい」

「…それってすぐに影響出るの？」

「ファムさま？」

「城の外に出て、命脈というのがおかしくなるまで、どれくらいの時間がかかるの？」

ベウオルクトが答えにつまった。

「それは…わかりません。どんな影響がでるかわかりません。危険です」

「今日の数時間だけで良いから行きたいの。帰って来たら大人しくしているから」

「…しかたありません。帰って来たら治療室行きは覚悟されていてください」

ベウオルクトが折れてくれた。

私は自室に駆け込んで、書き物机の上に置きっぱなしになっていたヴィルへの手紙をつかんでポケットに入れると、部屋の外にいた精霊達に言った。

「さあ、連れて行きなさい！」

「ワタクシが行くと目立ちます。レーヘンをお連れ下さい」

「わかったわ。おねがいね、レーヘン」

「はい。ファムさまはこの身にかえてもお守りします」

そう言うレーヘンはいつの間にか黒髪になっており、上は白のシヤツに薄い灰色のベストを、下は細身の濃い色のパンツと同系色のブーツといった格好をしている。これなら街を歩いても違和感無いわ。

ちなみに全部昨日私が自分の分と一緒に作ってもらったもの。寒色系がすなりとした背格好によく似合っているわ。さすが私。

ちなみに私の服は動きやすい薄い色の花柄ワンピース。今日はキヤンバス地の歩きやすいぺたんこ靴でよかったわ。

転移門の上で私はまたあの不味い葉っぱを噛んで、目を開くとそこにはもう見ることは無いと思っていた光景が広がっていた。

「ひとまず私の家に向かってちょうだい。なるべく人目につかないようをお願いね」

「はい。かなり速度をあげて走りますから、しっかり掴まったださい。風が強いようでしたら目を閉じていて下さいね」

レーヘンは前と同じように私を抱き抱えて走り、城壁までくると一気に足だけで壁を駆け上り、最後は蹴って高くジャンプした。

「……っ！」

いきなりの浮遊感に叫びそうになったわ。

それから屋根伝いに駆け抜けて、あっという間に見慣れた場所へ着いた。

私の家は酷い状態だった。

あたたかで居心地のよかった建物の面影がどこにもない、ほとんど崩れ落ちている、ただの黒い廃墟。あまりの痛々しい姿に見てい

ると涙がでてきたので、家に近寄ることはやめて、私は周囲にヴィルの姿を探した。

そこには誰もいなかった。私の家だった場所以外は、いつもと変わらない昼下がりの街だった。白っぽい石畳で、おなじく白く塗られた塀と、木枠と白っぽいレンガ造の小さな家々が立ち並ぶ。平民の住宅街だから、道も狭い上に人通りもほとんどない。

けれど、人がいなさすぎるように感じた。

「おかしいわね…」

「ファムさま、どうもこの都市の北の方にほとんどの人が集まっているようです」

「北？ 北の宮廷広場でなにかやっているのかしら？」

この時期にあるお祭りなんてなかったはずなのに…

一体なにが起きているの？



## 消えない思いと見つからない答え 2

「うちから北の方角にはこの国の王宮があつて、そこに面した広場は宮廷広場と呼ばれているのよ。そこで何かやっているみたいね」  
「様子を見に行きますか？」

「ちよつとだけ見てきましょう」

私は万一ヴィルが来てもわかるように、手紙を燃え落ちた家の門の所にはさんで、宮廷広場の方へ向かった。

レーヘンに抱えられて屋根伝いに向かうと、広場から聴こえる大規模な騒ぎの音がどんどん大きくなってきた。

屋根の上から見ると、広場は人で埋め尽くされていた。みな一同に王宮の方を向いている。

「王宮に何かあるみたいね」

王宮のメインバルコニーから何人か人が立っているけれど、さすがに遠すぎてよく見えないわ。

「レーヘン、下に降りましょう」

「わかりました。体に不調を感じたらすぐに言っして下さいね」

広場の隅に降り立ったとき、足元に号外新聞が落ちているのを見つけて、拾いあげた。

「新国王…」

「どうやら皆さんこの国の新しい王を祝っているみたいですね…フムさま？」

紙に印刷された写真の人物は、私がとても良く知る顔だった。

「まさかね、た、他人のそら似かもしれないじゃない…」

そのとき、法術で拡大された声が広場に響いた。

『国民のみなさん』

ちよつと低くて甘い音。私の、大好きな声だった。

『今日は祝つて下さりありがとうございます…この国の国王となつたヴィルヘルムスです…』

「ヴィル…ヴィルヘルムス王、即位…」

足元が崩れ落ちる音がした。

私は王宮を見上げた。私が待っていたヴィルは、今、あの遠くの、バルコニーに立っている。

人々をかき分けて、前へ進もうとした。

こんな群衆の中で、ちつぽけな私なんて見えるわけがない。

けれど、歩く足が次第に遅くなり、横へそれ、私はうつむきながら広場の隅の路地へ入った。

胸が熱くなり、いきなりこみ上げて来る物があった。

耐えられなくなつて、私は足元の地面に吐き出した。

「げほっ、かはっ」

それは大量の血の固まりだった。

「ファムさま！」

「じ、時間切れみたいね…」

一瞬にして、私の体は震えが止まらなくなり、喉の奥からはどんな熱い血の固まりが溢れ出て来た。

「ゲホゲホッ、と…とりあえず家まで戻るわよ、レーヘン」

焼け跡の家に戻つてくると、私は焼け残った門に背を預けるようにしてしゃがみ込んだ。

「手伝つてくれる者がいます。すぐに連れて来るので、落ち着いて待っていて下さい」

そう言つとレーヘンはどこかへ走つて行つた。

私は時折咽せそうになるのに耐えながら、気持ちを落ち着けるつもりで昨日のやり取りを思い出していた。

お城の案内に疲れたので王の間に戻つて休んでいると、ベウオルクトが丸い球体に絵と文字が沢山書かれているものを持って来た。手渡されて私も持つてみると、両腕に抱えるほど大きいのに、とても軽かつた。

「これは世界地図です」

触つてみるとただの球体じゃなくて、山や平野のような地形が凹凸で再現されている。

「私、世界地図つて初めて見たわ。へえ、この世界つてこんな丸い形しているのね！　なんでみんな落っこちないの？　空や雲や太陽はどこにあるの？」

「…そちら方面については、また追々説明します」

なんだか今ベウオルクトに可哀想な目で見られた気がするわ。布越しだけど。

「ちなみにファムさまが持っているのが今の人間社会で一般的に出回っているもので、こっちが精霊達で作った人類未公開版です」

そう言つてレーヘンがもう一つの地図を出してきた。

「そんなの私が見ちゃっていいの？」

「今の所、数で言つとこの国は精霊が多いので、大丈夫です」

「多いつていつても一対二だけだね…それにしても、国の数や地形がずいぶん違うみたいだけど」

「くろやみ国のように、人々の間では存在が忘れられた国や、人間の国ではないものなども載っていますからね」

星の亀裂やら忘却の穴なんていう、あきらかに胡散臭い名前が地図のあちこちにあったけれど、見なかった事にしましょう。

「この国はどこにあるの？」

「ここですよ」

ベウオルクトが指差した所は海だった。

「なにもないじゃない」

「人間版ですから記録から抜け落ちているのです。おなじ場所を精霊版の方で見つけてみてください。そちらにはちゃんと載っていますよ」

私は精霊版の地図に持ち替えて、ぐるぐるとまわしたあげく、ようやく見つけた。ちゃんと卵くらいの大きさの島があり、「暗病国」の文字が書かれていた。

「島国なのね！この国」

「昔はもつと国土があったのですが、沈んでしまったんです」

レーヘンが青灰の瞳をちょっと陰らせて言った。

「国の名前が変更されてませんね。……」

ベウオルクトが地図上の海の一箇所を押し、何かつぶやくと、「暗病国」の字が「くろやみ国」に置き換わった。

「わお」

「今ので他の場所にある世界地図でも国名が更新されました。いつでも精霊版ですから、知るのは精霊がほとんどですが」

「私、いろんな国が書かれた地図って初めて見たわ。へえ、はっほくこく白箔国ってこんな所にあったのね。くろやみ国とは、海と青嶺国（しょうれいこく）を挟んでいるのね」

レーヘンが一点を指差した。

「ファムさまがいたのは白箔国のこのあたりですよね」

「ええそうよ。王都のはずれの街よ」

「白箔王はいるのですか？」

ベウオルクトが言った。

「いるわ、見た事はないけれど、高齢だからそろそろ退位するってずつと前から噂になっていたわ。子供が沢山いるから次の王様選びが大変だろうって」

「長子が継ぐのではないのですか？」

「それで過去に何人もの長子が殺されたらしいから、王様や偉い人達が出来がいい子を選ぶようになったらしいの。でも、今は一番の有望株がずつと拒み続けているって話しだったわ」

「選ばれたのね：ヴィル。おめでとう」

あなた貴族じゃなくて王族だったのね

「お祝い、直接言っただけだけど、ごめんね」

遠い喧噪を背景に静かな裏路地で一人で血を吐いていると、今までこらえて来た悲しさと寂しさが溢れ出て来た。

汗が止まらないのに、寒くてたまらない…

消えない思いと見つからない答え 3

ヴィル、あなたが上流階級の人って、気付いてたわよ  
ちよつと世間知らずなところか、お行儀がよいところとか、  
でも、それでもいいって思ってた。

あなた偉そうな所無いし、私の話をちゃんと聞いてくれたわ

私、ちゃんと決めてたの。

いつかは別れが来るとしても、いまは目一杯あなたを愛するって  
私じゃない、立派な結婚相手が現れても、あなたの幸せを願うつ  
て、決めてた。

でも…

会いたい…ヴィルに会いたい。

時折咳き込んで血を吐きながら、私はうずくまって泣いた。

「ファムさま」

どれくらい時間が経ったのかわからないけれど、呼びかけられて  
顔をあげると、レーヘンが立っていた。

折角の服が私の血で汚れちゃってるわね。

「協力してくれる精霊を連れてきました。くろやみ国までファムさ  
まを連れて行ってくれます」

レーヘンの横に可愛い顔した見知らぬ少年が立っていた。

明るい茶色の瞳に、くすんだ灰色の髪をつしろでひとつ結びにしている。マントを羽織って、変わった柄のポーチを首から下げている。

「はじめまして闇の国主さま。ボクは旅の精霊です。お手伝いさせていただきますね」

旅の精霊は血で汚れる事に構わずに、私を抱えあげた。

「おねがい、もう少し、もう少しここにいさせて…。もうあんまり血も出なくなっただし…」

「いけません。すでにかんりの血を吐いています。一刻も早く戻らねば、命に関わります」

旅の精霊が私を背負うのを手伝いながら、レーヘンは強い視線で私を見た。

「ワタシがかわりにここで一日待ちます。手紙を渡せば良いんですね」

一度は止まった涙がまたあふれて来た。

「ありがとう…おねがい…」

私は震える手でレーヘンの手に手紙を握らせた。

中身は無事を知らせる内容と、家で待つと言う約束を守れなかったことを謝る文。国に着いてすぐで、怪我の治療の間に書いたので、くろやみ国の事は書いていない。書き加える時間がなかった。

「ヴィルのことは分かる…?」

「はい。さきほどバルコニーにいた人物ですね。さすがにこの国の王宮へ不法侵入できませんが、ここで待つ事はできます」

「国の精霊にはお互い不可侵の盟約があるからめんどくさいよね」  
旅の精霊が言った。

「レーヘン」

硬い表情をしたレーヘンに何かの薬を口に含ませられながら、私

は言った。

「なんでしよう」

「笑ってちょうだい…笑顔はね、武器にもなるし、元氣も沸いてくる優れもののよ。私に…元氣を分けてちょうだい…」

そう言って私は笑った。こんな力を振り絞って笑ったのはきつと親が死んだ子供の頃以来ね。

「……はい」

レーヘンは潤んだ瞳で、ぎこちなく微笑んでくれた。  
精霊って泣くのかしら。今度きかせてね

「ではくれぐれもよろしく」

「まかされたよ。西の妖精の祠だね」

「うん。キーはさきほど伝えたとおりだから。あと、祠の妖精にひとこと挨拶してくれるとありがたい」

「わかったよ。じゃあ、お先に」

私を背負った旅の精霊はレーヘンのように飛び上がる事無くひたすら軽やかに道を走りだした。そしてなぜか城壁は、そこに何も無いかのようにすり抜けた。

「ボクは大地の精霊だから、土や石なら自由にできるんだ」  
精霊って…すごいよね…

祠につくと、精霊は私を背負ったまま前方に声をかけた。

「妖精よ、出て来ておくれ！」

「なんじゃい、あまり大きな声で呼ばんで欲しいの」

祠の裏から出て来たのは、小柄な老人だった。しわくちやの顔にばさばさの眉毛とおひげ、曲がった足腰、どうみても良い歳までいっただおじいちゃんだった。

くたびれた生成りの草色のシャツとズボン、腰には小さな袋をく



くり付けている。

「よう…せい…なの…」

「そうですよ。妖精はたいていこの姿をしています」

元気だったらものすごく突っ込みたい所だわ

「キラキラして…羽の生えた妖精…に、憧れてたのに…」

「ははは、それ虫のことじゃないですか」

「これはおおごとじゃ」

私が軽いショックでぐったりしていると、旅の精霊と妖精が何か会話をして、祠の裏の転移門へ移動した。

「しばらく経ったら、闇のが来るからあとよろしくね」

「あいよ。おじょうちゃん、お大事にな」

妖精はしわくちゃんな笑顔で見送ってくれた。

おじいちゃんでも可愛いわね

また会えると良いな

気がつくとはくろやみ国の自室のベッドに寝かされていた。どうやって戻って来たのかも、治療も受けたのかさえ記憶に無かった。

けれど、ひどく体がだるい。少し動かしただけで、あちこちずきずきと痛む。

なんの夢もみなかった。

せめて夢の中で会えたらって思ったのに。

目を覚ますと枕元の椅子にレーヘンが座っていた。薄暗い部屋でうつむく姿勢のレーヘンの表情はよくわからない。

私はかすれる喉からゆっくりと声を出した。

「ヴィルはいた…？」  
「…いませんでした」

私はため息とともに手を伸ばしてレーヘンの頬にふれた。レーヘンは私の目を見ようとしない。

「嘘ね」

「すみません。戦闘になり、やむなく撤退しました」

レーヘンは気まずそうに眉間に皺を寄せて私に言った。

「どうしてそんな状況になるのよ。私は手紙を届けてって言っただけよ？」

「すみません」

「手紙はどうなったの？」

「一応は渡しましたが…説明はしてません」

「…そう」

来てくれたんだ、ヴィル。

「ファムさま、どうか安らかに…」

「それ、死んだ人に言う言葉よ」

体痛いのに、笑っちゃったじゃない

### 消えない思いと見つからない答え 3（後書き）

次回更新ではレーヘンが頑張り（？）ます。

妖精が出てきました。

感想欄での回答で「一般とはかけはなれた姿」とお答えしましたが、ノームという、ヨーロッパのおっさん妖精の存在を書いてから思い出しました。しかもノームは大地の妖精らしいです。

この作品の妖精イメージは、ホームレスのおじさんのような感じですよ。

## 見つからない思いと消えない答え 1

「…ん？」

「どうしました」

「広場で異質な精霊の動きがありました。確認作業にはいります」  
「その精霊の属性を最優先で調べて下さい」

「ヴィルヘルムス王、国民への挨拶の時間です」  
「わかりました」

ヴィルヘルムスはバルコニーから外に出て、彼を待ちわびた国民達へ国王就任の挨拶をした。冷静に、淡々と、適度な速度で喋り、早口になることも、言葉に詰まる事も無い。その内容は感動を与え、るものではなかったが、聴く者に安心と信頼を抱かせるものだった。無事に挨拶を終えて手を振るヴィルヘルムスの耳元で、ささやく声がした。

「判明しました。闇です。人間の女性を抱えて広場から離れ、その後探知が途切れしました」

「現場に案内しなさい」

「お、王、今夜の食事会の打ち合わせを…」  
「任せます。しばらく休憩時間にしてください」

ヴィルヘルムスは歩きながらマント、王冠と腰の飾りのついたサ

「ベル、華やかな刺しゅうの入った上着を脱いで傍に控える側近隊に渡した。

「どちらへ…！」

「外です」

先ほど人々の注目を浴びて演説していた人物が、まさか興奮冷めやらぬ広場に現れるとは誰も思わない。

ヴィルヘルムスは広場の隅の、裏路地に立っていた。足元には、おびただしい血痕が残っている。彼は微動だにせずそれを見つめる。「この血の持ち主を探知する事はできますか？」

「いえ…人物を特定することはできませんが、探知が阻害されていますので、どこにいるのかは」

「かまいません。彼女かどうかの確認だけでも」

「わかりました」

「立ち去った闇の精霊の行き先には心当たりがあります」

ヴィルヘルムスは淡々と言い、歩き始めた。

「ヴィルヘルムスさま、あなたはもう一国の王です。身の安全に気を配って下さい。…護衛に二等級精霊を五体つけますよ」

「ご自由にどうぞ」

広場から南へ向かった先にある住宅街の片隅には、焼けただれた廃墟がある。そこには三日前の夜に現れたのと同じ黒髪の男が立っていた。

あたりは夕暮れ色に染まり、男の無表情な顔に黒い影を落としていた。

ヴィルヘルムスが仕掛けておいた結界は、またしても反応した様子かなかった。

「また君ですか。彼女をどこへやりました」

「どこへも。あの方はもうどこへも行きません」

端正な顔を傾けて、男は言った。

ヴィルヘルムスはわずかにだが、表情をゆがめた。

「その血は？ 君のものではないでしょう」

男の服は、あちこち赤茶けた色に染まっていた。見慣れた者ならば、それが乾燥した血液だとわかる。だが、男に怪我をした様子がない事から、それが誰か他の者の血であることは一目瞭然だった。

男はヴィルヘルムスの言葉には答えず、うつすらと微笑みながら言った。

「いいんですかこんな所を出歩いて。約束も忘れてしまつくらい、とても忙しいのでは？」

「その血は誰のものだと聞いている！」

ヴィルヘルムスは声を強め、走り出した。

手にはめたグローブから、あらかじめ用意しておいた結界を発動させ、法術を動かす。

「目標へ向けて、拘束と貫通！」

周囲に針金状の光の集合体がいくつも発生し、ヴィルヘルムスの声とともに男の身体へと飛んで行く。

男は慣れた様子で光の針を避けて行くが、針達は男の動きに合わせて弧を描きながら追いかけて、数本が身体に突き刺さる。

「そのまま爆……くっ」

しかし身体に無数の光の針が刺さったにも関わらず、男の動きは更に加速する。一瞬の跳躍でヴィルヘルムス前へ移動し、首筋には刃物が触れる気配がした。

刃物は男の手から伸びていた。よく見れば、両腕がそのまま銀色の刃へ変形しており、今にもヴィルヘルムスの首を刈ろうとしている。

夕暮れの日差しを受けた男の腕が、一瞬光る。

「あの方の心を惑わせる存在がいなくなるというのは、とても素敵な案だと思いませんか？」

ヴィルヘルムスの目をまっすぐ見据えながら、ささやくように男が言った。

穏やかな声音に反して、男の青みがかった灰色の瞳は強く輝いている。

だが、そう言った男は何もせずに刃物のようになっていた両腕を元の状態に戻した。

「ですが、どうもあなたを始末するの、かなり手間がかかるようですね」

男の手足にはヴィルヘルムスが仕掛けた攻撃の他に、いつの間にか透明な花びらのようなものがまとわりついていた。

「随分と大事にされているようで」

男はヴィルヘルムスの周囲に浮かぶ五つの白い大輪の花のようなものを眺めて言った。

「そうでしょうね」

ヴィルヘルムスは淡々と言った。

「あなたが探している人は生きています」

男は赤茶けた色の封筒を掲げた。

「ですがもうこの国には帰ってきませんよ。すでに新しい居場所ですごく過ごされています」

それまでの冷静で、ゆらぎなかったヴィルヘルムスの雰囲気が一変する。瞳には、怒りがこもっていた。

「そんな血まみれの手紙を見せられて信じられるとでも？」

「信じる信じないは関係ありません。事実ですから。この国があの方の居場所を奪った以上、もう自ら戻る事はない」

男は言いながら掲げていた封筒をヴィルヘルムスの前へさし出した。

「なにがあっても見つけ出します」

封筒を受け取ると、黒髪の男は一步後ろへ下がりと、冷たい笑みを浮かべた。

「それはどうぞ、自由に」



見つからない思いと消えない答え 1（後書き）

レーヘンが頑張り（？）ました。

一人称じゃなくなつたとたん描写が楽になつた・・・

## 見つからない思いと消えない答え 2

日中はきらびやかな世界にいる男が、夜な夜な廃墟にでかけていた。

ほとんどの時間はそこに佇むだけで、時間が経つと己の場所へ戻り、数時間の仮眠の後に公の仕事に向かう。

時折、体が汚れ手が傷つくのもかまわず、一心不乱に廃材を掻きわけ、地面を掘り返している姿もみられた。

見つかつて欲しくないものを探すという矛盾のなかで、彼は狂いそうになる己の意識と必死に闘っていた。

新国王就任に関わる一連の催しの日程は、直前に起きた異例の変更によってかなり前倒しとなり、式典の当日はさらに変更が起きた。それらすべてを押し進めたのは当事者である新国王だった。

前国王によって次代の発表がなされると、国民への告知よりも早く、内々での即位式典が行われ、新白箔王は誕生した。この時点で異例だった。

さらに、病気がちだった前国王は療養のために早々に離宮へと移ることとなり、ただちに宮廷は新国王とその身の者たちで固められた。

その見事な交代劇に、前国王と新国王の間に密約の存在を勘ぐる者達もいたが、その内容まで把握出来た者はいなかった。

「これからよろしくおねがいします、我が国の精霊よ」

「かしこまりました。ヴィルヘルムさま。ようやく貴方を王と呼ぶ事ができますね」

即位式典の後、新白箔王はすぐさま近衛兵と共にナールデン公爵の元へ向かった。それと同時に、王専属の非公開の調査部隊を動かす。即位前日に平民街で起きた、とある事件の調査のために。

「証拠は押さえました。ナールデン公爵と軍警察の癒着問題は貴族庁と軍部に任せます。それで、報告を」

「はっ、現場検証の結果、崩れた二階の下敷きになった者がいるようです。遺体はまだ発見出来ていません」

白箔王は、自室の椅子に背筋を伸ばして座り、指一本動かさずに淡々と報告を聞いていた。

「それと、例の家が火事になった翌日、今朝の事ですが、都市を囲む城壁に巡らせていた守護障壁を越えた者がいます。それも、障壁に無理矢理穴をあけるのではなく、障壁上部の力が薄い部分をくぐり抜けたようです」

「障壁の弱い箇所は、三秒ごとに移動する上に目視は不可能で、越えられる者がいないとされていたのでは」

「はい。ですので…ただ者ではありません」

「また例の場所へおでかけですかい？」

「……」

ルトガーは部屋の前で男が帰って来るのを待っていた。

男の公務の予定表は頭に入っているので、今日はいつもより早い時間に帰ってくる事はわかっていた。

男は無言で扉を開けて中に入り、ルトガーは慣れた様子でその後に続く。

「俺たちの間でも驚きの声があがってますぜ。日中もあれだけ動き回っているのに、よく体が持ちますねえ、ヴィルヘルムス王」

ヴィルヘルムスは返事をする事無く、両手にはめたグローブを外し、濡らしてしぼったタオルで顔と手を拭くと、水差しからゴブレットに水を注ぎ、一気に飲み干した。

ルトガーはかまわず続ける。

「知ってますかい？ 宮廷内の一部では、新国王は夜な夜などこそ女の元へ通っているという噂。皆その相手が誰かを嗅ぎまわりますよ」

身を投げ出すようにソファに腰掛けたヴィルヘルムスは口元をゆがめ、いびつな笑いを浮かべた。

「そんなもの、好き勝手に詮索するがいい」

「どうせオーフあたりに隠してもらってるんでしょうが、時間の問題ですよ」

ため息まじりにルトガーが言った。

「見つけれぬのなら見つけて欲しいですよ」

ヴィルヘルムスはシャツの胸ポケットから取り出した赤茶けた封筒を見つめながら言った。

「どうしたんです、それ」

「さきほど手渡されました」

「誰に」

「先日と同じ、あのいまましい黒髪の男ですよ」

ぶっきらぼうに答えたヴィルヘルムスに、ルトガーは少々面食ら

った。

たいていの物事に動じず、冷静で沈着な男が悪態をつく様子は、めったに見られるものではない。

封筒の表面を指先でゆつくりとなぞりながら、ヴィルヘルムスは言った。

「報告は？」

「ありますよ。家の裏庭で倒れていた軍警察隊員についてですが、案の定、巧妙なやりかたで記憶を封じられていました。なんで、指示のとおり精神の病ということにして、退役処理と入院手続きの後、うちで強制的に身柄を引き取りました」

「結果は」

「手こずりましたが、これが報告書です」

ルトガーは着崩した軍服の懷から一枚の折り畳んだ紙を抜き出した。

差し出されたそれを受け取ったヴィルヘルムスはすぐに開いて目を通した。数秒後、ヴィルヘルムスが手を離すと、紙は音も無く火がつき、空中に溶けるかのようにして一瞬にして消え去る。

「銀色の…理論上では、闇の精霊ということになりますが…現実には存在するとは…」

「報告している俺も、半信半疑ですよ。こないだ遭遇したっていうボロい外套を着た男とは、関係あるんですかねえ」

「おそらくあるでしょう。花の苗を貰いに来たと言うのがあからさまに怪しい上に、問いつめようとするのらりくらりとかわされ、さらに実力行使に及ぶと速攻で逃げられましたからね」

「その胡散臭さ、フリーなら、是非とも調査部にきてもらいたい人材っすね」

ルトガーが茶化すように言った。

「あの場に精霊がいたということは、一緒にいたはずの人間は生きている可能性があるという事ですね。…オーフ、聴こえているのでしょうか？ いまこちらに来れますか？」

ヴィルヘルムスは、己の人差し指にある指輪に話しかけた。

「はい、なにか御用でしょうか」

柔らかな光と共に、輝くような流れを持つ黒髪と、美しいまつげをもつ中性的な顔つきの精霊が現れた。白地に金の刺しゅうの入った布地をたつぷりと使用した衣装をまとい、神官のような姿をしている。

ソファに腰掛けるヴィルヘルムスをみて、わずかに眉をしかめる。

「王よ、そろそろ晩餐会が始まりますよ」

「この話が終われば向かいます。銀色の精霊について教えて下さい」  
ヴィルヘルムスは衣装棚に向かって歩き出した光の精霊オーフに声をかけた。

「闇でしょう」

「闇ですか」

「はい。さらに申し上げますと、人の姿をとり、しかも都市の障壁をすり抜け、ヴィルヘルムスさまの結界をもろともしない精霊となると、おそらく特級精霊です」

オーフは衣装棚から晩餐会用の王の装いを取り出しながら答えた。  
ルトガーはその様子を眺めながらソファの背にほおづえをついて言った。

「特級つてのがあるんですか？ 精霊つてのは一等級、二等級、三等級、あとは薄級：でしたっけ。それ以外にも存在するのです？」

「ええ。特級はとても稀な存在です。世界でも20は存在しないでしょう。そしてそのほとんどはワタシのような国に仕えるなどの特殊な地位にいます」

取り出した靴に汚れがないか調べながらオーフが答える。

「それでは、オーフも特級精霊なのですか？」

「そうです」

「闇の特級精霊が仕えている国というのはあるのですか？」

オーフは答えずに上着を差し出し、ヴィルヘルムスがしぶしぶそれを受け取って身につけ始めると、口を開いた。

「暗病国といって、ほとんど名前だけの状態ですが、今でも存在だけはしています。この国ではおとぎ話に出てくる闇の国として有名ですね。そういえば先日、新たな名前に変わっていました」

「その新たな名前は？」

装飾が施されたサーベルを受け取りながらヴィルヘルムスは尋ねた。

「くろやみ国です。表記は国字表記の黒闇国ではなく、くろやみ国だそうです」

「ずいぶんとふざけた名前ですねえ」

ルトガーが愉快そうに言った。

「ヴィルヘルムス王、先刻の血痕の主は例の家の住人の方でしたよ」  
鏡の前で身だしなみの確認をするヴィルヘルムスに、オーフは静かに言った。

「…この手紙の血痕も確認してください。それと、何か仕掛けられていないかも」

オーフは、赤茶けた封筒を受け取って、しげしげと眺めて、微笑んで言った。

「なにも仕掛けられていません。付着した血は先ほどと同じ人物のもので。ですが、この封筒は我が国で流通していないものです」  
「へえ、そりや珍しい」

オーフの傍に寄って、ルトガーは封筒を覗き込んだ。よく見れば、封筒はつなぎ目が存在しない袋状のものだった。使われている紙にも見た事のない光沢がある。

「一連の出来事に共通するのは、闇属性ですか。おそらく彼女は……」  
ヴィルヘルムスはちいさくつぶやいた後に、言った。

「……いいでしょう。なんとしてもその闇の国を世界の表舞台に引きずり出します」



思わず良く生きていたわねって言っちゃったわ。二回目だけど。

目覚めると一ヶ月ほど時間が経っていた。

なんでも、私の中の命脈と、気脈に変換した瘴気が反発して身体の内側からぼろぼろに崩れていたそうなの。

ずっと寝ていた割に床ずれなどが無いのは、精霊達がなにかやってくれていたおかげらしいわ。しかも身体についたお肉すら以前のままなのよね。うちの精霊達は隙のない仕事してくれるわね。

変化といえ、髪が背中あたりまで伸びていたくらいかしら

目が覚めたといっても、身体を動かすとあちこち痺れたように傷むから、まだ一日の大半をベッドの中で過ごしているわ。

ちなみに、王の居室は王の間に繋がっているらしくって（そういえば歩いてたどりつける場所にあった）、気脈の安定には適しているのだそうよ。

内臓が弱っているからと、食事は全てどろどろしたおかゆに近い何か。ほんのり甘いし、そう悪くない味だけど、色が黒と紫で、あんまり食べる気にならないわ…

あとは人間の食生活についてちょっと思い出してくれたベウオルクトが、時々ホットミルクやアップルジンジャーティーを作ってくれる。

レーヘンは白箔国の広場で私がつけた号外新聞を持ってきてくれた。

しわくちゃになっていたそれを手のひらで丁寧にのばして、読んで、ようやくあれが夢ではなかった事を確認できた。

記事には新しい王の即位について詳しく書かれていて、同じペーシの写真に大きく写っている顔は、改めて見てもとても格好よかった。

ヴィル、自分が暮らしていた国だからわかるわ。あなたの立場の大きさが

白箔国は戦争が多い赤麗国せきれいこくや青嶺国せいりやうこくと違って、交易で豊かに栄える国。

いま栄華を誇っている国のなかで、一番優雅な国。  
私が存在するのか怪しい、小さな小さな国の王になった時、彼は歴史ある立派な国家の王になっていた…

そして記事には私が知らなかった彼の情報も詳しく書かれていた。  
「ヴィル…あなた…」  
年下じゃないの！

どれだけ私に隠し事してんのよ！

「18歳だったのね…成人年齢は過ぎてたからいいけど、未成年にお酒飲ませてたら、やばかったわね…」

居酒屋に良く行ったもの。しかもヴィルの方がお酒強かったのよね。

「白箔国の成人年齢はいくつなんですか？」

「16歳よ。飲酒や結婚なんかはその年齢から出来るの。へえーへえー、青嶺国の学院で法術の学位をとって、白箔国では精霊術の学位をとったんですって。凄いわねえ」

というか本当に私って彼の事知らなさすぎだわ

彼と会った時は他愛ないおしゃべりが楽しくって、そして彼の身分を知るのが怖くて、あまり彼の事を尋ねなかった。

「ねえ、レーヘンはヴィルと会ったんでしょ？」

「ええ、一応」

「彼、どんな様子だった？」

「とっても元気でしたよ。ところでファムさま、ご報告が」

「な、なにかしら改まって」

ふわふわした表情をしていた綺麗な顔が、いきなり真剣な顔になるから変にちよつと緊張しちゃった。

「白箔国の者に祠の転移門がバレそうです。端末に接触の反応がありました」

「それはまずい。あれは繊細だから下手にいじっておかしくなると、こちらからは修理できなくなります」

レーヘンの言葉に加えて、ベウオルクトが言う。

「ファムさま、どうなさいますか？」

私を殺そうとした貴族の追っ手かしら…

私の頭には軍警察に取り囲まれて尋問される、祠の妖精のおじいさんの姿が脳裏に浮かんできた。怖い声で脅されて、涙目でふるふる震えている。

「…仕方ないけど、壊れちゃうのはもしもの時に困るし、しばらく白箔国への転移門は使わないでおきましょう」

「いいね、レーヘン」

「はい」

ベウオルクトがレーヘンに確認して、両方そろってお辞儀する。

「“ご命令承りました”」

なんだか初めて女王さまっぽいことした気分よ

でもこれで、転移門でヴィルに会いに行く事が出来なくなっちゃった。

手紙で無事を知らせることはできたけど、やっぱりちゃんと会って話したい。

でも、私には既に考えがある。

私は白箔国だとただの街娘で、王宮なんて行つたつて門前払いされる身分だけれど、くろやみ国では一応は一国の主。

ならいつか、王さま同士という立場で会える機会がきつと来る。そう思うと、明るい気持ちになれたわ。

そしていつか会えた時に、ヴィルにしっかり挨拶できるよう、ヴィルにちゃんと目を向けてもらえるよう、しっかりした良い王様になるわ！

「そうとくるなら、まずは元気な身体に戻らなくちゃ！」

あの変な色のおかゆを持って来てちょうだい！

「ファムさま、運動のために城内だけです散歩にでも行きませんか？」

「いいわね！ 軽い散歩ついでに植物園に行きたいわ」

「それって植物育成施設のことですね」

「そうよ、味気ないから植物園って呼んでるのよ。植え替えた花の様子が見たいの」

「ボクも行つて良い？ 国土の土はひととおり見て来ちゃったんだ」

そうそう、私を運んでくれた旅の精霊は、まだくろやみ国にいたりする。

街にいる時は偽装していたらしくて、今の髪は薄い水色で、瞳はターコイズブルー。どちらにもこにこしている可愛い顔によく似合っているわ。

「ファムでいいわよ。国土の土つて外の事？ それって面白いの？」  
「ボク、世界の土壌を見て回ったり、地形を調べるのが趣味なんだ」  
精霊つて趣味持つてるのね…

「国土に変化はありませんでしたか？」

「うーん、今の所なかったみたい、あ、でもさ…」

自分たちと違う精霊に会えて、ベウォルクトはちょっと嬉しそう

だった。布越しだから表情は分からないけれど、いつも静かで落ち着いた声がちよつとだけ弾んでいるときがある。ときおり旅の精霊となにやら難しそうな話に熱中していたわ。

「この国は闇の転移門でないと来られないからラッキーだったよ。ファムさま、また来るね」

そう言つて、私が植物園に通えるようになった頃、旅の精霊はこの国を去つていったわ。なんでも、白箔国以外の場所にある転移門を使ったそうよ。

「あ、植物園にボク秘蔵の種を植えといたから！　楽しみにしててね！」

翌日、見事な果樹園ができていた。美味しい果物は嬉しいけど、急激に栄養を持つて行かれて横に植えてあつた私の花たちが枯れかけた。

これだから精霊は！

影霊と再生 1 (後書き)

修正：踏みつけた      みつけた

ちよつとずつだけど、私は女王さまとして一歩ずつ歩き始めていた。

まずは知ることから！

「私は自分の生まれた国についてもあまり知らないの。この国のことはアナタ達に教えてもらうとして、他の国の事も知りたいわ」

いずれ他国と渡り合うことになるんだし、情報は大事よね。

「我々の伝手で各国の精霊からの情報なら手に入れますが、断片的ですし、具体的な人間達の様子はわかりませんね…」

「実際に見に行った方が早いってこと？」

「ファムさまの外遊は認められませんよ。しばらくは国内で大人しくしてください」

「わかつてるわよ」

私の提案に、ベウオルクトが間髪入れずに言ってきた。

私の行動に関して精霊達はとても厳しくなった気がするわ。まああれだけ死にかけてばかりだから無理も無いけど…

「使者をたてるのはいかがですか」

「私は行きませんよ。ファムさまをお守りするんですから」

今度はベウオルクトの言葉に間髪入れずレーヘンが言う。

「…ワタクシにひとつ考えがあります。ですが、時間がかかりますのでしばらくは手持ちの情報を知る所から始めましょう。大丈夫ですファムさまに学んで頂きたいことは沢山ありますから」

ベウオルクトの最後の一言には、なんだかいままでにないくらい強い決意というか、意思を感じたわ。私に向かって

「…おてやわらかに願います」

「ファムさまが楽しくそして興味深く学習出来るよう、全力を尽くさせて頂きます」

そんなこんなで、わりと穏やかな日々が続いたある日、私はあることに気付いた。

「なによこれ…」

「レーヘン」

「はい、ファムさま、なんでしょう」

「髪の毛が落ちないのよ。違う洗髪剤ないかしら？」

毛先から中程までがまばらな灰色の汚れがついて、洗ってもこすっても落ちないのよ。

私の話を聞いたレーヘンは、にっこり笑って言った。

「ファムさま、それは汚れではありません。髪そのものの色です」

「…どうということかしら」

「王座から変換された瘴気がファムさまの体に蓄積されている証拠です」

「どうしてくれるよ、私の自慢の黒髪が…！」

「もうしばらくの辛抱ですよ」

それから数日過ごすうちに、私の髪は根元まで灰色に染まり、ついにレーヘンと同じ銀髪になってしまった。

おほほほ、見事な輝きだこと。

「おそろいですね、ファムさま」

…私、人間やめちゃうの？

「そろそろ頃合いですね」

どこをどう判断したのかわからないけれど、ベウォルクトが言った。うちの精霊達には、そろそろ当事者に事前に説明する事の大事



さを理解してもらいたいわね

「すっかり体に変換された瘴気が貯まったようですので、影霊を創りましょう」

「影霊？」

「いったいなにが起きちゃうの？」

「まずは媒体を用意しましょう」

「何でも良いのなら花の苗なんてどうかしら？　可愛いと思うけど」

「かまいませんが、おそらく寿命がかなり短いですよ」

それはちよつと寂しいわね

「はじめてですから、媒体にはファムさまの気脈が馴染んだ物がいいかと」

私達は影霊創りのために王の間にいた。

最近では身体の痺れもなくなつて、王の間で過ごす時間も増えたのでここには私の私物がいくつか置いてある。鏡や身だしなみ用の道具やハンカチなどを入れた小箱、体の調子を整えるための体操をするマット、いつでも飲めるお茶セットと保存のきくお菓子。あとは良い香りのする花を乾燥させて入れたポプリボール。

一度、王座のまわりにごちゃごちゃと物を置いたらベウオルクトが「王の間は特別な場所ですから品格を云々」と言いだしたので、王座の裏に棚を置いて、細々とした物をだけ収納するようにしたわ。

王の間はとっても不思議な場所で、私が「こうだったらいいな」と思うと、希望にあつた形に変形してくれる。

王座が無骨で可愛くないって思った時は、気がつくと表面に繊細な彫刻が施されたものになっていたり、お茶を楽しむ場所が無いとなげくと、椅子やテーブルが現れてくれた。

一度レーヘン達とゆつくり話をしたいと思った時には、即座にソファやローテーブルが床から出てきてびっくりしちやったわ

ちなみに王の間や王座と同じ素材で出来ているらしくって、全部

暗い色なのがちょっと寂しいのよね。あと出来ないこともけっこうあつて、食べ物や服や本は出てこないみたい。

私は王座の裏の棚の扉を開けて、媒体になりそうなものを探してみた。

「じゃあ、子供の頃から使ってるこの櫛なんてどうかしら？」  
「理想的ですね」

ベウォルクトが何か合図をすると、ちょうど王座の正面の床が立ち上がり、腰の高さあたりで止まった。

「こちらに媒体を」  
「ええ」

私は手に持っていた桃色と白の花の絵が描かれた櫛をそこに置いた。

「それでは背筋を伸ばして王座に座ってください。心を落ち着かせて、穏やかな気持ちを心がけてください。あとはレーヘンのと  
きと同じです」

「うーん」

私が心の中で思い浮かべると、台の上に置いた櫛が黒いもやもやとした物につつまれ、空中に浮かんで人の形になる。

あら？

しばらくして黒いもやが溶け去るように消えると、そこには人の姿をした者が立っていた。背中を越える長さのゆるやかなカーブをえがく銀に髪、アーモンド型よりちょっと尖っている目、低くもないけど高くもない鼻、血色の良い唇に、筋トレで鍛えたやわらかくあがる口角……

「つて、私じゃないの」

銀髪の、私そっくりの人物がそこにいた。

着ているのは今まさに私が着ているのとまったく同じ花柄の膝下ワンピースに、白いリボンで編まれたサンダルをはいている。

『はじめまして、ファムさま。わたしはあなたによって生み出された影霊です。よろしくおねがいたしますわ』

どうしてかは解らないけれど、影霊は口を開かずにそう言って、微笑みながら優雅にスカートの裾を持つてお辞儀をした。お上品だわ！

それからお辞儀が終わったもう一人の私は、間をおかずに灰色の子うさぎになった。

近寄って抱き上げると手のひらに乗る大きさで、すごくちっちゃい！

「はじめて創った影霊ですから、まだ身体が安定しないようですね」「いいえ、この姿で合っているわ。私がお友達が欲しいって思っ、それから動物ならいいなって思っ、うさちゃんなら、なお素敵って思ったのよ」

「…姿はひとつの方が安定しやすいのですが…」  
ベウオルクトがちよっと疲れたような声を出した。

私、だいぶベウオルクトの感情に気付けるようになってきたわ。

「次からは気をつけるわ。で、影霊って何？」

王座に戻って膝の上に子うさぎちゃんを乗せ、そつとなでてみる。暖かくて柔らかくっ、ふわふわ…うふふ、幸せ…

「影霊は媒体を元に構成した精霊の一種です。王の間の機能として、一定量ファムさまの身体に瘴気が貯まったら、それを用いて影霊が創れるようになっていいます」

じゃあこれから定期的に影霊を創る事になるのね。

「ファムさまにしか出来ないことですよ」

子うさぎちゃんの耳をそつと人差し指でつついていたレーヘンが微笑んで言った。

鏡で確認すると、私の髪はすっかり黒髪に戻っていた。

あはは、精霊なんて創っちゃったわ。

子うさぎちゃんハハーシエという名前にしたわ。

まだ身体が安定してないからか、最初の一言以来何も喋ってくれないけれども私の後をとてとてと歩いて、とっても可愛い。

「ファムさま、以前話していた国外の情報収集の件ですが、使用者に影霊を使うのはいかがでしょうか」

私がハーシエを愛でているとベウォルクトがそんな事を言出した。「アンタ、こんなか弱いうさちゃんに何をさせようっていうのよ！」「ハーシエは現在のファムさまと同程度の記憶と知識しか持ち合わせていないので、旅に出しても危ないだけです」

一応、分かるけど、ちょおつとはつきり言い過ぎじゃない？ 国王舐めてる？ レーヘン、んん？

「ハーシエではありません」

私がレーヘンにげんこつをあげようと右腕を振りかぶったとき、ベウォルクトが言った。

ハーシエには王の間であるすばんしてもらい、私は列車に乗って随分と長い時間移動した先に連れて行かれた。

床がぼんやりと光るだけなので、部屋全体がよく見えない。まるで空気そのものが固まっているかのように、肌にまとわりつく感じがする。慣れない感覚に私が身震いすると、レーヘンがどこからともなく取り出した暖かいシヨールを肩にかけてくれた。

「ここはどこなの？」

「過去の王達の霊廟です」

ベウォルクトが奥に消えて、しばらくしてから小さな箱を持ってきた。手のひらに乗るくらいの大きさで、光の具合で色かわる綺麗な白っぽい布に包まれている。

「ファムさま。今回の影霊はこちらを媒体にしましょう」

「それってなに？」

「古の王です」

## 影霊と再生 2（後書き）

ハーシェⅡ野うさぎちゃんの意（多分）  
オランダ語です。

猫と迷ったけれど、ウサギで。

ほぼ一ヶ月後、私の髪は再び銀色に染まっていた。

そしてベウオルクトが持つて来た小さな箱と、その中身を媒体に、私はハーシエと同じ手順で影霊を創った。

「今度の媒体にははすでに人物の記憶が含まれていますので、特に姿をイメージする必要はありません」

前回と同じように、黒いもやは人の姿となった。

そしてもやが消え去ると、そこには美しい女性が立っていた。

短い髪は銀色で、長い前髪は左側だけ耳にかけられて、右側は目を覆うようにたらされている。肉の厚みが薄いほっそりした身体は、足元まで覆う形の飾り気の無い真っ白なワンピースに包まれていた。

「ふうん」

女性は物珍しそうに己の両手をひろげて眺める。

それから顔をあげて、確かな意思を持った灰色の瞳が周囲を見渡す。

鋭さを持った目元、堅く結ばれた口元、一見すると少年のような中性的な風貌のなかに、権力者の雰囲気があった。

ほっそりとした指先で前髪をつまみ、しげしげと眺めて、口を開く。広い部屋によく響く、低めの安定感のある声。

「おれ、ちゃんと死んだと思ったんだけど？ それに、この髪の色……」

私は王座の上で背筋を正して、ちよつとお腹に力をいれて、声を出した。さあ、女王として初めての挨拶よ！

「はじめまして、古の女王。私は今この国で女王をしているファム。」

あなたには影霊として復活してもらったわ」

「影霊…あの技術、実用化できたのか…で、わざわざ復活させて、このおれに何の用？」

「あなたの力を貸して欲しいの」

「断る」

女性がそう言った瞬間、突風のような轟音がして、いきなりレーヘンが私の目の前に立ちふさがった。

「させませんよ」

レーヘンのひろげた腕の下から彼女の方を見ると、私へ向けて右手を突き出して立っていた。

「チッ」

「なんて危険人物を推薦したんです、ベウオルクト」

レーヘンが強い声を出す。

「この性格は見事に生前のままですか…」

ベウオルクトがやれやれという風に言う。

え、ということ？

「もしかして、私、いま危なかった？」

「あんたを人質にと思っただけさ」

女性は悪びれずに言った。

「面白い冗談ですね。今の攻撃はどう見ても殺傷目的でしたよ」

見ると、レーヘンの身体は服ごと傷だらけになっていた。余裕の笑顔だし、血が出てないから気がつかなかった。

「レーヘン！ ぼろぼろじゃない！」

「ワタシは大丈夫です。時間が経てば元に戻りますから」

「王への攻撃は厳罰対象ですよ。貴方はそんなことまで忘れてしまったのですか？ 古の王よ<sup>いにしえ</sup>」

ベウオルクトが静かにそう言うと、女性は震えて、表情には怒りの感情が露になった。

「おれはようやく死んで楽になれたんだ！ もう放っておいてくれ



！

そう叫んで、彼女は王の間から走り去ってしまった。

「えーと、あの人、行っちゃったけどいいのかしら」

私がレーヘンの怪我の具合をみながら言うと、

「ファムさまが認めない限り、城から出られませんので大丈夫です。それに逃げ込む場所は見当がつきます」

ベウォルクトが落ち着いて答えた。こうなること、全部予想していたわねアンタ

表情が見えない精霊は、遠くに耳を澄ませるかのように布で覆われた頭を傾け、数秒経ってこちらを向いて言った。

「確認しました。この城の中には過去の歴代王の私物を保管する専用の小部屋が多数あるのですが、現在彼女はその部屋に立て籠っています。ここは基本的に本人が中にいると外からは開けられません」  
「なんとか話し合いたいんだけど…本人が嫌って言うなら仕方ないわね」

ちょっと疲れたので、私は王座の裏の棚からお茶セットを取り出して、王の間にテーブルセットを出してもらって一息つくことにした。

保温瓶から甘く味付けした薄緑色のミントティーをカップに注いで、お皿の上に昨日焼いたさくさくのビスケット菓子を並べる。

「ワタシが引つ張り出してきますよ。扉のシステムに介入すれば解錠できます」

ぼろぼろなのに元気良いわねレーヘン。あ、傷がもう塞がってる。切り刻まれた服の間から見える白い肌が目の毒だわ。

「立て籠るのも時間の問題ですね。影霊は王の間でファムさまから力の補給を受けるか、なにかしらの気脈を摂取する必要があります。そのうち飢餓感に耐えられずに出てくるかと」

「だからハーシェはいつも王の間にいるのね」

暗い色のソファに座ってハーシェを膝の上に乗せて、ミントティ

「をたつぷり一口飲んで、私は一連の出来事を整理した。」

「無理に開けなくていいわ。彼女が落ち着いてくれるまで待ちましよう。レーヘン、アナタはその小部屋の前で待機。彼女が出て来たら知らせてちょうだい。あと向かう途中で新しい服に着替えて来なさい。ベウオルクト、アナタはここに残って私の質問に答えて。彼女の生前について知りたいわ」

レーヘンはお辞儀をして王の間から出て行き、ベウオルクトはテーブルを挟んで私の向かいに座った。

「教えてちょうだい。あの人、どうしてあんなことを叫んだの？」

「彼女が生きていた時代は、世界中で戦争が起きていました。この国の元となった暗病国も、国内は比較的落ち着いていましたが、軍事大国としてあちこちの国家を蹂躪していました」

第一王女だった彼女はわずか11歳で即位。それとともに国軍の総帥という立場を受け継いで、何度も前線まで赴いて軍を指揮し、また類い稀な法術の才能があつたために直接戦いに身を投じることもあつた。

そして戦乱の世の集結をみることなく、28歳の若さで亡くなる。

「…楽しみの少なそうな人生ね」

「ちなみに後世での呼び名は血霧の女帝でした」

「そ、そうなの。強そうな名前ね」

影霊と再生 3 (後書き)

各話の後書きは活動報告にて

## 願いが許される場所 1

影霊として復活した古の女王が小部屋に引きこもって3日が経った。

レーヘンがずっと扉の前に待機してくれているので、いい加減寂しくなった私はベウオルクトとの勉強の合間に様子を見に行った。

「いいかげんに出て来たらどうですか？ そのまま部屋の中で二度目の死を体験しますか」

「自死なんて、おれのプライドが許さない。惨めな死骸を貴様らに見せてたまるか！」

「ではそこから出てきてください、ワタシの手で終わりにしてあげます」

「ざけんな！ 誰が貴様なんぞに殺されるか！」

なぜか口喧嘩になっているわね。というか、声は中に届くのね。

「なに喧嘩してるのよ。わかったわ、手を貸してくれないなら、それでかまわないから。とにかく出て来てくれない？」

「はん、いきなり甘い言葉に切り替えて誘い出すつもりか？ 出て来た所で拘束して洗脳でもするつもりか？」

「なかなか良い考えですね」

「レーヘン、ちょっと黙ってなさい」

「はい」

私はレーヘンを押しのけて扉の前に立った。

「古の女王、あなたが出て来ても何もしないわ。女王の名にかけて誓います。勝手に復活させたのは事実だし、自由にしていいいわ」

「…本当か？」

「ええ」

「ただし、ひとつゲームに参加してもらっわ」

彼女は部屋から出て来た。元々白かった顔が、さらに青白くなっている。

「この女はふざけているのか？」

「ファムさまにはファムさまの考えがあるのです。アナタはもう王ではありません。今の王の命令には従ってもらいますよ」

彼女の言葉にベウオルクトが答えていた。顔見知りなのかしら？

「王の間でゲームの説明をするから、移動しましょ」

私はリボンを束ねて作った花飾りをピンで胸元に留めた。

「私はこの花を守りきったら勝ち。あなたはこの花を奪ったら勝ちね」

「簡単なルールだな」

王の間に戻ってだいぶ回復したらしく、彼女の顔色はだいぶよくなっていた。

「あなたが勝ったら、願いをきいてあげる。負けたら私のお願いをきいてね」

「ああ」

「ちなみに期限はあなたが諦めるまで」

「なんだと！」

「レーヘン、全力で守ってね」

「かしこまりました。ではっ」

「なんで守り手が襲って来るんだ！」

「攻めの守りですよ」

それから毎日のように繰り返される影霊の彼女とレーヘンの攻防が始まった。

もうどこのサーカスなのよって言いたくなる激しい動きと、たぶ

ん法術？の技の応酬。始めは遠くから見学していたのだけれど、あまりに動きが早くって、私には何をやっているのかさっぱりわからないので、一日で飽きちゃった。

ちなみに毎回レーヘンが圧勝しているらしいわ。

レーヘンに勝てないとわかると、彼女は戦略的になって、私の隙を狙うようになった。

おかげで食事を共にしてくれたり、私が植物園の手入れするのを眺めたり、お茶の時間を一緒にしてくれたわ。少しずつだけど、会話が続くようにもなった。

でもすぐに彼女は私を攻撃しようとするから、脇にいるレーヘンが速攻で攻撃態勢になり、そのまま長時間の攻防戦へなだれ込むのがいつもの流れ。ときどきこれが一晩中続いたりもするわ。

彼女もだけど、レーヘンも元気がいいわね

そして戦闘で壊れたお城はベウオルクトが順次修復している。文句の一つも出てこないのは、彼女の復活を提案したのがベウオルクトだからみたい。

お城の仕組みの勉強として、私も手伝っているわ。横で眺めていることが多いけれど

今日はベウオルクトと共にこの国に元からいる移動民族に会いに行った。ちょうど彼らがお城の近くを通りかかる日らしいの。

久しぶりの外よ！

私の身体もだいぶ落ち着いたらしくて、一時間くらいなら外出しても大丈夫だつて！でも念のために体内の命脈を落ち着かせためのフード付きコートを着せられたわ。

彼らの事をベウオルクトはイグサ族と呼んでいるので、私もそれにならってイグサ族と呼んでいる。

イグサ族は30人程の集団で生活していて、基本的に島の沿岸部をなぞるように移動しながら生活している。鍋に入れた海水を火にかけて沸騰するやり方で蒸留して、塩と真水に分けて生活に使っているらしいの。食べ物には海藻と、魚介類。

私も魚が食べたい！ とベウオルクトに要求したけれど、くろやみ国近辺の海で採れるものは私の体には合わないそうよ。

一応お城の施設で魚も育てられるらしいんだけど、何百年も動いてないらしくて、お魚を食べられるようになるまですごく時間がかかるらしい。ちえ

イグサ族の人たちは私とは違う種族らしくて、背が低く、手足が太くて、顔には大人も子供も皆地面に生えている枯れかけの草と良く似たものもじゃもじゃと生えている。男女の区別は、ちよつとわからなかったわ……。身体にも草を編んだマントのようなものをまとっていて、遠目からだとか固れ草の固まりに見えた。

イグサ族には長い間滞在する場所もあって家のようなものもあるらしいんだけど、そこは遠いらしいのでまたの機会に見せてもらう事になった。

私は友好のしるしに、私の作った花の塩漬けと砂糖漬けに、緊急連絡用に呼び出しスイッチのついたペンダントをあげた。

それからベウオルクトに翻訳してもらいながら、困った時は手を貸すし、必要な物があれば彼らの魚介類や生活用品と交換出来ると言っ事を伝えた。これは私が欲しい物ではなくて、ベウオルクトが欲しかったものだったりする。イグサ族の事を色々調べているらしい。

帰りには逆におみやげとして彼らが連れている動物の毛を刈ったものをもらったわ。このもこもこ、何に使おうかしら。王座で使うひざかけを編むなんていいかも。

帰り道、珍しくベウオルクトは私に感心していた。

「初めての訪問で彼らとあそこまで情報交換出来るとは、お見事で

す」

「世の中には持ちつ持たれつつ言葉があるのよ。ベウオルクト。こちらが見返りを期待せずに提供すれば相手は何かしらを返したくなるものなのよ。商売の基本ね」

お城までのあと半分の道のりというところで、突然岩陰から影霊の彼女が飛び出してきた。

「よう」

「な、なんで外に？」

「おそらくファムさまが外にいるからでしょう。城がゲームのルールを最優先で適用したようです」

私は腕の中のもこもこをベウオルクトへおしつけ、胸元の花飾りを手で押さえながら反対方向へ走り出した。

「待てっ！」

「待てと言われて待つ女王はいないわよ！」

コートの裾が足にからまって、ものすごく走りにくいわ！  
そう走らないうちに彼女に腕を掴まれてしまった。

「それをよこせ！」

花を奪おうとする彼女から私は必死にもがいて胸元を守ろうと深く屈んだ。

「あがつ！」

突然彼女がつまづいて、何かの力で地面に叩き付けられた。見ると、地中から伸びた手が彼女の足を掴んでいた。

「こんなこともあるうかと、地中にひそんでいました！」

声とともに、地面がひび割れてレーヘンが飛び出して来た。今度は土で服を駄目にして…コイツは…

「ちくしょう！ たかが精霊に！」

「いまの時代はもう、たかがなんて存在じゃありませんよ」

「あつ！ あんなところに空飛ぶトカゲが！」



「そんな言葉にだまされません…って、え？」

彼女の指差した方を見ると、薄緑色をした何かがこちらへ向かって飛んで来るのが見えた。

「な、何かしらあれ、鳥？」

「ファムさま！」

ベウォルクトが素早く私をもこごと抱き上げ、お城の方へ走り出す。

「ま、待って、アレ、上に人が乗っているわ！」

「襲撃かもしれません。とにかく城へ戻りましょう」

いつもおっとりしているベウォルクトも、その気になれば俊敏になるのね

「わ、わかったから、レーヘン！ その人たちまとめてお城まで連れて来てちょうだい！」

「はー…い」

猛スピードで遠ざかっていくレーヘンの声が間延びして聴こえた。これドップラー効果っていうのよね！ こないだ勉強したわ！

## 願いが許される場所 2

「ベウオルクト、世界にはあんなに大きな翼を持ったトカゲがいるのね！」

「ファムさま、あれは竜です」

しばらく経って、レーヘンの後から竜という生き物と一人の人間が王の間に入って来た。

影霊の彼女は一緒じゃないみたいね。

生まれて初めて見る竜は、牛2、3頭分はある大きさの灰色がかった緑色をしていて、二本の早く走れそうな足と二本の小さな手の、一对の大きな翼と長い一本の尻尾を持っていて、ごつごつした岩や木の肌のような鱗らしきものに覆われた姿をしていた。背中の中程には馬具のようなものがとりつけられている。

それに乗って来たであろう人物は、背格好から判断すると相手は男の人のようで、毛布に包まれた何かを大切そうに抱えている。あの大きさからして…

「こんにちは。私はこのくろやみ国の女王ファムよ」

思いつきり普段着用の木いちご柄ワンピースで王座に座ってますけどね。女王なのよ

「お目にかかれて光栄です、ファム女王。あの…ここは暗病国ではないのですか？」

お客さんはやはり男性だった。マントのフードをかぶった上にマフラーを深く巻いているので顔はよくわからないけれど、低く響く声が王の間に響いた。

「以前はね。いまはくろやみ国という名前になったの。それで、うちに何か御用かしら？ その抱えているのはもしかしてあなたのお子さん？」

「…妹です」

彼はゆっくりと抱えていたものを床に降ろし、毛布を取りのけた。

「…どうしちゃったの、その子」

「子供の頃からこいつは時々こっぴどくやっつけて身体がおかしくなるんです。初めは一部分だったんですが、成長するにつれてどんどん酷くなっていきました。様々な名医に見てもらいましたが、ついに見放されました」

中から出て来たのは、身体のほとんどが透けてしまった女の子だった。

「かつてこの地にあった暗病国は、高度な技術を持った国だときいています。…どうか、妹の命を助けてください」

少女の前に膝をついて、お兄さんは深く頭を下げた。

「どちらで暗病国の話を聞きましたか？ この国は人間の地図には載っていない場所ですが」

私の横に立っていたベウオルクトが言った。

「旅の精霊が教えてくれました。西の海の上に妹を助けられるかもしれない国があると。それから自分でも古い文献を調べて、暗闇国の事を知りました」

「私を助けてくれたあの子ね…」

あの明るくてやさしい精霊ならこの国の事を人に教えるくらいしそうだわ。

ベウオルクトが納得したように言った。

「確かにこの国にはかつての暗病国の技術が眠っています。人間の国の地図にはまだくろやみ国は登録されていませんから、信じて貰うためにあえてばかした伝え方をしたのでしょうか」

「あなた達はどこから来たの？」

「緑閑国りよつかんごくです」

海の方この青嶺国のその先の、かなり山深いところにある小さな国だわ。

「伝説を信じて、最後の希望にここまで来てくれたのね」

「失礼します」

レーヘンが女の子の透けた手首をとり、じっと見つめた。

「どう？」

「かなり危険な状態です。おそらく生まれ育った場所の気脈が特殊だったでしょう。ファムさまに似た体質のようですが、制御が安定せず暴走しているようです。自分の命脈が外へと流れ出て、逆に天地の気脈を吸収し、どんどん存在が薄くなつて身体が消滅しかけているのかと。」

「ベウオルクト、レーヘン、意見を聞かせて」

「影霊として再生させる方法なら助かるかもしれませんが。ですがこの少女の存在はだいぶ薄くなっているのです、影霊の媒体として持つかどうか…」

「それに、影霊創りの時期までに間に合いそうにありません」

私は自分の髪の毛を手にとってみた。まだ半分ほどしか銀灰色に染まっていない。

私たちが話をしている間も、少女の輪郭はどんどん薄くなり、いまはもう、うつすらとした影だけが存在を示すだけになっていた。

「とにかくこの状態を止めないと。そういった薬かなにか、ある？」

「あります。治療室から持って参ります」

そう言つてベウオルクトが早足で立ち去つていった。

「ファムさま、先ほど着ていたコートはありますか？」

「これね」

レーヘンは私からコートを受け取ると、少女の身体を包むように巻きつけた。

「これで命脈が流れ出すのを止められます。一時しのぎですが…」  
お兄さんは少女から目を離さずに、ただじっと私たちの話を聞いている。

彼らを連れて来た竜も、心配しているのかそつと上から少女を覗き込んでいた。

お兄さんが少女をいたわるようにそつと触れている場所を見て、私はあることに気がついた。

「ねえ、お兄さんの力を借りれないかしら。使えそうな感じがするの」

はじかれたように彼は私を見た。

「あなた、生まれ持った命脈以外の気脈が身体にあるの、わかる？」

王の間にいるからか、私には気脈や命脈などの存在がよく感じ取れるようになってるみたい。お兄さんの手が触れている場所から、何か少女に流れ混んでいるのがわかった。

「もしかしてこの身体の原因も…」

そう言ってお兄さんは片手でマフラーとフードを外した。

中から現れた精悍な顔つきの男性は黄緑色の短く刈られた髪と深緑の瞳をしていて、さらに目元を中心に三分の一ほどが鱗のように堅く変質していた。特に左目は爬虫類のような瞳孔をしている。

「おそらく彼らは竜脈の近くで育ったのでしょう」

レーヘンが少女の手首に触れたままの姿勢で言った。

「竜脈？」

「古くからある天然の強い気脈の一種です。竜はそこからの影響で生まれるんですよ。うまく調和すれば彼のようになりますが、この少女のようにその強い気脈に引きずられるようにして身体を壊す場合もあります」

「じゃお兄さんは竜の力を持った人なのね。すごく強い生命力を感じるわ。ねえ、この竜脈をうまく混ぜて調和できれば、彼女の命脈を身体にとどめられるんじゃないかしら」

「そんなことをすれば人間じゃなくなっちまうぜ？」

声に振り返ると、王の間の入り口に影霊の彼女が立っていた。

「身体に竜脈が混じったからそこにいる男はそんな格好をしているんだ。顔を隠していたのは、そのみてくれで地元で苦労したからじゃないのか？ そんなのを命脈にまぜるとさらに酷い事になるぜ。図々しいんじゃないのか？ そんなことをして。あんたはその人間の事を背負い込めるのか？ 勝手にまるで違うモンに変えられて、おれのように絶望してあんたの命を狙うようになるかもしれないぜ？ やろうとしていることは、そういうことだ」

お兄さんはうつむいている。けれど、少女から離れる事はない。

レーヘンはずっと少女の手首を持って様子を測っている。

私は彼女を見つめて、言った。

「でも、今この場でこの子が死んでしまう事を望む者は誰もいないわ」

「持って参りました」

ベウオルクトがいくつか箱を抱えて帰って来た。

小瓶から薬を飲ませようとレーヘンが少女を抱き起こすと、少女の口が動いてかすかな声が聞こえた。

「お、おね…おねがいします。兄を…ひとりぼっちに…したくない…」

少女の兄は顔をあげて、私を見つめて言った。

「どんな姿でもかまいません。妹が生きてさえいてくれるのなら…だから…頼みます」

私はゆつくりと、自分にも、王の間全体にも響くように言った。

「この子が生きる事に悩んだら、私も一緒に悩んで、一緒に良い方法を考えるわ。法术が使えたりすぐく頭が良かったりするわけじゃないけど、それくらいの事は私にもできるし、更にいえばこの国の

女王としてなら何かできるはずよ」

王の間に頼んで影霊を創る時のような台を王座のすぐ横に出してもらい、少女の身体を横たえる。

私は王座に座って、ゆっくり深呼吸をして心を鎮めた。

『ファムさま』

「ハーシエ？ どうしたの？」

声が聞こえた方を見ると、ハーシエが誕生したとき以来の人の姿になっていた。

『お手伝いしますわ。この子が吸い取った気脈をわたしに流して下さいまし』

口を動かさずにそう言って、ハーシエは穏やかな微笑みのままそつと手を差し出してきた。

「わかったわ」

私はハーシエの手をとった。

「ファムさま、ハーシエと手をつないだまま、反対の手を少女の胸元に置いてください。アナタはこちらに手を」

そう言ってベウオルクトがお兄さんの右手を少女の額へと誘導した。

私はゆっくりと皆を見渡し、最後に影霊の彼女を見て微笑んで、言った。

「さあ、はじめるわよ」

願いが許される場所 2（後書き）

竜出てきました。王道っぽく。竜が  
ぽこぽこ現れる新キャラ達の名前は、順々に出てきます。

2011/02/06：お兄さんの髪の色を深緑に変更



### 願いが許される場所 3

はじめてだけどなんとなく大丈夫だという思いがあったから、私は落ち着いていた。

少女の身体を眺めながら流れをつくることを意識する。

冷たくて固いバターがゆっくりと温まり、溶けて柔らかくなるように。

それからその柔らかくなくなったものが流れ動いて行くように…

お兄さんから少女に、少女から私の身体を通しハーシェに…

少女の命脈はゆっくりと竜脈と混ざるにつれて強く感じられるようになって来た。

それと共に消えかけていた姿が現れ始め、しっかりとした輪郭が見えるようになってきた。

そして私の視界がちよつと暗くなった瞬間、

『ファムさま、』

「命脈が安定しました」

「お身体の限界です。今日はここまでにしましょう」

ハーシェが言つて、ほぼ同時にレーヘンとベウォルクトが喋った。

私は手を離して、倒れこむように背を王座に預けて深く息をついた。

どれくらい時間が経ったのかわからないけれど、すぐく身体が重くなったみたい。うまく動かせないわ。

「ファムさま、すぐに薬を飲みますよ」

レーヘンがすぐさま小瓶を3本押し付けて来た。

「まずこれを飲んで、次にこれ、そして15分後にこれを飲んでく

ださい」

「わ、わかったわ」

なんだかよくわからないけど、とにかく言われたままに飲む。初めのはすつごく不味くて、次はまあまあ甘くて、最後のは酸っぱかったわ。

全部飲み終わったら、身体がびっくりするくらい軽くなった。

「ありがとう、レーヘン」

「お疲れさまでした。ファムさま」

小瓶をレーヘンに返してあたりを見渡すと、ハーシェはいつのまにか子ウサギに戻っていて床に目を閉じてうずくまっていて、お兄さんは崩れるようにして少女の眠る台のふちにもたれ掛かっていた。みんなそれぞれ疲れているみたいね。

そばですつと様子を眺めていた竜はふんふんと少女の匂いをかいで何かを確認しているみたい。

ベウオルクトがそれぞれの身体の様子を見て回って、最後に私の元へ戻ってきた。

「ファムさま、お身体の方はどうですか？」

「今のところはちよつとだるいだけね。ねえベウオルクト、あの子まだ元気になれないの？」

「まだ身体の消滅を防げた段階です。全快にはしばらくかかるかと。ファムさまの身体への負担具合を見て明日か明後日に二回目をおこないましょう」

「わかったわ。じゃあみんなの滞在場所を用意しましょう」

「少女は王の間から動かさない方がよろしいですよ」

「ならきつとお兄さん達もここに泊まる方が安心できるわね。簡易テントでも張る？」

「…夜だけ彼らの普通の寝台と簡単なついたてを作りましたよ」

王の間にテントは駄目みたいね。ベウオルクト。

「寝台とついたてね。あと人が滞在するのに必要そうな物は私が用

意するから、アナタは竜が滞在するのには何が要るか聞いておいてちょうだい」

「かしこまりました」

私は王座を離れて、うんと伸びをした。

それからこわばった身体をほぐすようにゆっくりと歩きながら窓辺に立つ影霊の彼女の元へ行った。

「なにもしないでくれて、ありがとう」

「…べつに」

彼女は窓の外を向いたまま言った。

「ねえ、さっき言ってた事についてだけど、あなた絶望してたの？」  
「死ぬ時までな。今は、なにもかも変わっちまって、無くなって、からっぽになっちまった」

小さくかすれた声だった。

私は彼女の目線と同じ方向にある、空を覆う灰色の雲たちを眺めながら言った。

「あのね、私王の間であなたを蘇らせた時に願ったの。もしも蘇らせようとしている相手が死んでいたいと思っていたなら何もしないでちょうだいって。本人が生きたがっていた時だけ復活させてちょうだいって」

「…なんだと」

私をまっすぐに見つめてきた彼女の瞳は暗い灰色だった。いまにも雨が降りそうな空の色だわ。

「あなた、死ぬ時にもっと生きたいって思っていたはずよ」

「…覚えてない、そんなこと」

彼女は足元に目線を移した。見ると、ここ何日かの乱闘のせいで真っ白だった細身のワンピースの裾はぼろぼろになって、灰色になっていた。

「私ね、この間死にかけたの。身体の内側が崩れて、血を沢山吐い

て、自分ではわからなかったのだけどかなり危なかったらしいわ」  
あの時、思い返すたびに呆れちゃうくらい私は自分の死を感じてなかった。レーヘンが必死で止めたのに、まだまだ大丈夫だって思ってた。

「それでね、その時すぐ会いたい人がいて、自分の身体がどうなるかよりもその事だけ考てたの。だからもしも私がその時死んでいたら、死ぬ間際はその人と会う事しか考えてなかったことになるわ」  
あの時ヴィルに会えていたら、もしかしたら私、気が緩んでその場で死んじゃってたかもしれないわ

「とらえようによつては何かを望むことは生きたいって願うことになると思うの」

「…おれも、なにか強く望んでいたのか」  
「たぶんね」

それつきり彼女は口をつぐみ、私は背後から聞こえてくる竜の鋭い爪のついた足が床を引つ掻く音や、ベウォルクト達が話す声「可愛い竜ですねえ」「床が傷つくのであの竜の爪を切りたいのですが」「いやあの、爪がないとコイツ早く走れなくなるんで…」に  
なんとなく耳を傾けていた。

「…ゲームはおれの負けでいい」

ぼろりと、こぼれ落ちるように彼女の声が聞こえた。

「え？」

「あんたの配下になつてもいいって言つてるんだ。したいことも別にないしな。ただし、条件がある」

「何かしら？ 可能な限り受け入れるわ」

「黒のマスカラが欲しい。銀のまつげだと目元が寂しいんだ」

「化粧品もアクセサリーも、必要な物があればなんでも用意するわ。昔あつたものと同じものもお城のシステムを使えば作れると思うか

ら、なんでも相談してね」

「ああ」

「ねえ、ずっと尋ねたかったのだけど、あなたの名前、なんていうの？」

「おれの名は…女王サマ、あんたが新しく名付けてくれ」

「え、いいの？」

「おれは生まれ変わったんだ。なら名前だって新しいほうがいいだろう」

照れる美人つてとっても可愛いわ！

「えっと、じゃあマルハレータはどうかしら？ 私の育った所の言葉で真珠という意味があるの」

「マルハレータか…わかった」

「ありがとう、これからよろしくね！ マルハレータさん」

「呼び捨てで良い。…よろしく、ファム女王」

私が差し出した手を、彼女はゆっくりと握ってくれた。  
ほっそりした長い指は少しひんやりしていたけれど、暖かい手のひらだった。

さあて、今夜は新しい仲間と、お客さんの為に女王さま自らが料理をふるまうわよ！

いつも自分で作ってるんだけどね！

## 願いが許される場所 4

「はい、どうぞ」

意外なことにマルハレータの要求した品々を用意したのはレーヘンだった。彼女は嫌そうにそれらを受け取って、大浴場へ消えて行った。

人間の頃の習慣に感覚が馴染んでいるから、影霊という存在になってもお風呂には入りたくなるものらしいわ。

一夜明けて、朝。私とベウオルクトは朝ご飯を持って兄妹と竜が滞在している王の間へ向かった。

「おはよう、サヴァ。身体の具合はどう？」

「おはようございます。ファム女王。おかげさまで疲れがとれました」

お兄さんのサヴァはすでに起きていて、旅装の下に着ていたゆったりした組織りの長袖のシャツとズボンに、膝上まで覆う皮のブーツを履いている。服の端からは所々変質した肌が見えているけれど、昨日のように隠したりせず、堂々としている。

彼は竜のゲオルギの身体を草で編んだたわしのような物で磨いていた。

「ライナちゃんの様子はどう？」

「眠ったままですが、健康状態です」

一晩彼らと一緒に待機してくれたレーヘンが答えた。

消えかかっていた少女は昨日の急造した台とは違って、柔らかなマットのついた寝台の上に横たわっている。一時は影しか残らない

まで薄くなっていた姿はすっかり存在感を取り戻していて、ライナという名の少女の姿が良く見えるようになった。

顎のラインで整えられた暗い緑の髪に、涼やかな目元にはお兄さんのサヴァと似た雰囲気がある。それに加えて子供らしさのある丸みのある輪郭。まだ女性らしさの少ないほっそりとした身体つき。瞳の色は何色なのかしら

彼女は遠目からだと人形と見間違っくらい静かに眠っている。

「ゲオルギ用の朝食も用意しました」

そう言っただけでゲオルクトが抱えていた箱を床に置いた。

「中身は果物と野菜よ。美味しそうなのを選んで来たわ」

レーヘンはゲオルクトが持ってきた箱の中からストローのついた瓶を取り出してサヴァに渡す。

「これをライナさんに飲ませてあげてください」

「何から何までありがとうございます」

「せっかくはるばる来てくれたんだから、ライナちゃんにはしっかり元氣になってもらおうよ」

窓際にテーブルセットを用意して、スープポットからそれぞれの器にポタージュを注ぐ。野菜と果物のサンドイッチを盛った籠はテーブルの中央に置いた。食事はマルハレータも一応食べるだろうかと3人分。人数が増えると作りがいがあるわ

これでさわやかな朝日が差し込んでいけば素敵な朝食になると思うんだけど、この国の空は今日も曇り。窓の外にはいつもと変わらないもやとした色合いの空と乾いた大地が広がっている。

「ハーシエも折角だからお茶だけでも一緒にどうぞ？」

『いただきますわ。ファムさま、わたし、お茶を淹れてみたいですよ』  
人の姿になったハーシエと一緒にお茶の葉を蒸している頃に彼女はやってきた。

「おはよう、マルハレータ」

「ああ…おはよう」

王の間に入って来たマルハレータは新しい服に着替えていた。

ヒールが高い黒のショートブーツに黒い細身のパンツ。薄いグレ  
ーの光沢のあるシャツを着て、両手には法術師の証である人差し指  
と中指が覆われていない形の黒いグローブをはめている。

「男みたいな格好ね」

「おれにはこれのほうが落ち着く。もう女王じゃないしな。おかし  
いか？」

「うっん、男装の麗人って感じで、素敵だわ！ ねえ、その靴で歩  
きにくいなの？ それにどうして爪に色がついてるの？」

「靴は慣れると平気になる。今は高さがないと落ち着かないくらい  
だ。爪はちょっとした仕掛けのためと、その、お洒落で…」

「綺麗ねえ、私にもできるかしら？」

「ああ。道具があれば簡単だ」

ああ、女の子同士の会話ってものすっごく久しぶり！

二回目の竜脈の融合は午後に行われた。

もう消えかける事のなくなったライナの身体には様々な変化が起  
きた。竜脈の影響らしいわ

全身が鱗に覆われたり、色が変わったり、顔つきが変わったり、  
かと思えば元に戻ったりと安定しない。

「ファムさま、影霊の要領で調節してみてください」

「わかったわ」

せつかく見た目が変化するのなら、可憐な姿になって欲しいわ  
私は王の間の力を借りてそう願うと、最終的にライナの姿は元の  
女の子の姿に近いものになった。

そうするうちに彼女の命脈が動く気配がしたので、私は触れてい  
た手を離れた。



まぶたが痙攣して、そつと開く。兄のサヴァと同じ深い緑の瞳が現れた。

「ライナ、ライナ？」

サヴァがそつとライナに声をかけた。

「…兄さん？」

ライナは二回ほど瞬きした後 ゆっくりと両手を持ち上げて目の前にかざして眺める。

「私、いま生きてるの？ どこか消えてない？」

「どこも消えてない。お前は生きているよ」

ライナはゆっくりと身体を起こした。彼女が着ていた病人用の薄い灰色のゆつたりとしたワンピースは後ろが破けていて、窮屈そうに折り畳まれた白い羽根が見えている。両耳の上には親指の先くらいの大きさの突起が現れていた。

「羽根と角が残ったわね…」

一对の真つ白な羽根と一对の銀色の小さな角。あごのラインで整えられていたまっすぐな髪は暗い緑色の中にいくつか銀色の房が生まれて、たて縞模様を描いていた。

私は王の間に頼んで全身が映る鏡を出してもらった。

「ライナちゃん、心の準備ができたならこの前に来てちょうだい。すぐじゃなくてでもいいわ」

「女王さま、お気遣いありがとうございます。今、行きます」

心配そうなサヴァに手伝われながらライナは寝台から降りて、ふらつきながら裸足のまま鏡の前に歩いていく。

彼女はまっすぐな視線で自分の姿を見た。

「…面白い髪の色になってますね」

「あと羽根と角が生えちゃったけどね。でも十分可愛い女の子よ、あなた」

ライナは角を人差し指で撫でたあと、ワンピースの襟をさらに破いて背中 of 羽根を引っ張り出して、なんとか動かそうとして、あきrameて言った。

「私、銀色好きです。角はそんなに目立たないですし、羽根は頑張れば空が飛べるようになるかもしれません」

彼女は鏡を見ながら自分の顔に触れ、ワンピースの上から胴体に触れ、両腕、両足に触れ、しゃがんで10本揃った足の指を優しく撫でた。

「私の身体、もう消えたりしませんか？」

「このまま城内で様子を見て、10日間後までに体内でなにも変化が起きなければ、その後も大丈夫でしょう」

ベウオルクトがそう言って、ライナは笑顔になった。

願いが許される場所 4（後書き）

やっぱり後書きは活動報告にて

## 無いものと有るもの 1

私は目を潤ませて天を仰いだ。目に入るのは果てしなく高くて暗い色した天井だけど、感動のあまりなんだか輝いて見える。

「おいひい…お魚ってこんなに美味しい出汁がでるのね…」

なんとサヴァがゲオルギと一緒に海の遠方まで出かけて、網で魚を捕って来てくれたの！

彼らの旅の荷物にあった干し肉をもらった私が涙を流して喜んだのを見て、可哀想に思ってくれたらしいわ。

下処理をしたお魚をぶつ切りにして油で炒めて野菜と一緒に煮込んだスープは、ひと匙でうっとりするようなコクのある味だった。

「喜んでいただけでよかったです」

「やったね兄さん」

新鮮な野菜や穀物はあるんだけど、お肉やお魚、ないのよね…。

代わりに植物油や豆やスパイスで作られたお肉っぽいものや人造の卵や牛乳とかは手に入るんだけど、時々あの脂ののったベーコンやこつてりした貝のシチューが恋しくなるわ…

「ベウオルクト！ レーヘン！ 魚介類の保存食の作り方を調べるわよ！」

「学習意欲が高いのはよろしいのですが、王の間で干物をつくることはやめて下さいね」

元気になったライナが翌日には固形の物も食べられるようになったので、回復のお祝いを兼ねて私はまた頑張ってご飯を作ったわ！  
今晚の献立は魚と野菜の具沢山スープとパンが二種類、三種類の

豆のパテと温野菜サラダ、デザートは果物のゼリー寄せとベリーのプディングよ。

レーヘンにちょっと手伝わせたけれど、単純な下ごしらえは出来ても、味の仕上がりに関わる細かい気配りが出来ないみたい。味見させてもいまいち分らないって顔をしていたわ。

今日は品数が多いので食堂でご飯を食べる事にしたわ。

精霊達は料理を食べたがらないから離れた席でゲオルギにご飯をあげたり、食器を運んだりしている。

元人間の影霊のマルハレータは一緒に席についてなにやら難しい顔つきでサラダを食べている。彼女は大抵の料理に対して不思議そうな顔や難しい顔をするのだけど、生前は何を食べていたのかしら？

「そういえば、あなた達はいま何歳なの？」

ちまちまとパンを食べていたライナが顔をあげた。

「兄は21歳で、私は12歳です」

彼女ははきはきと答えた。

「しっかりしてるわねえ」

「俺がしっかりしていかないの……」

サヴァは静けさと落ち着いた雰囲気を持っている青年で、肌の紋様の影響が表情が少なくて言葉数も少ない。そのかわりにライナは喋る子で、よく動く表情で明るく笑う。サヴァに言わせると、屈託なく笑うようになったのはこの国に来てからだそうよ。

食後の団らんにお茶を飲みながらサヴァとライナの生い立ちを詳しく聞く事になった。

「戦争で村が無くなってしまい、二人きりの兄妹なんです」

彼らが生まれ育ったのは山あいの小さな村だった。

近くには野生の竜が多く生息する谷があつて、扱いが難しい竜と仲良くなる人間が多く、竜関係の仕事につく村人が多かった。

けれど6年前に起きた野生の竜が生息する谷の権利争いに巻き込

まれて、村は消滅。ライナと彼女の幼馴染以外は皆殺されてしまった。

うちの精霊達に言わせると、その村も竜の谷も、竜脈の影響があったに違いないそうで、その村には竜人と呼んでもいいくらい強く竜の力を持つ人達が沢山いたはずなんだそうよ。

「小さな争いでおそろしく貴重な資源を無駄にしていますね」

一足早く村を出て自活していたサヴァは、なんとか生き延びた4歳のライナを引き取って一緒に暮らしはじめた。

けれどライナの症状が一気に悪化し、治療法を求めて隣国の青嶺国に身を寄せた。

その後、知り合った旅の精霊に海の彼方にある治療出来そうな国を教えられ、ほとんど賭けのような思いで海を渡ってくるやみ国までやって来た。

「ファムさま。私達をここへ置いてくれませんか」

ライナが意を決したように言った。

「何でもします。私の身体を治してくれた恩返しがしたいんです」  
ちらつと隣のサヴァを見ると、目を見開いている。彼は知らなかったみたい。

周りを見ると、精霊達は我関せずという様子なので、私の好きにして良いということらしい。マルハレータにも視線を送ると、『アントアが女王だろ』という声が頭に響いて来た。どうも影霊は創造主の私と思念で会話できるみたいね

「私はかまわないけれど、ここ何も無いわよ」

「私達は身体のせいで緑閑国でも青嶺国でも辛い思いをしました。暖かく迎えてくれたこの国で生きていきたいんです」

ライナのまっすぐな瞳はきらめいている。確かにここには山も森

も自然の生き物もないけれど、身体が消えかける子や身体に鱗模様がある人を嫌がる人間もないわね。羽根や角を生やした責任もあるし、彼女達がここで暮らす事に問題はないわ。

「サヴァはどうなの？」

「俺も構いませんが：ゲオルギは国に戻さなければなりません。卵から俺が育てましたが、個人で所有権を持てないんです。コイツは頭がいいから、鞍を外せば自分で帰れるでしょう」

「そう：せっかく仲良くなれたばかりなのに：」

ゲオルギを見ると、何やら熱心にギイギイと鳴いている。それを見ていたレーヘンがうなずいて言った。

「大丈夫だそうですよ。一旦戻って、力ずくで脱走してくるそうです」

「レーヘン、アナタ言葉分かるの？」

「竜の言葉は簡単ですから」

私には全部同じ鳴き声に聞こるのだけど、何がどう簡単なのかしら？

「ゲオルギ、オマエ言葉を喋るのか」

サヴァも驚いているじゃない

「この世には人間が考えている以上に賢い生き物が沢山いるんですよ」

ついに国民が出来たわ！

祝杯をあげたいのに、お酒が無いなんて！

「ベウオルクト、一刻も早くお酒作りを開始しましょうね！」

「では明日の勉強は醸造技術にいたしましょう」

とりあえず絞ったての林檎ジュースで乾杯したわ。

無いものと有るもの 1 (後書き)

変更：ライナの年齢を三歳ひきあげました。



## 無いものと有るもの 2

「よく似合っているわよ、ライナちゃん」

二日経ってだいぶ歩けるようになったライナはもう病人服ではなくて、身体を締め付けないふんわりとしたワンピースを着ている。

羽根があるので背中があいたホルダーネックになっていて、首元にはふわふわした生地のスカーフが巻かれて、同じ生地の花飾りがついたサンダルをはいていて、とても可愛い姿だわ。

「ありがとうございます、ファムさま！」

ライナは照れながら笑う。

昨日ガラス板の画像を操って彼女の服を作った時、はじめ顔を赤らめて遠慮していたけれど、次第に一緒に服の柄えらびを楽しんでくれた。

「ギョオギョオ」

「そう、君の言うそれが結界。壊すには鼻息に工夫が必要なんだ」

レーヘンは竜のゲオルギと随分仲良くなったらしくて、無事に戻って来るためにいろいろと助言をしていた。

「ギー、フー」

「もっと力を混ぜることは出来るかい？ あとは厩舎を抜け出す時は暴れるよりも鍵を解錠して逃走した方が、君自身の仕業と思われるにくいと思うんだ」

「ギュー」

「なんだかどちらも可愛いわね」

「俺もゲオルギと会話してみたいですよ」

ゲオルギから外した鞍を布袋にしまいながらサヴァが言った。

「ベウオルクトに尋ねてみたら？ あなたなら竜と会話出来そうよ」

レーヘンとゲオルギを眺めながらサヴァと会話していると、マルハレータがずんずんと近づいて来た。

「お前、その身のこなしからしてそれなりに強いんだろ」

「え、ええ。一応ですが国の騎士団に所属していました」

確かに、サヴァは背が高く見て目は細身だけど肩周りを中心にしつかりとした筋肉がついているし、力強い歩き方をする。

「騎士団にいたということは、もしかしてサヴァは騎士なの？」

「ええ、一応は。もう騎士団を抜けたので剣は返してしまいました  
が」

「ゲオルギと一緒になら竜騎士というわけね。格好いいわあ……」

でもわりと大人しそうな人だし、マルハレータに圧倒されて布袋を抱きしめながら答える姿はちょっと戦う人に見えないわね。

「なら、おれの身体慣らしにつき合え。おれが身体の扱いに慣れたらお前の妹の身体慣らしを手伝ってやれる」

「おや、ワタシではだめですか」

声が聞こえていたようで遠くからレーヘンが言う。なに、そのにやつとした笑い方。どこで覚えて来たのかしら

「オマエは卑怯な手ばかりで慣らしにならん」

一体どんな手口で闘ったのかしら、レーヘン。マルハレータは精霊達に慣れて来たようで、復活したばかりの時のように感情をあらわにして言い返す事がなくなった。

「ファム女王」

「なにかしら、マルハレータ」

「おれはライナの身体の慣らしが済んだらまずこの国の状態を見てまわってくる。おれの時代の後に国がどうなったか気になるしな。帰って来たらあんたが言ってた他国の情報収集に出かける。それで

いいか」

「いいわよ。国内のことを調べたら内容をベウオルクトに報告してね。あと私も報告を聞きたいわ」

「了解した。あと、それから……」

彼女は胸元から金色のペンダントを取り出し、私に差し出してきた。

「いつでもいい、影霊の核にこれを使ってくれないか」

「わかったわ」

ゲオルギが飛び去るのを見送った後、マルハレータの身体慣らしを行う事になった。

「身体慣らしとは、俺は何をすればいいんですか？」

「格闘の模擬戦みたいなもんだ」

「暴れるのでしたら、練兵場がありますのでそちらでやりましょう」  
そう言っただけでベウオルクトが私たちを案内してくれた。

お城の中層階あたりにある練兵場は、とてつもなく広かった。王の間を3つほどつなげたくらいの広さがある、壁や天井がぼんやり光るだけの、何も無い部屋。

「この部屋はファムさま以外でも登録さえすれば誰でも扱えます」

レーヘンがそう言っていると、床に四角い穴が開いて金属製の柵がせり出して来た。

「練習用の防具です。どうぞ」

サヴァは柵の中から黒と灰色の胴あてと厚みのある籠手、すね当てを取り出して身につけた。マルハレータは防具に見向きもしないで軽く伸びをしている。ちなみにいつもの高いヒールのブーツもそのままよ、あの人。

私とライナはマルハレータとサヴァが立つ場所から離れて、王の間と同じように床から椅子を出して座る。

「何ですかこの鎧。金属でもないし、皮でもない。布のような…」  
「はじめるぞ」

不思議そうなサヴァの言葉を無視してマルハレータは素手で飛びかかった。

「うわっ」

サヴァは驚きつつもわずかな動きでかわし、大きく後ろへ飛び退いた。

マルハレータの手足は陽炎のような透明なもやに包まれていた。

彼女が腕を振ると大風のような音がする。

「あれは空気をいじってるの？」

「そうです。マルハレータの手足は高速震動する空気で包まれており、触れるだけで岩も砕けます」

「あれが法術というもののなんですか？」

一緒に見学しているライナも興味津々でレーヘンに質問する。

「似ていますが違います。あれは純粹に氣脈を操る技です。法術ほど繊細な制御ができない分、破壊力があるんですよ」

「まだ法術は使わない。原始的な術の方があんたらも目で理解できる事が多いはずだ」

ちらりとこちらを見てマルハレータが言った。

確かに、彼女が操る氣脈の流れがよく分かるわ。あなた先生に向いてるかもしれないわね。

「ライナはわかる？」

「なんとなくですが…」

長い手足でしなやかに動く二人の姿は格好よかった。

「こうやって目で追える動きを見ると、レーヘンの動き方がいかに異常だったかわかるわね」

「お褒めにあずかり光栄です」  
褒めているつもりないわよ。

「おまえ、少しは反撃したらどうだ」

物足りなそうにマルハレータが言う。

「女性と素手で闘うのは苦手で…模擬戦用の槍か剣はありませんか？」

サヴァがマルハレータの蹴りを箆手で受けながら言った。

「槍とか剣とか触った事がないから、棒でいいかしら？」

私が形をイメージすると、床から台座に乗った何本かの長さが違う棒が現れた。

「かまいません」

サヴァは箆手を外して放り投げ、彼の腰の高さを越える位の長さの棒を掴んで、マルハレータに向かっていった。

二人は二時間ほど模擬戦をして、ついでに私やライナも練兵場の機能を使って障害物を出したりして参加した。二人の動きを邪魔するようにブロックを出すのは面白かったわ！

それにしてもあれだけ動き回って二人ともほとんど息が切れないのは凄いわね

「兄さんは騎士団の中で1、2を争う槍使いだったんですよ」  
やるわねえ

### 無いものと有るもの 3

翌日の午後も同じように練兵場で遊んでいると、レーヘンが天井を見あげた。

「どうやらゲオルギが戻って来たようです。まだ海洋上ですがしばらくすると到着するでしょう」

「もう？ 帰って来るの早すぎない？」

「おかしいですね。移動だけでもっと時間がかかるはずですが……」  
サヴァが首を傾げている。

「とにかく港へ向かいましょう」

それにしても港なんてものがあつたのね、この国。

私はライナとサヴァと一緒にレーヘンに誘導されるままお城内から列車に乗って移動した。

駅から降りるといつの間にか外に出ていた。

かつてはきちんと舗装されていたらしい幅広い荒れた道をしばらく歩いて行くと、どんよりした暗い灰色の海に面して朽ち果てた港が広がっていた。さびた金属と半分砕けた石垣に波がぶつかってしぶきが飛び、物悲しげな風が吹いている。

「港というか、人工物の跡しか残ってないわね……」

「この方向に青嶺国などがある大陸があるんですよ、ファムさま」  
「そうなの……」

私は風になびく髪を手で押さえながらレーヘンが指差した方向を見つめた。

青嶺国の向こうには、緑閑国や白箔国があるのよね……

私たちが港に到着してそう時間が経過しないうちに、空にごま粒

のようなゲオルギが見えて来た。

「…何か乗せてるわね…子供かしら？」

「兄さん！ ゲオルギの背を見て！」

隣で見ていたライナが叫んで、ゲオルギが着地した場所へ向かった。

まだ羽根に慣れてないからかふらつきながら小走りで駆けて行く。

「シメオン！」

「ライナ！」

ゲオルギの背に乗っている何かはライナと同じくらいの年の旅装の男の子だった。明るい黄緑色のさらさらした髪に、女の子のように整った顔立ちをしている。

「ライナ！ ライナ、ライナ、ライナ！」

つけていたゴーグルを外して急いで竜の背から降り、泣きそうな顔でまっすぐにライナへ向かって走る。

そのまま猛烈な勢いを殺す事無くライナに抱きついた。

…あんな勢いでぶつかってライナ大丈夫かしら？

「シメオン、どうしてここに？」

「そんなのライナがいるからに決まってるからじゃないか！ ライナ、外に出て、身体は大丈夫？」

男の子は必死な顔でライナに尋ねる。

「うん…あの、あのね」

ライナは顔を伏せた

「私の身体、いろいろ変わっちゃって…」

シメオンと呼ばれた男の子の手をとって角に触らせる。

「角とか」

それから大きく羽根を広げて、動かしてみせた。

「羽根が生えちゃったの」

シメオンはライナを見つめたまま硬直して動かない。

「で、でもね！ もう身体がおかしくなる事はないんだ。私、こん

な姿だけど、元気になったんだ！」

そう言って目を潤ませて震えながらライナは一生懸命に笑おうと  
していた。

ライナを見つめていたシメオンは震えて、叫んだ。

「髪！ ライナの長い髪が！」

シメオンに驚いた拍子にライナの緊張が解けたようで、顔のこわ  
ばりが溶けていた。ぽかんとした顔で自分の顎の長さで切りそろえ  
られた髪を触る。

「ええ？ あ、うん、長いと旅に邪魔だから切っちゃった」

あらら、あの子泣き始めちゃった。

ひとしきりシメオンは泣いて、ライナに慰められていた。

「でも…よかった」

そう言って、シメオンは再びライナを抱きしめた。

「ライナが元気になったのが一番嬉しいよ。どんな姿になってもラ  
イナはライナだよ」

「…ありがとう、シメオン」

そう言って、ライナも泣き始めて、二人は涙を流しながら笑いあ  
った。

しばらく私たちが遠くから眺めていると、ライナがシメオンと呼  
ばれた男の子と手をつないで私の元へやってきた。

「ファムさま、幼馴染のシメオンです」

「はじめまして、女王さま」

綺麗な顔をした男の子だけど、私をまっすぐに見てくる青みがか  
つた緑の目には鋭さがある。どうも普通の子供じゃなさそうな感じ  
ね…

「私の一つ年上で、緑閑国では神童ってよばれていた凄い子なんで



す。村が襲われた時も、シメオンのお陰で生き残れたんです」

「はじめまして、シメオン。私は…」

「女王さま、僕をライナと同じ身体にしてください！」

シメオンは私をまっすぐ見つめたまま言った。

「ええっ？」

「シ、シメオン、何を言うの！」

ライナが驚いている。

「ライナを世界で一人きりにしたくないんです」

「やめてよ。シメオンは身体どこも悪くないんだよ」

「ライナの言う通りよ。生まれ持った身体をそんなに軽く扱うもんじゃないわ。とりあえず、成長期が終わってからもう一度言いなさい。その時まで願っていられたらちよつと考えてみるわ」

なんだか激しい子ね…

ゲオルギの様子を見ていたサヴァが近づいてきて言った。

「シメオン、お前、国は？ 学院試験があつたんじゃないのか」

「無理。緑閑の国外追放受けた」

「はあ！？ 一体何をしたらそんなことに」

「兄ちゃん達を実験に使おうとした組織を潰した」

「…全員か？」

「ああ。それで、全部王様に報告した。そしたら、命だけは助けてくれた」

なんだか物騒な話をしているわね…

彼らは彼らなりの状況があるみたいだし、落ち着いたらゆっくり話を聞かせてもらいましょうか。

「あのね、シメオン、私この国で暮らすことにしたんだ」

「わかった。僕も一緒に緒だからね」

即決だわ！ この子！

## 無いものと有るもの 4

霧が漂う早朝の朽ち果てた港に小さな人影があつた。

懷から取り出した物を空に向かつて放り投げる。投げられた金色の物体は海面に落ちる事無く羽ばたいて、空の彼方へ吸い込まれるように消えて行つた。

「これで借りは返したよ、白箔王」

「あんたらのいた国はけつこう荒れていたようだな。あのちび、随分な殺気を持つじゃないか」

そう言つてマルハレータはライナの傍から離れないシメオンを眺めてにやりと笑つた。

シメオンが来た翌日、人工の太陽光が降り注ぐ植物園で朝ご飯を食べながらみんなの顔合わせをしたわ。

今は食後ののんびりとした時間で、私たちはご飯を食べていたテーブルで、子供達とゲオルギは離れた場所の芝生の上でゆったりとした時間を味わっている。

ライナは昨日一昨日と長旅をしたゲオルギの身体の泥汚れを固いブラシでこすり落としていて、そのライナの後ろでシメオンが彼女の翼に水で湿らせた柔らかなブラシをあてている。

私は洗ってきたラズベリーを盛ったお皿をテーブルに置いて、サヴァに尋ねた。

「彼も騎士団にいたの？」

「いいえ、将来的には入るつもりのようなのですが、勉強してライナの身体の治療法を探すつもりだと言ってました」

「じゃあ学者志望だったのね。」

「だがあいつの目は随分と……」

「……そうです。村が襲われたときも、今回ライナの事でも、あいつは随分と手を汚しています」

シメオンが国を出る経緯は壮絶だったわ。

そもそも、緑閑国で暮らしていたはずのサヴァとライナがくろやみ国へ来る直前に青嶺国にいたのには理由があって、事件に巻き込まれていたのだそうよ。

緑閑国には古くから存在する秘密組織があつて、特殊体質の人間を捕まえては実験に使っていた。目的は不老不死や錬金術など、様々に噂されていたけれど、実際の所不明。表立って公表出来ない命や魂を弄ぶような行為を繰り返していた。

そんな集団に特異な体質を持っているライナが目をつけられ、攫われてしまった。なんとか致命的な実験に使われる前にサヴァは彼の騎士仲間達の助けで彼女を救出することに成功して、縁故を頼って青嶺国へ逃げ込んだ。

何故国外に逃げたのかというと、組織の背後に緑閑国の大貴族が関係していて、さらに他国の貴族とも繋がりがあったので、緑閑国は彼らを守ってくれなかったのだそうよ。

青嶺国で保護をうけて兄妹は一時の平和を得たけれど、騒動の結果としてライナの身体の症状が一気に酷くなって、手の施しようがない程に進行してしまった。

そしてサヴァはライナを助けるために僅かな情報を頼りにゲオルギに乗ってこの国まで飛んできた。

「世の中には恐ろしい集団がいるのね」

「仲間がシメオンと共に滅ぼしたようですから、もうあまり心配はないと思います。事後処理にいくつかの国が動いているようです。ですが、そのせいであいつ…シメオンは行き場を失いました」

シメオン本人いわく「ライナを傷つけた奴らを徹底的に潰した」  
それで、危険人物として子供ながらに捕まり、国王に組織の内部情報を提供することで取引をして、処刑ではなく国外追放処分になった。

裏の意味では、秘密組織や大貴族の罪を暴いた事であちこちから恨みを買ってしまい、後ろ盾の無い13歳のシメオンは彼らの権力が届かない国外追放という形で生き延びることができた。そして国を出た所でちょうど騎士団を抜け出してきたゲオルギと再会して、連れられるままにくろやみ国へ来たのだそうよ。

貴族の権力で殺されそうになって国を出て来た所は私とちよっと似てるわね…シメオンの方が話が大きいけれど。

ちなみに現在の緑閑国は内部に巢食っていた秘密組織が暴かれて、国内が大混乱状態だそうよ。青嶺国が介入して調停を試みているらしいわ。

「あいつの家族は早くに死んでしまつて、村の孤児院で育つたんです。村が焼かれた後は俺がライナと一緒に引き取って一緒に暮らしていました。あいつらは本当に仲がいいんです」

ライナの白い羽根を優しく撫でているシメオンの顔は、とても安らいでいた。

ライナが振り返り、シメオンを見て微笑む。

彼はそれをみて頬をかいた後、心から嬉しそうに笑った。

「シメオンが気になるの？」

マルハレータは彼をじつと見つめていた。年下が好みなのかしら？

「いや…ちょっと懐かしい奴を思ひだしたただけだ。似てるようで、やはり似てないな」

つまらなさそうね、誰に似ていると思ったのかしら。

「あいつはあんな風には笑わない」

サヴァがライナ達のところへラズベリーの皿を持って行き、ベウオルクト達がテーブルにやって来たところでマルハレータが口を開いた。

「追跡はどうだった」

「うまく行きましたよ」

私が真つ赤な林檎にナイフを入れている横で、ベウオルクト達が何かの情報をマルハレータに伝えている。

「なにかあったの？」

「外からの搜索の動きがありましたので、こちらからも一応たどつてみたのです」

「まだ想定範囲内でしたし、今はあえて深く探らない方がいいでしょう」

ゲオルギかシメオンの荷物に何か術がかけられていたのかしら？

「今回はいいけど、次からは何かあったら私にも教えてちょうだいね。私に理解出来ない事でも情報が見えない所で素通りするのって不安になるから」

「はい」

「ちょうどいい機会だ。この国…くろやみ国のセキュリティについて確認しておきたい」

テーブルの上にあるプラムを指で転がしながらマルハレータは言った。

「せきゆりちい？」

あつ、睨まないで、あなたが睨むと本当に怖いから。

「もつと女王の教育をしつかりしろよ。ざっとみてきたがこの城にはかなり物騒なものがあつたぞ」

「すみません」

私と一緒に睨まれたベウオルクトが謝っている。

「この城はすべてあんたの指示で動く。もとからいた精霊やあんたに創られた影霊もそれなりに城のシステムを使う事が出来る。だが新しくやってきた人間はそういったことができない」

「一応みんなには居住範囲は自由に使えるようにしているわ。登録しないと使えないものや慣れないと使うのが難しいものが多いから、今は日常で使う施設がある場所だけ行き来出来るようにしてあるの」「当分それだけにしろ。用事があつて他の区域に行く際は精霊達をつける。そうだな…あのウサギも動けるようにしておけ」

ハーシエにもお仕事ができたわね…

マルハレータは私たちにいくつか助言をくれて、ライナには気脈を整える方法を伝授してくれた。シメオンがライナと一緒に自分の事のように一生懸命聞いていたのが、なんだか微笑ましかった。

「単騎ビークルがまだあるなんてな」

「すぐに動かせるのは平野用の簡単なものだけです。気になるものを見かけたら記録を撮ってきてください」

「了解した。3日ほどで帰ってくる」

午後になって、マルハレータは銀色の馬の背のような不思議な機械にまたがって国内を見て回りに出かけていった。

「いつてらっしゃい！ 気をつけてね！」

## 真珠の守り手 1

マルハレータがでかけている数日の間に、私の髪の色はすっかり変化して影霊を創る頃合いになった。

なんだかとても久しぶりな気がするわ

約束通り、私はマルハレータのペンダントを王の間の台上に置いて王座に座る。

「ファムさま、もしやそのペンダントはマルハレータのものでしょうか？」

「そうよ。よく分かったわねベウォルクト。これを今回の影霊の核にするわ」

折角だから、彼女がいない間に創って、驚かせちゃおうと思ったのよ。肌身離さず持っていたペンダントなんだもの、きっと彼女にとって大切な何かだったに違いないわ。

台の上では今までどおりと同じ黒いもやが生まれ、人の形をつくりだしていく。うーん、感じとしてはどうもマルハレータの時と同じく、昔の誰かが復活するみたいね。あのペンダントの中に何か入ってたみたい。

「レーヘン、構えてください」

もやが消える前にベウォルクトが突然言った。

「またですか」

あきれたようにため息まじりでレーヘンが答える。

「どうかしたの？」



私がそう言った瞬間、影霊の黒いもやが消え去り、レーヘンが素早く私を抱えて飛び退って、遅れて強い衝撃が襲って私たちはまとめて一気に吹き飛ばされた。

「わっ」

「ええええ！」

壁に叩き付けられるかと思ったけど、なんとかレーヘンが空中で姿勢を変えて、無事に着地することができた。

顔を上げると目の前が煙に包まれていて、なにがどうなっているのかわからない。

遠くで何かが崩れる音がする。

頬に風を感じた。

「……なんと」

愕然とするベウオルクトの声が聞こえる。

しばらくすると煙が晴れて、王の間の様子が見えて来た。

窓際に見事な大穴が空いて、外からびゅうびゅうと風が吹き込んできている。

「ど、どうなっちゃったのこれ？」

私は急いで大穴のふちまで走って、外を覗いた。

「ねえ、あの遠くで吼えてるの、あれ、人間？」

遠くの枯れた大地から聞こえてくる爆発音に次々と天高くあがる土煙と地響き。それと共になにか叫んびながら暴れ回っている人影がちらりと見える。

「一応そうですね。いまは影霊ですが、元は人間でしたから」

「王の間に穴……空いちゃったわね……」

レーヘンが追って来て大穴から下を覗き込んでいた私の手を掴む。  
「ファムさま、危ないので下がってください。別室へ退避しましょう」

「え、あの復活した人を追わなくていいの？」

「それはベウォルクトがやります」

見ると、ベウォルクトの周囲から危険な気配が漏れていた。

両手に壊れた壁の固まりを持って、うつむいたまま動かない。

「そ、そう。じゃあ任せるわねベウォルクト！」

「…かしこまりました…もしかしたら治療室を使うかもしれません  
が、よろしいですか」

「自由に使ってちょうだい。せつかく復活してもらったんだから、  
死なせちゃ駄目よ」

「善処します」

それからしばらく私とレーヘンはライナの羽根を動かす練習につきあったり、彼らの居室で必要なものを話し合ったりして過ごした。  
半日経った後、レーヘンが言った。

「そろそろ王の間に戻りましょうか」

危ないのでライナ達には部屋で待機してもらったわ。

「レーヘン、ちゃんと私を守ってね」

「もちろんです」

王の間は相変わらず大穴が空いたままだった。

王座に座って『大丈夫？』と王の間に尋ねると、『問題ないけど、  
修理に数日かかる』という、言葉には満たない思いのようなものが  
伝わって来た。というか、いつの間にか建物と会話出来るようにな  
ってるわ私！

影霊として蘇った人物は、がっしりした体格の大男だった。私の  
腕ほどの太さの金属で編まれた縄でがんじがらめになって、うつ伏

せでベウオルクトの前に転がされている。

「…生きてるの？」

「問題ありません。この人物は元々頑丈ですし、さらに影霊となつて補強されていますので」

ベウオルクトが手をかざすと縄が消え、男は勢いよく立ち上がった。ものすごく背が高いわね！

「なんだあ、ここは」

暗い銀髪、鈍く光る刃物のような灰色の瞳が周囲をせわしく見回す。肉の薄い頬に強く引き結ばれた口元。キツイ目つきと思いきり不機嫌な表情がなければそこその好男子なのに、もったいない。服装は灰色の制服のようなかつちりしたズボンに黒の細身のタングトップ。靴底の厚い頑丈そうなブーツを履いている。ベウオルクトが何をしたのかしらないけれど、全部ぼろぼろだった。筋肉のついた見事な体つきに、レーヘンがうらやましそうな目線を送っている。

「こ、こんにちは。私はこのくろやみ国の女王ファム」

ぎらつく瞳が、私を見た。

「あ…あ？」

睨んでくる…迫力あるわね。

「あなたは一度死んで、影霊として復活してもらったの」

「お嬢ちゃんよ、ふざけるんじゃないわねえぞ。誰がそんな事頼んだ」

「おれだ」

私が答える前に、男はいつのまにか背後にいたマルハレータに蹴りとばされた。

細い足であんなに遠くまで蹴り飛ばせるなんて！

男は頭から壁にぶつかって、なぜか壁の方にヒビが入った。ベウオルクトが微動だにせずじつと壁を見てるのが凄く怖いわ。

「アンタは…」

「ひさしぶりだなあ、オイ。復活早々大暴れしやがったそうだな」  
女でも、ああいった凄みのある笑顔ってできるのね！ 私にも出

来ないかしら。あのヒールでぐりぐりっ  
てするの！

## 真珠の守り手 2

「おれが頼んでてめえを蘇らせてもらっただ。感謝しな」

男は夢からさめたようにぼんやりとした表情でマルハレータを見上げた。

「あー、さっぱり状況がわからねえんだが。それに、あんた、体が」  
「だまれ。おれの今の名はマルハレータだ」

「ああ？」

「おれも一度死んで、蘇った。オマエのようにな。だから今のおれはマルハレータだ」

「随分と女らしい名前になったんだな」

「別にいいだろう？ 強さが義務の時代じゃないんだ」

二人の会話からは随分慣れた感じがするわ。家族なのかと思ったけれど、顔は似ていないわね。

男はマルハレータが差し出した手を掴んで、引き上げられるようにして立ち上がった。

「マルハレータ、彼とはどういった関係だったの？」

「コイツはおれの部下だった。軍の將軍で、おれの護衛もやっていた。ファム女王、コイツにも新しく名前つけてやってくれないか？」

「ええ、よろこんで！ そうね…ローデヴェイクはどうかしら？」

昔話に出て来る英雄の名前なの

「いいんじゃないの」

「おい、俺様の意見は無視かよ！」

マルハレータはわめくローデヴェイクから離れて私が座る王座の

方へやってきた。

「おかえりなさい、マルハレータ」

「あー…タダイマ」

彼女は視線をはずしながらだけど挨拶して、指の先くらいの大きさの小箱をくれた。

「記録だ。精霊達に見せてもらえ」

「ありがとう。国内を見て回って、どうだった？」

「なにもなかったな。潔いくらいまでに何も無かった。どうしようもなく死んだ土地だな」

すっきりした顔してるわね、あなた。

「いまは蘇ってる途中なのよ。時間はかかるけど、これから元の姿に戻っていくわ」

「元にしないでいい。あんたはあんたの国を造れ」

彼女は表情を変えずに私をまっすぐに見て言った。

「わかったわ」

マルハレータが戻って来て、ローデヴェイクはすっかり大人しくなった。表情も、まあそんなに恐くなくなった。

私が話しかけても睨んできたりぶっきらぼうな返事が多いのだけど、彼女の言葉にはちゃんと耳を傾けて、素直に従う。

「彼は生前『狂狼将軍』と呼ばれていました。当時は女王以外の命令をきかず、気に入らない事があると敵味方構わず暴れ回っていたそうです」

ベウオルクトの話を書いて納得しちゃったわ。

「あなたの言う事はきいてくれるのね」

「ちゃんと躡けたからな」

何をどうやったのか聞きたかったけれど、彼女は教えてくれなかったわ。

ちなみにローデヴェイクは暴れた彼を取り押さえたベウオルクト

に対しても、一応従順な態度をとっている。

一日あけて、マルハレータについてもらいながら他のみんなと顔合わせをしたわ。

「兄さんよりも大きな人！」

ライナがローデヴェイクを見上げて驚いたように言った。

確かにサヴァも背が高いけれど、ローデヴェイクのほうが頭ひとつ分大きいわね。

「あんだ、おまえらは」

「ライナです」

「シメオンだ」

ライナはちょこんと可愛くお辞儀をして、隣に立つシメオンは視線を外す事無くローデヴェイクを睨んだまま名を告げる。

「おびえるかと思ったけど、意外とライナは平気ね」

「小さい頃はよく森で野生の竜や虎を手なずけてましたから」

「…あなたたち凄いい所に住んでいたのね…」

でもサヴァの答えにちよつと安心したわ。というか、まったく動じていないライナとは逆にシメオンがものすごく警戒してるわ。

「この時代は羽のあるチビなんているのか」

「この国では彼女だけです。他所ではわかりませんが」

ローデヴェイクの言葉にレーヘンが答えた。

確かに、探してみれば世界のどこかには羽根のある人がいるかもしれないわね。人間以外の種族も、ちよつとはいるみたいだし。

「ライナに近づくな。あんたは殺し屋と同じ気配がする」

シメオンがローデヴェイクを睨みつけたまま言う。

「察しの良いガキだな。俺様は仕事じゃねえ限り弱いには手を出さねえよ」

ローデヴェイクは面白そうににやつと笑った。マルハレータとちよつと笑い方が似てるわね。

「弱い」という言葉にシメオンの機嫌がますます悪くなったみたい。ライナが不安そうにシメオンの様子を伺っている。

「ローデヴェイク、残りのみんなを紹介するわ。まずこっちがハーシエちゃんよ」

空気を帰るために私はそう言ってレーヘンから子うさぎのハーシエを受けとって両手で胸の高さに掲げ、

「サヴァです。こっちは竜のゲオルギ。よろしく」

続いてサヴァが挨拶した。

「珍しい生き物がいるじゃねえか」

ローデヴェイクはゲオルギを見て言った。

ゲオルギは首をかしげながら見返す。

「焼いたらそれなりに食べそうだな」

「食べないでください」

サヴァが言いながらおびえるゲオルギの前に立ちふさがった。

マルハレータがつかつかとローデヴェイクに近づき、すばやく足払いして引き倒して頭を踏みつけた。

「食うなよ？」

「…了解」



### 真珠の守り手 3

なんだかんだで、ローデヴェイクは元上司のマルハレータについて旅に出る事になった。

彼の復活を頼んで来たマルハレータ本人は最初、「国において護衛にでも使え」と言ったわ。でも、

「国に一人で置いておくと危険なので、あなたが責任持って管理してください」

とベウオルクトが言うので、連れて行く事にしてみたい。

王の間の穴、びっくりするくらい大きな穴が開いちゃって、当分は修理終らないものね。

必要な物を準備するのと、復活したばかりのローデヴェイクの身体の調子を見る時間を考えて、マルハレータ達の出発は三日後という事になった。

「ちなみにローデヴェイクってどれくらい強いのか？」

「おそらく本気になる和我々では押さえきれないでしょう」

「ワタクシが彼を取り押さえる事が出来たのは、復活直後の錯乱状態だったからです。戦闘経験もあちらの方が上です」

精霊達がそう断言するのなら、相当の危険人物ね…。頼もしいのか、危ないのか、いまいち判断がつけられないわ。

「とりあえず、しばらく彼の事はマルハレータに任せましょう」

三日間、ローデヴェイクには影霊として安定するためになるべく私がいる王の間にいてもらっていた。もちろん監視役のマルハレータも一緒に。

たいていの時間は、マルハレータと私がお茶を飲んでいる横でベウオルクトが王の間の修理を手伝わせていた。ローデヴェイクはふてくされた顔をしつつも、見た目に似合わない丁寧な手つきで繊細そうな検査器具や道具を使って作業していた。

どうも昔の時代って、複雑な道具や機械が普通に使われていたみたい。マルハレータもお城の壁の所々にとりつけてある板を触っていたし。あれで城内のどこに誰がいるかとか、部屋の明るさとか暑さ寒さを操作できるなんてすごいよね。仕組みについて説明してもらったら法術みたいな技術が使われていなくて驚いちゃったわ。

ちなみに、私は王の間にいなくても簡単なお城の操作なら手ぶらでできるようになったわ。不思議だけど、気がついたらできちゃった。

うちの精霊達はまた私に何か告げ忘れてるんじゃないかしら…

王の間でマルハレータと二人分の荷物の最終確認をしていたら、ローデヴェイクが珍しく私に話しかけて来た。ベウオルクトの修理手伝いは、一段落したみたい。

「今の女王さまよ、旅に持っていく武器をよこせ」

ローデヴェイクはポケットが沢山ある皮のような生地の上着にこれまたポケットのたくさんついた灰色のゆったりしたズボンに着替えていた。うーん、彼らの時代の服って今より形が複雑よね。生地も丈夫そうだし。

「そうね、色々歩くから護身用の物が必要よね。剣がいいかしら？」

「普通之物だといつはすぐにぶっ壊す。おい、おまえの相棒はおれの部屋に置いてある。良い出来だったからとっておいた」

驚いた表情でローデヴェイクはマルハレータを見た。

「ちゃんと手入れはしてあるんだろうな」

「さあな」

そっけない返事に、ローデヴェイクは唸った。

結局、彼の武器はすぐには使える状態じゃなかったらしいので、小型の整備道具セットと一緒に丈夫な黒い袋に入れて担いでいくことになった。随分と変わった形をしていたけれど、いったいどんな使い方をするのかしら、アレ。

「マルハレータは武器とか必要ある？」

「いらん、下手に兵器を持つと怪しまれる。おれは素手で十分だ」

「ローデヴェイクの武器は良いの？」

「あれはアイツの一部みたいなものだったからな。たとえ動かなくても持つてりゃ少しは落ち着くだろ」

動く？ 剣に似たような、そうでないような不思議な形をしていたけれど、どう動くのかしら。

「これが必要そうなものは大体そろったかしら？」

「あとは…そうだな、現在この国はどの程度まで外部に情報を出しているのか確認しておきたい」

確かに、そのあたりの話はまだしてなかったわね。

「この国はまだ人間の地図には載ってないの。伝説上の国としてや、おとぎ話に出てくる闇の国として存在が知られている程度ね」

「ファムさまの言った通り、この国はほとんど外に存在を知られていない状態です。他国とのつながりも定期的なやりとりすらありません。白箔国とは2度ほど接触がありました、それきりの状態です」

レーヘンが私の言葉に続けて言った。

「サヴァが言うには、青嶺国の王室図書の古い文献には『暗病国』の名前があったらしいけど、『くろやみ国』という名前を知っている人間は今の所いないんじゃないかしら」

「わかった」

マルハレータはうなずいて、それから銀糸のような前髪をゆらしながらゆったりと首を横に傾けた。

「それで、女王さま、あんたはおれ達に外でどう振る舞って欲しい

？」

「なんだか学校の先生に問題の答えを聞かれているみたいね。」

でもこの場合、正しい答えなんてない。

必要なのは、私の意思。女王としての指示だわ。

「しばらくただの旅人ということで、見聞を広めて来てちょうだい。精霊達の情報網じゃ得られない、人間の目から世界を見て来て欲しいの。よその人間の国が今どう動いているのか。そして暮らしている人達の生活や文化、価値観や考え方、何を日々感じているのかを私に教えてちょうだい。あなた達の情報は、このくろやみ国が外の国と喧嘩をしないで済む助けになるわ」

マルハレータは私の言葉を聞いてやわらかく微笑んで、ゆっくりお辞儀をした。

「その命令、承った。ファム女王」

「それと、私たちが何かしなければならぬ事が起きそうな時や、誰かにくろやみ国の話をする時は事前に相談してね。私とあなた達影霊は離れた場所でも会話ができるから」

「ああ。わかった」

「アナタ達は何か言う事ある？」

古くからこの国を守っていた存在の意見は大事よね。

「暴れるのは好きにしてくっこうですが、くれぐれも他国に侵略の口実を作る真似は避けて下さいね」

尋ねてみたら、レーヘンがそう言った。暴れるのはいいの…

## 真珠の守り手 4

「申し訳ないけど、お金これだけしか無いの。追加の現金は現地調達でお願いするわ。一応換金出来そうな物は渡しておくから」

私の持つて来た荷物には白箔国で働いて貯めていた微々たる通貨しかないわ。あの貴族オヤジからもらった手切れ金は燃えた家の食卓に置きっぱなしだったから、とつくの昔に灰クズよ。

「今は国が違えば通貨も違うんだろ？ 現金はいらん。荷物になる換金物だけでいい」

三日目の早朝、マルハレータ達を見送るために私たちはお城の出口に立っていた。

ベウォルクトが手のひらに収まる大きさのガラス板のようなものをマルハレータに渡す。

「ローミングパッドです。使い方はあなた方の時代のものと同じにしておりますから、必要な情報はこれで得て下さい。精霊とのやりとりにも使えます」

「わかった」

「マルハレータさんが帰って来る頃には私、飛べるようになってみせます」

ライナは生き生きとした目でマルハレータに挨拶をする。本気で空を飛ぶ気なのね。

「期待はしない。だがおれが言った事を守って実践すればもっと身軽に動けるようになる」

「はい！ わかりました」

珍しくライナの隣は竜のゲオルギだけがいて、シメオンがいない。なんでも、昨日ローデヴェイクとひと悶着あつて、朝方まで練兵場でぼろぼろになるまで闘つて、止めようとしたサヴァ共々寝込んでいるらしいわ。

ローデヴェイクの方は何ともないみたいだけど。彼は今ベウォルクトに何事かを言い聞かせられている。

「あと、あのね……」

私はおらずとマルハレータに封筒を差し出した。

「これ……もし白箔国でヴィルヘルムスつて人に会える事があれば渡して欲しいの。一応、彼は王様をやっているんだけど……」

精霊達が「またですか」つてあきれた雰囲気を出している気がするけど、無視。

「もし、でいいの。もし、会えたらで。大した事書いてないし」

中身は、私は今お仕事に就いていて帰れないけど、元気です。つて、書いてあるだけだし。

マルハレータは私の手から封筒を受け取ってくれた。

「了解した。渡すだけで良いんだな？」

「うん。ありがとう」

一通りの挨拶が終つて、二人は出発した。

「時々は帰つて来てね！ おみやげよろしくね！」

「ああ」

表情は変わらないながらも私の声に手をあげて答えるマルハレータの横で、ローデヴェイクが信じられない物を見たという顔をしていた。

マルハレータ達を見送った後、ライナとゲオルギは医療道具を持ったレーヘンとシメオン達の様子を見に行つて、私は久しぶりに一人で王の間でお茶を飲んでいた。

「二人が出発したばかりなのに、もう寂しく感じちゃうわ」

「彼らがいた時は随分とにぎやかな出来事が多かったですからね」

焼いたメレンゲ菓子と、ジャムを練り込んで焼いたロールパンをお皿の上に並べながらベウオルクトが言った。

「ところで、どうしてマルハレータはローデヴェイクの復活をお願いして来たのかしら」

結局本人には聞きそびれちゃったので、ベウオルクトに尋ねてみた。

顔を布で覆ったこの国最古の精霊は私の向いの椅子に座つて、彼女と彼についての昔話をしてくれた。

「あの時代の誰もがそうだったので、全てが戦争に向かつて動いていて、誰もが己の願い通りに生きられる時代ではありませんでした」

マルハレータは11歳で即位してずっと戦争国家の代表として戦いの指揮をとり、自身も前線で戦った。既に戦火は何代も前から世界中に蔓延しており、彼女の代ではもうどうにも止められる規模ではなかった。

ローデヴェイクは徴兵制のために幼い頃から少年兵として戦陣に身を投じ、初めは戦いへの恐怖で怯えていた日々を送っていた。

その中で彼は偶然にも即位前のマルハレータと出会う。その時、境に彼は積極的に戦闘に参加するようになり、早くからその戦闘能力の高さから頭角を現していたこともあって、成長とともに軍での地位も上がっていった。

「本人は初め機械工員になりたかったようですが、大規模戦闘での殲滅戦にかなりの才というか、実力があつたようで、最終的にはマ





「アンタも俺も、もう戦争に行かなくていいんだな」

「…ああ」

マルハレータは己を囲うローデヴェイクの腕に触れながら言った。

「オマエはもう一人きりじゃないんだよ。ローデヴェイク」

「アンタもだ、マルハレータ」

「…死後になるけど、せつかくだから二人には人生の楽しみを味わって欲しいわね」

いつも奇妙な顔をしてご飯を食べたり、お茶を飲んでいたマルハレータの姿は結局お城を出発するときまで変わらなかった。花の香りをかいで目線が揺らぎ、子うさぎハーシエのふわふわの背中をおそるおそる触ろうとして、結局触れなかった。

ローデヴェイクは国を出発する直前まで穏やかな雰囲気の中で落ち着かなさそうにしている、明るく楽しそうに笑うライナ達を遠くから眺めては不思議そうな顔をしていた。

「少しはこの時代に馴染んで、落ち着いて帰って来てくれると嬉しいわね」

「ところでファムさま」

「どうしたの？ レーヘン」

いつの間にか戻って来ていたレーヘンが私の傍に立っていた。

「二人が旅立って、この国の人口比率が変わりました。現在人間に属するものが4、精霊に属するものが3となり、人間が過半数を越

えました。それで、先ほど確認したのですが、人間の地図にも『くろやみ国』が表示されました」

「えっ」

「ヴィルヘルムさま、地図に例の国の名前が載りましたよ」

「そうですか」

指に止まっていた金色の小鳥を窓の外へ放っていたヴィルヘルムスは、書類が積まれたテーブルに戻り、卓上に飾られた赤い花にそっと触れ、言った。

「この時を待っていました」

## 真珠の守り手 4（後書き）

次回から第三章です。

女王の目覚めを感知して城の一日は始まる。

毎日彼女が過ごす場所に照明がつき、空調が整えられ、彼女が眠っている間に働いていた清掃や改修などの管理部門が休眠状態に入る。

基本的に睡眠を必要としないベウォルクトやレーヘンは、いつもその動きで朝を知る。

遠くから漁から戻って来た竜の鳴き声が聞こえてくる。

「お目覚めになられたようですね」

「では朝の挨拶へ向かいましょう」

くろやみ国の一日はこうやって開始される。

朝、外が明るくなった頃に私は目覚める。

カーテンを開けても朝日はなくて、いつも代わり映えのしない曇り空。

私の目覚めを感知し城は動きだし、空調が整う音がする。自動的に天井や廊下の照明が音も無く点灯していく。

曇りだから朝から照明が必要なのよね…

寝間着のままかく体操をして、顔を洗って身支度を整えて調理室へ向かう。

「おはようございます。ファムさま。ご機嫌いかがですか」

「おはようレーヘン。私の機嫌はいつも通りよ」

「体調はいかがですかファムさま」

「おはよう、まあまあ良い調子よ、ベウオルクト」

大抵は自室を出て廊下に出るとすぐに精霊達が現れる。涼やかな笑顔は朝に似合うわね、レーヘン。

「おはよう、ライナ」

「おはようございます、ファムさま」

「さまなんて付けなくても良いのよ」

「私がつけたいんです。ファムさまはこの国の女王さまなんですから」

調理室に着くとライナがいて昨夜作っておいた朝食をバスケットに詰めていた。彼女はだいぶ翼の扱いに慣れて来たらしくて、体の幅まで折り畳んで、調理台のまわりを元氣よく動き回っている。

「サヴァとシメオンは朝ご飯に来れそう？」

「シメオンはちょっと寝坊するけど来るって言っていました。身体の方は昨日ベウオルクトさんとレーヘンさんが治療してくれたんですが、まだ疲労が残っているみたいなんです」

「そう。無茶するわねあの子」

ライナはシメオンの好物の具入りパンをバスケットに入れている。

「兄さんはゲオルギと漁に出かけて、もう帰ってきて貯蔵室へ魚をしまいに帰ってます」

「え、もう？ 回復早いわね」

「兄は丈夫さだけがとりえですから」

足に柔らかい感触がатарるので見ると、子うさぎの姿をしたハーシエがすりよって朝の挨拶をしてくれたので、抱き上げる。

『おはようございます、ファムさま』

「おはようハーシエ。今日もふわふわね」

最近植物園にみんなが集まってご飯を食べるのが習慣になってきている。

そのあとは人工の日光を浴びながら花たちや畑の手入れをして、野菜と果実の収穫をして過ごす。お昼前になったら調理室に移動して一日分と明日の朝食を作って、食堂が王の間で昼食。

その後はそれぞれの時間を過ごす。

私は王の間でベウオルクトによる女王学習の時間になっていて、内容によってはライナやシメオンも参加するのだけれど、今日はベウオルクトが二人とサヴァとゲオルギを連れて海岸の調査へ向かっている。港も補修しようっていう話になっているし、下調べをしておきたい。

私はいまだ城内安静の身なので、レーヘンとハーシエと一緒に大人しく王の間で過ごしているわ。

おやつブルーベリー入りクッキーをつまみながら、私はペンで勉強用ノートにみんなの名前を書き出してみた。

・人間：ファム、サヴァ、ライナ、シメオン（計4名）

・精霊：ベウオルクト、レーヘン、ハーシエ（計3名）

・竜：ゲオルギ（計1匹）

・現在国外で活動中（精霊扱い？）：マルハレータ、ローデヴェイク（計2名）

「こうしてまとめてみると、ちょっとは賑やかになったわねえ」

私はペンをノートの上に転がした。ペンの中のインクがきらきらと光る。

「それで、マルハレータとローデヴェイクがいなくなつて、精霊と人間の数の比率が逆転したのね」

「そうです。一応人間の数が過半数を占めると、人間の国として地図に表示されるようになります。ゲオルギは竜なので人口には加えていません。サヴァやライナ……いわゆる竜人の他国での扱いは分かりませんが、この国では同じ人として計算しています」

私は王の間に転がしている二つの球体の地図を眺めた。どちらも同じ位置、同じ形の島にくろやみ国の名前が書いてある。

「これから何かが起こるかもしれないわね……」

「念のため、国土と周囲の海に注意しておきます」

「お願いするわ。サヴァにも声をかけておいてちょうだい。彼も漁で沖に出かける事があるし、何かあったときのためにね」

「かしこまりました」

そう言つてレーヘンがお辞儀をした時、王の間にベウオルクトの声が響いた。

『ファムさま、しばらく王の間に皆で待機されていてください。修復中の壁とは反対側の奥の方に。レーヘン、警戒態勢を』

「どうかしたの？ ベウオルクト」

レーヘンが微笑みを消し、ハーシェが人の姿になつて私の傍に立つ。

『海賊が来ました』

シメオンは眉間に皺をよせながら水平線を見つめていた。ベウオルクトに指示された機器は先ほどから順調に海水の調査を始めていて、もうしばらくは見守るだけでよさそうだった。

体の痛みはすっかりなくなったが、手足のだるさはいまだ消えない。思考がぼんやりしているのは、先日は旅に出してしまった銀髪の大男に言われたことが未だに頭にこびりついているのもあった。

「そのままいくと守りたいものの傍にいれなくなるぞ。あの羽根の生えたチビはそのうち死ぬだろうな。おまえのせいだ」

見下されるように言われ、感情が沸点をこえて、自分から飛びかかってしまった。恐怖に耐えられなくなつて戦闘になつたともいえた。大男ローデヴェイクは見た瞬間から危険だと、シメオンの本能が叫んでいた。

年齢も経験も体格もあちらの方が上。内容は一方的だった。

サヴァが止めに入り、マルハレータが静止の声をかけなければ死んでいたかもしれない。

「ちくしょう、どうすればいいかも言えつての」

シメオンは前髪を両手でわし掴み、海から目をそらした。

しばらくたつてシメオンが検査を終えた機器を持って調査基点の



テントに戻ろうと歩き出した時、甲高くなったライナの声が響いた。  
「いやあ！ こないでっ」

恐怖に染まった彼女の声にシメオンの意識は急激に働きはじめた。  
「ライナ！」

ライナは人間が恐かった。

幼い頃から異質の外見を持つ兄への人々の反応を見て来だし、自分も奇病のせいで沢山の人間に、沢山の視線と扱いを受けて来た。心優しい人もいることは解っている。けれど記憶に貯まった恐怖とはなかなか仲良くできない。その恐怖心は緑閑国で組織に攫われて決定的になった。

無言のうちに攫われ、言葉のやり取りの無いままに実験物としての数々の扱いをうけて、ライナの心の傷はさらに深くなった。

くろやみ国で治療を受けて、生まれ変わったような姿になっても、その心はいまだ傷を負ったままで、女王の保護のもとにゆっくりと時間をかけて癒していこうとしていた。

「操作は難しく有りませんか」

「だいぶ慣れてきました。これで何がわかるんですか？ ベウォルクトさん」

ライナの持っていた杖は下部が海水の中に沈んでいて、上部についた筒にはめ込まれた林檎サイズの画面には何かの計測結果の数値が刻々と変化しながら表示され、記録され続けていた。

一緒に海辺に来ていたベウォルクトがライナの横から画面を覗き込む。顔を布で覆った姿は奇異だが、その内は穏やかで優しい事をライナは知っている。

「今のうちに海の様子を調べておきたいのです」

「どうして今のうちになんですか？」

「ファムさまのおかげで時折、海に波が観測されるようになりました。波が生まれると、船が来ます。本格的に海が変化する前に対策を講じておきたいのです。港も必要になるでしょう」

ライナは海を見つめた。暗く厚ぼったい灰色の空に覆われたそれは、沼と言ってもいいくらいの、静かすぎるものだった。

「シメオンが来たときはあんなに波が高かったのに……」

「まだまだ島の近海は不安定なのです」

「ベウォルクト！」

ライナが見上げると空をゆっくり旋回するゲオルギが見えて、羽の隙間からサヴァがこちらを見下ろしていた。

「どうしましたか、サヴァ」

「小舟が数隻この島へ向かって来ている」

「……なんと」

ライナは杖を両手で強く握りしめた。

ゲオルギは音も無く大地へ降り、サヴァがゲオルギから降りてこちらに駆け寄って来た。

「城へ連絡しました。ワタクシはここで彼らを出迎えます」

「付き合います。ライナ、おまえはゲオルギに乗って城へ戻るんだ」

サヴァはそう言い、顔の鱗のような肌を隠すようにまもっていた外套の風よけの襟を立ち上げ、マフラーを巻き直した。

「シメオンはどうするの」

「俺が探して、一緒に戻る。おまえは心配するな。さあ、行け」

サヴァそう言い、ライナの髪を撫でて、背を押して歩かせる。

「う、うん。すぐに帰って来てね！」

ライナはゲオルギに駆け寄って羽根の根元を掴み、後ろ足を踏み台にして体を持ち上げ、ゲオルギの背中に乗った。風の抵抗をうけないよう、自身の翼は背中影の影に小さくすばめる。

ライナの姿勢が安定するとすぐにゲオルギは力強く飛び上がった。

竜の背から地上に残ったサヴァとベウオルクトを見つめると、ベウオルクトが片手をあげた。

「我々もすぐにあとから行きますから、心配しないでください」

上空から見ると、兄が言っていた舟がよく見えた。

一隻からは既に何人か人が降りていて、兄と闇の精霊が立っている場所へ向かって歩いていった。

もう一隻は別のところにいて、すでにそこから降りて歩いて来らしい数人が、ライナとゲオルギを見て何かを叫んでいる。ライナは身を切るような風の冷たさに身を縮こませ、震える両手を強くにぎりしめた。

不意に、風を切って何かが甲高い音を立てて素早く横切る音がした。

ライナは血の気が引いた。攻撃されている。

ゲオルギは飛ぶ速度をあげた。

「このままだと、私達を追ってお城にたどり着かれちゃう」

お城には女王がいる。

ライナは女王の事が大好きだった。ライナの話を聞いて笑ってくれる人。

彼女は兄の姿を蔑まず、牙を持ったゲオルギを可愛がり、極端な性格のシメオンを受け入れてくれた。そしてライナの体を作り替えて、自分の世界から恐ろしい奇病を追いついてくれた人。一緒に料理を作って、服やアクセサリーを作って、おやつを食べながらお喋りをして、ライナはファム女王に対して、母親にも姉にも友人にも似た、不思議な思いを抱いていた。

女王はライナにとって、兄のサヴァやゲオルギやシメオン以外に出来た初めての『大切な人』だった。なんとしても守りたい人だった。

「ゲオルギ、海に向かって」

ゲオルギはライナの言葉に素早く方向転換をして、速度をあげた。一人と一匹に投げかけられる物は、更に増えた。羽根をかするものも増えてきた。

「ゲオルギ、これ以上は羽根を怪我しちゃう。降りよう」

「ギュー」

不安そうな声にライナはゲオルギの首筋を優しく撫でた。

着地したゲオルギの元に大きな体格の男達が集まって来た。

「やっぱりだ！ 俺の言った通りだろ！」

「みごとな竜だな。本当に野生か？」

「女の子が乗っているぞ」

「羽根が生えていやがる」

ざわめく声に、ライナは不安で顔をあげられなかった。ライナの視界に顔が入らないほどに大きな人影が5、6人うごめいている。

「俺たちは何もしない。安心しろ」

「この島は死んだ場所じゃなかったのか？」

「そのはずだが、お頭にきいてみるしかないな。おまえ、名は？」

「おい、お前は何者だ？」

矢継ぎ早に投げかけられる男達の声。

ライナはゲオルギの背の上で後ずさりした。すると彼女を捕まえようとする手がいくつも伸びて来た。

「おい、よせ！」

鋭い声に、ライナの緊張は限界を超えた。

「いやあ！ こないでっ」

「ごきげんよう、海賊のみなさん。私はこの国の女王、ファムよ」  
私はベウオルクト達が調査設備を置くために設置したテントの中で、仁王立ちの姿勢で海賊達に挨拶をした。

今回は着替える余裕があったから、漆黒と淡い灰色で染められた手触りの良い生地で作った、裾が広がらない足首までのワンピースを着ている。足元はヒールの高い編み上げ靴。

「怪我をさせたのはこちら側ですが、先に攻撃したのは向こうです」  
ベウオルクトがいつもと変わらない調子で言う。

「わかってるわ。ライナ、大丈夫？」  
「だ、大丈夫でう」

ライナが怯えきっている。顔は泣くのをこらえているのがわかるし、羽根の先が震えているわ  
ずっと彼女の手を離さないシメオンは、全身土汚れまみれで、ものすごく不機嫌な顔つきで立っている。

「よく守ったわね、シメオン」  
「はい」

「でも相手に怪我させるのはよくないわ」  
「…うん」

私たちが王の間で待機して、サヴァとベウオルクトが海賊の代表に会っている間に、先に戻ろうとしていたライナとゲオルギが別行動していた海賊達に襲われた。

ゲオルギを野生の竜だと思って捕まえようとして、羽根の生えた女の子を見つけて、これまた捕まえようとしたそうよ。

それに気付いたシメオンが殴り込んで来て、大乱闘。

なんとか死者は出なかったけど、怪我人が出たので、治療器具を携えて私とレーヘンは海辺までやってきた。お城は今ハーシェがお

留守番してくれている。

「怪我人に関しては、こちらで治療を引き受けましょう」

「わかった。先に手を出したのはこちらだ。あとで対象者にはしっかり罰則を与える」

海賊達の代表は、うなずいてそう言くと、ライナの方を向いた。  
「怖がらせてすまなかったな、嬢ちゃん」

相手の右目はつきぬけるような青空の色だった。この灰色に覆われた国ではめったに見られない、懐かしい色ね。

「それで、あなた達、いったいうちに何の御用かしら？」

## 海の波と国民たち 2（後書き）

20110612：語句の微修正をしました。

### 海の波と国民たち 3

「アンタらこそ何者だ？　ここは俺たちの先祖の土地だぞ」  
…どういうことかしら？

私は男と私の間に立つベウオルクトを見た。

「すでに血による統治は終わりました」  
ベウオルクトが変わらない調子で言った。

「確かに彼らは数千年前にこの国を見捨てた者達の末裔です。崩壊して行くこの国を捨てるという誓約もなされています。もう別の民族ですよ」

私の隣に控えるレーヘンが言った。

「そう」

自分の肩の力が抜けたのがわかった。

また家を追われるのはいやだもの

「それにあの男では王位に就けません。国や城のシステムを使うことはできませんよ」

レーヘンが口をほとんど動かさず小声で言った。

「まあいいか。俺たちは今さらここに戻る気もないしな」

そう言っただけで海賊達の代表は首の後ろに手をやってもみはじめ、あくびをした。そのまま横目でベウオルクトとレーヘンをちらりと見る。

「オマエら、伝承にあるあの錆びた山の精霊か。二体もいたのか」  
独り言のようにそう言ったあと、大股で近づいて来て、私を見下ろして来た。…背が高いわね。サヴァとどちらが高いのかしら？



首の後ろがちよつと疲れながら、私は男を見上げる。

首筋の中程までの黒い髪は波のように豊かに波打ち、はつきりした二重の目は左が黒で、右は透き通った青い瞳。どちらも強い視線でぎらつと周囲を射抜いている。顔つきは精悍だけれど、若そうだし、整った容貌は女性にもてそうね。

脚をぴつたりと覆う荒い生地のパンツに胸元の開いたシャツ。ちよつと光沢のあるジャケットは丈が短い。

そして左手には黒のグローブをはめている。

ということは、法術を使うわね。

さらには、腰布に四本も剣を差している。使い分けでもしているのかしら？

そういえばテントの外で待ってもらっている他の海賊達も、何かしらの武器や道具、法術用のグローブや腕輪をつけていたわね。

目の前にいる海賊の代表も、外にいる仲間達も、きっと何かあれば即座に動いて、私達なんてあつというまに切り伏せちゃうわね。

でも、私の傍にはレーヘンとベウォルクトがいる。

子供達にはサヴァとゲオルギがいてくれている。

「アンタも精霊か何か？」

「一応人間よ。出身は大陸なの」

私は声の調子に気をつけながら、ほがらかに話し続ける。

「何にも無い土地で、寂しくはないのかい」

「景色が味気ないのを気にしなければそれなりに楽しいわ。荒々しい海賊には解らないでしょうけれど。ところで、あなた達どうやって来たの。今、海は波がない状態のはずよ」

男はにやりと笑った。

「確かにこの近海は“銀鏡海”って言われるくらい強烈な風の海だ。だが俺達の祖先はその海を渡ってこの国から出たんだぜ？ その時

と同じ方法を使つたまでだ」

「もしや、ジェットエンジンの技術がまだ残っているのですか」  
ベウオルクトがちよつと驚いた調子で言う。

「まあ、あれがあると便利だからな。だがいまだ一から作るのは難しく、既存のを小型舟にしかつけられないままだ」

「燃料は何を使っているの？」

「海水を加工して使っている。元々使っていた燃料は俺達だけだといまだに再現出来ないんでね」

「元々は何だったのかしら？ あとでベウオルクトに聞けば教えてくれるかしら？」

「それで、話は戻るけどあなた達は何をしに来たの？ 私としては侵略ではないと嬉しいのだけど」

男はますます笑みを深めた。やわらかく動く口元ね。

「失礼、女王。俺達は『黒堤組』という海賊だ。大体この島の近海と大陸の間で主に活動している。俺は組の首領、通称“マヴロ”だ」

そう言うのと、マヴロと名乗った男は腰に着けていた鞆から手のひらに乗る大きさの壺を出した。

「俺達はオジ貴を弔いにきた」

…マルハレータの壺に似ているわね。

「偉大な黒堤組の男は死ぬと船の炉の火で焼かれる習いがある。志半ばで無念の死を遂げた者は海に、そして満足して死んだ男の灰はこの祖先の土地に葬ってきた。先代の首領だったオジ貴は最後まで偉大で、そして満足いくまで生き抜いて死んだ」

男は黒くてツヤのある小さな壺にそつともう片方の手を添えながら言った。

「そつ、それであなた達はここまで来た訳ね」

「まあ、それに加え最近この島がいきなり国名つきで地図に出て来

たのは気になっていた…な。それを確かめに来たつてのもある。そこでだ」

マヴロと名乗った男は壺を差し出してきた。

「頼みがある」

「どういうこと？」

「いままでここは無人の、閉じられた場所だった。今は開かれていくのなら、オジ貴をちゃんとした場所で眠らせてやってくれないか。野ざらしの場所に一人眠らせておくのは忍びないんでね」

「それくらいなら、まあ…いいけど」

私は壺を見つめて言った。

「大切な人にはゆっくり休んでもらいたいものね」

私が壺を受け取ろうと両手を差し出すと、男は目元を緩め、それから壺を持った手を後ろへ引いた。

いきなりだったのでバランスを崩してよろめいた拍子に顎をつかまれて、向こうがぐいと顔を近づけてきた。

唇と唇が重なる

触れたか触れないかのその瞬間、私はめいっぱい右手を振りかぶった。

## 海の波と国民たち 4

テント内の空間に鋭く乾いた音が響く。

思いっきり振り抜いた右手の指先が痺れて震えた。

「ウブな女かと思ったんだが、いてえな」

目の前の男は詫びる様子もなく左頬をさすっている。  
なんてことしてくれるのこいつ！

しびれていた手のひらがすごく痛くなってきたわ！

海賊は油断大敵！ 気を許してはならないわ！

「レー……」

震えながらレーヘンに命令しようとして、背後を振り返った私は  
びつくりした。

「ファムさま、3秒ルールです！ 3秒ルール！ 0・2秒でした  
から、大丈夫ですから！」

レーヘンが必死になって言うてくる。

「なによ、3秒ルールって！ それに、足元のそれは一体なんなの」  
一生懸命フロローしているつもりらしい銀髪の精霊は、いつの間  
にか現れていた灰色の生き物を踏みつけていた。レーヘンの足の下  
で暴れるそれは、白箔国の動物園で見た事のあるライオンという動  
物に似ているけれど、ゲオルギ並みに大きな体をしている。一体何  
かしら？

レーヘン達より後ろの少し離れた場所では、こわばった顔つきで  
こちらへ飛び出そうとしているライナと、慌てて彼女を押しとどめ  
ようとしているシメオン、その横で立ち尽くしているサヴァに、状

況がよくわかっていない様子で首を傾げている竜のゲオルギが見える。

そしてベウオルクトの隣にはいつの間にか白に近い灰色の髪 of 若者が腕を組んで立っていた。

「…どちら様かしら？」

「動けよコトヒト。シシはちゃんと俺を守ろうとしたぞ」

マヴロと名乗った男は頬をさすりながら若者に向かって睨んで言う。

「組頭くみがしらの命に別状はありませんでしたので。それに、今は明らかに礼を欠いた行為だった」

コトヒトと呼ばれた若者は表情を動かさずに答えた。中性的な風貌をしていて、灰色の髪を一本の三つ編みにして、やや濃い灰色の瞳をしている。房飾りのついた墨色のゆつたりとした上着を着て、下は同じ系統の色をした裾の短いズボンに、布で出来たサンダルを履いている。

「アナタ、闇の精霊？」

レーヘン達と似た物を感じたので思わず尋ねてみると、若者はわずかに目を見開いて、組んだ腕をほいて前に一歩踏み出した。

「鋭い目をお持ちですね。初めまして、くろやみ国の女王。ワタシはかつてこの国を離れた精霊で、現在はコトヒトと名乗っております」

そう言って灰色の髪した精霊はゆるく微笑み、お辞儀をした。

「うちとは違って、灰色の髪なのね」

私は銀髪のレーヘンを振り返った。

「一等級だと銀髪以外も現れるんですよ」

銀髪の精霊は優雅に微笑んで、私が尋ねる前に答えてくれた。

「シシ、もう大丈夫だ、戻れ」

海賊の首領は腰にあった剣の刺さっていない幅広の鞘を掲げて、レーヘンが足で抑えていた灰色の生き物に向かって声をかけた。

レーヘンが足をどけるとシシは体を起こしてぶるぶると震えて毛並みを整え、レーヘンに向かってひと吼えしてから首領の元へ駆け寄り、吸い込まれるようにして鞘の中に消えていった。

「な、なあにあれ！　もしかしてあれも精霊なの？」

「あれはいわゆる人工精霊です。影霊の研究過程で誕生した一体です。国外へ出た人間達や精霊の元でずっと保護されてきたのでしよう」

びつくりして声をあげる私の耳元で、ベウオルクトが小さくささやいて教えてくれた。よく見るとシシという人工精霊は柄にライオンの彫刻が施された剣になって鞘に収まっていた。

「コトヒト、おまえも一旦戻ってくれ。あとでちゃんと場を設ける」  
「わかりました」

そう言つて、コトヒトも剣の姿になった。シシとは違って鞘も一緒で、飾り気のない灰色の細くすべてが真っ直ぐな形で、黒い房の飾りがついている。

「精霊つて、ああいったことも出来るのね！」

「お伝えしておきますが、特級はあのような事はできませんよ」

「あれはコトヒトが己自身をああいっただ形に改変したからで、我々にはできませんので」

レーヘンが言い、ベウオルクトがさらに付け加えるように言った。

「別に誰もやれなんて言つて無いじゃない」

そんな事言いそうに見えるのかしら、私つて。

「このシシとコトヒトは俺の護衛用精霊みたいなもんだ。まあ、由来はあんたの方が詳しいみたいだが、今は黒堤組の首領に代々仕える精霊だからな。今更何言われたって返さねえぞ」

そう言つてマヴロと名乗った男はふた振りの剣を元のように腰に

つけた。

「…ふてぶてしいわね」

「うちの業界はツラの皮厚くないとやってけないんでね。そう言うあんたはなかなか気が強いな」

「気弱じゃ女王は勤められないわよ。左頬の腫れ、どんどん赤くなってるわよ?」

「それを言うならあんたの手も、だいぶ腫れてるんじゃないか?」

男は愉快そうな顔つきで笑い、私は顔が引きつりそうになりながら力をこめて微笑み返した。

「お頭、なんかもめてたつぱいけど、どうしたんすか。コトヒト達も出て来てみたいですけど」

テントの外から海賊の仲間が声をかけてきた。

「なんでもねえよ、ちよつと女王さんを口説いてただけだ」

男は目の前で飄々（ひょうひょう）と答える。

ああ、もう一度ひっぱたきたいわ。

すぐ外には何人が集まっているらしくて、ざわめく声が大きくなった。ライナが身を堅くして、シメオンがそつと寄りそう。

「お仲間さん達が心配しているみたいね。一旦外に出て話しを続けましょう」

「ああ、わかった」

「ライナ、シメオン、あなた達はゲオルギとここにいて機材を見ていて。サヴァは奥の怪我人達の具合を確認してきてちょうだい。顔は隠したままで構わないから」

私が指示を出すあいだにレーヘンが外出用の外套を着せてくれる。フード付きで地面すれすれまで裾が長く、袖も長いそれを海賊の首領は興味深そうに見ているけれど、何も言ってこない。

「ベウォルクト、レーヘン、アナタ達は一緒に来てね」

「かしこまりました」  
「もちろんです」



## 海賊と情報 1

精霊を連れて海賊の首領と一緒にテントの外に出ると、海賊の仲間達が集まってきた。黒堤組と名乗るだけあって、皆黒や灰色が多い服を着ている。ざっと見て6、7人いて、若い人が結構多いわね。みんな首領の周りに集まって、ほとんど顔しか出ていない格好をしている上に不機嫌顔が隠せていない私と、顔を布で覆ったベウオルクトに珍しい銀髪と綺麗な顔立ちをひんやりとした表情で覆ったレーヘンは遠巻きに観察されている。

「それで、あなたのオジさまを預かる話も受けたときの、さっきのは何かしら？」

「あの…うちの頭は一体何をしたんですか？」

黒髪の壮年の男性が一人進み出て、私たちに話しかけてきた。

「女の唇は安くないって教えてあげただけよ」

つい思い出してぶつきらばうに答えちゃったわ。

「気に入ったもんは速攻で捕りにいくのが海賊の流儀だ」

私の言葉に、マヴロと名乗った海賊の首領はまたにやりと笑う。

「まさか…」

壮年の男性は顔を青くした。

「海の男には危険がつきまとう。いつだってその時その瞬間の情熱に命をかけている。何時死ぬか解らないからな。だから気に入ればその場で口説く」

自信満々の姿にまた腹が立ってきたわ…

私は彼の周囲に集まった面々を眺めた。みんな口の端を下にまげて、呆れ返った顔つきをしている。

「ほかの海の人達は違うみたいだけど？」

「俺の流儀だからな」

「アホか」

「なにやってんすか」

「失礼にも程がある」

「死ね」

… 個性的な海賊のみなさんね。

「ただのちよつかいなら早々に引き上げて欲しいわね。匿名のマヴロさん？ 通称の名前ということは、本名ではないんでしょう？」

「ああ、たしかに口説く相手に名乗っていないのは悪かったな、俺の本当の名はカラノスだ。マヴロは仕事相手に黒堤組の代表が名乗る名前だ」

キスしようとしたことはあくまで謝るつもりないみたいね…

「カラノス、ね。こっちのほうがあなたらしい響きだわ」

「そうか？ ありがとよ」

海賊の首領、カラノスは少年のように微笑んだ。

腹立たしいことに彼の頬の腫れはひいてきている。私の右手は未だに痛いのに。右手はカラノスと会話している間にレーヘンがそつと近づいてきて、冷たい包帯を巻いてくれていた。

「女王さんよ、あんた面白いな」

波打つ黒髪を弾ませ楽しそうにそう言った後、笑みを含んだ表情のままカラノスの黒と青の瞳が鋭くなった。

「だが国主としてちよつと甘すぎるな。世間知らずのただの小娘と変わらないレベルだ。それじゃ他所の国に舐められちまうぞ？」

ひとつの集団を率いるだけあって、しっかり見てるところは見ている男ね。

「…わかってるわ。まだ、女王になりたてなのよ」

「近いうちに他の海賊や国の調査団なんかがこぞってここにやってくる。その時は誰もあんたの都合なんて構ってくれないぜ。俺としては先祖の土地が他所の国に占領されるくらいなら、あんたらにいてもらった方がいいんでな。僭越だが言わせてもらう。このままじゃ、この国はいいように扱われる。それでいいのか？」

最後の言葉は、私だけじゃなく背後に立つ精霊たちにも投げかけられているように感じた。

「なぜ、他の人達がここに来るって言えるの？ 島だけなら地図に前から載っているし、何もない土地だって、あなたたちも知っていたじゃない。子孫にあたるあなた達はともかく、来るだけ無駄なのにどうして？」

「それが状況が違うんだな」

カラノスは腰に差した剣に手をもたせかけて言った。

「いま大陸では青嶺国や白箔国、それに赤麗国なんかがこぞって新しいものをかき集めていてな。新しい土地、国、珍しい品物、情報でも良い値段で買い取ってくれるんだ。あんたらの事も、報告するだけでも報償がでるだろう」

「どうしてそうなっているの？」

「さあな…最初は一国の王がはじめたらしい。新事業開拓でもしたいんだろ。それを他の王達も真似しだしたようだ」

「さらに、この国の周囲の銀鏡海に波が生まれる事が増えている。

この現象は数百年ぶりだそうだ」

のんびり構えている場合じゃないってことは、わかったわ。

「教えてくれたことは感謝するわ。正直いって、外の状況なんて、知らなかったし」

カラノスは思考に手一杯状態の私にゆっくりと近寄ってきて、外套から流れていた毛先が灰色の髪を一房持ち上げながら、言った。

「なら改めて、俺と今夜とお？」

「レーヘン、沈めて」

「任せてください」

「うわっ。気配消して近づくな！」

「精霊ですから、あしからず」

それからシシがまた出てきたり、レーヘンが追ったりと、騒動になった。

しばらくして海賊の仲間たちが疲れた顔で謝ってきたので、なんとか苛立ちを静めて、その場を収めたわ。

結局、怪我人の治療ももう少し時間がかかるので、海賊達には機材を撤去したテントに追加のテントを設置して、そこで夜を明かしてもらったことになった。

間違っても、あの男を城に入れるもんですか！

一応食べ物も提供することにしたので、有り合わせの材料で急いで作ったシチューが二つの寸胴鍋一杯、お芋と葉野菜のサラダをひと山、ハーブを練り込んで焼いたパンをこれまたひと山に、採れたての果物を一箱と癖のないハーブで香りをつけた水をガラスのボトルに詰めたものを20本ほど届けた。

運ぶのはシメオンが率先して引き受けてくれて、サヴァとゲオルギと、城の外に出るまでだけどハーシェが手伝っていた。シメオンは運んだついでに怪我させた人達に謝りに行ったみたい。

今日の夕食は王の間で食べることにしたので、ライナが料理の仕上げをしている間に私とレーヘンと一緒にテーブルの上に食器や飲み物を並べていると、ベウオルクトがコトヒトを連れて入ってきた。「今回は私用で来ました」

コトヒトは、先程の姿と同じだったけれど、肩から黒いケープを羽織っている。胸のあたりにはなにか模様のようなものが描かれているけれど、何か意味があるものなのかしら。

「組頭の許可は得てきました。まあ、内偵と思って頂いてかまいませんよ。ちよつと精霊として用事があつたものでして」

「私も話を聞いているわ。精霊の用事なら仕方ないけれど、今回は手短にお願いね」

「ありがとうございます。女王さま」

「どうも、先程ぶりですね。コトヒトさん」

レーヘンがコトヒトに言葉をかけて、握手した。

「やあ、さっきは挨拶できなかったねレーヘン？　だっけ？　今の名前」

「ええ、その名前であっています。これからはそちらで通してくださいね」

「ねえベウォルクト、もしかしてコトヒトの方が先輩なの？」

「ええ。レーヘンは世界の一等級以上の精霊のほとんどよりも後に生まれましたから」

「ベウォルクトさん、これ青のからの回覧板です」

そう言つてコトヒトは何も持っていない右手を差し出した。

「ああ、きいてるよ。ありがとう」

ベウォルクトはそう答えて同じく右手で握り返した。

「例の話ですか……」

レーヘンがなんだか暗い顔つきでベウォルクトの右の手のひらを覗き込んでいる。

「回覧板？　もしかして精霊にはご近所付き合ひがあるのかしら？」

「ええ。特定の精霊達のやりとりを扱うときは時々こうやって仲間が運んで来てくれるんです」

一体どんなやりとりなのかしら？

私がじつと見ているのに気づいたらしく、ベウォルクトが手のひらから顔をあげた。

「情報をまとめてからになります、この件は後ほどファムさまに

御報告いたします」

「ありがとうございます。よろしくね」

「ファム女王」

コトヒトの灰色の瞳がまっすぐ私を向く。

「ワタシはもうこの国の精霊ではありませんが、言わせてください。この国を蘇らせて頂き、王になって頂き、ありがとうございます」

「まだまだこれからよ。でも、嬉しい言葉をありがとうございます」

コトヒトはそれからほどなくして海賊達のテントへ戻っていった。

夕食後の食器を片付けたテーブルの真ん中に、私はお茶をたっぷり詰めた保温瓶と、棚から出てきたありったけのビスケットとドライフルーツを乗せたお皿をどんと置いた。

「さあ、みんな、会議をするわよ！」

## 海賊と情報 2

今日は騒がしかったから、食後の、しかも夜は難しいことを考えずのんびりしたいところだけれど、私は国民たちと話し合いたい事があった。

「レーヘン、ベウオルクト座ってちょうだい。それにハーシエも」

「わかりました」

「はい」

精霊達は空いていた席に座り、ハーシエはウサギから人の姿になってライナの隣の席に落ち着いた。ゲオルギはサヴァの隣から顔だけ出している。

全員が席に揃うと、私はめいめいの席の前にカップを並べて、お茶を注いだ。精霊達は飲まないからお茶はないけれど、お皿に載せたカップは置いた。

テーブルセットが整うと、私はみんなを見渡して言った。

「海賊と取引しようと思うの」

驚いた様子なのはライナとレーヘンだけだった。ベウオルクトなんて頷いているわ。

「彼らの持つ情報は貴重だわ」

「あの、海賊と取引って、危ないんじゃないですか？」

ライナがおそろおそろ言う。

「ありがとう、ライナ。危ないからこそなのよ。彼らは波がなくても来れたくらいだから、今後もそれなりに関係を持っておいたほうがいいと思うの。取引相手ならいきなり略奪しに来る事もしないでしょうし」

「ファムさまはあの男はお気に召さなかったようですが？」

レーヘンが不思議そうな顔で言う。

「ええ。腹立たしいことこの上ないわ。でも、言動は腹立たしいけれど、あの男には悪意はなかったわ。私に油断が多くて頼りないって、忠告してくれたけどもの」

私はそこでお茶を一口飲んで気持ちを静めた。

「まあ、初対面であれだけ助言してくれたことには十分警戒したほうがいいわね」

「当面はこの国から情報が何かを提供して、向こうからは世界の情報を貰うというのを考えているの。注意しながら、利用できるものは利用しないと。何もしないでいて、そのうち他の集団が来たとき対処できないのが一番怖いわ」

私はみんなを見渡して言ってから、薄く切って乾燥させた林檎をかじった。生のものよりも強めの甘酸っぱさが口の中に広がる。

「みんなはどう思う？」

「ワタクシに反対意見はありませんが、初めは様子見とした方が良いでしょう。海賊は彼らだけではありませんし、渡すものは注意深く吟味しないと」

ベウオルクトが言った。

「あの」

サヴァが手を上げた。

「騎士団にいた頃に聞いた話ですが、あの黒の海賊は比較的まとまだといわれています。大規模ながら規律があり、海賊と名乗っていますが無差別な略奪はせず、依頼された仕事をこなすことが多いとその取引相手には国家の要人も多いと聞いています。昼間少し言葉を交わしましたが…」

話している途中でみんなからの注目を浴びて落ち着かなくなったのか、サヴァは一度言葉を切ってお茶を一口飲んで、それからまた



口を開いた。

「…無作法なところもありますが。ですがこの国の情報を流せば、その分外からの危険も増えるのでは？」

「問題はそこよねえ」

「僕のことはどう伝えたってかまいません。でも、ライナの事は守ってほしいです」

他国の権力者達から恨みを買っているシメオンがカップを握りしめて言った。

「シメオン、私はあなたを売ったりしないわ。あなたの事も、ライナもサヴァの事も、ゲオルギの事だって、精霊たちの事だって私は守るわ」

ベウオルクトが黙って私のカップにお茶のおかわりを注いでくれた。レーヘンは驚いた表情で自分を指さす。

「ワタシ達、精霊もですか？」

「そうよ。アナタ知らなかったけど、よその国には精霊を捕まえて改造したり、売買する人間だっているのよ？」

「ああ、そういうえば、熱心にどこかへ連れていこうとする人に何度か会いましたっけ。あれはそういう意味だったんですね」

よく500年間うろつきまわって無事だったわねアナタ…

「しかしファムさまはあの男と関わりを持つのは嫌そうでしたが」

「商売で関わるのと、好き嫌いの感情は別の話よ。ご心配なく、私はあの男とどうにかなるつもりはないわ！」

それからまたひとしきりみんなで意見交換をして、海賊に何を提供するかや、どういった交渉方法でいくかの案を出しあって、大まかに決めて、後は私がベウオルクトとレーヘンからの助言を元に最終決定をすることになり、夜の会議はおしまいになった。

王の間に穴が開いているせいでお城の機能がかなり弱っているらしいので、念の為にサヴァとシメオンはベウオルクト達と一緒にお城の周辺の警備に立つことになった。

「ライナ、今夜はハーシェと一緒に私と眠らない？」

私は海賊が来てからずっと不安そうな表情をしているライナに声をかけて、ふわふわのウサギのハーシェと一緒に寝ることにした。

「兄さん以外と眠るのは初めてなんです。時々、朝になるとシメオンも一緒に寝ていることはあるんですけど」

温かい寝間着に着替えて、ライナは羽根のある彼女専用につつたうつぶせ寝用の枕を抱えて、照れながら私の部屋にやってきた。

一緒に横になって他愛ないおしゃべりをしているうちに安心したのと、昼間の疲れが出てきたらしくって、ライナは程なくして眠りについた。力の抜けた真つ白な羽根がふんわりとシーツの上に広がる。そつと触ってみると、汚れひとつなく、艶のある羽先だった。

私自身はなかなか寝付けなかった。しばらくしても眠気がこないで、枕元にいるハーシェに眠るライナを頼んで、起き上がった甘酸っぱい味のハーブティーをカップ一杯作って、備え付けの浴室に向かう。

たっぷりのお湯に肩まで浸かり、ゆつくりとハーブティーを飲む。ふつとため息をひとつくと、自然に涙が出てきた。

「別の男に口説かれても、ちつとも嬉しくなんてならないわよ」

湯気の向こうに向かって、つぶやいてみた。

「聞いてよ。キスされそうになって、防げなかったの」

そう言っ、頬を伝う涙をお湯に落としながら、私は一人で作り笑いをした。

「でもね、思いつきり、力いっぱいひっぱたいてやったんだから」

湯気のせいかわからないけれど、前が良く見えない。

「褒めてよね、ヴィル」

「あの女がほしい」

カラノスはそう言い、持っていた杯から酒をあおった。

彼の言うところのオジ貴、先代の組頭を見送るために特別に用意していた酒で、黒堤組はささやかな宴を開いていた。皆めいめいに酒を飲み、物を食べ、あちこちで先代についてや、この島の変わった国民たちについて語り合っている。

その中で組頭のカラノスは護衛の精霊シシの上にもたれかかり、送別の際にだけ使用される杯でコトヒトを相手に飲んでいた。杯をおおる回数がすんだせいか、カラノスの黒と青の瞳は熱をおびて潤んでいる。

「体の形もなかなかよさそうだが、媚びない目つき、飾らず動く唇。駆け引きはそこらへんの小娘程度の癖して、譲らんところは譲らんど胸。ああいうのは海にも陸にもなかなかおらんな」

カラノスはそう言い、酒に濡れた唇をなめた。

「しかも普通は国に一体いるだけで貴重な特級精霊を二体も従えていやがる。んであの手の早さ。お袋より容赦なかった」

カラノスはどこか嬉しそうに己の左頬をなでた。

「しかし、あれはかなり嫌われたんじゃないのか」

ただ居るだけの形で宴に参加しているコトヒトは、右ひざを抱えて座った姿勢で、冷静に言った。

「逃げると追いたくなる。ますます欲しくなったな」

コトヒトはため息をついた。

しばらく経って、酔い覚ましにとテントの外に出てきたカラノスに、副頭の一人の壮年の黒髪の男が近づいてきた。

「おいお頭、あの女が例の依頼の対象なのか？」

男の言葉に、カラノスは頷いた。

「ああ、おおかたあの女がヴィルヘルムスの依頼の女だろう」

「髪の色が違っていたようだが。依頼の女は、黒だろう。女王のは不思議な色だった」

「いや、おそらくあの女で合っている。あの顔にはまっ黒な髪が一番良く似合う」

カラノスはそう言いつて腕を組み、雲に覆われた夜空の下、水平線も何もわからない海の方角を眺めた。

「探しまわる訳だ。若いくせに枯れてる奴だと思っていたが、女を見る目はあるんじゃないかねえか」

そうつぶやいて、背後に立つ精霊の視線に気づくとカラノスは強気の笑みを浮かべた。

「だが譲る気にならん。女については向こうから問いつめられるまで黙っとけ」

「もう一つの用件はどうしますかい」

副頭の男が尋ねた。

「そうだな…売り込みに使う情報はちと精査しとくか。『くろやみ国つてのが海の上の島にできたという情報は本当だった。だが銀鏡海のせいで苦勞して上陸はできたが、事故が起きてすぐ帰った』って所にしておくか。嘘は無いし、これだけでも結構な内容だ」

「わかりやした。さっそく報告書の準備にとりかかりやす」

壮年の男はそう言つて、テントへ戻つていった。

「悪いがヴィルヘルムス…女王はもらうぞ」

カラノスは暗い闇に包まれた海原の果てを見つめながら言った。



## 海賊と情報 2（後書き）

番外編ページにこの晩のレーヘンとコトヒトの雑談を「銀と灰」というタイトルで載せています。

何度も何度もあの人の夢を見る。

街外れにいくと、焼け落ちたはずのあの白い小さな家が元の姿で建っている。急いで中に入るが、誰も見つからない。

探し回ると台所に人のいた痕跡を見つける。火にかけられたままの鍋があり、まな板の上には刻みかけの野菜、食卓の椅子にかけられたエプロン。

一瞬前まで、彼女はここにいたに違いない。

台所から続く裏庭への扉が小さく開いていて、昼下りのあたたかな光と、庭に植えられた花たちの発する香りが差し込んでいる。扉の先から彼女の楽しげな笑い声が聞こえてくる。

だが急いで扉を開けると、そこは一瞬にして火の海だった。

直ぐ目の前に彼女がうつ伏せで倒れている。あの艶やかな黒髪が、血溜まりの上にひろがり、投げ出された手は青白い。

そして、気がつくとそのは煤だらけの廃墟になり、彼女の姿は消えている。

この夢はたいていここで終わる。今回もそうだった。いまだに慣れることなく、そしてほとんど変化がない悪夢。しかし今では悪夢であっても会えるのなら構わないとさえ思うようになってしまった。

諦めようかと思う気にもなれないほどに求めている。もう一度、あの声で名を呼ばれ、あの指先に触れられたいと

ヴィルヘルムスはゆっくりと目を開いた。

ベッドサイドに置かれた小箱に一瞬目をやると力なく起き上がり、必要な分だけ朝の空気を吸い、一旦おいて深く吐き出すと、ベッドから出て身支度を始める。

「おはようございます。ヴィルヘルムスさま。よく眠れましたか？」  
寝室を出たところに王の上着を持ったオーフが立っており、声をかける。

「ええ、以前よりはマシになりました」

その表情をみて、オーフは眉間にシワを寄せた。

「王の居室を結界で覆うのを認めたのは、落ち着いて休んで欲しかったからなのですが」

「休んでいますよ。密偵や忍びこんでくる女性がいなくなって、気が休まります」

廊下を歩きながらヴィルヘルムスは袖の金のカフスボタンを留めていく。

「結界は執務時間外の“おでかけ”をごまかすためでもあるようですね」

「緑閑国の件が落ち着いたので、しばらくは遠出しませんよ」

オーフから上着を受け取り、ひととおりの術の確認をして、羽織る。

「あの国の秘密組織が人間をさらっていると聞いて飛び出して行ったのに、見つからなかったのでしょうか？」

「収穫がありました。黒堤組にも依頼しています」

まっすぐ前を向いて歩き続けるヴィルヘルムスに、オーフは目を伏せた。



先に執務室へと向かうオーフと別れ、ヴィルヘルムスが食堂に入ると給仕たちと王の秘書官達が一様に礼をする。

「おはようございます、ヴィルヘルムス様」

ヴィルヘルムスは白いクロスをかけたテーブルに着き、ひとり分だけ用意された朝食に手をつける。用意された飲み物の中で、赤い野菜を絞ったものに一瞬だけ眉をひそめる。給仕が動いた。

「お下げいたします」

「いえ、飲みます。嫌いではありません」

朝日を受けて輝くグラスを持ち、ヴィルヘルムスは礼儀にのつとった姿勢でどろりとした真つ赤な飲み物を飲み干す。

「マウリッツ、今日の予定に変更は？」

王の選任秘書官が一人進み出て、口を開く。

「夕刻に会議がひとつ入りました。これは新規事業の成果報告も兼ねています。それと、ヴィルヘルムス様個人宛てに先日の結界の件で正式な依頼状が届いています。…夜会の招待状が三枚ほどきていますが、いかがいたしますか？」

「夜会は貴方達秘書官が私の代理で出てください」

「我々がですか」

「そうです。すべて代理のほうで、偏りがなくていいでしょう。あとで報告を聞かせてください」

「かしこまりました」

そのまま指示を出しつつ食事を終え、コーヒーが運ばれてくる。異国から持ちこまれた深く豊かな香りがあたりに漂う。これを飲み終われば、白箔王としての一日が開始される。ヴィルヘルムスはいして味を楽しむこと無くそれを飲み干す。

「今日の休憩にはハーブティーをお願いします」

「…あれは庶民の飲み物ですが？」

「味の好みは個人の自由です」

「シシって雄？ 雌？」

「さあな。精霊にそんなもの関係ないだろ」

「まあ、見た目だけの話なのは確かね。でも一応気になるわ」

「なあ…あんた、コトヒトがどっちなのか知ってるのか？」

「もちろんよ。え、何あなた、知らないの？」

「どっちなんだ」

「精霊にそんなもの関係ないんでしょ。知らなくても問題ないわよ」

「いや、あれはあれで気になる」

港でカラノスと並んでそんな会話をしながら、私は海賊たちの船を眺めていた。

遠く、灰色から海らしい濃くて深い青色にかわっていく水平線の間に、焼いたケーキのような黒茶色の四角くて平べったいものが浮いている。遠くにあるはずなのにかなりの幅がある。

「あなた達の船、かなり大きいのね」

「母船はひとつの街くらいの規模があるぜ。人も多いし、物もそれだけある」

「賑やかそうね」

「乗るかい？」

「そうね、機会があればお邪魔させていただくわ」

「そうか」

…なぜそこですっごい笑顔になるのかしら。私、何か返答間違えた？

カラノスは黒と青の目を細めて、ひどくゆっくりと手を伸ばして

きた。逃げたかったけれど、下手に避けるのは危険な感じがしたので、動けなかった。指先で頬をそつと触れられる。

「また口説きに来るぜ」

「そういうのはもつと遊びがいのある人としてちょうだい。少なくとも、この島にはそんな暇のある相手いないわよ」

私はいつでも背後に待機しているレーヘンへ声をかけられるように注意しながら、感情を込めずに言った。

「なんだ、操をたてた男でもいるのか？」

「個人的な話にはノーコメントです」

エンジンの音がして一艘の船が港に近づいてきた。

港に辿りつくと、降りてきた男からカラノスは両手に収まるくらいの黒い立方体をした箱を受け取り、そのまま私に差し出す。

「ほら、ご依頼の他国の情報だ。おまけで王たちの情報も別項で作っている。あとは大陸の一般的な上流階級の情報もひと通り入っている」

「あ、ありがとう」

受け取った箱はずつしりと重かった。中の情報の取り出し方、きつと精霊が知ってるわよね。

海賊との取引は順調に話をつけることができた。素直にカラノスに情報がほしいから取引しない？ と声をかけたら「ああ、いいぜ」と、それだけで成立したわ。

「報酬がジェットエンジンの大型化技術とは、えらく割のいい取引だ」

こちらから提供するものは、海賊が必要そうにしていた技術で、もちろん喜ばれた。

「おまけの分はコトヒトを通じてその精霊に頼まれたやつだ。注文通り、あちこちの国の過去の女王とか、王女情報がしっかり入っ

てるぜ」

思わず勢い良く振り返っちゃったわ。レーヘンは微笑んだままで、ベウオルクトはそっぽを向いている。

「…アナタの要求は受け取ったわ、ベウオルクト」

「こればかりは、重要なことですの」

「まあ確かに必要だけど…」

一国の主として、しっかりしなくちゃね！　これから先、この国は他国に舐められる訳にはいかないもの。

## くろの騎士と闘技場 1

世界一の規模と言われている大空騎士団が毎年主催している協闘大会の時期がやってきた。

毎年各国の部署から腕に自慢の代表騎士たちが集まり技を競うこの大会は、大空騎士団所属の者だけでなく、国家の騎士はおるか傭兵や一般市民でさえ参加することが出来るので毎回多くの注目を集めている。

莫大な賞金が出る上に、うまく権力者の目に止まれば出世のチャンスもあるため、一般層の予選は千人単位で人間が集まる。だが毎年のように本戦まで進める者は少なく、本戦に進めただけでも見事なものだと褒め讃えられる。それだけ騎士とそうでない者の差は大きい。とりわけ大空騎士団の層は厚く、ほぼ毎年のように上位入賞をさらっていく。

だが、今年はいつもととは大きく様相が違っていた。すでに誰が勝つかの予想は軒並み崩壊し、闘技場近辺の賭博場は阿鼻叫喚で大騒ぎになり、関係者はおるか闘技場の周辺の住民たちでさその話でもちきりになっている。

「こりゃ、すごいことになったな。一体どういうこった」

大空騎士団の大会運営室の壁一面に張り出されたトーナメント表

を眺め、紺碧色の瞳にまつすぐな青い髪をした青年は口笛を吹いた。表には参加者達の名前があり、周囲には各人についての情報が貼り出されている。身内にあたる大空騎士団の者達は名前と装備、入賞した場合の賞与についてなど。他の国家騎士団所属の者達の名前の周囲には性格や戦い方の癖などの情報を印字した紙が貼りつけられている。

そして一箇所、正確には約一名の周辺には慌てて書かれたとわかる文字が踊った紙片が大量に貼られていた。

「競技名は“くろの騎士”で本名は…偽名だろうな、これ。語感からして大陸の東の奴っぽいな…。なあ、今までの戦歴をもう一度教えてくれないか」

「はい」

青年の言葉に背後に直立していた女性が答えた。大空騎士団の制服を着て細い銀フレームのメガネをかけ、深く澄んだ湖のような水色の瞳に、やや緑がかった青色の髪を肩のあたりでゆるく束ねている。

「まず“くろの騎士”は一般枠で応募し、一般予選の集団競技は圧勝。武装して闘う本予選に進み、ここではすべて一分以内に勝利しています。現在進行中の本選では二戦をこなし、こちらは三分以内で勝利。いまだ武器を手にすることなく、無手で、かつ、無傷です」  
青年はため息をついた。

「とんでもないのが出てきたな。こいつ本当に人間なのか？ いくつかのように、どこぞの精霊か何かが退屈のあまりに紛れ込んだんじゃないのか？」

「…事前に参加者の身体検査を実施しています。それに会場内と周辺には法術と精霊術で常に探知術を発動させていますので…一応人間かと」

予選は二段階あり、一般人は一般枠だけの一般予選、騎士達は事前に各騎士団内での厳しい選抜がある。それらを経て合同の本予選

があり、勝ち抜いた者だけが闘技場で一戦一戦開催される本戦に参加できる。ちなみに過去の入賞者達は予選が免除され、いきなり本戦から参加することが認められている。

「大空の中で負けたのは二人だったな。すぐ呼び出せるか？」

「一人だけなら。一人はまだ治療室から出られません」

協闘大会は厳密に決められたルールにのっとって闘うため、一応の安全は保たれているが、法術での緊急治療が必要なほどの大怪我はざらにある。

「一人でいい。呼んでくれ」

「はい」

女性が控えの伝令に指示を終えるのを待ち、青い髪の青年は再び口を開いた。

「それで、こいつは何者なんだ。これだけの腕を持つ奴だ。どこかで見覚えくらないのか」

女性は目を泳がせた。

「…実は心当たりがあります。団長も、動きに見覚えがあると断言していましたし」

「その団長様は今どこにいるんだよ」

嫌な予感がして、青年は口の端を曲げた。

「その…先ほど飲み物を買に行くと言って出かけてしまいました」  
「引き留めるよ。あいつを制御できるの君だけだろ。ユリア副団長」  
「すみません」

ユリアは目を伏せ、謝罪の礼をした。

「ジェスル、ユリアを咎めるのはやめていただきたい。彼女を咎めていいのはこの私だけです」

「ああ、来たか」

ジェスルは男の声を聞いて、先程よりも重いため息をついた。  
扉から入ってきたのはやや大柄な体格に必用な分だけ筋肉をつけた男だった。濃い青紫の瞳にやわらかく波打つ淡い紫色の髪をして

いる。

「ユリア、冷えた飲み物を買ってきた。ジェスルも飲みますか？」

そう言っただけの男は抱えていたケースを下ろして、瓶を1本取り出し、胸元から呪い捕りのスカーフを取り出してざっと表面を拭くと、ジェスルに差し出した。

「どうぞ」

「相変わらずだな、おまえ」

受け取ったジェスルは空気が抜ける音とともに瓶を開封すると、そのまま口をつけて飲み始めた。

「私は私ですから」

表情を動かさずに男はそう言っただけ、もう一本瓶を取り出すと今度はポケットから取り出したハンカチで水分を丁寧に拭き取って、ユリアの手をとり、瓶を持たせた。

「あ、ありがとう」

その言語に満足したようで、紫の髪の男は口元に小さく微笑みを見せ、それから口を開いた。

「ユリア、例の騎士と会話してきた」

眼鏡の奥でユリアの目は瞬いた。

「本当ですかエシル。どうでしたか？　やはり彼でしたか？」

「ああ。事情があって参加しているようだ。だが多くは語ってくれなかった」

「そうでしたか…彼が…」

ユリアは瓶を持ったままうつむき、エシルはいたわるように彼女の髪をなでた。

「おいおいお前ら、俺にわかるように説明しろ！」  
置いてきばりにされたジェスルは声を上げた。



協闘大会本戦の、三回戦第二試合がまもなく開始されようとしていた。

毎試合それなりの盛り上がりを見せるが、今回はある出場者が現れる試合はどれも満席となり、立ち見席すら設けられるほどだ。

闘技場内の、闘いの広場へとつながる西門の警備を受け持つ男は震えていた。

日の入らない廊下の先から聞こえてくるのは落ち着いた、静かな足音だった。全身鎧だとは思えないほどに、恐ろしく音が軽い。

そして音は大きくなり、暗影の中から黒い鎧に包まれた戦士が現れる。

見たことのない形状と質感の漆黒の鎧は、中の人物の長身で細身の体を隙間なく覆い、その複雑な形状は身体の動きを一切殺すことがない事が見ただけでもわかる。いくつものパーツで構成されているが、継ぎ目が巧く隠されており、よく見れば同色の細かな装飾も施されている。

すでに何名もの有力騎士を一瞬でねじ伏せたその実力に、かつて騎士を目指していた男は、恐怖ではなく期待で胸が打ち震えていた。この目の前の存在が、これからどんなものを見せてくれるのかと思うだけで、手に汗をかく。

「がんばれよお」

黒い鎧はその声に特に答える事なく、男の開けた門をくぐり、日の当る会場へ足を一歩踏み出した。

歓声が一気に膨れ上がった。

黒い鎧がゆつくりと闘技場の中央まで歩みを進め、立ち止まると、会場の興奮はさらに増した。客席すべての視線が騎士に降り注いでいる。

興奮の渦に取り囲まれながら、“くろの騎士”は微動だにしない。その威風堂々とした様子に、観客たちはまた熱くなった。

（「まいったな…」）

“くろの騎士”は、外からはまったく見えなかったが、闘技場の中心でけっこう動揺していた。

本来はそこその所で有力騎士と接戦をして、負けて、本予選か本戦の参加賞どまりで落ち着く予定だった。まさかここまで自分が動けるとは思っておらず、本人の意図しないまま思わず勝ち進んでしまったのだ。

こんなにもものびのびと自由に体を動かせたことが未だかつてなかったので、面白くて少し調子に乗ってしまったのもある。

目立つことは不本意だったが、状況を報告した際に上から「勝ち進んだからには、ついで行くところまで行つてごっそり賞金をかつさらつてきてちょうだい！」と、正式なお達しまで出てしまった。しかも一緒に参加する予定だった“やみの騎士”は、「あ、なんか法術で制御入ってますね。これはワタシは遠慮したほうがいいです」と突然言いだし、出場を辞退してしまったので、彼一人で目的を果たす状況になっている。

だが、優勝は目的ではないし、この先にはより腕のたつ者がいる。加えて言えば、彼の知り合いだって増えてくるだろう。動けば動くほど、正体に気づかれる可能性が高くなる。

現に、先ほども知っている顔に声をかけられた。自分の素性とはとなく、国や目的のことをうまくはぐらかせたかどうか自信がない。「どうしたものか…」

サヴァは外からは見えないヘルムの中で、音にならないため息をついた。

## くろの騎士と闘技場 2

「あなた、緑閑国の『竜槍のサヴァ』だろ？ 国を抜けて、例の騎士団の誘いも蹴って行方不明と聞いていたが、こんな地の果てみたいなところで何をしてるんだ？」

くろやみ国に海賊の黒堤組がやって来た際、サヴァはシメオンや国の精霊のベウォルクトと共に海賊達の対応をした。その時に組頭の側近らしき壮年の男からそう話しかけられた。

いきなりで少々驚きつつも、武装もしていないのにどうして自分だと解るのかと尋ねれば、「隠しているつもりでも見えるもんは見えるし、女王があんたの名を呼ぶのも聴こえた。それに竜がえらくなついていたしな」と笑って言われた。

「俺達と一緒に来ないか？ うちには外見で何かいう奴なんざいないし、竜使いも何人が働いている。金も仕事もたとあるぜ」

そう言葉をかけられて、サヴァは腕に抱えた箱を持ち直し、言った。

「せっかくの申し出だが、断らせてもらう」

「どうしてだ？ こんな死んだ土地に何があるんだ？ こんなちっぽけな国だとあんたの力を腐らせるだけだぜ？」

箱の中からはほんのりと料理に使われたらしき香草の香りがした。これを準備するのはかなり大変だったはずなのに、妹のライナは女王と一緒に時折笑顔を見せながら調理室で賑やかに動きまわっていた。

「ここは居心地が良い。妹も気に入っているし、離れるつもりはない」

「そうか、だがせいぜい気をつけろよ？ 海にいるのは俺達のように

にお行儀よい連中だけじゃないからな」

海賊達は去り、サヴァは女王に申し出た。

「俺をこの国の騎士にしてくれませんか？」

王座に座る女王は目を見開いて驚いたあと、口を開いた。

「守り手が増えるのは嬉しいけれど、騎士にするってどうやったらいいのかしら」

傍らに声をかけると、くろやみ国の精霊レーヘンは首をかしげる。

「さあ……」

「ファムさまが任命すればよいのです。外交的に通用する正式な“騎士”でしたらどこかの戦場に乱入するなどして名を挙げるなど、やるが増えますが」

もう一名の精霊であるベウオルクトが言う。

資料庫に駆け込んでいたライナがシメオンと共に戻って来た。抱えていたデータボードを差し出してくる。

「兄さん、シメオンが見つ付けてくれたの。昔の特殊な服だって。これを改良すれば兄さんの竜脈の制御もしやすくなってもっと強くなるかもって！」

ボードに表示された画像資料を覗き込んで、レーヘンが言う。

「確かに、これならサヴァさんに負担がかからず防御にも役立ちそうですね」

「さっそく調整にはいりましょう。さあ、まずはサヴァさんの検査を、緻密に、徹底的に」

布で巻かれた顔に覗き込まれるように詰め寄られ、サヴァは後ずさった。

「せっかくだから、装備もしつかりしたものを用意しましょう。」

近接戦から遠隔操作、細菌ものまでありますよ」

「ベウオルクト、アナタなんだかうきうきしてない？」

ウサギのハーシェと共にボードを眺めていた女王が顔をあげて言った。サヴァは言った早々不安を感じてきた。

「…あの、使い慣れた形状のものでお願いします」

装備がひととおり完成すると、あとは調整と動作点検が必要になった。古い時代のものを再調整したのもあって、かなり徹底的に耐久性を検証する必要が出て来た。国外に出ている戦闘が得意な二人組を呼び戻して耐衝撃実験をする話も出たが、ちょうど大空騎士団の協闘大会が開催される頃だったとライナが思い出し、ならせつかくだからと参加することになった。

緑閑国にいた頃、サヴァは一度も協闘大会に参加した事が無かった。それなりに実力があつたので惜しむ声もあり、身近でその様子を見ていたライナは悔しい思いをしていたらしい。サヴァ本人としては自分のような外見の者が代表として国の外に出す事を上層部が許可しないとわかっていたので、特に出たいと思わなかったが。

そして名前は女王の発案で、

「くろやみ国の騎士だから“くろの騎士”とか“やみの騎士”なんてどうかしら？」

となった。

そして今に至る。

今まで経験した事が無いほどの歓声と注目を受け、少々動揺したサヴァはひと呼吸置いて思考を整理すると、自分が立っている場所に集中する事にした。

一気に観客の声は気にならなくなり、目の前に立つ対戦相手の様子を探ることに意識が向かう。

これまで“くろの騎士”の相手は二種類いた。一方はとにかく少しでも健闘しようと力んで周りが見えなくなっている状態、もう一方は闘争意欲を無くしてすっかり怯え、思考が止まっている状態だった。

だが目の前にいる相手はそのどちらでもなかった。

自分と同等かそれ以上の相手とやり合える喜びで表情は生き生きとしており、目は輝いている。

上位入賞確實の実力を持った正式な騎士だ。

「貴方はエシル団長とお知り合いなのですね」

腰の両側の鞘から剣を抜き、相手の騎士は言う。二本とも装飾のない実践的な剣だ。

「僕は天空騎士団所属のユミット。お相手できて光栄です、“くろの騎士”」

二人の間に立つ老年の騎士が手に持った小さなランプに水色の線香を近づける。この線香が燃え尽きるまでが試合時間で、約十分ある。

線香が燃え尽きても勝負がつかなければ、主審の天空騎士団所属の騎士と赤麗国と青嶺国から呼ばれた副審二名によって勝敗が判断される。

試合が早く終われば燃え残った線香は勝者のものになり、次の試合時間を延長する事などに使う事が出来る。これは短時間で戦闘を終わらせる事が出来る者を高く評価するという、天空騎士団の考えに基づいているからだと言われている。

線香に火が付き、細い煙が空へと立ち昇った。

闘技場に併設した建物内の大会運営室には張り出し窓があり、高層階でもないため闘技場の広場を近くで一望出来るため、試合を見

るには特等席だった。

「はじまりましたね、“くろの騎士”の試合が」

窓から“くろの騎士”に突き進むユミットを眺めながら、エシルは傍らで右腕で左腕をかばうようにして立つユリアに言う。

「ユミットが相手なら少しは実力がわかるだろう。何せ前回の三位入賞者だ」

ジェスルはそう言うと、窓から視線を外し伝令と共に部屋に入つて来た騎士に声をかけた。

「さてメールト、休んでいる所をすまないが、お前が闘った“くろの騎士”について教えてくれ」

「は、はい」

メールトという名の騎士はちらりと上司のエシルとユリアの姿を確認すると、口を開いた。

「自分は本戦の初回到剣で闘いました。相手は何も持つておらず、初め拳闘士かと思ったのですが違うようでした。自分の剣筋の距離を測り損ねている事が何度もあり、素手に慣れていないようでした」

「得物が別にあるって事か。それでなんで素手なんだ？」

「自分には解りかねます。ただ……」

メールトの言葉にひと際大きくなった歓声が重なる。

「なんだ」

ジェスルが闘技場を見ると、ユミットが片膝をついていた。

ユミットは荒い息を整えると立ち上がり、再び“くろの騎士”へと立ち向かう。二本の剣による激しい剣戟を“くろの騎士”は一つ一つ受け、時折小さな動きではじいていく。どの方向から剣が迫ってきてもすぐに体の向きを変え、すべて黒に包まれた手で対応している。

そうするうちに次第に剣戟を受けるよりもはじく回数が多くなり、ついに片手だけですべて受け止め始める。

「あの騎士は闘うごとに学習し、強くなっています」

闘技場から目を離せないでいるジェスルへ向かってメールトが言

った。

「自分の時もそうでしたが、ユミットの剣ももう効かないでしょう」  
ユミットが剣を引いた一瞬の間に一步踏み込み、金属の胸当て部分に手刀を叩き込んだ。重い一撃だったようだが、ユミットは踏みとどまり、衝撃で足元の地面に亀裂が入る。

だがユミットが体勢を立て直す前に“くろの騎士”は両方の剣の刃を掴むと胸部に蹴りを入れた。

たまらずユミットは剣から手を離して吹っ飛び、倒れる事は無かったが両膝をついてうずくまった。

両の膝が地面に触れると負けとなる。

「勝負あり！」

主審の老年の騎士が右手をあげて声をあげ、火消しの粉を線香に振りかけた。

“くろの騎士”は掴んでいたユミットの剣を空中に放り投げ、目の前に落ちて来る瞬間に蹴り飛ばし、それらは持ち主のすぐ前の地面に交差するようにして突き刺さった。

「見事だ。そう思わないか、ユリア」

「…ええ」



## くろの騎士と闘技場 2（後書き）

もうしばらくサヴァ兄さんのターンは続きます。

24日：勝負判定ルール変更。肩の判定を削りました。

### くろの騎士と闘技場 3

闘技場の入り口前の広場で黒髪の青年が手に持った紙片を睨んでなにやらつぶやいていた。

「ええっと、焼きマシユマロと飴細工は買ったから、あとは焼きりんごに焼きそばに、串焼き？ 串を焼いたら炭になるのに一体どこを食べるんでしょう」

整った顔立ちを曇らせ、その哀しみにも似た表情にすれ違う女性達が心配そうに愛おしげな視線を送るが、青年はまるで気付かず人ごみの中で手元を見つめ、器用に障害物を避けて歩き続ける。

もう片方の手には広場の屋台で買った食べ物がお紙に包まれて二つほど抱えられていた。

「しかしこれでは折角の売り上げが減ってしまうんじゃないませんか？」

青年は紙片を持った手に止まる黒い小鳥に話しかける。艶のある尾羽根を持った黒い小鳥は青年を見上げてピチピチと鳴き、紙片をくちばしでつつく。

「わかりました。わかりましたから。確かにお陰さまで上手いきました。串焼きは鳥肉でいいんですね？」

青年は顔をあげて屋台に視線を巡らせるが、何かに気付くように闘技場に目を留める。

「おや？ この術の気配は…」

黒い小鳥はパイと一声鳴くと、青年の手から飛び立って闘技場を目指してまっすぐ向かって行った。

“くろの騎士”とユミットの試合が終了して次の試合が開始された頃、闘技場裏口の関係者のみが立ち入れる通用門を通る存在がいた。温暖な気候の土地で灰色のショールで髪を覆い、灰色の外套を着ている。裾からは花柄の普段着のようなものが見えているので旅人ではないようだった。その姿は周囲の目をひき、さらに抱えている身長よりも長さの包みも目立っていた。

大会出場者の関係者に与えられるバッジを持っていたため通しはしたが、門にいた衛士の一人は金の象眼細工の腕輪に手を触れ、あらかじめ指示されていた通りの相手へ信号を送った。

長い包みを抱えた存在は時折通路の途中で立ち止まり、首を傾げ、また歩き出す。何度かそれを繰り返し、ついに目的の場所までたどり着いた。

注目される中で鎧を脱ぐ訳にも行かず、サヴァは控え部屋に戻ると椅子に大人しく腰掛けていた。本人はする事も無いのでそうしていたのだが、じっと動かない姿に勝手に威圧感を感じて怯える者もいた。

さらに先ほどの試合前に大空騎士団の団長に声をかけられていたこともあって、周囲では様々に憶測を飛ばす会話が行われており、時折サヴァの耳にも「あの団長の知り合い……?」「昔のうちにいた奴とか?」「あの鎧は一体」などの言葉が漏れ聴こえて来た。

「くろの騎士」さま?

場違いなくらいのんびりとした若い女性の声が聞こえ、見ると部屋の入りに細長い包みを持った女性が立っていた。灰色のショール

ルで顔を隠しているが、“おつかい”が来る事はあらかじめ知っていたサヴァは彼女の方に向かって歩いて行った。

「ご入用の品が完成しましたの。お持ちしましたわ」

「ああ、ありがとう。…君は」

「ハーシエとお呼び下さいまし」

シヨールから覗く瞳をきらめかせてハーシエは言う。女王と瓜二つの瞳だが、ウサギの毛並みと同じ灰色をしている。

「それと、伝言があります」

彼女は抱えていた灰色の布で覆われた細長いものを差し出して、言う。

「『壊せるところまで壊せ』だそうです」

周囲がざわついた。

ハーシエはようやく声を使って喋ることが出来るようになったばかりなので口数は少なく、たどたどしい。

内容としては合っている。だがそれは“くろの騎士”の話だ。試作だから使い勝手や耐久性を確かめるために強者が集うこの大会に参加したのだ。だが控え室にいた人々は違う話だと思い込んだらしく、ハーシエと自分を恐れる目で見ている。

「おい、壊せつて…」

「会場には補強の結界が貼られてるんだろ？」

「死傷者がでるかもしれんな…」

動揺したざわめき声に対応する方法も思いつけず、サヴァは聞かなかった事にした。

「…屋上に移動しよう」

関係者のみの立ち入り区域なためか、屋上の休憩所は人がおらず閑散としていた。

ハーシエは人目がないとわかるとシヨールを外し、束ねていた銀髪を手で整えなおした。サヴァの視線に気付くと、俯うつむいて「上手に黒髪に変えられませんでした」と言った。

サヴァは「そうか」と答えるとハーシェの持つて来た細長い荷物を何度か持ち替えて重さを確認した。

「どうですか？」

「重さもしなりもちょうどよさそうだ」

「ベウオルクトが渾身の作だと仰ってましたわ」

「そういえばレーヘンはどこに？」

「入り口近くまでは一緒でしたが、結界を避けて外でファムさまのお土産を買っています」

サヴァは銀髪の影響を見た。彼には精霊と影霊の区別がつかない。どこが違うのだろうか

「あなたは入れるのか」

「わたしは新しい存在なので既存の術では認識出来ないようです」  
ハーシェは微笑んだ。

“くろの騎士”の試合をハーシェは見学していくことにした。

観客席は人であふれていたので控え室から続く通路の窓からなんとか会場が見える場所を見つけて覗き込んだ。やや遠くからだが場所は一望出来たしサヴァと闘う相手の姿は見えた。

会場からは人々のざわめきが聴こえてくる。

「皆さん一体何を話しているのでしょうか」

「今までは何も持たずにいた“くろの騎士”が初めて武器らしきものを持つて現れたのです。皆驚いているのですよ」

突然の声に振り向くと、見ると銀色の眼鏡をかけ長い髪を束ねた女性が隣に立っていた。ハーシェは一瞬自分の事に関して何か言われるかと警戒したが、女性が何も言わないのでそのまま試合に視線を戻した。

“くろの騎士”が手に持っていた長い包みの布を取り払うと、中から出て来たのは「槍」だった。

灰色の不思議な淡い光沢をもつ一種類の素材だけで出来ており、

持ち手のある本体部分からなだらかに鈍く光る刃へ繋がっている。

「槍というより、薙刀なぎなたみたいですね」

同じ方向を見て女性は言う。ハーシエは薙刀を知らないの、帰ったら調べてみようと思った。

「おそらくこれで彼の正体に気付く人が増えるでしょう」

「どうしてですか？」

ハーシエは首を傾げる。この女性は彼の事を知っているのだろうか。ある国の騎士団に竜槍と呼ばれる騎士がいました。国外の催しものや外交式典などには姿を現す事がありませんでしたので、知る者しか知らない存在でしたが、彼は槍の名手であり独特の使い方をすることでも有名でした」

女性は眼鏡の奥の目を細めて言う。

「はあ…」

「要するに、槍を持つと解りやすくなるのです」

「そういうわけですね」

奇しくも相手も槍を持っていた。紺色の髪の男の「突き」に対して“くろの騎士”は「なぎ払う」ことで応える。三回目で全く同じ瞬間に真正面から刃が突き当たり、男の槍が碎けた。男は残った槍の柄を放り捨てると腰の剣を抜いて切り掛かっていった。

「彼は青嶺国の騎士団の精鋭の一人です」

「だから青い服装ですね」

「今大会では上位三位以内は確実にされています」

“くろの騎士”は槍の刃で剣を受け、そのまま振り抜くと長い柄を回転させてもう一撃、さらに勢いを増して二撃と続けて振り下ろす。男は一撃目を避けたが二撃目は剣で受けると体勢を崩し、距離をとろうと一歩後ろへ下がる。

「あなたは“くろの騎士”の関係者ですか」

試合の様子を話す調子のまま、女性は言う。

「ええ」

既に会話している姿を人に見られているので、偽る必要は無いと

考えてハーシエは答える。

「ではあなたに恩を売ります」

驚いて顔をあげた瞬間、背後から声がした。

「足止めありがとうとさんよ、副団長」

振り向くと、ハーシエは人間の集団に取り囲まれていた。

## くろの騎士と闘技場 4

「すまんが、闇属性の精霊は問答無用で捕獲するよう依頼がでている。あんたが精霊なのか人間なのかいまいちわからんが、とりあえず連行されてくれ」

中心に立つ青い髪の男が言った。彼と同じ制服を着た無言の男達に囲まれ、ハーシエは身構えた。

影霊であることを知られてはならないとベウォルクトに言われている。どこかに連れて行かれる訳にはいかない。さらには創造主から受け継いだ記憶から制服を着た男達に殺されかけた事を思い出し、不安を感じて後ずさる。

先ほどまで話しをしていた女性を探すと、こちらの状況を無視して窓の外を眺めていた。

「おっと、逃げないでくれよ」

取り囲んでいた男の一人が素早くハーシエの腕を掴んだ。振りほどこうと腕を振るが、相手の手はびくともしない。

「暴れると拘束するぞ」

「は、離して」

ハーシエが小さく叫んだ瞬間、男とハーシエの間に剣が突き刺さった。

「なにっ」

男が思わず手を離れた隙をついて、ハーシエは走った。



「敵襲か!？」

ジェスルが剣が飛んで来た方向を見ると、開いた窓の外、かなり離れた会場の真ん中に小さく立つ“くろの騎士”からだった。

「牽制のつもりか? おい、今は競技違反になるのか?」

「試合中の不慮の事故でしょう。“くろの騎士”も手がすべることがあるようですね」

眼鏡をかけなおし、ユリアは言う。

「思いつきり狙ってるだろうがこれ。かなり深く刺さってるぞ」

「暴投は暴投ですよ。ちょうど試合の勝敗もついたようです」

見れば試合相手の男は会場の端に座り込んで、やはり驚いた顔でこちらを見ている。剣は男の物だったようだ。

「これで“くろの騎士”は決勝戦まで到達しましたね」

ユリアは穏やかな表情で言った。

“くろの騎士”がしばしこちらを見つめた後、早足で退場するのを見て、ジェスルは悟った。

「まずい、あいつも動き出したぞ」

ジェスルは衛士に撤収の合図を出して移動を開始しながら、隣で涼しい顔をして歩くユリアを睨んだ。

「お前わざとあの女を逃がしたろ」

「私はただ彼に熱い視線を送っただけですよ」

「“くろの騎士”が気付くように強い殺気を込めただろうが」

「あの女性を追いますか?」

ジェスルの言葉には応えず、ユリアは静かに言った。この調子になると彼女は融通が利かなくなる。舌打ちしたくなるのをこらえ、ジェスルは思考を切り替えた。

「ああ。手分けして闘技場内を探すぞ。外はいい。別のが待機しているからな」

ハーシエは走りに走って階段を下り、裏門を目指してさらに走った。

しかし出口付近にまた数名の人間がいるのを見て立ち止まる。

「どうしよう……」

どうすべきか迷っていると階段の上からざわめきが聴こえ、見上げると“くろの騎士”が降って来た。

彼は数階分飛び降りたはずなのに柔らかく着地し、ハーシエを見る。

「無事か」

「はい」

「レーヘンがすぐ外で待っている。そこまでたどり着けば無事に帰れる」

サヴァの言葉にハーシエは深くうなづき、二人はそのまま外へ向かって走り出した。ほとんどの人間は驚いて避けてくれたが、立ちふさがろうとする衛士はサヴァが槍で牽制して道をあけてくれた。

走りながらハーシエが闇の精霊を探すと、裏門の向こう側で数人の男達と対峙しているようだった。

「あちらでも問題が起きていますようですわね」

「よく知った術の気配がしたので彼が現れたのかと思いましたが、違いましたね」

黒髪の青年は残念そうに言った。

「本人は今すごく忙しいんでね。俺らが代理で動いてるの。まあ術は真正銘あの人のなんだがね」

真っ白い襟が特徴的な外套を着た男達が青年を取り囲むようにして立っており、その中で代表格らしき男が茶化した調子で言う。

「忙しいなら忙しいなりに余計な事をしないで欲しいのですが」

そう言いながら青年は持っていた食べ物を肩から下げていた布袋に放り込み、両手を空けた。

「そう言うなって。あんだだろ、白箔国で血のついた手紙を運んで、ヴィルヘルムス様を襲ったのって」

男の言葉を聞いて上空を飛んでいた黒い小鳥が降下して青年を突っつきだした。

「…そうですが、何か？」

小鳥の攻撃をものともせず、青年は答える。

「おまえさんはくろやみ国の者かい？」

「今回は“お忍び”ですので、お答え出来ません」

青年は微笑んだ。

黒い小鳥が一声鳴き、青年が裏門を見ると、ハーシェが飛び出して来る所だった。サヴァは衛士の足止めをして門の内側に残っている。

「おっと、待ちな」

青年に向かって駆け寄ろうとするハーシェを白襟の外套を着た男が捕らえようとする。状況がよく解らず、戸惑っていたハーシェは男と目が合う。

「あんたは…」

男はずれたシヨールの間からハーシェの顔を覗き込んだ。

「あの、あなたはどなたですか？」

食いつくようにして顔を覗き込んでくる男に対して、不思議そうにハーシェは言った。

「俺はルトガー。白箔国の者だ。あんた、名前は？」

「私は…」

ハーシェが答える前に、黒い小鳥がルトガーの視界を遮るように顔の前に飛び込んで来た。

「なんだ、この鳥は。精霊術か？」

その時、どこからともなく現れた金の小鳥が黒い小鳥を襲った。

鋭い足の爪で捕まえると地面へ押さえ込む。

その隙にハーシェは青年の元まで走った。

「おつかい」ご苦労様です」

「はい…」

息を整えながらハーシェは言う。

押さえ込まれた黒い小鳥は何度か羽ばたき、もがきながら苦しうに一声鳴く。金の小鳥が強く爪を立てると、そのまま煙のように消えてしまった。

青年の顔が曇った。

「ずいぶんと乱暴な」

金の小鳥は地面から飛び立つと男の方にとまった。

「俺の主もだいぶ余裕がなくなってきたね。ずっと探し人が見つからないもんだから術も荒っぽくなっちゃって」

「探し続ければいい」

冷たい響きを持つ声で青年は言う。

「だが貴方達が探そうとすればするほど、あの方が傷つくだけです  
よ」

## くろの騎士と闘技場 5

「ここを出れば闘技場の外だからな。中と違って術の制限がないからアンタらの拘束くらいなら訳ないぜ？ それくらいの準備はしてある」

衛士達とともに追って来た青い髪の男が言う。

サヴァは強行突破するために身構えようとしたが、背後から威圧感を感じ、振り返った。

「そいつらを逃がせ」

声を発したのは獣のように荒々しい紅の髪をした大男だった。乱れに乱れた髪で目元はおろか顔つきまで隠れて見えないが、赤を基調とした風格のある服装から赤麗国の身分ある人物なのだと判断出来る。赤麗国軍の紋章が入っているので、おそらく軍籍で騎士なのだろう。だが男の言葉に衛士達が動かないので、サヴァは警戒体勢を解かずに状況をうかがった。

「聞こえなかったのか。そいつらを見逃せと言っている」

「將軍。一応この場では指揮権は大空騎士団にあります。どいてくれませんか」

「エシル団長」

紅の髪の大男の隣にはサヴァも見知った大空騎士団長がいた。

「という訳なので、全衛士に通達を。彼らを追うな」

「おいエシル！ どういうつもりだ！」

青い髪の青年が驚いて叫ぶ。

「もう一度言うがこの場では大空騎士団が全ての判断を下します。つまり私がルール」

長い両腕をゆったりとひろげ、良く通る声を響かせ、堂々とエシル団長が言った。

「白箔の依頼だろうがなんだろうが知らねえ。決勝で俺の相手が消えるのが一番困る」

赤よりも濃く鮮やかな紅色をした髪を振り、大男は言う。

「まさか…あんた赤麗国の紅濫將軍か？ 前回優勝者の」  
目を見開いて青い髪青年は言う。

「おう、青嶺の坊主か。お前とは初めて会っな。親父殿は元気にしているか？」

紅濫將軍は乱れた髪で表情はよく見えないが笑っているようだ。

「普段は所属先の意向に縛られる我々騎士が、心置きなく闘える場を設けるといのがこの大会のそもそもの主旨。つまり、この場で一番優先されるのは協闘大会の決勝の遂行。このまま“くろの騎士”を捕まえ決勝が無くなってしまえば、今大会に参加した全ての騎士だけでなく、最愛のユリアからも恨まれてしまう」

苦悩の表情でエシル団長は言う。

「お前はいつだって副団長命なんだな」

「ええもちろん」

青年から投げかけられた呆れ気味の言葉にエシル団長は力強い頷きで返した。

「それに、不完全燃焼は健康に良くありません」

「不完全燃焼はまずいよな。思わず手当たり次第に殺したくなるもんな」

エシル団長の言葉に腕組みをしてうんうんと頷く紅濫將軍に、周囲の一般衛士たちは一歩距離を置いた。

「という訳で、そこのお二人、どうぞ逃げてください」

「では遠慮なく」

黒髪の青年はエシル団長の言葉に応じて素早くハーシエを抱える。彼らを取り囲んでいた衛士達はいつの間にか昏倒していた。

青年は目線だけでサヴァに挨拶をすると、搔き消えるようになっていなくなった。

エシル団長は倒れた一人の元へ行き、首筋に触れた。脈はあり、死んではおらず外傷も無く、ただ意識が無い状態だった。

「流石ですね。良い仕事だ。特級あたりでしょうか」

サヴァはこの隙に自分も去ろうかと考えていたが、エシル団長が周囲の衛士に指示を出しながらもこちらの動向を探っているのて下手に動けずにいた。

「おい、“くろの騎士”」

思いがけず傍で声をかけられ、見上げると紅濫將軍が紅色の髪の毛の隙間から、橙色の瞳で見つめてきていた。

「お前は俺と闘え。それでこの貸し借りは無しだ」

サヴァは相手の言葉にうなずくと、兜の顎に軽く指をかけて通信機能を立ち上げた。

「聴こえるか？ 俺は後から戻る」

『わかりました。闘技場、さらに包囲されていますから帰りは気を付けて下さいね』

連絡を待っていたらしく間髪入れず精霊からの返事があった。

「ああ。なんとかしてみる」

『それとくれぐれも設置した転移門の場所を悟られないようにしてください。バレそうでしたら破壊して構いません。それではくろやみ国でお待ちしています』

「ほんと騎士つてのは、どこの奴も我が道を突き進んでるよな…」  
運営室の椅子に力なく座り、ジェスルはつぶやいた。

「我々大空が決定権を持つのは大会終了時まで。その後はまた各国の意見に従いますよ」

エシル団長が腕を組んで壁にもたれ掛かりながら言った。

「わかったよ。あーあ、この結果、あいつにどう報告すりゃ良いんだ」

青い髪をかき乱すジェスルに、ルトガーが申し訳なさそうに近づく。

「色々すんませんね」

「気にするな。お前はそのまま赤麗国に向かって例の銀髪の二人組を追え。こっちの報告は俺がヴィルヘルムスに届けておく」

「お手数かけます。ジェスル王子」

「いいさ。あいつには今まで山のように借りを作ってるしな。友人のよしみってやつだ」

青嶺国のジェスル王子はそう言い、伸びをした。

「さあて、決勝が終われば“くろの騎士”の確保だ。今度こそ逃がすなよ！」

紅濫將軍は主審に手元に残った線香の全てを使う事を宣言した。

「この線香は残せば残すほど賞金が増えるらしいが、俺は存分にこの闘いを楽しみたい。まあ金と比べて望んだ相手と闘える時間を惜しむなんざ、騎士としちゃあとんだ笑われ者になるだろうがな」

サヴァも残った線香全てを使用する事を主審に告げる。これでさ



らに闘える時間が増えた。この鎧が持つかどうか解らないが、出場目的は達成出来そうだった。

精霊達がくろやみ国にたどり着くまでの時間稼ぎにもなるだろう。決勝が終了すればまた追っ手が動き出すに違いない。

「『竜槍』はこの世で闘いたいが叶いそうにない相手の一人だった。他の二人は運営だのなんだので今回は出られないと言いやがったが、こうして叶わなかった相手と勝負出来るなら、わざわざ遠出して参加したかいがあったわけだ」

「大陸に名を轟かせる武人にそう言われるとは、光栄だ」

サヴァは槍を軽く振って握り具合を確認すると、わずかに腰を落として構えた。

紅濫將軍は笑い、駆けた。

## くろの騎士と闘技場 5（後書き）

この続きは兄さんメインのため番外編ページの「くろの騎士の脱出劇・決勝」にあります。

次回からまたファムさんのパートです。

ハーシエとレーヘンが闘技場のある街から転移門を使って帰って来たのは夕方になる前で、ハーシエは疲れたらしくてウサギの姿でレーヘンに抱えられていた。

けれど王の間でレーヘンがひと通りの報告をしている間に回復して、初めてのおつかいの体験談を聞かせてくれた。

「ちゃんと外の方達とお話できましたの。しっかりとおつかい任務も果たせましたわ」

「ワタシだって、ちゃんと屋台のお土産を買ってきましたよ」

どうして生まれたての子と張り合うのよレーヘン…。

精霊と影霊の話を聞いているうちに日が暮れて、ようやくサヴァとゲオルギが帰って来た。

「ただいま戻りました」

「お疲れ様、サヴァ」

試作の黒い鎧は見事に大破していて、パーツはかるうじて繋がっているけれど、もう機能はしていないみたい。ゲオルギから降りる時にも細かな破片がぼろぼろと落ちていた。

「大陸の騎士達って強いよね…」

「その、大会中は右肩と右腕の亀裂以外はそう破損していないのですが、脱出時にやっかいな人物とやりあって、その時にだいぶやられました」

サヴァは疲れた様子でそう言い、レーヘンに手伝ってもらいながら崩れかけた鎧を脱ぐ。

槍を見てみると、こちらは細かな傷が入っているだけだった。

「こっちはそんなにひどい事にはなっていないみたいね」

「修理は必要ないかもしれませんが、今回のデータからさらにサヴァさんに使いやすいものに改良することができます」

ベウォルクトが槍を灰色の布で包みながら言う。

「兄さん！ 目が…！」

ライナの驚く声にサヴァ達の方を見ると、兄の顔をライナが両頬を掴んで覗き込んでいた。サヴァは律儀に背を屈めてライナにされるがままになっている。

「どうしたの？」

見ると、サヴァの右目が竜のような縦線の瞳孔になっており、数回瞬きをすると両目とも人間のものになった。瞳の色は前より少々明るい緑色になっている。

「サヴァ兄ちゃん、身体大丈夫？」

シメオンがサヴァの腕を持ちあげて傷がないか調べる。

「なんともないな。むしろ、以前よりも身体が軽く調子が良いくらいだ」

「鎧で身体を覆っている間に命脈と竜脈の混ざり具合が調整できたようですね」

「確かに、腕の模様も左右対称になっている気がする」

レーヘンの言葉にあまり自覚がないのか、シメオンに身体を調べられながらサヴァは答えた。

黒いアンダースーツだけになったサヴァがシャワーを浴びに行き、ベウォルクトがついでに体調を調べるとついて行った。残ったライナとシメオンが外された鎧の破片を拾って何段もの浅い箱に丁寧に並べている。

「ゲオルギも慣れない身体でよく頑張ったわね」

全速力で飛び続けたのでまだ荒い息をしているゲオルギの黒い肌を撫でて労る。元々灰色がかった緑色をしていたゲオルギの身体は、

くろやみ国にいるうちに黒くなってしまった。この国の気脈、というよりも王の間で私が瘴気から変換した気脈を吸収しちゃったらしい。

竜の個体判別は色と尻尾の形を元に行うらしいから、これでもう元々どこの国に所属していた竜なのか判別できないそうよ。そのおかげで今回ゲオルギもサヴァについて他国へ出かけることができた。「竜って本当に不思議なのね…」

「竜脈の性質がそういった変質的なものなんですよ」

ゲオルギのために水気のある瓜を持ってきたレーヘンが言った。

黒のシャツとゆったりとした灰色のズボンに着替えてきたサヴァを囲んで、活躍の話をみんなでレーヘンのお土産の屋台の食べ物を食べながら聞くことにした。

サヴァのかなりざつくりした話し方に加えて、時々レーヘンとハ―シェが詳しい説明を加えたり、合いの手を入れる。各国の騎士を打ち倒してサヴァが大会を勝ち進んでいく様子をライナは目を輝かせて聴いていた。

「兄さんがちゃんと強いつて証明できて、嬉しい」

「あの大会は法術も精霊術も使えないから、俺に有利だったただけだ。実戦ではどうなるかわからないぞ」

ライナの隣に座るサヴァはそう言うと、妹の頭を手のひらで軽く撫でた。

「それで、すみません女王。脱出に全力をかけたので賞金は…」

「そうなの…」

「ファムさま、賞金は持って帰れませんでした。前日に出店で稼いだ分があります。元気を出して下さい。はい、暖め直した焼きマシユマロですよ」

「うん…そうね」

微笑むレーヘンからピンク色の焼きマシユマロを受け取ってほおばる。手のひら大のビスケットに挟まれたとろける甘いマシユマロは、いつもは大好きなんだけど、今はあんまり美味しく感じないわ…

「レーヘンさん、ファムさまはお金で落ち込んでるんじゃないんです。鳥の精霊が消されてからなんです」

解説ありがとうライナ。そのとうりよ

闘技場周辺で市場が開かれていると聞いて、うちの果物の中でも大陸で良く見かけるものと、作り置きドライフルーツを竜のゲオルギに運んでもらって売ることにした。でも無口なサヴァとすっとぼけたレーヘンだけで売るのはどうにも心配だったので、精霊術が出来るシメオンに作ってもらった黒い小鳥型の人工精霊に、影霊の要領で私と繋がる簡単な連絡機能をつけて、レーヘン達に連れて行ってもらう事にした。

おかげで露天商で果物を売る際に、私の花屋の経験から色々アドバイス出来ただけけど…黒い小鳥は結局ハーシェが捕まりそうになった時の騒動で金の小鳥に消されちゃったのよね…

金の小鳥。

あれ、ヴィルの人工精霊だわ。よく私との連絡用に手紙を運んでくれたから良く覚えているもの。

「攻撃されるなんて…何か行き違いでも起きているのかしら…」

レーヘンが以前ヴィルと戦闘になった時も、防戦だけかと思っただらこちらからかなり攻撃したって言うし（これについてはさっきたっぷりレーヘンを叱った）、もしかしてうちの国ってヴィルに敵認定されてるのかも…

「うつつ、どうしよう」

泣き出したい気持ちになりながら甘ったるいマシユマロをもうひとくち食べる。

「ファムさま、元気を出してください」

心配そうな顔でライナが私のグラスに冷やしたザクロジュースを注いでくれた。

「うん、ありがとうライナ」

「ファムさま」

「なあに、ベウォルクト」

サヴァの鎧を運び終えたベウォルクトが王の間に戻ってきて、ゆつくりとした足取りで私に近づいてきた。

「先日コトヒトが運んで来た回覧板の内容についてお話したいのですが」

「ああ、国家ランキングの話ですね。ようやく完成しましたか」

レーヘンが納得した顔で言う。

「国家？ ランキング？」

一体どんな話なのかしら。

「何名かの精霊達で趣味の一環として作っているものなのですが、国家の様々な項目でランキングを作っているんです。回覧板でデータを収集して、先日そちらの最新版が完成しました」

「それって、うちは載ってないんじゃないの？」

何しろ建国したばかりだし、国民も十名くらいしかないもの。ちゃんとした国家扱いさえしてもらえないのか怪しいものだわ。

「いえ、制作員の中にワタクシもいますので、最新情報が反映されています」

レーヘンがベウォルクトが説明を始めるのに合わせて王の間の空間に沢山の画像を映し出す。様々な項目の元に、国の名前が並んでいる。

「子供の平均寿命に睡眠時間に男女の人口比、平均的な親指の長さ、赤ちゃんの平均昼寝時間……？ ずいぶん色々あるのね。なにこれ、夕食の献立に悩んでいる時間？ これ本当に測ったの？」

「まあ各国の精霊が好きに調べているものなので、項目内容はかな

りバラバラなんですよ。大まかな内容のものや細かいものを合わせる  
と一万項目くらいあります」

今回自分は参加していないと言うレーヘンが指先で空中に浮かぶ  
画面を整理して、いくつかの画面を前面に出した。

「それで、我がくろやみ国なのですが、技術力の総合と開発力が圧  
倒的にトップでした」

「な…げほっ！」

さらりとベウォルトが言うものだから思わずマシユマロを吹いち  
やった。気管支にビスキットの破片が入って咳が止まらないわ！



## くろやみ国と準備 1（後書き）

23日、前半部分リライトしました。

6月26日、露天商で売るゝのあたりの話を番外編「銀色の精霊、商売する」に載せました。

## くろやみ国と準備 2

「わが国は最下位や、情報無しで順位外の項目もかなり多いのです  
が：技術力の項目は、総合だけでなく細かく分類した項目でも八割  
以上の項目で上位三位以内になっています。ちなみに誕生したばかりの国がトップを飾るといのはかなり珍しいことです」

ベウォルクトが技術力の項目の画面を表示してくれた。

確かに画面中央の大きな三角形の一番上にうちの国の名前が大陸  
共通語で書かれているわ…

「う、うちの技術力ってそんなに凄いものなの？」

咳き込んで涙目になりながら尋ねると、レーヘンが水の入ったコ  
ップを差し出しながら答えてくれた。

「ワタシは五百年間あちこちの国をうろつきましたが、この国、特  
に城にあるほとんどのものはもうよそでは存在していないようでした」

レーヘンの言葉に驚く。

「え、そうなの？ てつきり青嶺国みたいな大国では普通にあるも  
のかと思っていたわ」

周囲を見渡すと、シメオンが口を開いた。

「僕、青峰国の王立学院の入試用に大陸の技術について勉強をした  
ことがあるけど、くろやみ国のシステムは全く知らないものばかり  
です」

「確かに、鎧もあの槍もいまだに素材も造りもよくわからないな」

「私は入院が多かったからあんまり世の中のこと知らないです…あ、  
でもあの植物園は凄いです！」

この国で生まれてまだ数ヶ月しか経ってないハーシェは何が何だ  
かわからないって顔をしているわ。

「確かに、建物の中や地下を走る鉄道なんて聞いた事無かったわ」

「説明してちょうだい、ベウオルクト。この国にはどうしてこんなに珍しいものが多いの？」

「…以前にも簡単にご説明しましたが、改めてお話いたしました。私の言葉にベウオルクトは椅子に座り、みんなに説明してくれた。我が国にあるものは大昔にはどの国でもありふれたものでした。ですが過去に発生した大規模戦争での破壊行為で、暗病国以外の大國は崩壊したため、新たな国が育っていくに連れて別の文化が生まれていったようです」

「確かに、私よりもマルハレータ達の方がこの国の道具を上手に使っていたわね」

「ここ数百年は法術や精霊術が発達して日常生活に使われるようになっていきます。そのせいで黒堤組のように、かつての物は残っていても製造方法や改良については知らないといったことが多々あるようです」

「技術力はわかったけれど、開発力って、うちは新しい物なんて作ってないわよ？」

「物というよりは技術のことですね。ライナさんを助けた際の、王の間のシステムと人体を経由して治療をするという発想が画期的でして、新しい治療法開発として高く評価されました」

「私の時の？」

ライナが驚いた表情で自分を指差す。

「ええ、あれは我々でも全く思いもよらなかった王の間の使い方なのです。ちなみにこの件では精霊の研究団体から問い合わせがきています。なんでも、賞を贈りたいとかで」

レーヘンの言葉にあの時の事を思い返してみるけれど、無我夢中だったからあまりよく覚えていないわ。

「そ、そう、なんだかよく分からないけど、凄いことだったのね、あれ。…その、ちなみに、白箔国はどうなの？」

「あの国は貿易、文化事業、法術学、新規開拓などでトップですね。精霊研究も上位にきています」

レーヘンがまた別の画像の内容を読み上げてくれる。

「ふうん」

頑張っているのね、ヴィル

「ねえ、そのランキング情報って一般に公開されるの？」

「いいえ、これは精霊が自分たちの楽しみとして作っている物ですから基本的に公開はされていません。ですが尋ねられれば開示しますし、精霊の個別の判断でこうして仕えている国には知らせることもあります。…おそらく精霊が国家に関わっている国の上層部には公開されているでしょう。比較した情報しかないのです、それぞれの具体的な数値はわからないようになっていきますが」

楽しみで一万項目も情報調べるって、何が面白いのかしら…？

「それって、なんだか嫌な予感がするわね…」

「お察しの通り、今回いきなり無名のわが国が技術力総合トップに現れたためか、急遽上位になった国で会合を開きたいとの通知が青嶺国の特級精霊経由で届いています」

ベウオルクトが頷いて言った。

「くろやみ国は欠席するわよ」

私はきっぱりと宣言した。

「おや、どうしてですか？」

驚いた顔をしてレーヘンが言う。

「だって、私まだ海賊としか渡り合ったことのない元一般市民よ？  
なのいきなり大国の王様達と渡り合えっていうのは無理があるわ」

それに、ウイルスのこともある。また攻撃されたらもう今度こそ本当に立ち直れなくなっちゃう。もうちょっと状況を調べて、私の気持ちも落ち着いてからにしたいところだわ。

「白箔国の王が来るとは限りませんよ。誰かしらが来た場合は故郷の話などできるのでは？」

白箔国から私を連れだした張本人のレーヘンが言う。

「それならもつと行きたくないわ。私あの国の貴族に殺されるところだったのよ」

「酒造と飲食店数、一人当たりの食費一位の赤麗国が来るので、お酒や料理もきつと豪華ですよ」

今度はベウオルクトが言う。

「ぐっ…なんでアナタたち、そう勧めてくるのよ！」

「実はこの集まりに各国の特級精霊達の会合も便乗しようかという話になっていまして、くろやみ国が会場設営の担当になっているのです」

コイツらは…

「ちよつと、そこ並びなさい」

きょんとした顔で王座の前に並んだレーヘンとベウオルクトの額に、私は思いつきり手刀を叩き込んだ。

「何勝手に決めてんの！ 誰が王様やってると思ってんのよ！」

ああもつ、すっごく手が痛いわ！

「あのう…」

精霊たちに説教していると、サヴァが申し訳なさそうな顔で近づいて来た。

まさか…

「すみません…できれば俺からも出て欲しいんです。青嶺国の王に一言だけでも挨拶を」

「おねがい、ファムさま。私たちここに来る前に青嶺国の王様に命

を助けられたんです」

「確かシメオンの処刑やゲオルギの搜索がされていないのも…」

「青嶺国の措置ですね。ゲオルギの件は憶測ですが」

ベウオルクトが答え、シメオンが頷く。

みんなが私を見る。

「大丈夫です。ファムさまは我々が全力で守ります」

レーヘンが言い、ベウオルクトやライナ達が頷く。個人の気持ち  
がどうこうと言ってられないのね…

「…もう！ わかったわよ！ 行くわよ！」

仁義と、すつとこどっこい精霊達のためにね！

みんな、手伝ってよね！

## くろやみ国と準備 2（後書き）

例によってあとがきのものは活動報告にて

なお月曜日に前話を半分以上書きなおしています。  
セリフと描写が増えている程度ですが

9月26日：誤字修正

### くろやみ国と準備 3 (前書き)

会議しています。



### くろやみ国と準備 3

「会合場所はくろやみ国と青嶺国の首都から地図上で正三角形に位置する海上になります。このあたりは海流が安定しているので、会場施設と、宿泊施設を浮かべる計画になっています」

「家の乗った筏みたいなものね。わかったわ。内装の雰囲気は旅行先のちよつと豪華な宿って感じでいきましょう。快適で、居心地の良いものにしてちょうだい。途中途中で確認したいから報告してね」  
「かしこまりました」

「これって誰か取りまとめ役に報告しなくちゃいけないんじゃない？」

「ええ。今回発案元の青嶺国が調整役も引き受けてくれていますので、そちらに事前資料を提供せねばなりません」

「それっていつ頃までにするのか聞いている？ 連絡手段とかは？」

「青嶺国の特級精霊から使者が送られて来る予定なので、その際に渡すことになっています。正確な時期は分かりませんが、おそらく一ヶ月ほどになるでしょう」

「わかったわ」

私は自分のノートに作った予定表に書き込んだ。

「まったく、やることが山積みね」

王の間は現在対策会議室になっているわ。

王座の前に創られた寝台ほどの広さの真っ黒な机の上には、広げられるだけ広げたメモの山と大量の資料が積み上げられている。それらを前にすると思わずため息が出てしまった。

国として他国との会合に出るのに何が必要なのか、考えられるだけ考えついたものを整理して、とにかく一つ一つ決定したり、作ったりしている。みんなで作業を分担しているけれど、とにかく私が判断して、どうするか決めないと始まらない。毎日脳みそがフル回転しているわ。

「すべて必要なことですよ。そもそもが今まで国として対外的なことを何も決めていなかった状態だったのです」

王の間の空中に無数に浮かんでいる、先程まで話し合っていた内容に関係した情報画面を整理しながらベウォルクトが言う。

「もう、アナタだって今まで何も言ってこなかったじゃない。それに政治とか経済の仕組みなんて白箔国の市民学校ではたいして勉強しなかったから、思いつきもしなかったし。仕方ないわよねえ、ブルムちゃん」

そう言いながら私は傍らのクッションの上に置かれた銀色のかたまりを撫でる。表面は鏡のようにつやつとしていて、触るとほんのり温かくてとても心地良い。

「卵に尋ねても何も答えられませんよファムさま」

床に落ちていたメモを拾い上げながらレーヘンが苦笑する。笑顔のバリエーションが増えてきたわね。

「でも中では聴こえているかもしれないじゃない。いいのよ、ほとんど独り言なんだから」

イライラの解消にさらに卵の表面をすべすべと撫でる。

ブルムちゃんは先日創った影霊で、核をライナとシメオンが資料庫から見つけてきてくれた竜の卵の化石にしたためか、未だに孵る様子がない。

王の間が調べてくれたところによると女の子らしいので、レース飾りのついたピンク色のクッションの上に乗せていつも側において撫でている。鳥の卵のように暖める必要はないらしいわ。

「古代の竜って、どういった子なのかしら？ ゲオルギやライナ達

と仲良くして欲しいわね」

「お待たせしました、女王」

冷たいお茶とオレンジとレモンの蒸しケーキで休憩をしていると、サヴァが王の間にやってきた。

「お疲れさま、サヴァ。慌ただしい時に呼び出してごめんなさいね。新しい鎧は順調？」

サヴァの鎧は修理できないくらい壊れちゃったらしくて、新しい物を一から作っている。色々時間がかかっているみたい。

「ひととおり完成しました。これから耐久試験です」

「今回は法術への耐久性も付加していますので、調整にはもう少しかかりそうです」

サヴァの言葉に、ベウォルクトが補足してくれた。

「あなたを呼んだのは意見を聞かせて欲しいからなの」

ハーシェがサヴァの分のお茶を用意してくれる横で、私は机の上に並べた色とりどりの記憶ブロックの中からキラキラ細かい粒子が光るものと真つ黒いものを手に取る。

「俺もあまり国交関係について詳しくないのですが、分かる範囲でお答えします」

「ありがとう。助かるわ」

手に取った記憶ブロックのうち黒い方を机の真ん中に空いた穴にはめ込むと、このあいだ黒堤組から得た諸外国の情報が空間に表示される。

海賊がくれた黒い箱をあけるとこの記憶ブロックが詰まっていて、レンガくらいの大きさからサイコロのような小さいものまで様々で、初めて見た時は子供用の玩具かと思っちゃったわ。ちなみに精霊はこの記憶ブロックに触らなくても中身を知る事が出来るらしい。

キラキラしている方を同じように穴にはめ込むと、今度は精霊達が趣味で作ったランキングが同じように表示された。王の間経由で操作して、くろやみ国の名前が載っている部分だけを抜粋して、机の上に引っ張ってくる。

サヴァは表情を変えなかったけれど瞬きをして、書類やメモの上に浮かぶ画面を見て、それから私の方を見た。

「何度も見っていますが、不思議な仕組みですね」

「私はもう慣れちゃったわ。原理は、さっぱり分らないけど」

「お望みならば何度でもご説明いたしますよ」

それは今度お願いするわ、ベウォルクト。

「他の国はこのランキングを見て私たちの国をどう思ったかしら？」

「いきなり現れた謎の国といったところでしょうか。しかも高い技術力がある」

サヴァが腕を組んで言った。

「警戒すると思う？」

「ええ。そして利用しようと考えてでしょう」

「やっぱり、今度の会合で注意すべきは人間よね。各国の頭脳が集まるもの。頭も切れるし立ち回りもうまいわ。ねえサヴァ、あなた交渉ごとって得意？」

「いえ、まったく…」

私とサヴァ、この国の年長者が二人して暗い表情になる。

「私も花屋の時のような街の人達との駆け引きくらいならできるけど…国の代表となると難しい所だわ」

平民だった私に、騎士で口数の少ないサヴァ、まだ子供のシメオンに同じく子供ですと病気だったライナ。精霊と影霊はおいといで、私たちは彼らに対して話術も交渉力も及ばない。

ましてや腹の探り合いなんてできるわけがない。

弱い立場だと思われるしまうと、うまく丸め込まれてしまって、気がつかないうちに属国にされたり、一方的に搾取されてしまうことも有りうる。

「私たちはまだ国同士の交易なんてできないわ。交易するにしてもこちら側がちゃんと有利に交渉できる要素が思いあたらないもの。精霊のランキングで他国より評価されたといっても、うちの技術は外に出すにはまだ不安があるし、私だって人に仕組みを聞かれてもまったく答えられないものが多いし」

黒堤組との交渉は彼らの持っていた技術の延長のものだったから、相手にとって価値があったけれど、法術や精霊術が主流の今の時代だと、どの技術がどう価値があるのかまだわからない。

「ライナを治療した方法だって、画期的だけれどこの部屋のシステムを使わないと出来ないわ」

「問題は世界の中でこれからのこの国の立ち位置をどう作って行くかね。正直、小さい小さい国だし、そっとしておいて欲しいところだけれど」

頭が疲れて来たのでお茶にスライスしたレモンを入れて飲む。きりつとした酸っぱさに気分がすっきりするわ。

「ですが、いずれこういつた状況になる事は避けられなかったでしょう。ワタシとしては、この国の外交活動の初回が人間のみの会合になるよりは我々が介入出来る今回の方が安心出来ます」

レーヘンが言う。

「俺も、今は他国に内部を知られていない分、様子見よりも少々前に出てみた方がいい時期だと思います」

サヴァが言った。

私は腕を組んで、肘をついて、それから高い高い王の間の天井を眺めて、窓の外の曇り空に目を移して、そしてお茶を飲み干した。  
「いいこと思いついたわ」

「今の所、この国は外に知られている情報が少ないから怪しまれているに違いないと思うの。だから、いつそ初めから怪しい謎の国ってことを利用するわ。やってくるのは、精霊と、人間の大使と、その護衛」

「この国には大使がいませんが」  
レーヘンが首を傾げる。

「私がやるのよ。ただの使者だったらそこまで身分が高くないから、おそれおおくて各国の偉い人と会えませんかって言えるでしょう？」  
「はあ」

レーヘンがさらに首を傾げる。身分の話は理解しにくそうね、アナタ。

「最低限会う必要があるのは…今のところ青嶺国のトップだけよね。長く喋るとボロが出しちゃいそうだから、もし国の紹介みたいな物が必要になるのなら書類みたいなものにして配りましょう」

その方が権力や汚い狸オヤジ達と触れなくて済むわ。はつきり言っ  
て彼らとやりあって話術で勝てる見込みは無い。

黒堤組との時だって、私、腹をたててひっぱたいちゃったし

「白箔国はどうします？」

「…国の代表に誰が来るのか、行ってみないと分からないのよね。今のところ国同士では関わりがないし、面会の予定はなくていいわ」  
今、女王としてヴィルと会っても、私は彼とどう会話すればいいのかまったく分からない。この間の鳥の精霊の事もあるから、敵視されているかもしれないと思うと恐くて、当分会いたくないのが正直な気持ちだわ。

もし違う人が来たら私を狙った貴族について知りたいけれど、他

所の国の者がいきなり国の貴族（しかも裏で犯罪めいた事をして  
いる狸オヤジ）について尋ねるなんて変よね…。

「あとの面談は…そうね、各国の精霊たちとします」

「どうして精霊と？」

「精霊が出てくるなら貴方達が同席できるでしょう？ それに私、  
精霊相手なら口喧嘩になっても勝てる自信があるの」

腰に手を当てる宣言する私を見て、

「ええと、そうなんですか？」

サヴァが精霊達に確認する。

「…」

納得したくないけど反論もできないみたいね。

## くろやみ国と準備 4

「各国への土産物は何にしますか？」

「そういったものも必要なの？　うちに土産になるようなものなんてないわよ。アナタ達精霊が喜びそうなものを選んでちょうだい。いつそその方が世間ズレしてるみたいでいいわ」

そう言ったら、何故か城の外に生えていた枯れた雑草の標本になった。謎の感性だわ…

「あと重要なのは、衣装ね」

女王ではなくて、大使っぽく見える、あまり派手ではないものがいいわね。

私は感情が顔に出やすいから、表情はメイクで隠しましょう。

各国の上流階級の女性の服や髪型、メイクを研究しなければ！  
全身綺麗づくめになって、各国の権力者と渡り合うわよ！

「服も身だしなみも問題ありませんよ、ファムさま」

私が黒堤組からもらった資料を漁っているとレーヘンが爽やかに言ってきた。

「どういうことかしら？」

「ファムさまの服は既に我々で用意してあります」

ライナから資料を受け取りながらいつもの落ち着いた調子でベウオルクトが言う。

「…嫌な予感しかしないのだけど」

特に、初対面ではるぼろの外套を着ていたレーヘンに言われると、不安しかないわ。



案内されたのは衣装部屋ではなかった。円形に湾曲した壁全体がぼんやりと光る灰色の空間。その中央に、漆黒の衣装が用意されていた。ちょうど人が着ているような形で宙に浮かんでいる。

「なんなのよこれは」

そう、全部まっくら。頭頂部から足先まで。

「これって私の衣装なの？」

腕を組んで睨みながら尋ねると、ベウォルクトが深く頷いた。

「はい。実は検査した結果、ファムさまの身体はいまだ万全ではないようなのです。さらに会合に参加する時期は影霊を創った直後にあたり、とりわけ周囲から気脈を吸収しやすい頃ですので、万一に備えております」

「最終調整がまだですが、どうぞ着てみてください。きっと似合いますよ」

そう言うとなーへんは衣装を手渡してきて、どこからともなく現れたカーテンで部屋の一部を仕切った。

着替えは見てはならないという私の教えにちゃんと従ってくれているのね。

仕方ないから黒い衣装を手にとってよくみると、それぞれのパーツは違う生地で作られていて、表面の色合いや光沢も微妙に差がある。

「凝った作りをしているのね…手触りもすごく良いし…」

とりあえず着てみることにして、ブーツとタイツとが一体になったようなものを履き、床すれすれまで丈のある袖なしワンピースを着る。

それから手袋と袖が一緒になった前開きの上着を着て、手首の金具を留めて、これまたひたすら丈の長い、細身のベストを羽織る。これには細かいリボンがところどころに編み込まれていて、不思議な模様が肩周りから胸元をたどり、膝下辺りまで続いている。

「着てみたわよ」

そう言ってカーテンを開くと、いつの間にかレーヘン達だけでなくライナやシメオン、ハーシェも待ち構えていた。

「すごく素敵です。ファムさま」

「ありがとう、ライナ」

「襟元はきちんと閉めていてくださいね」

そう言くとレーヘンはベストの襟から胸元のボタンを留めた。これで顎から下の肌は全部隠れてしまったわね。

「なかなか悪くない着心地ね。締め付けもないし。このリボンの刺繍も可愛いわ」

「これは特殊な織り方で作ったものでして、この国の大使の証であるとともに他の精霊達が見ればファムさまの身体の説明にもなります。取り扱い説明のような物ですね」

「なんだか珍獣扱いね…」

「最後にこちらを」

そう言ってベウォルクトが黒い花環のような帽子を頭に乘せてきた。すると霧のようなものが降りてきてヴェールのように全身を覆う。

ヴェールは触ろうとするとともやっとしていて、触れている感覚がない。重さもない。

私が歩くと床に触れているあたりのヴェールが碎け、花びらのようにふわりと舞い散り空气中に溶けて消える。けれどヴェール自体は減る事がない。

「すごいわね、これ。一体どうなっているの？」

鏡で見ると見事に黒に覆われた姿だった。このヴェールは内側からは透けて見えるけれど、外からは見えないうようになっていたみたいね。メイクも髪型も、さらには体型すらも全くわからない。

「そのヴェールの性質は王の間に使われているものと同じもので、常時空気中から生成され、また空气中に還元される循環素材です。それによってファムさまの全身とその周りの空間を常に安全に保つ

ているのです」

「仕組みは全くわからないけれど、とにかくこれに包まれていれば私の身体はおかしくならないということね」

「そうなります。ファムさまが周囲の気脈を吸収しないよう、外界から遮断するのです。会場は気脈が薄い場所を選びましたが、念のために、安全処理を施した部屋以外では絶対に脱がないでください」  
「わかったわ」

またあの時みたいに血を吐いて死にかけるのは御免だものね。

「王の間と同じということは、もしかして私の意思で形を変えられたりもするの？」

「はい。ですが全身を覆う形は変えられませんのであまり自由度は高くありません」

何度か試してみたけれど、結局真っ黒な色は変えられなくて、模様をつけたり、光沢のある生地にしてみたり、レースを付けられる程度だったわ。

「上質な布でふちにキラキラした刺しゅうがあるように見せれば礼装っぽくなるし、地味にすれば普段使いに見せることができそうね」  
「こういう機能、お洒落するには便利そうだけど…」

「こんな布の塊みたいな姿でお洒落してもねえ…もうこれは変装よね。謎の国の大使って演出には合っているけれど、この姿で女王ですって言っても誰も信用しないわね、きつと」

目的に合ってるからそれはそれでいいけれど。

いつか立派な女王さまとして素敵なドレスを着たいわ。

「どこか不具合な点はありますか？」

「見た目以外ならまあまあ満足しているけれど…そうね、ワンピースの裾周りが歩きにくいから、もう少し広がるものか、スリットを入れてくれないかしら」

「かしこまりました」

「もういっそ声も変えてしましましょう。女か男かも、人間か精霊

かも分からなくしましょう」

ここまでできたらとことん演出しようじゃないの。

人が揃っているので、ついでにみんなの衣裳も決めてしまっことにしたわ。

同じ顔をしているハーシェは似たような格好をしてもらうことになった。こちらはところどころに灰色の意匠が入ったもので、髪をまとめて結いあげて、ひざ上までの黒い布のヴェールで覆う。

「アナタ達も、それっぽい格好でよろしくね。サヴァの分も鎧とは別に軽くて動きやすい騎士の服を用意してちょうだい。使う色は黒か銀、それと灰色で」

「はい」

「折角だし、留守番組もみんなで揃いの衣裳を作りましょうか」

そう言って私はライナとシメオンの肩を抱いた。

「ライナのは僕に考えさせてください。ファムさま」

「じゃあシメオンののは私が決めます」

「二人で考えなさいな。礼服としてかつこいいものをね」

さすがに全員でかけると城と国がから空きになるので、留守番組としてライナとシメオンとゲオルギ、そして城の管理をするためにベウオルクトが残ることになっている。

「レーヘンは今回の特級精霊たちの会合に初参加になります」

それを聞いてなんだか激しく不安になったわ。

ベウオルクトに助言を貰いたい時って結構多いから、一応何か連絡手段を考えるつもりだけど。

王の間に戻って今度は他に用意するものについて話し合っている

と、鎧を着たサヴァがやってきた。

「完成したのね！」

「ええ」

この間の“くろの騎士”の鎧とは少々違っていて、関節まわりが布のような素材になっている。身軽になってかるやかに動けそうね。「表情は相変わらず頭部全体を覆う形の黒い兜で見えないのね」細身で長身の背格好からなんとか中身はサヴァだとわかる。

「ああ、すみません」

そう言つとサヴァは兜だけ外し脇に抱える。

「槍の他に今回はこちら也使ってください」

そう言つてベウオルクトがサヴァに一振りの剣を差し出した。鞘にも柄にも私の衣裳と似た模様が描かれている。

「鎧には対法術処理を施しましたが、精霊術にはこちらで対応してください。術でけしかけられてきた精霊をかなり強引に排除できます」

サヴァは手渡された剣を鞘から引き抜き、明かりにかざす。

「綺麗……」

ライナがそれをみて感嘆した声をあげる。

剣は暗い色ガラスのような素材で透きとおっていて、中に煙のようには黒い模様が入っているのが見える。

「落としたら割れちゃいそうだけど、大丈夫なの？」

あんまり見慣れないのでちよつと心配になつちやつたわ。

「外見はガラスに似ていますが材質は全く違います。脆くはありませんし、金属よりも丈夫ですよ。サヴァさんの腕力に耐えるようにも作っております」

サヴァは剣をひと通り調べると、刃の側を持って持ち手を私の方へ向けて差し出して来た。

「女王、騎士の任命をお願いします」

「改めて、正式な任命式ということね。私は何をしたらいいのかし

ら」

「騎士とは覚悟を決めた者のことをいいます。己が定めたものを守る為に剣をふるい、己の情理を殺してでもそれを守るという覚悟を決めた者です。その覚悟をあなたに認めてもらえば、俺はくろやみ国の正式な騎士となります」

私をまっすぐ見る彼の声は、とても静かで落ち着いていた。

「わかったわ」

私は差し出された柄を両手で持った。

王座の前でサヴァは右膝をついた。

剣はかなり重いけれど、しっかりと握れて、持ちやすい。ふらつかないように気をつけて持ち上げ…無理。とても重いわ。

顔が引きつりそうにながら私が持ち上げようとするのを、左右からハーシエとライナが支えてくれたので、なんとかひざまづくサヴァの右肩に刃を置く事が出来た。

一呼吸おいて息を整えて、私は宣言した。

「あなたをくろやみ国の騎士に任命します。この国と国民を守ってね、サヴァ」

「はい」

「ふ〜ふ〜ふん、ふふーん」

「どうしたんです、ファムさま。朝から粉だらけになって。新しい美容法かなにかですか？」

「お菓子焼いてるのよ！ 調理室で小麦粉を練ってるんだから察しなさいよ。きいてレーヘン。今日はね、私の二十歳の誕生日なのよ！」

ちゃんと白箔国と、この国の暦表を確認したもの。

「私の生まれた国だと、五年ごとに大きなお祝いをするの。これはそのための特別なケーキなのよ」

ちなみに二十歳すぎは嫁き遅…フツ。なんでもないわ。この国ではそんなもの関係ないわ。自分で自分の誕生日ケーキを焼くのも、この国ではまったく問題ないんだから！ とっておきの、素敵なケーキを作るわ！

「ちなみに晩ご飯はライナとシメオンが作ってくれるそうよ。折角だからアナタもなにか作って祝ってみない？」

「うーん、ではこの間上手く出来たパンケーキを焼きましょうか」

あれ、三十枚失敗してようやく一枚成功しただけじゃない。

「多分、もう失敗しませんよ」

「気持ちは嬉しいんだけど、私、これからスポンジケーキを焼くから今度にしてくれないかしら」

「パンケーキはスポンジケーキの付け合せになりませんか？」

「同じような味だからならないわよ」

どうしてそこで心底不思議そうな顔をするのかしら…

「お菓子って難しいんですね」

私は精霊に味覚を教える事のほうが難しいと思うんだけど。

「今夜は試作のお酒も出して、皆で楽しく過ごしたいわ」

ところがそうもいなくなってしまった。

スポンジケーキが焼きあがるのを待ちながらケーキを飾るクリームや果物や砂糖漬けの花を吟味していたら、お城から近海に接近する船があると知らせが来て（勝手に頭の中に映像が浮かんできた）、詳しく確認したらこの間来た海賊の黒堤組の小型船だった。

前回と同じように港ので腕組みをして、私は船から降りてくる黒堤組の代表を睨む。<sup>マクロ</sup>

「もう少し後か、早い時間帯に来てくれると助かるのだけど」

もうこれでケーキは夕食に間に合わなくなっちゃったわ。

「俺達は商売相手だぞ。時々挨拶しに来たっていいだろ。時間の都合は波に聞いてくれ」

形の良い眉を上げ、風に揺れる黒髪をかきあげながらカラノスは言う。

相変わらず態度が大きいわね。それに、私が何を言っても見上げた先の黒と青の瞳は笑っている。

「別に挨拶だけならコトヒトとシシだけ寄越してくれてもいいのよ。ねえコトヒト、シシ」

「こんにちはファム女王。そう言っていただけると、組頭には悪いですが嬉しいですね」

「ガウ」

私がいつものように傍に精霊を待機させているからか、前回と違ってコトヒトとシシはカラノスが船を降りる時から姿を現している。白灰色の髪をした若者姿のコトヒトはにこやかに、艶のある灰色毛



の長い四足の獣姿のシシはやや警戒しながら挨拶をしてくれた。

「シシはいつもとっても素敵な毛並みね」

あのふさふさした体毛を触りたいけれど、私が近寄るとシシに後ずさりされちゃうのよね。

「そいつは俺が寂しい。わざわざあんたに会いに来たんだぜ？ それにシシは用心深い上に忠誠心も篤いからな。懐いて欲しいなら俺に近づくのが手っ取り早いぞ」

「うっ」

それは避けたいんだけど。

「まあいい。今回の商品はこれとそっちの箱だ」

そう言ってカラノスは肩に抱えたずっしりと重そうな黒い箱と、三人の黒尽くめの男達が船から積み降ろしている大きな箱を指さす。「依頼通り収集した情報と、あっちの箱には他国の書籍が入っている」

「ありがとう。こちらまああなた達と交渉できそうなものをリストアップしているから、確認してちょうだい。それから取引といきましよう」

「ああ」

「荷物はちゃんと持った？ 忘れ物はない？ ハンカチ持った？

ほら、襟が曲がってるじゃないの」

「……なあ、……ナンデオレナandesカ？」

「あんたあの子の事応援したいんでしょ、ならしゃんとしなさい！」

「これって普通は精霊がやるんだろ？ 俺他に仕事が…ナンデ俺…」  
「滅多にできない経験じゃないの。何事も経験が大事よ？ あと夜の冷えに気をつけなさい。お腹壊しやすいんだから」

『時間がない。急ぐぞ』

「あーもうわかったからって、ちゃんと役目は果たしますって、うわ！」

「向こうの…と仲良くな。くれぐれも怒らせちゃダメよ？ 命に関わるから」

「ちょ、待てええええええ！」

「ベウイルクト、詳しい確認をお願い」

「…我が国のものではありませんね」

一瞬耳をかたむけるような仕草をしたベウオルクトが答える。落ち着いているから、危険な物ではないみたいね。

「どうした」

カラノスが私たちの様子に気付いて声をかけてきた。

港の傍に建てた待合室と会議室が一緒になった施設で黒堤組と取引内容の確認をしていると、海賊が来たときは違う、もっと別の警報のようなものがお城から伝わってきた。何かわからないものがあるうちの領域内に出現したらしい。

…というか、私は外にいるのに普通にお城と連絡が取れちゃって…まあとにかく、何が来たか調べないと！

黒堤組はコトヒトや他の仲間たち含めて皆不思議そうな、必要とあれば警戒状態に入りそうな様子をしているから、今のところは無関係とみていいわね。

「取引中にごめんなさい、ちょっと近海に不審な物が出てきたらしくって…これ、空を飛んでるわね」

サヴァとゲオルギは今城内にいるから、別よね。

「まもなくここから目視できる領域に入りますね。どうします？  
ファムさま」

レーヘンが私の傍らで待機しながら言う。

「一応お城の皆には待機していると伝えてちょうだい。んー、こっちに誘導できそうね」

なんだかそういった事ができそうだわ。

「わかりました。無理はしないでくださいね」

## 青と翼と 1（後書き）

24日、タイトルを「青と翼」から「青と翼と」に変えました。

「ここまで成長されているとは」

ベウォルクトが少し驚いた声でつぶやく。

「やりすぎちゃったかも。これ加減が難しいのね」

海上にいる未確認飛行物体が私たちがいる港に辿りつくよう、突風を起こして誘導してみたけれど、風力が強かったみたいで空中で何度かきりもみ回転して、最後はふらつきながら港に降りたった。

：なんとなくて出来ちゃっていいものなのかしら、こういう事って。

「お城と私が繋がっているからできたみたいだけど、これって法術の一種なのかしら？」

「今のは純粹に海面温度と上空の温度を変動させただけです。これは空気中の分子を操作しただけですから、法術が成立するよりもっと前の時代の原始的な技術ですよ」

レーヘンが空を見上げながら言う。

うん、戻ってから細かい説明をお願いするわ。

「まずはお客さんのお相手が先ね」

そう言って、私は港に降り立った存在を見た。

「ベウォルクト、この世には羽毛の生えた竜がいるのね！」

「ファムさま、あれはグリフォンという青嶺国特産の生き物ですよ」  
やってきたのはゲオルギと同じくらいの大きさで、やや細身のグリフォンという生き物だった。

頭の中から上半身と羽根の付け根まで薄青い羽毛で覆われていて、

下半身はそれよりもやや濃い青で、どうも普通の動物と同じような毛みたい。尻尾は細く長くて、先っぽにふさふさの毛がはえている。前足の爪はかなり鋭くって、後ろ足はシシと似た形をしている。

大きくて曲がったくちばしに、鋭い目付きは猛禽類に良く似ていて、そして眉間のやや上の額には宝石のように輝く拳ほどの大きさの石が埋まっていた。

「へえー。あれがグリフォンなのね」

輝くような艶のある毛並みに包まれたすっきりとした立ち姿は、青嶺国の絵本で見たことのある姿よりずっと優雅に見えるわ。

厚ぼったい灰色の雲に覆われた空に同じく灰色の海を背にして、港の暗い色した石畳の上に立つグリフォンは、その青く輝く姿と背景の暗さとが似合わなさ過ぎて存在が浮いて見える。

グリフォンは降り立った場所から動かず、鋭い目付きでじっとこちらを見ている。口に何かを咥えているわね

「ねえ、あれって…人かしら？」

「そのようです。先程から動きませんが」

「げっ」

声をした方を振り返ると、カラノス達が待合室の建物の扉を半分ほどあけて顔を出していた。何故かカラノスが引きつった顔をしている。

『黒堤組か、こんなところで何をしている』

不思議な響きの声が出た。

「え、今、あのグリフォンが喋ったの？」

『失礼する。ここはくろやみ国だろうか』

今度は私の方に声をかけてきた。じっとこちらを見つめながら、口元を動かさずに。どこから喋っているのかしら？

「え、ええ、そうよ」

『我は青嶺国の精霊、アクシャム様からの使いで来た。くろやみ国

の代表者との面会を希望する」

「代表者は私よ。ところでその啞えている人、大丈夫なの？」

『ああ』

グリフォンは今気がついたとばかりに嘴をひらき、ぐったりしたままの人を地面へ落とす。前足でつつくが、反応はない。

『すまないが、こいつの世話をお願いしたい』

「ええ。面会はこの人が目覚めてからの方がいいかしら」

私は精霊を連れてゆつくりとグリフォン達に近づきながら尋ねた。

『こいつはただの付き添いだ。使者は我だ』

「わかったわ。使者さん、お名前はなんというのかしら」

そばまで来て見上げると、澄んだ緑色の瞳がじっと見下ろしてきた。

『我の名はソルだ』

「ソルね。ようこそくろやみ国へ。私はこの国の女王のファム。私の後ろにいるのがこの国の精霊のベウォルクトとレーヘンよ。ええ」と付き添いの人、大丈夫？」

声をかけながら観察すると、青と紺色のきつちりとした服をまとった青年だった。まっすぐな青い髪を後ろでひとまとめにして、腰には剣が差してある。

「うっ…」

返事のようなうめき声のようなものが聞こえてきたけれど、暗い表情で目を閉じたまま動かない。

「…治療室に連れていったほうが良さそうね」

『ちなみにこいつの名はジェスルだ』

「青嶺国の精霊の“証紋”を確認しました」

いつの間にかソルの額の石に手をかざしていたレーヘンが言った。つまり、正式な国からの使者ということね。

「ベウオルクト、王の間の修理はもう完了しているのよね」  
「ええ」

この人を治療室に運ばなくちゃいけないし、使者との話もある。  
「あなた達も、お城に来る？ 取引の品物の受け渡しもあるし」  
もう全部まとめて相手をしようと思つて、そう黒堤組に声をかけた。

前回彼らが来た時はお城の機能が落ちていたから用心のため海賊達を案内しなかったけれど、もう取引の契約をしたし、今回は万一おかしな動きをしても対処できるわ。

「おおよ。面白そうだしな。ついでにそいつも運んでやらあ」  
箱を担いで意気揚々とカラノス達が待合室から出てきた。

「それ、どうかしたの？ さっきまで怪我してなかったじゃない」  
現れたカラノスは何故か黒い眼帯をつけて右目を隠していた。

「カツコイイだろ？」  
指摘するとにやりと笑う。

「物騒な感じが倍増するわね」  
事情がありそうだし、あんまり踏み込みたくない相手だからそれ以上は追求しないことにした。

「組頭、本当に大丈夫か？」  
黒堤組の精霊のコトヒトが心配そうな顔をしている。

「別にお城に罾なんてしかけてないわよ」  
「いや、城の事というか…」

珍しく言葉を濁し、コトヒトはちらりとソル達を見る。他の黒堤組の仲間の何人かも同じような顔つきをしている。  
何かあるのかしら

「あつちは俺個人の事情だ。オマエ達は気にするな」  
そう言つとカラノスは安心させるように笑い、傍らのシシの背中を撫でた。



港から歩いて数分の駅からグリフォン一名と付き添いの青年、カラノス含めた黒堤組の人たちを列車に乗せて、一気に城の中へ移動する。

ソルは何も言わず案内されるままで、海賊たちも特に驚く様子になかった。なんでも、彼らの母船にも同じような移動手段があるらしいので、見慣れているんだそうよ。

「あとであなた達のオジ貴さんが眠っている場所にも案内するわ」  
「そいつはありがたい」

まったく、慌ただしい誕生日になっちゃったわね。

## 青と翼と 2 (後書き)

毎話あとがきは活動報告に書いてます。

女王からの来客の知らせを受けて、ライナとシメオンは王の間に散らかった資料の片付けを行っていた。掃除などは女王の指示を受けたいらしい小型機械が現れて自動的に رفتてくれている。

「シメオン、今度は暴れちゃだめだよ」

ライナがまとめたメモの束の上に重しがわりのデータボードを乗せながら言う。

「わかってるよ。今回は大丈夫。ライナの傍から離れないようにするから。さあ、もうお客さんが来るから別室に移動しよう」

記憶ブロックを机の上に並べ終えると、シメオンはライナの手をとり急かした。

「うん。でも、ちょっとグリフォンは見てみたいな…あれ？」

ふと王座の傍らにおいてある銀色の卵を見て、ライナは顔色を変えた。

列車を城内の途中駅でいったん停めて、ジェスルさんを治療室に運びこむ。彼の治療のためにベウオルクトが残り、残り全員で王の間へ向かう。

控え室にあたる部屋まで来るとレーヘンに後を頼んで、先に私だけ王の間に入ると、ライナとシメオンが片付けてくれた机を、上に乗っている物も全部まとめて床下に収納した。

「あとは家具が必要かしら」

王の間に指示を出してお客さん用の椅子とテーブルを窓際に配置する。ついでに照明も落ち着いた色に変えてみた。

そして呼吸を落ち着けると髪を整え、着ている黒いワンピースの襟元と裾を整えて王座に座る。

「ファムさま、これを」

来客用のティーセットを運んできたハーシェが、黒い布を首にかけてくる。

「謁見用のものです。略式ですが」

「ありがとうございます」

広げてみると細かい刺繍の入った細身のストールだった。

「レーヘン、いいわよ」

ハーシェが別室に移動して、合図をするとまず青嶺国からの使者がレーヘンに案内されながら王の間に入ってくる。

レーヘンが王座の傍に待機すると、私は王座からある程度距離をおいて静かに佇むグリフォンを見た。

『改めまして。くろやみ国の女王よ、我はソル。青嶺国の精霊の使いで参った。どうかお見知りおきを』

そう言うとソルは頭をゆっくりと下げた。動きに合わせて首の毛並みがつやりと光る。

「ようこそ青嶺国の使者ソル、アナタが来るのは精霊達から聞いています。資料を受け取りに来たのでしょうか」

『そうです』

「渡す形式は記憶ブロックと紙とを用意してあります。アナタが運ぶにはどちらの形式がいいかしら？」

『記憶ブロックで』

王座の脇に置いてある箱からレーヘンが光沢のある黒い記憶ブロックを一つ取り出し、ソルの額の石の前にかざす。ソルは目を閉じた。

『くろやみ国の精霊の証紋を確認した』

「この中に会場の情報が入っています。各国に仕える特級精霊の証紋で見ることが出来るようになりますから、皆さんにそう伝えてください」

『了解した』

ベルトの付いた鞆に記憶ブロックを入れると、レーヘンはそれをソルの首にかけ、金具で固定した。

これで使者の用事は済んだわね。付き添いの人、大丈夫かしら？

目覚めると箱の中だった。

薄暗い、身動きできない狭さ。低い振動音も聞こえ、ジェスルの意識は状況を確認するために急速に覚醒した。

まるで棺桶に入れられているかのようだ、思った瞬間手足に“加速”と“強化”の法術をまとい目の前に迫る天井板を叩き、蹴る。

何度か繰り返すと箱は壊れ、空気の抜ける音と共に蓋が外れた。

這いずり出てみると箱の外は闇だった。照明が全て落ち、何かの光が周囲でまたたき、箱が開いたことを知らせているらしい甲高い音が響きわたっている。

「なんだここは」

攫われるようにして青嶺国から海上へ飛び出した後の記憶は無かった。国獣であるグリフォンに乱暴するわけにもいかず、されるがままだった。

「元気がよろしいようですね」

声に振り向くと、一気に周囲が明るくなった。

「うわっ、なんだ一体」

眩しさに思わず目を閉じる。

「ようこそ、くろやみ国へ。ワタクシはこの国の精霊ベウォルクトです」

すぐ傍で聞こえる声にジェスルは身構えるが、まだ目が慣れずまぶたを開くことが出来ない。

「せいれい…なのか？」

こじ開けるように無理やり目を開くと、顔を布で包んだ人の形をした精霊が立っていた。

「次は黒堤組ね。レーヘン、お願い」  
「はい」

レーヘンに誘導されながら誘導してソルと入れ替わるようにして

黒堤組が王の間に入ってくる。

「天井、高っ！」

「見事なもんだな、こりゃ」

カラノス達が王の間を見渡しながらちよつと驚いている。さすがにこういった部屋は海賊たちの船にもないみたいね。

「おい、さっきの話忘れんなよ」

『ああ。我はあくまでアクシャム様の使いだ。お前のことは気にしない』

すれ違う瞬間、カラノスとソルが小声でそんな会話をしているのが王座に座る私の耳に聞こえてきた。どうも、王の間経由で声を拾ってるみたい。

便利ね。今はあんまり有効活用できてないけど。

「ファムさま、付き添い人が起きたそうです」

レーヘンが小声で伝えてくる。

「わかったわ。こちらに案内してちょうだい」

正面を向いたままそう返事をする、レーヘンは珍しく返事を濁す。

「それがその、すでにこちらに向かっているのですが少々……」  
どうしたのかしら？

「アンタこの国のお偉いさんか？ 聞きたいことがある」

案内されてきたはずのジェスルさんは、ベウォルクトを盾にしていた。

「ちゃんと答えてくれないとこいつの首が飛ぶぜ」

剣をぬき、ベウォルクトの首に当てる。

なんてこと！

「やめなさい！」

あまりの出来事に思わず叫び声が出た。

「お客さんに手荒な真似しちゃ駄目！ ベウォルクト！」

「なっ、げっ！」

ジェスルに首に剣をあてられ直立しているベウォルクトの背後には銀色の太い金属製のワイヤーの束のようなものがうごめいている。今にも驚いている青嶺国の青年に襲いかかろうとしていた。

銀のワイヤーはたどっていくと精霊の左の袖口から出ている。

「正当防衛が成り立つ場面ですのに」

いつの間にか私をかばうようにして前に立っていたレーヘンが表情を変えず、目だけ細めてこちらを見る。こちら右腕が刃物のように変化していて、すぐにでも斬りかけられるように身構えている。

「せっかく実験体に使える口実ができましたのに」

ベウォルクト、そこは残念そうな声を出さないでほしいわ。



「どうしよう、これ…」

ライナは途方にくれながら抱えている銀の卵を見つめる。

卵はいまだに内側から音がしており、小さなひびも生まれている。今にも孵化しそうだった。

王の間の片付けを終え別室で待機しようとした際に卵の異変に気づいたライナは、慌てて卵を抱え王の間を出てきてしまった。前回の影霊が王の間で大暴れしたように、もしも女王が謁見中に孵化したこの影霊が暴れでもしたら大変なことになる。

「大丈夫かな…いきなり爆発とかしないよね」

「修理した王の間の機能を確認するための影霊ってベオルクトさんが言ってたから、危ない生き物じゃないと思うけど…」

不安そうなライナを元気づけるようにシメオンが言った瞬間、卵の内側からの音が大きくなり、ひびが崩れて穴が空いた。

覗き込もうとしたライナの目の前で穴から何かが飛び出した。

「わっ」

穴から飛び出した銀色の何かは捜し物をするかのように部屋の中を飛び回り、扉にぶつかるか一瞬ずり落ちるが、姿勢を正してパイと鳴くと、再び扉に体当たりをして、閉まったままの扉に穴をあけ外へ飛び出した。

「すごい速さ！ 危なくないの？ あれ…」

驚いた顔つきのままライナが振り返りシメオンを見る。

「さあ…」

シメオンは不安そうな顔になった。

「きっと創造主の元へ向かうつもりなんだ」

「創造主、じゃあファムさまの元ね。とにかく追いかけよう」

「ライナ待つて！」

二人は銀色を追いかけて走りだした。

精霊を使つての脅迫に失敗して、ベウオルクトとレーヘンの様子に驚いた顔を見せつつもジェスル青年はまだ余裕があった。

「うちの家訓にはこうある。“精霊とやりあうには五手先読んでも足りない。アイツらはその斜め裏側から鼻歌を歌いながらやってくる。ならどうするか”」

そう言いながらジェスル青年は左手を右手の剣にかざす。剣の刃はぼんやりと青く輝いた。何だか良くない気配がするわ。

「とにかく死に物狂いで先手必勝”つてな！」

そう言つて床を蹴り、ベウオルクトに斬りかかった。

ベウオルクトは身体から出ている銀色のワイヤーで剣を受け止める。けれどすぐに一步引いて身構えた。見るとワイヤーの何本かが切られて落ちている。

「！」

レーヘンがそれを見た途端わずかに眉間に皺をよせ、私を抱えて飛び退った。

「もういつちよ！」

ジェスル青年はさらに斬りかかろうとする。

「ちよつと！」

さっきから何してるのよ！！ この男！

私が静止の声をあげる寸前に、金属と金属がぶつかる音が聞こえた。

レーヘンの肩越しに見ると、王の間の中程にいたはずのカラノスがいっつの間にか割って入り、ジェスル青年の剣戟を自分の剣で受け止めていた。

「ひと家で暴れるなんざ行儀の悪い坊ちゃんだな」

間近でカラノスと睨み合ったジェスル青年は酷く驚いた顔つきになる。

「あ、兄貴！？」

「お前みたいな舎弟は知らんな。悪いが別人だ。まあ他人の空似って奴だな」

カラノスはそう言った。こちらに背を向けているけれど、きっとあの不敵な笑みを浮かべているに違いないわ。

「危ない！」

突然、開いたままの扉の向こうから叫び声が聞こえてきた。

そして扉から勢い良く入ってきた銀色の何かと、ジェスル青年の後頭部とが激しい音をたててぶつかる。

銀色の何かはぼとりと床に落ち、ジェスル青年は倒れて動かなくなつた。

「……ええーつと」

どうしよう

「とりあえず、生きてるみたいだから…レーヘン、様子を見てちょうだい」

「わかりました」

「ファムさま！ブルムが…ひつ、知らない人！」

「…ジェスル王子？」

ブルムを追いかけていたらしい、ライナと、ライナを背負ったシメオンが王の間へやってきて、扉の傍で倒れているジェスル青年に氣付いて驚いている。

「…王子？」

どういう事かしら？ この人付き添いなんじゃないの？

「シメオン、ライナ、隣の控えの間にグリフォンのソルがいるから、ちよつと呼んできてちょうだい」

二人が出てから今度は城外の警備についてもらっているサヴァに連絡をする。

「サヴァ、聞こえる？ あなた青嶺国のジェスル王子って知ってる？ …そう、そうなの。直接の面識はないのね。わかったわ。こっちの謁見はもう少し長引きそうだから、引き続き警備をお願い」  
それから城内で待機しているハーシェにも連絡と確認をとって、ベウオルクトとカラノスの元へ向かう。

「ありがとうカラノス。止めてくれて」

「なあに、恩を売ろうかと思ってな。んで、そいつは一体なんだ？」  
床に転がる銀色の塊に視線をやりながらカラノスが尋ねる。

「うちの新しい仲間よ」

「ようやく孵ったようですね」

いつもと変わらない調子に戻ったベウオルクトがそれを拾いあげる。

『こんにちは、こんにちはファムさま！ ブルムやつと卵から出られましたの！』

胴体をベウオルクトに掴まれたまま、ブルムが尻尾と羽根をめいっばい振りながら挨拶する。

「こ、こんにちは、ブルム。無事に生まれてくれたようだなによりだわ」

まだちっちゃいけど、ゲオルギより目元が鋭い。…遅しく育ってくれそうね。

「そういえばベウオルクト、アナタ切られてたけれど大丈夫なの？」  
ベウオルクトの左手をつかむと、灰色の手袋に覆われたいつも通りの姿だった。人間と同じ形で、指も五本揃っている。切られた銀色のワイヤーもいつの間にか床から消えていた。

「問題ありません。少々驚きはしましたが」

確かに、あの暴れるローデヴェイクを取り押さえたものが、こうも簡単に切られちゃうなんて驚きだわ。

「：お前ら、もしかして精霊術に詳しくねえの？」

振り向くと、腰に剣を戻しながらカラノスがなんだか呆れたような顔をしている。

「こいつが使ったのは“抗<sup>こうせいれい</sup>精霊”術。精霊と事を構える時に使う精霊術の一種だ」

：…そういったものがあるのね。

見ると、ベウオルクトも首を傾げている。

「ベウオルクトはずっと引籠もってましたから、外の様子に詳しくなくても仕方ありません。精霊術はここ最近の数百年の間に大陸の人間達が作ったものなんです。特に、抗う精霊術はここ数十年のものですね」

元同郷の精霊コトヒトが説明してくれた。

「あるらしいとは聞いていましたが初めて見ました。あれが抗精霊術ですか。けっこう地味なんですね」

五百年人間の街をさまよっていたレーヘンが言う。

「俺も間近で見るのは久々だな。使える奴はそう多く無い。精霊術がかなり使えないと抗精霊術を習得できないらしいからな」

左右に揺れながらカラノスが言う。見ると、護衛のシシが駆け寄ってきて彼に頭突きをしていた。

「すまんかったって。あれくらいで心配するな、シシ」

『何をやっているんだ。まったく』

王の間に戻ってきて私の説明をきいたソルは、マットの上で頭に黒い包帯をまいて眠るジェスル青年を呆れたように睨んだ。驚のような顔でも表情って出るのね。

「この人、なんでこんなことをしたの？」

尋ねると、ジェスル青年の顔を覗き込んでいたソルは一つため息を吐いてから顔をあげた。

『こいつはアクシャム様の秘蔵っ子の一人だな』

あちこち出かける事の多い王子に対し、青嶺国の精霊アクシャムは世界中の精霊に依頼した。

「青嶺国の王子に会ったらよろしく頼む」と、

心配したつもりでの依頼だったのに、言葉だけが一人歩きして精霊達に伝わったらしい。そのおかげで森で巨獣型の精霊と会えば目があつた瞬間突進され、谷で霧状の精霊に出逢えば霧を濃くされ遭難し、海に行けば海の精霊達が総出で襲い、海中に引きずり込もうとする。

聞いていて思わず顔がひきつつちゃったわ。

「それは…よく今まで生きてこれたわね。そんな目にはかり遭つてると精霊を見たら速攻で攻撃したくなる気持ちもわかるわ」

「みなさん冗談半分で遊んであげてるだけなんですよ」

レーヘンがさらりと言う。

「アナタ達にとってはそうでしょうけどね…精霊の冗談って人間には冗談じゃ済まない事もあるのよ？」

私も子供の頃に両親が精霊に子守りを依頼して、結果とんでもない目に遭ったことがある。

「くそっ、だからどこ行っても俺にだけ精霊が絡んでくるのか」

声がして、見ると頭を抑えながらジェスル青年が身を起こしていた。

「頭打ってるからまだ動かないほうがいいわよ。でもあなた王子様なんでしょ？ 身分が高いんだし、国が精霊達から守ってくれたりしないのかしら？」

「そりゃあないな」

ジェスル青年が何か答える前にカラノスが言う。

「青峰の王子つてのは大陸一キツイ身分で有名だ。何しろ王子を甘やかせば処罰対象にすると国法で決められているくらいだから」

「我が国の王族は何事も自力で対処しろというのが教育方針だからな」

ソルも当然のように言う。

「なんだか…大変な人生を送ってるのね」

王子様って大変なのね。

「とりあえず、拘束」

「うわっ」

ジェスル青年が無事に目を覚ましたので、私は王の間の床材から漆黒のベルトのようなものを創りだして手足を拘束して身動きを封じる。

ちなみに、剣は没収済み。

「何だこれは！」

「そうやってちょっと頭を冷やしてちょうだい。いきなり他所の国で暴れるなんて、そんなのじゃ命がいくつあっても足りないわよ？」  
そう言ってから青い髪 of 青年を睨む。

「精霊に言われたくないな」

そう言って相手もまっすぐ睨み返してくる。

…精霊？

私は王座に座ったまま肩から腰まで流れる自分の髪を見下ろした。ブルムを創ったのは結構前だったからけっこう銀灰色に染まっている。

「これでも人間なのよ、私」

青年の眉間の皺がさらに深まる。納得してない顔つきね。

『自業自得だな』

座り込んでいるジェスル青年を見下ろしながらソルは口を開いた。  
「ソル！ お前、何してたんだよ！」



『無論仕事だ。貴様が寝ている間に終わったがな。まあ、貴様のおかげで台無しになりそうではあるが。まったく勝手なことをしてくれる』

「それは…すまん」

ジェスル青年はグリフォンに対して申し訳なさそうに顔を下げた。「使者ソル、この状況、どう対処しますか？」

ベウオルクトがグリフォンに尋ねと、ソルは尋ねたベウオルクトではなく私の方を向いて答えた。

『我は今回精霊の使いとしてやってきた。青嶺国では精霊は人間に對し権限と責任を持たず、人間も精霊に對し権限と責任を持たない。精霊側の立場からするとこいつの責任を取る必要はない。この責任能力のないバカはそちらでどう処理しても構わん。それがこやつの運命なら仕方あるまい』

堂々と言い切ったわね。

「見捨てるってか。ソル」

ジェスル青年は青いグリフォンを見上げながら皮肉じみた笑いを浮かべる。

『お前はお前で対処し、道を切り開け。我は我の使命があるんでな。では』

ジェスル青年は何も言わず、ソルは翼を軽く広げて礼をすると尻尾をゆったりと揺らしながら青年を置いて出口へ歩いて行く。

一瞬、このままソルを帰していいのか迷った。けれどこの場は相手の言う事を受け入れておいた方がいい気がした。

「…サヴァ、ゲオルギと一緒に海の途中まで青嶺国の使者を見送ってちょうだい」

「あなたが王子だろうとなんだらうと、この国で暴れた責任はとってもらわよ」

「おおよ。なんだったて受けてやる」

…なんだか積極的ね。ひとまずジェスル王子は禁固部屋に入れることにした。といっても、内側から開けられない単なる個室なんだけど。

鍵は私が精霊達の許可がないと開けられない仕組みになっている。これまでに国外からのお客が騒動を起こした場合どうするか決めてなかった上に、相手は正式な青嶺国の使者の付き添い。どう対処すべきなのか考える時間が欲しかった。

帰国したソルは何かしらの報告を青嶺国にするだろうし、万一王子のことで私たちの方に問題があるように判断されたら、まずいことになる。けれど…

あの王子には必死さが無かった。

どこか余裕みたいなものがあつたし、抗精霊術というものも、驚いたけれどあの時はそう威力のあるものじゃ無かった。

「なんだか試されてる気がするのよねえ…」

それならそれで、おもいつきり腹がたつけど。

あまり手荒なことはしたくない。けれど今は彼の事情を知りたい。

「あー、情けねえ、俺」

そう言つてジェスル青年は濃い青色の瞳で天井を見上げる。

治療を受けて連行されたのは一人用の寝台と机と椅子が1セットだけがある小部屋だった。窓は無いが壁のパネルが十分な明かりを保ち、不便はなかった。壁は継ぎ目がなく、さらには法術の影響を

受けないものだった。これだと剣を没収されたジェスルには破壊しようがない。

「技術力が世界一だというのは本当なんだな」

壁をひと通り検分すると寝台に座り、慣れない手ざわりの毛布の上に寝転がる。

いきなり付き添い扱いでこの国にやってきたジェスルがとっさに思いついたのはこの方法しか無かった。上級クラスの精霊に取り囲まれて軽く感情が先走ったのもあるが

「こりやお袋にどやされるな…あいつにも」

どちらも怒らせると大変恐ろしい相手だ。しかしチャンスは掴めるときになりふり構わず手を伸ばすのがジェスルの信条でもある。

自分としては、まずまずの成果といったところだろう。

「失礼します」

扉をノックする音が響き、部屋の中に一人の少年が入ってきた。

寝台から起き上がり、少年の顔を見てジェスルは思わず声を上げた。

「お前っ、シメオンか？」

かつて緑閑国で秘密組織が騒動を起こした際、大空騎士団の分隊長として鎮圧に出向いた時に会った少年だった。

「お久しぶりです。ジェスル王子」

少年はかつての時の悲壮な表情ではなく、穏やかな顔つきをしていた。肩にはいままで見たことのない種類の、鋭い顔つきをした銀色の子竜が止まっている。

「一応顔見知りなので僕が尋問役として来ました」

そう言うときメオンは手に持っていた箱を机に置き、中から筒状の物と金属製のカップを二つ取り出す。それから筒の蓋を外して中の液体を注ぎだす。一瞬自白用の薬品かと思ったが、シメオンは二つともに注いだ。

一つを自分で持ち、もう一つを差し出してくる。

「薬物を心配するなら確認しても構いません。この部屋、壁材は法術を弾きますが中に対しては使えますから。精霊術は靈素が薄すぎて使えませんけど」

そう言って立ったまま自分のカップを口に運ぶ。

ジェスルはカップを受け取り念の為に“分析”で調べてみるが、中はただの香草茶のようだった。一口飲んでみると、知っている味だった。

「お前、この国にたどり着いたんだな。あいつに渡された人工精霊は？」

「位置情報を伝えるだけのものだったからこの国に来てすぐに稼働させましたよ。あとは何もしてませんけど」

「そうか」

思えば、あの男の行動が活発になったのは、この少年が去ってしばらく経ってからだった気がする。

「お前が暴れた理由ってのには会えたのか」

「ええ」

そう言ってシメオンは穏やかに微笑む。

歳相応ではないが、自ら滅びに向かっていた以前よりは子供らしさが出た顔にジェスルは僅かばかり安堵を覚えた。

「そうか、よかったな」

「あの時はありがとうございます。お二人のおかげで僕はこうしてここで生きることが出来ています」

そう言つとシメオンは一度目を閉じ、再びひらくとそこにはかつての昏い鋭さが宿っていた。

「ところで、ジェスルさんはなぜこの国に来たんですか？」

恩はあれど、いざとなれば容赦するつもりはないようだ。きっと少年が大切にしているものがこの国にはあるのだろう。

「あー、本当は来るつもりなんてなかったんだが、使者：ソルが出掛ける直前に俺も一緒に行けって言われてな」

そう言ってジェスルは肩をすくめてみせた。

シメオンは無言でジェスルを見つめる。

「それで？ 何故精霊を盾に取るなんて事を？」

「俺はこの国を知りたい」

青い瞳はシメオンの肩にとまる銀色の子竜を見た。

「名前以外ほとんど知られてないのにあちこちからかなりの注目を浴びているこの国が、どんな場所で、どんな奴らがいるのか。うちの実家に仇なすのか、そうでないのか。知るのにいい機会だと思っただから俺は俺で行動することにしたのさ。馬鹿な真似かもしれないが、こうでもしないと俺はソルの付き添いとしてあのまま帰らねばならなかった」

伸びをして、ジェスルは身を乗り出す。

「それに、ひとつ探してみたいものもある。この国で黒髪の女を見かけなかったか？」

## 機会と噂と信じるころ 1（後書き）

シメオンとジェスルの会話の内容は、番外編「ある少年の物語」にあたります。

## 機会と噂と信じるころ 2

ジェスル青年についてはブルムを連れたシメオンが尋問に向かってもらい、その間に目の前の事を片付けることにした。

「お待たせしたわね。黒堤組のみなさん」

預っている先代マヴロを安置した霊廟から戻ってきた黒堤組をハーシェが王の間に案内してくる。

ハーシェは今度の会合に着ていく灰色のヴェールをまとっている。あの衣裳が気に入ったらしい。一応は私と同じ顔なのをカラノス達に詮索されないようにする意味もあるもので着てもらっているのだけど「待ちはしたが、まあ俺達にも得るものはあった。コトヒトも懐かしがっていたしな。珍しい光景だったぜ」

「そういうのは見ないふりをするものです」

カラノスの言葉に、コトヒトがすまし顔でシシの背を撫でつつ返事をする。

「あのグリフォンと坊ちゃんはどうした」

「別室で対応中よ。さあ、取引と行きましょう」

合図をすると、王座脇の扉から黒堤組へ渡す品を詰め込んだ箱をレーヘンが運んできた。

私たちの方で予め用意していた取引用リストの中から海賊たちが選んだ今回の品は、ジェットエンジン用の燃料の効率的な製造方法と、それ用の製造設備。かなり大きな荷物になる。

「テリダイ、確認しろ」

「はい」

カラノスに同行してきた海賊の一人、黒い細身の上着を来た男性が箱の中の物を調べ、いくつか質問をする。ベウオルクトがそれについて図面や実際の設備を指さしながら解説を始めたので、確認作業が終わるまでしばらく時間がかかりそうだった。

「ところであんたら、今度ある海上会合に出席するんだってな」

ベウオルクトとテリダイの会話が終わるのを待っていると、カラノスが話しかけてきた。

「ええ」

いつの間に知ったのやら。海賊の情報網ってどこまで広がっているのかしら。

「国同士の会見としちゃ非公式だが、かなり大物が集まるらしいな」

「そうみたいね」

「女王さんよ、俺たちをその会合へ向かう道中の護衛として雇ってみないか？」

「護衛？」

思わずカラノスの顔を見つめると、相手は黒い瞳を細めて不敵な笑みを浮かべている。

「…狙いは何？ 正直に伝えてくれたら、考えるわ」

そう言つと、カラノスは両手を広げながら答える。

「何も会合に参加させるって訳じゃない。ただ、俺たちにとつちやああいっただ大陸のお偉いさんと近づく機会はめったにないからな。得意先を増やすキツカケが欲しいだけだ」

「組頭は黒堤組の“マヴロ”になってまだ間もないですから、あちこちに顔を知らせる必要があるんですよ」

カラノスの後ろに控えるコトヒトが補足した。

「あんた達の不利になるような真似はしない。約束する」

「本当に？」



「ああ。なんだったら誓約書も書くぜ」

確かに、海にいる海賊が各国の要人に近づく機会なんてめったになさそうよね

「もしかして、さっきの恩を売ったって……」

「まあ、この流れを狙ってはいたな。で、どうするよ?」

軽い言葉の調子は変わらないけれど、カラノスの顔つきは真剣で真っ直ぐにこちらを見つめてくる。

「それに、俺たちがいるとお得だぜ。あんたら法術と精霊術に詳しくねえだろ。必要だと思うぜ、そっち方面の対策」

うっ

確かに、ここには様々な過去のシステムが眠っている王城があるけれど、海の上ではそうもいかない。

私はおろか精霊達も人間の術に詳しくないし、サヴァは一応知識があるけれど、一人だけだと防御だけで手一杯になるかもしれない。旅に出ているマルハレータ達は今回の件に間に合いそうにないし、この国でその方面に一番詳しいシメオンは留守番組としてライナと共に国を守ってもらう必要がある。

さっきのジェスル王子の事もあるし、最新の法術と精霊術について弱いのはまずそうね

「会合で各国の王達と渡り合うつもりなら用心に越したことはないだろう。特にそのあたりに関して注意した方が良い相手がいる。白箔国の王、ヴィルヘルムスだ」

一瞬、息が止まった。

聞こえた名前を頭の中で繰り返して、ようやく理解が追いつく。

「……ヴィルヘルムス、王?」

「そうだ。知っているか?」

「……名前と、顔だけなら。どんな王様かは知らないわ」

カラノスは面白そうな顔をする。

「そうかい。顔と名前、な。まあ、久々の白箔王の交代だからあちこちで話題になったからな」

「それで、その白箔国の王がどうしたのかしら」

カラノスは腕組みして王座に座る私を見上げてくる。

「ヴィルヘルムス王は数カ月前に即位したばかりだが、かなりやり手の王だ。それにあの男は王としての他に法術の使い手としても有名だ。性格も、冷徹で容赦がない」

「なんだかよく知っているわね。」

「会ったことあるの？」

「何度かな。あの王は国外の情報収集に力を入れているんでな、良い取引先だ。実を言うとずっと失われていたこの島の座標を手できたのも白箔国の所からだ」

「そう、手広くやっているのね」

あなた達も、白箔王も

「最近は会ってないが。なんでも、女に会うので忙しいらしいぜ」  
「…そう」

「どこぞの深窓のご令嬢に夢中らしい。貴族の娘か、はたまた他国の姫君かって噂だ」

「そうなの…」

あの人、素敵な女性に出会えたのね。

「ファムさま？」

レーヘンが声をかけてくる。

表情が、うまく感情が隠せているか、自信がないわ。周りのみんなと目を合わせられない。

「どうした？ 顔色が悪いぜ」

「なんでもないわ。カラノス、会合への護衛の話、受けるわ」

カラノス達に視線を戻すこと無く返事だけを投げかけて、立ち上がる。

「ベウオルクト、黒堤組が同行するのに必要な情報を至急まとめて彼らに伝えてちょうだい」

「かしこまりました。今日は久しぶりに外を歩きましたので少しお休みになられたほうがよろしいようですね」

ベウオルクトがそつと近づくと、小声で囁いてきた。

（「何かありましたらハーシェが代役をします」）

「ええ。そうね、そうさせてもらうわ」

「カラノス、私たちの出発は二十日後だからその頃にまた来てちょうだいね。レーヘン、ベウオルクト、悪いけれど、あとよろしくね」

「お、おお」

「かしこまりました」

「ファムさま！ 部屋まで…」

「いいの。レーヘン、アナタはここにいなさい」

レーヘンが付いて来ようとするのを止める。

「ファムさま」

王の間を出ると、ハーシェとライナが待っていた。

「大丈夫ですか？」

「平気よ、ちよつと疲れちゃっただけ。ライナ、気分がすっきりするハーブティーをお願いできる？」

「はい！ すぐに持ってきます」

ライナがかけ出して見えなくなると、こらえきれず涙が一筋流れ落ちた。ハーシェがそつと肩を撫でてくれる。

せめて、部屋に戻ってから。あとっ少しだけ我慢しなさい、ファム

「なんだ。なんか言いたいなら言えよ」

女王が去った後、無言でこの国の精霊の片割れは海賊の代表を睨んだ。

「今の話は、本当ですか」

「ああ、若い王の色恋の話だからな、あちこちの話の種だ。憶測や噂も多いが、女の夢中でどこぞに結界で囲った家に住まわせているだの、王宮を抜けだして会いにいってるだの言われているぜ」

「そうですか」

カラノスは精霊の顔を見たが、相手は変わらず冷たい表情のまま、銀髪で陰った瞳は遠く窓の外、空の雲の流れをみつめていた。

「うちの王子がしたことは国として関わりがありません。何しでか  
そつと国は責任を負いません。煮るなり焼くなり好きにしてください。  
い。」

ややこしい言い回しを簡単にすると、こう書いてあった。

「本当に、容赦無い扱い方されてるのね」

黒堤組から手に入れた資料の中に青嶺国の国外向け法律があつたので、さつそく王子の対処について何か情報が載っていないか調べてみたら、ソルの言ったようなことと同じような内容が書いてあった。

青いグリフォンは精霊は責任を負わないと行っていたけれど、国家としても、王子、つまり王位継承者の言動に責任を負わないと書いてある。

要するに、王の間で暴れた青嶺国の王子をどう扱うのか、全部私が決めなくてはならないわけね。

ひととおりシメオンが尋問したところ、ジェスルは自分の非を認めて、もう暴れないと約束してくれた。

こちらとしても斬られたベウオルクトがまるで気にしていない上に拘束する際に多少乱暴に扱ったので、特に罰則を与えることはせず、ひとまず相互理解のために話し合いの場を設けることにした。

なるべく和やかに会話したいので、場所は黒一色の王の間ではな

くて、明るく緑あふれる植物園の、果樹園と私の花畑の間にある、いつもみんなで朝御飯を食べているテーブル。

どうも人間離れた銀髪の私を警戒しているようなので、お茶とお菓子を用意した上に、精霊達はテーブルからやや離れて、さらにシメオンやライナも同席して会話に参加してもらう。

「本当に面白いなここ！ 建物の中に庭なんて初めて見たぞ。太陽無いのになんで明るいんだ？ この土は本物か？ このテーブルの素材は何だ？」

ジェスルがひとつひとつに驚くので、この国の技術が本当に今の大陸に存在しないものだ実感した。

好奇心旺盛なようで、なんでも質問してくるので、それに一応私の分かる範囲で答えていると、けっこう打ち解けることができて最初のような殺伐とした感じはなくなっていた。

ライナの姿に関しては、

「羽根のある奴っているんだな。綺麗な翼だな。これだけ真っ白だと手入れ大変だろ」

嫌悪せず、むしろ感心していた。性格は悪くない人のようね。

「ソルなんて暇さえあれば翼の手入ればかりしていつつも気にしてるんだぜ。青いから汚れなんて目立たないのによ」

対人恐怖気味のライナもこれにはちょっと驚いて、時間が経つと気軽に話しかけてくるジェスルに対して時折笑みを浮かべて返事をするようになった。

「俺たち王位継承権のある奴らは15歳までみっちり教育されて、あとは仕送りも後ろ盾も無しで世間に放り出される。俺達に根回しや贖<sup>ひいき</sup>なんかすると逆にした奴が罰せられるんで、誰も近寄ってこない。そんな中で人脈も自分で一から創りあげなきゃならんから、下手すると一般人より出世しにくいって言われてるな。まあ王位継

承権を放棄すれば王族としての生活費の支給やいろいろな特権も認められるんだが」

「たいしたことでもなさそうに笑いながらジェスルは桃の蒸しパンをかじる。

「うちではそれなりに苦労してタフにならないと王にはなれないのさ。けっこう美味しいな、これ」

「ご機嫌で次の蒸しパンに手を伸ばす。この人、偉そう……いえ、図々しいわ。」

「援助がないなら、あなた普段何をして身を立てているの？」

「俺は大空騎士団に所属している。あそこは完全実力主義だから身分で差別されないんだ。一応青嶺国経由で俺の休暇届は届いてると思うが、定内に戻れないとクビになってるかもな。騎士団長は容赦ない奴だから」

「あっさりとそう言い、また笑う。」

「そうなれば、また次の仕事を探ささ。今はこの国にいる方が面白い」

「びつくりするくらい脳天気だわ、この人。」

「ちなみにこのジェスル王子、私より年下で現在十七歳。青嶺国王の七人兄弟のうち四番目だそうよ。」

「以前青嶺国の精霊が言っていました、青峰の王族は代々楽天的で向こう見ずな冒険気質があるそうです。おかげで過去に国内外で問題を起こして色々と苦労したんだそうです」

「立ったまま私の近くに待機しているレーヘンが教えてくれる。」

「それって、よつつぽどの事をしてきたのね」

「おお、俺のじいちゃんの武勇伝とか、凄いぞ。失われた黄稜国の秘石を求めて手ぶらから旅したとか、グリフォンの子供を守るために赤麗国の一個師団に単身で喧嘩売ったとかな」

そんな王族ばかりでよく国が保てているわね…

ちよつと呆れつつ、甘い香りのする蒸しパンを食べながらジェスルを観察する。

紺に近い深い青色の瞳はよく動く口と共に表情豊かで、笑うたびに後ろで一つにまとめられた小さな尻尾髪が跳ねる。なんというか、元気の良い子猫みたい。ちよつと獰猛なところがあるから、この場合山猫とかそういった感じがしら。

様々な不便さを強いられる王位継承権を捨てずにいるってことは王位に就く気はあるってことよね。懐に入るのが上手そうだし、あんまり油断はできない相手だわ。

観察しながら様子を見てみると、次から次へと身内や自分の冒険譚を披露するジェスルに対して、

「黄稜国ですか」

「グリフォンの子供ってどんな感じなんですか？」

意外にもベウォルクトとライナが彼の話に食いついている。この国、外の刺激が少ないものね…

目を輝かせて青年の話を聞いているライナの隣で、シメオンがどこか不安そうな顔をしている。あんまり良くない傾向だわ

「シメオン、ハーシェとブルムをつけるからジェスルの案内をお願いするわ。ざつとお城の見学でもしてきてちょうだい。問題のない場所はハーシェが知っているから。それが終わったら王の間に連れてきて」

「わかりました」

「ライナ、あなたは留守番組のリーダーとして、いくつか伝えておきたい事があるから一緒に来てちょうだい」

「はい！」

シメオンがほつとしたように、ライナは元気よく返事をする。

「ひとまずこの場はお開きにしましょうか」



そう言つて、お茶を飲み干して席を立とうとしていたら、サヴァが木陰から現れた。

「女王、防衛システムの確認が終了しました」

サヴァが移動するの、気づかなかつたわ…彼もだいぶこの城のシステムに慣れたようね。

「ご苦労様、それで、うまくいきそう？」

「ええ。いくつか改善箇所はありますが。これがまとめたリストです」

そう言われて、差し出されたデータボードを受け取る。

城を含めてこの国には嚴重な防衛機能がある。けれど数千年も前に作られたもので、念の為サヴァに今の人間の視点から国の防衛システムに弱点がないか数日かけて探してもらっていた。

「ありがとう、これだけはなんとしても出発までに間に合わせないとね」

データボードの中身にざっと目を通すと、防衛システムの弱点だけでなく、もしも敵が襲撃してきた場合を幾通りか想定して、それぞれどう対応するのか、そのためには国のどの機能を使い、対策と準備には何が必要かも書かれていた。

元騎士だけあって、どの想定にも短所と長所、安全と危険について冷静にはつきりと書かれている。

「さすがね！」

これに今計画しているものが対応できるよう、精霊達と相談しなくちゃ。

「そうそう、サヴァ、あなたまだジェスル王子と会ってなかったわね。紹介するわ…」

そう言つてテーブルの方に顔を向けると、ジェスルが口を大きく開け、驚愕の表情をしてサヴァを指さしていた。

「お、おまえ！ “ くの騎士 ” か！」



「おまえこの国の奴だったのかよ。よくも闘技場の結界ぶっ壊しやがったな！」

顔を戻し、目の前のサヴァを観察する。そういえば、サヴァはずっと防衛システムの監視をしていたので、城のシステムと繋がっていたために黒い鎧を着ている。

「どういうことかしら？」

「えーと…」

見上げた先の表情の見えない黒い鎧の仮面の向こうから、サヴァの困ったような声が聞こえてきた。

「…すみません」

当分の間、ジェスル王子はれっきとした他国からの客人としてこの国に滞在することになった。客人といっても、本当はざっと見学してもらったら黒堤組にでも頼むか、自分たちで船を仕立てるかしてすぐにでも送り返すつもりだったのに、

「闘技場の結界の補修費用、けっこうしたんだよな。俺が帰って報告すればあんたら責任追求されるかもな。でもこの国面白いから、もうしばらくいたらそんな細かいこと忘れそうだなあ」

と、ジェスルに露骨に脅されて、結局会合の出發までうちに滞在することになった。

即位してから今までで一番お金が無いのが悔しい！ ちょっと真面目に外貨を稼ぐ手段を考えなくちゃ

「もう、せっかく対外用に謎の国ってことにして準備しているのに、あの王子に色々バレちゃってる気がするわ!」

一番秘密にしておきたいことは隠せているけれど、国民の少なさとかは把握されている。

せめてもの救いは彼が今度の会合に参加しないらしいってことくらいね。

「記憶操作でもします?」

レーヘンが微笑んで人差し指を立て、細い銀の針のように変形させる。

「危なそうだから、やめてレーヘン。一応は王子なんだから変な細工をしたのがバレるとそれこそ問題になるわ」

おそらく、この国がジェスル王子をどう扱うかは青嶺国に対する私たち態度とみなされる。彼を殺したり拷問すれば敵意があるとみるし、仲良くすれば友好的。そして王子だからとうやうやしく接すれば青嶺国に恭順の意思があるとみるでしょうね。

青嶺国の属国になる気はないし、敵対するつもりもない。友好関係を築けるかは、青嶺国の首脳陣と会ってみないとわからない。

「青嶺国の法律に合わせつつ特別扱いは無し、変に構えず、普通に外からのお客として接するのよ? いい?」

「わかりました」

レーヘンがお辞儀をして、その時ようやく精霊が手に持っているボウルに気づいた。

「あら? 今日はアナタなの? いつもはハーシェがやってくれるのに」

顔をあげたレーヘンは、嬉しそうに微笑む。

「はい。交代してもらったんです。ハーシェはベウオルクトから影霊としての説明を受けています。今度の会合で精霊達に会う際の準備です」

「そう」

ハーシェは世界で最初の影霊ということで、精霊達へお披露目する必要がある。なんでも影霊は長く研究されていて、ようやく完成した存在ということで他国の精霊達も興味があるらしいわ

「それに今日は影霊を作りましたから、普段の成分に加えて保護成分も入っているんですよ」

「そうなの」

ボウルを覗き込むと、いつもの木の香りに加え、ふわっと甘い香りがした。

「ではそちらの椅子に座ってください」

指示された背もたれのない椅子に腰掛け、お風呂上りではらけていた髪をざっとまとめて、背に流す。

銀髪の際は変換された瘴気を溜めてこんでいるせいなのか髪のコシが強くなってまとまりにくくなるけれど、黒髪に戻るとさらっとして、まとめやすくなる気がするわ

「失礼します」

そう言ってレーヘンが私の背のそばまで来たので、いつものように正面を向いて首筋を伸ばす。けれどいつま経っても髪を持ち上げられる感覚がしない。

変に思って振り返ってみると、銀髪の精霊はスラリとした指で髪を一本だけつまみ上げ、真剣な顔つきで細い筆で栄養剤を塗りつけていた。

「ちょっとなにやってるのよ。それじゃ朝までかかっても終わらないじゃない」

「ですが髪が痛まないよう、しっかり保護せねば」

「ハーシェはいつも手に栄養剤をつけてそのまま梳くようにして髪に刷り込んでいるから、アナタもそうしてちょうだい。私の髪、結構頑丈だからちょっとくらい引っ張っても平気よ」

そう言つとレーヘンは少し考えるようにボウルの中の深く澄んだ緑色の栄養剤と己の手を見比べ、そつと両手を栄養剤に浸して液体をなじまる。それから手をボウルから引き上げ、おそろおそろ髪の中に指を差し込むとゆっくり滑らせる。

「こうですか？」

「そうね、いい感じ」

「痛かったら言つてくださいね」

「わかったわ」

何度が繰り返すうちに慣れてきたらしく、次第に手つきも落ち着いてきたので安心して正面に戻つて温かいハーブティーを飲みつつ、今度の会合用の資料に目を通す。

しばらく経つて、やけに後ろが静かなのでまた振り向いてみるとレーヘンはまだ私の髪を触っていた。

「レーヘン、大丈夫？ 終わったの？」

「ええ。栄養剤は終了しましたが…」

言いいながらも生え際あたりから長い指先を髪に通し毛先までそつと滑らせる動きを繰り返している。

「どうしてだかずっと触っていたくて」

そうつぶやいて、黒髪を眺めながら目を細める。

「心地いいです」

「そう？」

毎日ハーシェと二人ががりで手入れているからかしら？

「気に入ったのならしばらく触つていてもいいわよ。そのほうが栄養剤も髪に馴染むだろうし」

そう言つと、部屋の明かりに柔らかく照らされながら銀髪の精霊が微笑む。

「はい」

実はだいが長くなってきたから少し切りたいのだけど、この様子だと反対するかもしれないわね

髪を触られているからか、なんだか眠くなってきたわ…

「ファムさま」

少しうとうとしていると、背後からレーヘンがそつと呼ぶ声が聞こえてきた。

「なあに？」

「もう夜に泣くのはやめませんか？」

口に運ぼうとしていたカップが途中で止まった。

ここ数日、夜はハーシェしか部屋に入れてないのに何でも知ってるのね。

「別に、泣くくらいいいじゃない。感情を溜めこむよりいいでしょ」

「ハーシェが心配してベウオルクトに相談しました。ライナ達もファムさまの様子が今までと違う事に気づいています」

自分ではごまかせているつもりだったのだけど、みんなに心配かけちゃってるのね…

「そんなに忘れられないんですか？ あの男が」

背後から、そつと、確かめるような声が聞こえてくる。

「…そうね、ふっ切るにはもう少し時間がかかるわ」

頭の中では理解していて、いくら泣いてもどうしようもないって分かっているのに、涙が止まらないくらいだもの。

「海の上で会わない方がいいのでは」

「いいえ、会うわ。それとこれとは別よ」

元恋人のファムとしてはまだ気持ちの整理がつかないけれど、黒いヴェールをつけて、顔を隠して、くろやみ国の代表として白箔国王に会うことなら、きつとできる。

「だって白箔国にもうちを認めて貰いたいんだもの」

「ファムさま」

振り返ると、レーヘンが床に膝をついてこちらをじっと見上げていた。

「ワタシには人の心の深いところは理解できないかもしれない。でもワタシはファムさまをお守りしたいんです。あなたの心も含めて」  
レーヘンの口元は引き締められ、銀のまつ毛に縁どられた青灰色の瞳はまっすぐこちらを見つめている。

「どうか一人で抱え込まないでください」

「ありがとう、レーヘン」

そう言ってくれるアナタや、みんながいるから、私はこの国を守りたいの。

いえ、なんとしても守ってみせるわ

「私はくろやみ国を守るから、レーヘン、アナタは私を守ってちょうだい」

「もちろんです」



「この辺でいいかしら」

この国はいつも曇りだから国土のどこも日当たりもなにも関係ない。

なのでお城に近い、やや土が柔らかいあたりでシャベルを突き刺し、穴を掘る。ある程度掘り返したところで肥料とつやつやした灰色の種を入れ、土を被せる。

「がんばって芽を出してね」

特別に加工されたこの種が芽を出せば、本格的に国土の土壤回復を開始できるという合図になる。

「ファムさま、タグを」

「ええ」

ライナから植えた日付が書かれたタグを受け取り、土の上に指すあたりには同じようなタグが無数に刺さっているけれど、芽が出ているものはひとつもない。

立ち上がり、空を見上げると以前は暗い灰色だった雲は白いものに変わっていて、雲の層がずいぶんと薄くなっているのがわかった。「さあ、これで出発前にやっておく事はひと通り終わったわね。ライナ、お城へ戻りましょう」

お城に戻り、手を洗ってから王の間に入ると、漆黒の鎧を着込んだサヴァとゲオルギがピンクのクッションの上で丸まって眠るブルムを覗き込んでいた。

「顔は怖いけど寝ている分には十分に可愛いわね。一緒に遊んでたの？」

サヴァがボールのようなものを持っていたので思わず尋ねてみた。  
「いえ、ブルムの身体能力のテストをしていたのですが…」

そう言ってサヴァは持っていたボールのようなものを前に出す。  
間近でみるとそれは弾力のあるものではなくて、鉄球だった。しかも、傷とへこみだらけで完全な球体ですらなくなっている。

「どうしたのこれ」

「反射神経を試すテストで使うものなのですが、途中で壊されました。普通は何をやっても中のシステムは故障しないようになっているはずなんです…」

「この子、かなり強いってこと？」

「ええ。すでに顎と爪の力はゲオルギ以上のようなのです」

まだ生まれたての竜なのに、すごいわね。

「それと、古代竜の生体は俺も詳しく知らないのですが、手足の形から最終的にかなり大型の竜に成長しそうです」

「そうなの？ まあお城に入れる大きさなら大丈夫じゃないかしらどこまで大きくなるのか楽しみね！」

「ブルムは力を持て余し気味なのですが、会合に連れて行っても大丈夫でしょうか」

サヴァが珍しく心配そうに言う。

「そうね…護衛役になりそうだからいてほしいんだけど」

「ワタシとサヴァさんで様子を見ていれば問題ないでしょう」  
声に振り向くと背後には“くろの騎士”の銀色版がいた。

「?? 兄さんじゃない人？」

その声にライナが首を傾げ、サヴァと交互に眺める。

「レーヘン、どうしたのその姿」

そう言って私は近寄って銀色の仮面を見上げた。身長も変わって  
るんじゃないかしらこれ

「これで顔に傷を付けず、服を汚す事も気にせずファムさまをお守りできます」

鈍く輝く銀色の姿になった精霊は両手を軽く広げたあと、胸に手をあてて軽くお辞儀をする。

これまでのレーヘンの行動から綺麗な顔に傷つけるのは駄目！あと長旅になるから着替えを破いちゃ駄目！と散々注意した結果、自分なりに考え出した答えらしい。

「もしかして、これって“やみの騎士”の鎧じゃないの？」

銀色の鎧の周囲をぐるぐると周り、観察する。色は違っけれどサヴァの鎧とすごく似ている。

「はい。以前闘技場の大会で使わなかった“やみの騎士”の鎧を再利用してみました。これは真似ているだけの姿なので、特別な機能はありませんが」

そう言うのと黒い鎧のサヴァの隣に並ぶ。サヴァは興味津々というよりは冷静に銀色の鎧を観察している。

「そっくりね、目線の高さも、背格好も」

「この姿の時だけサヴァさんの体格に身体を調節しています。槍を持てばある程度動きもトレースできますよ。それに…」

軽く腕を振ると、全身が黒一色に変わる。

「警備の時にこうして入れ替わることも出来ます。この間の一件で“くろの騎士”は大陸で有名になったようですから、こうして複数の“くろの騎士”がいると思わせれば我々の戦力の攪乱になるでしょう」

それからレーヘンはもう一度腕を振って元の鈍く光る銀色の鎧に戻った。

「面白いな。あとで手合わせできるか？」

「いいですけど、出発前ですから軽くお願いします」

仲良く喋る黒と銀の鎧を見て、守りの方は大丈夫そうだと安心できた。

「理由はわかったわ。でも時々はいつものレーヘンの姿になってね」

あの綺麗な顔に会えないのは寂しいわ

「はい。ファムさま」

銀色の仮面の下から微笑んだ時のレーヘンの声がした。

私たち、さらに胡散臭い集団になりそうね！

「なあ、あの女王、本当に人間なのか？」

ジェスルは木にたわわに実るオレンジを収穫しながら傍らのシメオンに声をかける。

元々の育ちが育ちなのでなにもしない客人の立場が落ち着かず、こうして自分から手伝いを申し出て労働にいそしんでいる。

「人間ですよ。だから今度の会合にも出席する必要があるんです。我々の存在を認めてもらうために」

シメオンはそう答えた。しばらく観察してわかったがこの少年は翼の生えた少女の傍以外だと年齢不相応な喋り方をする。

「お二人とも、休憩にしましょう」

麦わらを編んで作られたつばの広い帽子をかぶった女性がバスケットを持ち現れた。

この女性もジェスルにとって謎だ。闘技場に現れたのはこの人物らしいが、あの時の結界の反応は精霊とも人間ともつかない曖昧なものだった。

さらに女王と同じ顔立ち、同じ声。しかも日によって髪の色が銀になったり黒になったりする。もしかしたら複数人居るのかもしれない。

柔らかな草の上に座り、ジェスルは渡されたカップの中身をすすむ。果物の絞り汁を入れた炭酸水が喉を通り過ぎる。

広大な果樹園は場所によって温度や湿度、日差しも違う。おそらく植物の生態に合わせて変えているのだろうが、具体的にどこをどう管理しているのか分からない。さきほどいたオレンジのあたりは日差しが強かったが、朝方いたベリーの茂みあたりは涼しいくらいだった。

「本当に不思議だな、ここは」

見上げて、太陽は見えず雲もない真っ白な空。風も吹かず鳥の声もない。緑は生い茂り作物は豊かに実っているが、どこかぎこちない雰囲気を感じる。

「不自然なのは仕方ありません。ここは限定された環境ですもの。まだ城の外では作物は育ちませんの」

パウンドケーキを切り分けながらハーシェという名の女性が言う。

「外は恋しくないのかい」

「え？」

ジェスルのかけた言葉に、ハーシェは不思議そうな顔をする。

「あんと、あの女王もだが、言葉のところに白箔国の訛りがある。元々この国の生まれじゃないだろ？」

首を傾げる相手に、ジェスルはさらに踏み込んでみた。

「ヴィルヘルムスって男知ってるか？」

「…ええ。白箔国の王様ですよね」

「知り合いか？」

「…いいえ、直接は存じ上げません」

「そいつ、この国に興味を持っているんだ。ついでにいうと、この国にいるかも知れない、白箔国から来た黒髪の若い女に」

本人の口から詳しく聞いたことはないが、彼が収集している情報を総合するとそういうことになる。

「どうして興味があるのでしょうか」

あの普段無口で何を考えているか読めない友人が、王という立場

を利用して何をしようとしているのかジェスルは気になっていた。

「さあな。何か貴族の起こした事件に関係しているんじゃないかと俺は思うが」

白箔国は貴族の権力が強くこれまで見逃された犯罪行為も多かったが、ヴィルヘルムス王が即位して一転、ことごとく暴かれ、そして裁かれている。すでに白箔国の貴族の半数は大小関係なく罪に問われ、爵位を剥奪されているときく。

ジェスルの言葉にハーシエは一瞬目を細めた。

「…確かに、以前白箔国にいた際、貴族に命を狙われたことがあります。ですが相手の爵位も知りませんし、証言できることは何も無いでしょう。ワタシはこの国の者ですし協力はできかねます」

ハーシエは自分の中にあるファムの記憶を探り、答えた。

「そうか」

パウンドケーキをかじり、ジェスルはシメオンの方を見るが少年は我れ関せずといった様子でオレンジをむいて食べている。以前黒髪の女のことを尋ねた時も、少年は「自分で調べてください」と情報提供を拒絶していた。

「あの女王はどうなんだ。双子が何かなんだろ」

「あの方は…このあたりはまだ国外の方にはご説明できません。今度の会合で承認を得て公開するか、しないかを決定する予定なので」

ハーシエはそう言った。

意味するものはハーシエ自身の秘密に関わるものなのだが、ジェスルはその秘密にされた対象を女王自身のことだと考えた。

仕方が無いといえば仕方がない。

多少髪の色が変化するが一般的女性と何ら変りない（ように見える）ハーシエと、瘴気のような気配をまとい、城のシステムを手に触れること無く操り、特級レベルの精霊達に口頭で命令を下す女王ではどちらが「人間離れしている」ように見えるか。

ジェスルはもちろんヴィルヘルムスが「女」を探しているということにも注目していた。思いをかける相手を探している可能性も考えていたが、ここでまだ歳若い彼の価値観が作用した。「物静かなヴィルヘルムスが好きになるのはハーシエのように穏やかな女性に違いない」と。その思い込みと、女王の人間離れした様子が彼に考えの幅を広げさせなかった。

後になって彼は詰め寄られ、叫んだ。

「お前、あんな女が好みなのかよ！」

そして彼は締め上げられた。

冷凍していた誕生日祝い用に焼いていたスポンジケーキを出してきて、クリームとフルーツと、砂糖菓子の花で飾る。

あとはライナが用意してくれた木の実入りのクッキーと、ハーシエが入れてくれたお茶で出発前最後のお茶会をひらいた。

「ライナ、留守中この国をよろしくね」

「はい。任せてください」

「くれぐれも無茶はしちゃ駄目よ。不安に思ったらすぐにみんなを頼るのよ」

「わかりました！」

羽と角をもつ少女がまっすぐに答える。

私の留守中はライナが女王代理として国の守り手につくことになっている。ベウォルクトがサポートに着くことで城のシステムもある程度動かせるようにしてある。

「シメオン、ライナを守るのよ」

「もちろん、わかってるよ」

ちよつとすねたように少年が答える。

「ちゃんとあなた自身も無事でいるのよ。あなたがどうかなっちゃうとライナが泣いて泣いて、体調崩すわよ」

「う、うん…わかった…」

「ゲオルギ、二人を守ってね」



「ギュー！」

黒竜が元気いっぱい吠える。

「ブルム、サポートをお願いね」

『まかせてくださいな！』

銀色の鋭い尻尾を振り回しながら子竜が言う。

「ハーシエ、もしもの時はちゃんと動けるわね」

「お任せください」

銀髪の女の子が答える。

「サヴァ、みんなを守ってね」

「はい」

黒いこの国の騎士服を着た青年が頷く。

「レーヘン、国を代表する精霊としてしっかりするのよ」

「頑張ります」

銀髪の精霊が力を込めて答える。

「ジェスルは…船旅では大人しくしていてよね」

「わかってるって。またこの国来てもいいか？」

青い髪の青年が愉快げに言う。

「気に入ってくれたのなら、来てもいいわ。まあ、一人で来れるものならね」

「ベウオルクト、あとは任せたわよ」

留守番組の闇の精霊はいつもどおりの布で隠れた顔で頷いた。

「かしこまりました。ファムさまも、くれぐれも無茶をなさらないよう」

「わかってるわよ。なるべく大人しくしてすぐに帰るつもりだし。それに、私に何かあってもみんながいるから大丈夫よ」

そう言つと、ジェスル以外の全員が私を見た。な、何よ…

「何かあつてからでは困ります」

レーヘンが普段より強い調子で言う。

「ち、ちゃんと生きて戻るつもりよ…ヴェールは脱がないし、体調管理も気をつけるわ」

お茶会を終えて荷物の再確認とかをしているうちに沿岸に黒堤組の船が確認された。

「じゃあ、行つてくるわね！」

私を含めた出発組は港まで直行の列車に乗り込んで、留守番組に明るく手を振る。城内の駅ではライナとシメオンが手を振りかえしてくれて、ゲオルギも尻尾で答えてくれた。

「よいしょ」

列車が外へ向かう地下トンネルに入ったところで例の黒いヴェールをまとう。

ヴェールの下はばつちり正装を着込んでいる。細身の長いベストは胸元と首周りの飾りに黒いレースのフリルが追加されて可愛くなつて、ワンピースは腿のあたりからたつぷりとしたドレープが入つて歩きやすいように改良されている。まあ、全部ヴェールに隠れて見えないんだけどね…

ハーシエも膝上までのヴェールをまとい、お互いに確認しあう。うん、ばつちりね。

「色々尋ねたいのは分かるけど、こつちも事情があるのよ」  
もの言いたげなジェスルの視線に思わず答える。

「無事に帰りたいのならここから先、私たちのやることを詮索しないでいてほしいわ」

私の言葉にジェスルはひとつ息を吐くと、頭の後ろで手を組んで座席深くもたれかかる。

「わかった。俺個人としてはこの国とは友好的にいききたいからな、特にシメオンの事は言いふらすつもりはない。まあ、“くろの騎士”、騎士サヴァについては俺が黙っていても速攻ばれるだろうな。…なんか増えてるけどよ」

ジェスルがうんざりした様子で見た先には、輝きのない黒い鎧とにぶく光る銀色の鎧が座席に並んで座っている。私たちの視線に気づいて銀色のほうが挨拶するように軽く片手をあげた。

二名ともくろやみ国の紋章が入った丈の長いケープを羽織っている、黒い鎧は鈍く光る灰色に近い銀色を、銀の鎧は深い黒色になっている。黒い鎧の隣に積み上げられた荷物の上にはブルムがとまっていた、退屈そうにあくびをしていた。

まだ到着までに時間があるわね

この時間を利用して一つ気になっていることを片付けておきましようか

ジェスルから離れた位置に座り、集中するために眼を閉じる。ハ―シェがジェスルに話しかける声が聞こえる、さらにその先へと意識を向ける。

「マルハレータ、元気にしてる？」

『ああ？　なんだ？』

小声で話しかけると、頭の中で返事が返ってきた。

旅立ったマルハレータ達は、あちこちふらふらしながら赤麗国あたりを旅しているみたいだけど、最近なんだかもめているらしいので、あんまり話しかけないようにしていた。

一応、今度の会合のことはざっくりと伝えてあるけれど、余裕のあるうちにもう少し状況を確認しておきたかった。

「私たちこれから国を出るのよ。そっちはどう？ 順調？」

『あー、海のあれか。ああ。わかった。あんた弱いからちゃんと守ってもらえ、ちっ！ てめえっ！』

声しか聞こえないから状況がわからないけれど、慌ただし雰囲気気が伝わってくる。

「だ、大丈夫？ どうしたの？」

『後にしろ。おれは、こいつを、殴るので、忙しいっ！』

「どういうことなのよ…ちよつとローデヴェイク」

『ああ？ いま建て込んでんだ。くそっ、おい待てこら！』

相変わらずみたいね、あの二人。同じ場所にいるのよね？ 何やってるのかしら

ちよつと心配だけれど、彼らについてはしばらく後まわしにするしか無さそうね…

なんとも言えない気持ちになって抱えている銀灰色の羽毛のかたまりを見つめると、かたまりは首をかしげて慰めるようにそつと見返してくれた。

「さあ、ファムさまと兄さん達が戻るまでにこの国を守らなくちゃ！ よろしくね！」

背中を大きく羽ばたかせ、腕に乗せた羽毛のかたまりをなでながらライナが力強く言う。

「ライナ、羽根は大丈夫？」

別の羽毛のかたまりを肩に乗せたシメオンが心配そうに言う。

「こんなの、ちょっと痛いだけだよ。また生えてくるし。飛行訓練はしばらく休むけど」

「もしかして、今回の影霊に使っていた羽根はライナさんのですか？」

頭の上に羽毛のかたまりを乗せたベウオルクトがもしやという風に尋ねる。

「はい。ファムさまと話しあって私のを使ったんです」

今まで病弱で、何にも出来なずちっぽけな存在だったライナが自国の守りを任されたのだ。なんとしてもやりとげたい仕事だった。

女王いわく、「留守のサポートとしてあなたの指示もきいてくれる子にしくちなね」ということで、どんな影霊にするのか、姿や能力についてを女王や精霊達と話し合い、核に使うものを探した。その結果、自分の羽根にしようと決めたのだ。

決めれば後の行動は早かった。速攻でシメオンの部屋に押し入り、彼がこっそり拾い集めていた彼女から抜け落ちた羽根をひとかかえほど押収した。

「ほとんどはシメオンが集めていたものを貰ったんですけど、新鮮なものもあったほうがいいと思って、背中からも引き抜いたんです。私じゃ手の届かない所のはシメオンが手伝ってくれました」

最初は嫌がった彼だったが、脅すようにして頼みこみ、最後は涙目で頼みを聞いてくれた。

「そうですか、羽根を…集めていたんですか？」

ベウオルクトは顔を赤くしつつバツの悪そうに遠くを見るシメオンを眺め、自分の羽根を幼なじみにこっそり収集されていたにも関わらずたいして気にしないどころか黙認していたライナを眺め、首

を傾げる。

頭部に止まった羽毛も同じように首を傾げた。

「とりあえず、無理やり羽根を引き抜いたのでしたら傷の手当をしましょうか」

「よお、迎えに来たぜ」

「道中よろしくね、カラノス、黒堤組のみなさん」

地下から出てきた列車から港に向かうと、すでに黒堤組が到着していた。黒ずくめの私の姿を見て、カラノスは片眉を上げて反応する。

「えらく嚴重な格好だな」

「意外と中は快適よ」

でも足元は良く見えないので、黒い霧のようなヴェールを突き抜けるようにしてカラノスが差し出してきた手を取り、両手を広げた幅ほどの板を渡って彼らの移動艇に乗り込む。

手を戻すと、ヴェールは何事もなかったかように隙間を閉じ、ふんわりとなめらかな表面に戻った。

私の後にハーシェとハーシェに抱えられたブルムが乗り込み、手ぶらのジェスルが続く。そして最後に黒と銀の鎧が荷物を担いで乗り込んだ。

「青嶺の坊ちゃんはまだいたのか」

「いて悪いか」

「彼は途中で青嶺国に引き渡す予定よ。はいこれ、目的地の座標と航路」

むっとするジェスルを脇にどけて指先ほどの大きさの黒い記憶ブロックをカラノスに渡す。

「あんたら、荷物少なくてええか？ 会場設営担当なんだろう？」

「設営機材はさつき別便で出発したわ。そっちにいろんな荷物も詰めたから、船旅には最小限の物だけ持ってきているのよ。この船で行くの？」

「いいや。銀鏡海を抜けた先に長距離移動用の船が待機している」話をしている間に船は発進していて、波の少ない灰色の海と灰色の空の下を勢い良く進んでいた。銀鏡海はとても静かで、私たちの乗った小型移動艇のエンジンの低い振動音だけあたりに響きわたり、鳥は一羽も飛んでいない。風に煽られながら後ろを振り返ると、暗い雲の下にたたずむお城が小さく見えた。

しばらく進んでいくと、周囲の色が変わった。海は少しずつ波が高くなり、青味が増して、透明感が出てきた。空も雲が薄くなり、陽の光が強くなり、そして――

「青空だわ！」

もう何ヶ月も見ていなかった青い空が現れた。

思わず声をあげ、めいっばい背を伸ばして空を仰ぐ。ヴェールは視界をさえぎること無く、本来の世界を見せてくれていた。

どこまでも突き抜けるような底のない青い空に、白く輝く雲がちらほらと漂っている。

胸いっぱい空気を吸い込むと、少しべたつく潮風と、生き物の匂いが混じった温かい匂いがする。

「見て！ ハーシエ、魚もいるわ」

海面すれすれを泳ぐ影を見つけて隣に來た影霊に指し示す。

「まあ、こんな広いところを泳いで、疲れたらどこで休むのでしょうか」

船のふちに手をかけて軽く覗き込み、ハーシエは驚いたように言う。

きらきらと光る波しぶきが眩しくて、思わずもう一度背後を見ると、空と海の間に一箇所だけ暗く雲がかかった黒い小さな大地があり、異質な風景を作り出していた。



「外からだとああいう感じに見えるのね」

だいぶ慣れたつもりだけれど、陽の光の中から見るとすぐ違和感があるわ。普通だったら近づく気にも慣れないくらい、陰気ね！「以前はもつと瘴気が濃かったので雲に覆われて何も見えなかったんですよ」

隣に來た銀色の鎧がそつと教えてくれた。

「そのうち、お城からも青空が見えるようにしたいわね」

達成したい目標が増えたわ。

海がすっかり波と青さを取り戻したあたりで、待機していた黒堤組の別の船が現れた。船体の背後の部分が開いて、移動艇ごと中に入る。

「おおきいわねえ」

家一軒分くらいの大きさだった移動艇が余裕で中に入ってしまうくらい、この船は大きかった。王の間とどちらが大きいのかしら？「長い航行用ですから物資も人員も多く載せられるようでかいんですわ。本隊の母船はもつとでかいですぜ」

黒いバンダナをした男性が教えてくれた。

「こつちだ。あんたたちの客室に案内するぜ。足元気をつけな」

一度足元のパイプにつまずいてこけそうになったけれど、銀の鎧が支えてくれた。

「航路を見たが、到着まではざつと見積もって三日だな」

「わかったわ。予定通りにいきそうね」

客室に案内されて、海図と航路を見ながらカラノスから説明を受ける。

こちらから渡した資料にざつと目を通すと、海賊の代表は面白そうにくろやみ国使節団を見渡して最後に私に目を戻した。

「今回のあんたは“単なる使者”って訳か」

「そうよ」

「あんたと似たような格好のと子竜は部下。んで護衛か。数は少なえが“くろの騎士”二体はいい牽制になるだろうな」

「あら、知ってるの？」

「噂はかねがね。大空騎士団の陣地で派手に暴れたそうだな」

そう言うとかラノスは私の後ろを見ながらにやりと笑う。ちらりと背後を振り返ると、黒と銀の鎧がどちらも同じ姿勢で立っている。さらに眺め続けていると、黒いほうがちょっと気まずそうに身じろぎした。

「大陸どころか、海賊にまで名前が広まっているのね」

「そしておまけの青嶺国の王子と……。こいつはあんたらと同じ扱いでいいか」

顔を軽くしかめ、カラノスは人員表をつつく。

「ええ。私たちの管轄下だから部屋も同室でいいわ」

ちなみにジエスルはハーシェと共に客室に二つある寝室と浴室部分の点検をしまわっている。なんだかもうすっかり私たちに馴染んで行動してくれているのよね。

カラノスは資料をさらに読み進める。

「それで、今回はまたそれぞれ役名がつくわけか」

「ええ。ハーシェとブルムは変わらないけれど、背後の鎧は黒い方がズヴァルトで銀色の方がジルヴァラ。使者の私がナハトよ」

名前を呼ばれるとズヴァルトは頷くように、ジルヴァラは優雅にお辞儀をして答えてくれた。

「“黒”に“銀”に“夜”か。見たまんまの名前だな。じゃあナハト、ゆつくりくつろいでくれ。夕食後にでも船の中を案内する」

カラノスはそう言って微笑むと、部下を連れて客室を出て行った。

彼らの足音が聞こえなくなると、私はヴェールの下に隠し持っていた、ふわふわの羽毛のかたまりを取り出してテーブルの上にそっと置いた。

「さて、通信状況はどうかしら」

眠っているかのように眼を閉じている影霊をそつとなでると、明るい灰色の目が開いた。

丸い頭にふかふかの銀灰色の羽。羽毛に覆われていない足の先と嘴だけが緑がかった黄色をしている。

影霊はこちらを見上げ、それから一度首を傾げると、その尖った口をひらいた。

「“接続”を維持中。ベウォルクトに交代しますか？」

「お願いするわ、サユカ」

私の答えを聞いて影霊のサユカはまたゆるゆると目を閉じ、再び開いたときには瞳の色は暗い銀色になっていた。

「代わりました。ファムさま、お元気ですか」

かわいらしい声が一変して、ベウォルクトの落ち着いた声がする。  
「元気よ。さつき別れたばかりじゃない。それとここはもう外だからコードネームで呼んでちょうだい」

「かしこまりました。ナハトさま」

「こちらは黒堤組の船の中よ。なかなか良い部屋を用意してくれたみたいだわ」

「それはなにより。ジルヴァラ、気密装置の具合は？」

爪のついた細い足を小さく動かし、羽毛のかたまりは銀色の鎧の方を見る。

「うまい具合に動いていますよ」

見るとジルヴァラは黒い鎧のズヴァルトと共に床や天井の隅に四角い装置を取り付けている。

「しかし羽毛の姿で喋ってもなかなか様になっていますね、ベウォ

ルクト」

「ふくろうです」

ベウォルクトではなく、サユカ自身の声が答えた。

ジルヴァラが四角い装置の一つの表面のパネルを操作し、最後に黒いボタンを押すと、空気が震えるような感覚がした。

「これで大丈夫です。ファ、ナハトさま」

今間違えかけたわね。

「ありがとう、ジルヴァラ」

合図を受けてヴェールを取る。

「ふー、やっぱり何も無いほうが気が楽ね」

邪魔になるからと結い上げていた髪も解いて椅子の背にもたれかかり、軽く伸びをして一息つく。

「半日ごとに身体データを録ってこちらへ送ってくださいね」

銀灰色のふくろうがくちばしをかちかち鳴らしながら言う。

「わかってるわよ。ハーシエ、ちょっと来てちょうだい」

『はい』

ハーシエに声をかける、寝室からハーシエとブルムを肩に乗せたジェスルが現れた。

「海賊っていい物使ってたな。アメニティも全部揃ってたぜ」

用意してきた石鹸は必要なかったらしく、ジェスルの手の中で転がされていた。

「そうなの、ありがとう。ところでジェスル、私たちこれから最終会議をしたいの」

「わかった。俺はちょっと散歩してくるわ。こいつを連れてけばいいんだろ」

そう言い、青い髪の青年は軽い動きで石鹸を荷物の中に放り込んで肩のブルムを指さす。

「ええ。一応あなたは青嶺国に引き渡すまでくろやみ国の一員扱い

だから、くれぐれも大人しくね。ブルムから離れないでちょうだい」

「ああ。世にも稀な銀竜だ。奪われないよう守ってやるさ」

そう言つとそつと指先でブルムの首筋をそつとなでる。竜が好きみたいね。

「ブルムも、ジェスルのことよろしくね」

『おまかせください。こいつがおかしな動きをしたら容赦なく脳天をかち割らせていただきますわ!』

銀色の小さな古代竜はそう言つと目を細めて笑つように口を開き、尖つた銀色の歯を見せた。

「お、笑つと結構かわいいなお前」

ブルムの言葉、ジェスルに聞こえなくてよかったわ。

「みんなお前を見てるな。あいつなんてヨダレ垂らしてるぜ」

ジェスルは陽気な足取りで廊下を歩き、時折すれ違う海賊に挨拶をしながら散歩を続けていた。

「お前のあんまりの美女っぷりに、俺嫉妬の視線で背中がいてえわ」  
一人で言つて一人でケラケラ笑いながら階段を登る。

『あんまり冗談が過ぎるとこの肩踏み抜きましたよ』

「おおそんなに興奮して嬉しいか、そうかそうか」

肩にとまる子竜が頭を低くし翼を広げる姿にジェスルは喜んでい  
るのだと勝手に理解していたが、実際のそれはごく一般的な竜の威  
嚇の姿勢なため、彼らの周囲に近寄る人間はいなかった。

「俺の隊は竜いなくつてよ、ずっと憧れてたんだ。竜使いは竜に殺  
されることがあるっていうが、こんなに大人しいのになんでだろう  
な……よつと」

軽快な調子でジェスルが階段を登り終わると、たどり着いたのは  
船の甲板だった。とは言っても貨物用の箱や運搬機材などが並べら  
れあまり広々とはしていない。

ジェスルは甲板で働く黒堤組の海賊たちの邪魔をしないよう、端  
に移動し手すりにもたれかかり、そして水平線を眺める“ふり”を  
する。

「おー良い眺めだ。ソルに振り回された時よりずっといい。落ち着いて景色を楽しめる」

それから”雲の様子を確認するかのように”空を眺める。

それを待つていたかのように、小さな物体が接近してきた。親指大の身体に一对の翼を持ち、その全身は金色に輝いている。時折日光を反射して翼が輝く以外は音もなく、そして不自然だった。

「さすがっつーか、抜け目ないっつーか、あいつどんだけ人工精霊ばらまいてんだよ…よく精神が持つてるな」

灰色に塗装された金属製の手すりに頬杖を付き、ジェスルは船と並走する金色の物体を眺める。

金色の物体はしばらくジェスルを観察するかのように近くを飛んでいたが、しばらくすると羽ばたきを強め、空のかなたへ消えていった。

見送った視線で肩のブルムを見れば、子竜はジェスルを横目で見つめていた。

問いかけるようなまなざしに、ジェスルは口を開く。

「不審がつて俺を始末してもいいぜ。お前の主もその許可をだしてるんだろ？」

子竜は無言で、尻尾を揺らすだけだった。尾の先は菱形のヒレのような形状になっており、その銀色の硬質な輝きからかなり鋭利だとわかる。尻尾を一瞬動かすだけでジェスルの息の根を止めることなど簡単だろう。

だがまるで死へ誘導するように揺れるそれを見てもジェスルの様子は変わること無く楽しそうに海と空を眺めている。

「あれは気にすんな。飛ぶことと映像を記録することしかできないやつだ。友人が俺の無事を確認しに來ただけだからよ、お前の主には影響ないさ」

『その言葉、違えることなきよう』

「あれが美味そうにみえたのか？ 残念だがあれは精霊術だから食

えないぞ」

どうにもずれた会話しかできず、ブルムは諦めてそっぽを向いた。  
『こいつ疲れる。さっさと帰って昼寝させていただきたいわ』

「腹減ったんだな。じゃあ厨房に菓子でも貰いに行くか」

苛立たしげに揺れる尻尾に背を叩かれながら、ジェスルは歩き出した。

「これでひととおり人間側の確認は終わったわね」

私はこめかみをさすりながら帆布が張られたソファにゆつたりと背を預け、みんなの顔を確認する。

「次をお願い、ベウォルクト」

「かしこまりました」

テーブルの上にちょこんと立つふくろうが言う。

「我が国は現状では暗病国を上書きしただけの存在です。あらたにひとつの国として各国を代表する特級精霊の…この場合、国精霊と呼びましょうか。この国精霊の会合で改めて存在を認められる必要があります。これはジルヴァラがやります。精霊同士の顔合わせとしてもいい機会でしょう」

「認めてもらうなんて、大丈夫なのかしら…」

「お任せください。これを見せれば皆納得しますよ」

そう言つて銀色の精霊は、手に持っていたこれまた銀色の箱状の鞆を見せる。

「ジルヴァラの私物つてそれだけよね。けっこう頑丈そうな箱だけど、危ないものじゃないでしょうね？」



「危なくありませんよ。フ：ナハトさまにとってはおなじみのものです」

やけに胸をはって銀色の鎧が言う。

「国精霊の承認があれば問題が起きたときに精霊経由で他国と交渉することが出来ます」

「うちは交通の便が悪いから精霊の協力が得られるのは大事ね。ところで、青嶺国からもらった時間表には精霊側の動きは載っていないかったわよ？」

「これには少々事情がありまして、別の時間枠で動いていきます。このあたりは到着後に詳しく説明いたします」

「わかったわ」

手に持っていた資料を置いて、深く息を吐いた。なんだか息苦しい。

「ナハトさま、大丈夫ですか？ 顔色が悪くなっています」

向かいの席に座っていたハーシェが言う。

「ちょっと頭が重いだけよ」

すかさずジルヴァラが近づき、ひざまづいて私の額に手を当て、次に首筋、手首と触れてくる。

「どうも船酔いそうですね」

「私乗り物酔いしない体質なんだけど」

「城を出て時間が経過したので体内のバランスが不安定になっているようです」

ハーシェが部屋に用意されていたピッチャーからグラスに水を注ぎ、一口飲んで中身を確認してから私に差し出す。

「ありがとう」

ゆっくりと一口飲んで、少し気分が落ち着いた。

ジルヴァラが立ち上がった。

「ちよっとこの船の設備を借りてきます」

「何をするの？」

「薬を作ってきます。この部屋の警備を頼みます。それと、寝室の気密装置の数値を上げておいてください」

「わかった」

ハーシェに促されるままに私がソファに横になっている間に、ジルヴァラはズヴァルトに後を頼むと颯爽と部屋を出て行った。

黒堤組のマヴロ側近であるニカノルは食堂で遅めの昼食を食べていた。

片付けねばならない仕事はまだ残っているのでさっさと食べ終えてしまおうと行儀悪くパンを口に放りこみ、スープで一気に流しこもうと口に含だところで騒ぎの気配を感じた。

その気配がなんなのか把握できず、何気なく開かれた扉の方を見た瞬間音もなく銀色の鎧姿が横切り、思わず飲んでいたスープを具ごと吹き出してしまう。

慌ててテーブルにあった台ふきで顔をふくと、具の穀物のつぶが鼻に入った痛みで涙目になりながら立ち上がった。

「お、おい！」

単体で廊下をすたすた歩く銀の鎧を追いかけ、その背中にニカノルは声をかけた。

「はいなんでしょう」

声をかければ返事が返ってくるのはあたりまえのことだが、それが出来たことに軽く驚きを感じる。

振り返った鎧はやはり今現在客人として迎え入れているくろやみ

国という小国の使節団の一員だった。大陸の闘技場での“くろの騎士”の闘いぶりを聞き知っているニカノルは、たとえ色違いといえどその鎧姿に威圧感を覚えた。

「あ、あんた、客室は違う階だろう。何しに来たんだ」

周囲の人間は皆こちらを見ているが誰も動かずにいるので、仕方なくニカノルが代表して尋ねた。

「医療器材があるのつてどちらでしょうか？」

「なんだ？ 何の用事があるんだ？」

「薬を作りたいんです」

「薬？ 待て」

ニカノルは急いで壁についた取っ手を掴むと精霊術を立ち上げマヴロの部屋に通信をつなげ、確認を取る。返事はすぐに返ってきた。

「許可が出た。こつちだ」

医務室へ向かう方を指差し、ニカノルが歩き出すと銀の鎧も並んで歩き出した。やはり足音はなく、動きも酷く軽い。強いて音がするといえば羽織っているケープの衣擦れの音くらいだ。

「珍しい通信手段ですね」

案内されながら一定の間隔で壁につけられた取っ手を眺めて銀の鎧が言う。

「昔っからのやつだ。元々はうちの組のシステムだったが、そのうちここいらの一带の海賊船で使うようになってる」

「技術が漏れたんですか？」

「いや、昔売ったらしい。高値でな」

そうこうするうちに医務室についた。ニカノルはそのまま銀の鎧を置いて仕事に戻ろうとしたが、医療員が怖がりしかたなく一緒にいてやることにした。

銀の鎧は断りを入れてなにやら熱心に棚の中や機材を検分している。

「おい、銀の鎧さんよ、おい」

熱心に探しものをしていた鎧は二度目の呼びかけで振り向いた。

「はいなんでしょう。それとできればジルヴァラと呼ばれると分かりやすいんですが」

「わかった。あー、ジルヴァラ、技術者を一人同席させていいか。あんたが何をやるのか興味がある」

これはマヴロから指示されていることだ。すでに一人こちらに呼んである。

「どうぞ、興味が有るのならご自由に。少々薬剤を分けていただきたいので、その御礼がわりにしてもらえると助かります」

「わかった」

いくつかの箱の中をあけ瓶の中の薬剤を手に乗せて確認などをした後、ジルヴァラは目当てのものらしき薬剤をいくつか机の上に並べていく。

それからまとっていた黒いケープを脱いで形を整えると丁寧にたたんで机の端に置いた。

「あといくつか欲しい物があるんですが」

「わかった。何が必要なのか告げてくれ。俺達で取ってくる」

あまうろつかれると騒ぎになると、ニカノルが申し出る。

「それはありがとうございます」

食堂から必要な品物をとってきた医療員と技術員が医務室に到着したのはほぼ同時だった。

技術員は一瞬医務室を占領する銀の鎧を見て驚いた表情を浮かべるが、その手元の動きを見てすぐに顔を引き締め、記録用の術を動かそうとする。

「法術はやめてください。法術は気脈に影響します。この薬に気脈を混ぜたくないんです」

小皿に薬剤を取り分けていたジルヴァラが銀の仮面に包まれた顔をあげて言う。

「必要なら全部口頭で説明しますから」

「わ、わかりました」

技術員は慌ててポケットから手帳とペンを取り出す。

ジルヴァラはニカノルも知っている一般的な手順とはまったく違う調剤をした。

薬剤をのせた小皿を指で軽く叩きながら鼻歌のようなものを歌うかと思えば、無造作に固形の薬剤を一行に並べて眺める。目分量で計量していたにもかかわらず技術員が計りを使って確認すればジルヴァラが言ったとおりの数値が出る。さらには食堂から持ってきた砂糖は鎧の手のひらで混ぜているうちに小さな銀色のカプセルに変わっていたりと、なにがなんだか分からない。

技術員は目の前の出来事に若干涙目になりながらも、必死にジルヴァラのやっていることを理解しようとして質問を続けていた。

「大体はそこにある機材で代用できますよ」

精霊術だろうか？　だがそれにしては術の発動はなかった。

「あんだ、もしかして精霊なのか？」

もしかやと思い、口にだしつつも思わず探知の精霊術を走らせるが、鎧の表面がすべて受け流し判別ができない。

「どうぞお構い無く。設備を貸していただいて感謝します」

銀の鎧はそう言うと言った薬を詰めた小瓶を大切そうに両手で持ち軽い足取りで客室へ戻っていった。

「作ってたのは何だったんだ？」

「おそらく酔い止めだと思います。本来あんな短時間で作れるものじゃないんですが……」

「酔い止めが必要になるんだ。人間もいるんだろうな。どいつかわからんが」

乗船時みかけた使節団の姿を思い出しながらニカノルは言った。

「まあ、あれが精霊ってんなら色々納得できるが、とにかく悪い奴

「らじやなさそうだな」

ニカノルは疲れきった技術員と、いまだ怯える医療員と共に銀の鎧が去っていくのを見送った。

# 1 紙切れと花束

その日ヴィルヘルムスはいつもどおり本の入った鞆を持ち通りを歩いていた。部屋を出たときから気分は沈み込み、灰色の空の下では目に映る何もかもに面白みを感じなかった。三つ目の角を曲がった時に足取りは最高潮に重くなり、突如として彼はいつもと反対の方角へ足を向けた。

行き着いた先には広場があった。中央の芝生と樹木が植えられた区画をぐるりと巡るように石畳の通りがあり、それに沿うようにいくつかベンチも配置されていた。ヴィルヘルムスは芝生の上に鞆を放り出し、行儀悪く緑の草の上に座り込む。

それからポケットに入っていた紙を取り出して眺めた。

4歳の頃、まだ世界が小さな家とその周辺だけだと思っていたヴィルヘルムスはある日突然巨大な建物に連れて行かれ、そこで沢山の子供たちと一緒に暮らすようになった。小さな家に戻る事は二度と無く、その頃まで彼を世話していた大人たちに会うことも二度と無かった。

数年経って物事の判断が自分でつけられるようになった頃になり、ようやく彼は自分が養子に出された事を知った。

そして今朝受け取ったこの紙には短い文面で産みの親が事故で死んだことが書いてある。

離れて暮らすようになって以来一度も会った事がない相手の死。一方的に渡されたこれに対してどう判断すべきなのか、ヴィルヘル

ムスにはまったく分からなかった。混乱とあきらめ、そして疲れの感情とともに紙をポケットへ戻すと、うつむいていた顔をあげる。

そして目に入ったものはこの国ではあまり見かけない黒色だった。

正確には自分とさして年齢の変わらない、黒髪の女性。

広場の片隅で小さな荷車の側に立ち、荷車に乗せた切り花を売っているようだ。道行く人に声をかけては売り込みの言葉をかけている。だがどれもうまくいっていないようで断られてばかりいる。

何人目かに断られた際、立ち去る男性に何かを言われたらしく彼女はしかめ面になる。だがその次に通り過ぎた女性に何かを告げられると、とたんに笑顔になった。

ヴィルヘルムスは遠くからその様子をぼんやりと眺めていた。人はくやしければ怒り、嬉しければ笑うのだ。きっとあの女性は悲しければ泣くのだろう。

響いてくる女性の声にはどこか心地良いものがあり、ヴィルヘルムスはポケットの中身が軽くなったような気がした。彼はしばらくその女性を眺めると鞆を持って立ち上がり、本来向かうべきだった学院へ向けようやく歩き出した。

帰り道、思いついてまた同じ広場へ向かうと通りの途中に昼間見た黒髪の女性がいた。荷車をひっくり返したらしく、通りに散らばる花を慌てて拾い集めている。

ヴィルヘルムスの足元にも切り花が散っていたので思わず一本拾いあげる。それから続けて何本か手にとって顔を上げると、彼女と目があった。

「あ、ありがとう」

驚いたように目を見開き、女性は言った。深い黒い色をした瞳だった。

その瞬間なぜだか耳のあたりがむずがゆくなり、ヴィルヘルムス



は何も言わず下を向いたまま花を拾い続けた。

しばらく二人で無言のままに花を回収し、全てを荷車の中のバケツに入れ終わると、彼女は再びヴィルヘルムスに声をかけた。

「あの、ありがとう！　すごく助かりました」

満面と喋っているいい笑顔でそう言われ、ヴィルヘルムスは硬直した。これまで何かを手伝って言われてきた言葉は「お手を煩わせてしまい申し訳ありません」「すみません」「恐れ多いことでございます」が大半を占め、まっすぐ目線を合わせ、しかも笑顔つきの「ありがとう」には慣れていなかった。

だから戸惑ってしまったのだと、ヴィルヘルムスは自分に納得させた。

彼が固まっている間に、黒髪の彼女は荷車の中を漁っていた。

「残り物だけど、お礼をあげる！　好きな花は何？」

そう言くと、ヴィルヘルムスのぎこちない答えと共に金色のリボンを手に取り、彼が適当に示した花と他の花や葉を束ねてあつという間に小さな花束を作った。その手際のよさに、彼は目を丸くした。「どうぞ！」

笑顔と共に受け取った花束はあまりに軽く、軽すぎて、風が吹くと飛んでいってしまいそうだったので、ヴィルヘルムスは時々立ち止まって崩れていないか確認しながら花束を壊さないよう慎重に持ち帰った。

見よう見まねで自室の水差しに水を入れて花束を入れて眺める。それから思いついて二本ほど花を抜きとり、朝受け取った紙きれとともに窓辺に並べた。

星明かりに照らされたそれらを眺めるうちに彼の紙切れに対する気持ちはひととおり整理がついた。だが別の事に気がついた。

彼は彼女とほとんど会話していない。言葉はかけられたが自分からは一言しか発していない。その事に思い至ってから彼は消灯時間

を過ぎて隣室に注意されるまでずっと部屋の中をぐるぐる歩き回っていた。

「先日は花束をあ、ありがとう」

ヴィルヘルムスがその言語を言えたのは数日たってからだった。

翌日さっそく広場に行ったのだが彼女が現れることは無く、それ以来可能な限りこまめに足を運び、ようやく通りを歩く彼女を見つけた。

「ああ、あなたこないだ助けてくれた人ね！」

彼女は自分を忘れていなかった。

再び笑顔を向けられ、ヴィルヘルムスは今度は耳だけでなく頼までがむずがゆくなった。

だがそのむずがゆさが心地よく、一言だけしか言葉を交わさないのもおかしいと感じたので多少どぎまぎしながらも会話を続けることにした。それはたった一人を前にしているにもかかわらず数十人を一度に相手する時よりも緊張した。

天気の話から始まり、先日の花束に使われていた花の種類について、彼女の一挙一動に全神経を集中し、探り探りで話題をみつけては話を広げていった。

「いつもは花屋でバイトしているの。今月から時々お休みを貰って広場でも個人で花を売ってるの。あんまり売れないんだけどね」

そう言って彼女は苦笑する。

「いつもどれくらいの売上なんですか？」

「…さあ？ 売れるだけ売ってるから」

「売れ残る分は？」

「えっと、バケツ二つ分くらい」

「花の仕入れ値は」

「うーんと、いつもその時々値段で」

「原価計算は？」

「げんか…ええと、それ何？」

そこまできてヴィルヘルムスは相手の不安そうな表情に、いつもの調子で話していた自分に気づいて慌てて取り繕う。

「そ、その。商売の知識をもう少し身につけたら売れるようになると思います」

「ほんと!？」

笑顔が一気に近づき、ヴィルヘルムスは頬が痛いほどに熱くなるのを感じた。

## 2 本と図書館

広場の近くにはそこその規模の図書館がある。

その事を告げて目的の場所の説明をすると彼女は知らないと言うので、ヴィルヘルムスは案内を申し出た。

始めは遠慮され断られたが、あれこれ説明して彼女を納得させた。自分は何度もその図書館に行っているのでどこにどんな本があるのか把握している。必要な本がどれか自分ならすぐにわかる。それにすぐ近くだしそんなに時間もかからない。散歩ついでだからまったくもって自分には迷惑でも手間でもない。

「じ、じゃあお願い」

「ええ」

「私、図書館に初めて入るの」

図書館の重厚な木製扉を抜けたとき、声を潜めて彼女は言った。こわこわと柔らかいカーペットを踏むと、何度か足踏みをする。

「誰でも入れるところですが」

「ここって立派な建物じゃない。彫刻とかいっぱい飾ってるし。貴族とか学者の人しか入れないかと思ってた」

何者かの目線を気にするように彼女はやや身を屈め、ヴィルヘルムスの後をついて歩く。

「立ち入り禁止の場所もありますが、ちゃんと掲示がでています」  
そう言っただけを指差せば、彼女はちいさく口を尖らせる。あきらかに取り繕うような顔つきだが、不快感は感じず、今度は胸の内がくすぐったくなった。

ヴィルヘルムスは黒髪の女性とともに目的の書架にたどり着くと、棚の手に取りやすい位置にある厚みの少ない本を一冊手に取る。

隣で彼女も似たようなものを手に取り、首をかしげながら頁をめくる。

「これを読めば花が売れるようになるの？」

「内容を理解すれば、ですが」

彼女はひとつの頁をじっと睨んでいる。難しい内容なのかもしれない。見た所彼女は学院に通ってはいないようだし、詳しい解説があつたほうがいいのかもわからない。隣で説明でもしようか。

ヴィルヘルムスがそう考え、そして言葉を発する前に彼女は顔をあげた。

「なんとか読めそう。これ、すごく役に立ちそうだわ」

その言葉をきいてヴィルヘルムスはどうしてだか残念な気持ちになつた。

「その、いくつか専門用語が出てくるかもしれません。ほら、こことか」

そう言いながら彼女の開いている本の一箇所を指さす。近づいた拍子に彼女の髪からふわりと花の香りがした。

彼女はヴィルヘルムスの指差した箇所を見て睨む。それから顔をあげて彼の方を見る。

「あの、わからないところがあつたら、今度質問しても良い？ 暇な時でいいから」

遠慮がちな様子ではあつたが、彼女からの申し出にヴィルヘルムスは強い喜びを覚えた。だがそれを表に出さず、当たり前のように自分がそうする事が当然であるかのように振る舞う。

「ええ。わかつたこと、わからないことをそれぞれ書き残すといいですよ。それを見れば説明しやすくなります」

「うん」

彼女はまっすぐにヴィルヘルムスをみて笑顔を浮かべた。黒い髪に縁どられたその華やかな表情を彼は何時までも眺めくなる。胸の

内が暖かくなり、どうしようもなくむず痒くなるのを感じる。それは今すぐその場で声を上げ、爪をたて、掻きむしりたいくらいのもだった。

「やっぱりいい」

我に返ると彼女は暗い表情になって、本を棚に戻していた。

「どうしてですか？」

ヴィルヘルムスが己のむず痒さに意識を向けている間に何があったのだろうか。自分が何かしたのだろうかと不安になる。

「私、きつと本を借りれない。親死んじやったし、この国で親類とかいないし」

彼女はヴィルヘルムスを見ること無く早口でそう言うと言き出した。向かう先には図書館の出口しかなく、慌てて後を追う。

「後見人は？」

彼女は黙って首を振る。それからまた微笑んだ。どこにも暗い感情がみえない、すっきりとした笑みをうかべる。

「まあしかたないか。いいの、ここに入れるって知っただけで充分。時間見つけて読みに来るから」

ヴィルヘルムスもこの国の仕組みをそれなりに知っている。身分を保障する血縁者や後見人がいないとどういった事になるのかも。

彼女はずっとこうして生きてきたのだろうか。後見人や縁者がいないことがどれだけ彼女を孤独で狭い世界に取り残させていたのだろう。なのに、なぜこうも

「教えてくれてありがとう。私のこと、あまり気にしないで。ここを知れただけでも、すごく助かったんだから」

「大丈夫です。借りれますよ」

気がつけばヴィルヘルムスの口は勝手に動いていた。

「少しここで待っていてください」

彼女を閲覧席へ座らせ一人司書のいる貸し出しカウンターへ向か

い、司書官長に手紙を書き、受付にいた司書官にも同様の手紙を書き、それぞれに自分の名前と、自分に与えられた法術の“印”で王位継承候補である証を記入した。

「ただいま実習の試験政策の一環でこちらを利用しています。あちらにいる女性にこの本を貸してください」

ほとんど即興だったが、ヴィルヘルムスの表情の乏しさから受付は勘ぐることも無く、継承候補の印を見て顔色を変えずに許可書の発行にとりかかった。

しばらくして彼は許可書と本を持ちしつかりとした足取りで彼女の待つ場所へ戻る。ヴィルヘルムス自身が自分で借りて彼女に渡すことも出来たが、そうすべきではないと感じ、そう感じたままの勢いで行動した。

「尋ねてみたら大丈夫だそうですよ。これを持ってカウンターへ行つて手続きをしてきてください」

流れ任せて彼女の右手を掴むと本と許可書を渡す。そのささやかな暖かみと、初めて感じる女性の手特有のやわらかさに彼の心臓は跳ねるように鼓動を強めた。

彼女は目を見開いて受け取り、ヴィルヘルムスと手元を何度も見比べた。

「貸出期間は十日間。規約については発行される貸し出し証の裏に書いてあります。延長は一回だけ可能です。さあ」

彼女は促されるままにカウンターに向かい、しばらくすると貸出証と本を持って戻ってきた。

彼女は何も言わない。そのまま図書館の入り口へ向かい外へ出て行ったのでヴィルヘルムスは慌ててその後を追った。もしかして余計なことをして怒ったかもしれないと不安になるが、図書館を出たすぐ脇の路地で彼女は勢い良く振り返りヴィルヘルムスを見た。興奮気味に頬を赤くしている。

「ありがとう！ちゃんと借りれたの！あなたの言ったとおりだった。あなた本当に良い人ね！」

「ヴィルです」

「ヴィルさん！　ありがとう！　本当に！　私はファムっていうのよ」

「ファム」

その名前を口の中で反芻するヴィルヘルムスの前で、飛び跳ねるようにして喜んでいた彼女はその勢いで腕を広げ彼を抱きしめた。

突然のことに驚き、次の瞬間には途方もない心地良さと、甘く夢見るような香りに包まれ彼は呆然とする。そして彼女との間に固い本が挟まっていた事を直感的に惜しんだ。

どうやら早足で図書館を出たのははしゃぐのを我慢していたかららしい。

「ご、ごめんね。いきなり飛びついちゃって」

「い、いえ」

ヴィルヘルムスが硬直したせい、彼女はすぐに離れ取り繕うように髪を整える。

「そ、それじゃまたね！」

「あ、あの、次はいつ広場にいますか？」

「今度の休日はお店開いてるわ！　暇だったら来てね！」

「ええ！　ではあの広場で」

「うん、広場でね！」

ファムという名の女性は大切そうに小さな本を抱えて、何度も振り返って手を振りながら去って行った。

思わず手を振りかえして、彼女の後ろ姿が見えなくなってもヴィルヘルムスは小路から目が離せなかった。彼女のいた痕跡を探すかのように立ち尽くしていると、いつの間にか彼の隣には光の精霊が立っていた。

『わざわざ出迎えですか。オーフ』

『このままだと門限を過ぎてしまいますよ』

『わかっています。今度の改正課題の題目が決まったんです』

『もうですか？　早いですね』



『新しい国営図書館について考えていることがあります。早速今日その試験的な試みを始めました』

ヴィルヘルムスは真っ直ぐに前を見つめ、今までとは違うものを含んだその目の輝きにオーフは思わず目を見開いた。

### 3 調査と貴族

ヴィルヘルムスにとって次の休日までの時間はとても長かった。

黒髪の女性、ファムと会ったときに何を話そうか、彼女は何の話なら興味を持ってくれるだろうかと、その事ばかりを考えていた。

ようやくの休日になるとヴィルヘルムスはなるべく自然に通りがかった風に見えるよう、鞆に本や筆記用具などを入れ、彼女がいるはずの広場に向かう。

「こんにちは」

「あ！ ヴィルさん。こないだはありがとう！ 見て、本に書いてあったことを参考にしてみたの」

そう言うとならフアムは笑顔で手に持ったカゴを見せてきた。

「あまり見かけない植物ですね」

花もあるが、草もある。このあいだ売っていたものとは違い、華やかさには欠けるものだった。

「今日は普通の店で扱わないものにしてみたの。見た目は地味だけど、これとか料理に使えるし、こっちはお風呂に入れるととってもいい香りがするのよ」

カゴの中はもう半分ほどなくなっていた。

「ここだけの話、実は全部うちの裏庭から取ってきたから元値タダなのよ！」

彼女はヴィルヘルムスの耳元に顔をよせ、得意げに、しかし秘密を打ち明けるように小声で言った。ヴィルヘルムスは一瞬頭が真っ白になりながらも、なんとか「それは素敵ですね」と返すことに成功した。

「この広場は主婦がよく通るから、こういったもののほうがよく売れるみたい。こんなに売れるの初めてよ。もう少ししたら売り切れちやいそう」

彼女が本当に嬉しそうに言うので、ヴィルヘルムスは自分も嬉しくなり思わず微笑んだ。

「それはよかった」

それから二言三言会話した後、ファムから待望の言葉が出てくる。「あの、ヴィルさん今日の夕方は暇？ できればこないだの本の内容で教えてもらいたい所があるんだけど…」

そう言いながらファムはカゴの底からノートを取り出す。どうやら本の内容について自分でまとめたものようだ。

「ええもちろん」

あまり意気込みすぎないよう、声の調子に気をつけながらヴィルヘルムスは返事をした。夕方と言わず、今日一日全部あなたのために空けてあります。とはさすがに言わなかった。

あつという間に夜になり、なんとかファムから次に会う約束をとりつけ、達成感と高揚した感情と共に帰宅したヴィルヘルムは知らせを受けて軍部へ向かった。

「あなたが先日の賊ですか」

案内された個人牢には拘束具をつけた状態でうずくまる男がいた。ヴィルヘルムスは鉄格子越しに声をかけると、持っていたランプに法術で明かりを灯すと足元に置いた。

「この気配…あの結界はあんたのかい？」

「そうです」

ぐったりしていた男は顔をあげる。

「学者の仕掛ける罠にしてはえげつなかったが…こんな坊ちゃんにやられたとは」

ランプに照らされたヴィルヘルムスの顔を見て、男は苦笑する。

「法術の研究部から機密情報を盗もうとする人物に手加減は必要ないんですよ。しかしあれを半分以上くぐりぬけた貴方もなかなかの腕前ですね」

「そいつはどーも。で、俺に何のようですかい？」

「あの結界の謝礼は罫に引っかけた貴方です。今から私の配下になってもらいます」

ヴィルヘルムスはその旨が書かれた書類を提示する。

白箔国の法術研究部は大陸でも最先端の研究が行なわれており、そこから情報を盗み他所へ売りつけようとする者は多い。男はヴィルヘルムスが試作した結界に引っかけた唯一の賊だった。

その結界はあえて目立たず、重要そうにも見えないように作られているが、ある程度隠蔽術や特殊な法術に詳しい者が見ればかなり気になるような造りをしている。そのため引かかるのは隠密行動が得意で、かつ、かなりの術者だけ。つまりヴィルヘルムスが必要としているような人間だけが捕まるような結界だった。

男の出身は元々海賊だったが、そのうちより刺激を求めて大陸各地で単独で活動を始め、各国に情報売って渡り歩くようになったらしい。

「貴方の実力を買つてのスカウトです。有能に働いてくれるなら後々国の調査機関にも推薦しましょう。貴方の好奇心も満たせますし、それなりの危険とも戯れることが出来ますよ」

ヴィルヘルムスの言葉に、男の表情が動く。

「この国の裏の世界に踏み込む気はありませんか？」

男はふたつ返事で了承した。ヴィルヘルムスはそれを受けて牢番に鍵を開けるよう指示を出す。

「名前は？」

「ルトガーだ」

「私はヴィルヘルムスといいます」

拘束具を外されるとルトガーはしっかりと立ち上がり、渡された書類にサインをした。現れた契約印にルトガーは眉を動かす。

「あんた王位継承候補か」

「そうです。そして貴方は今からその影の手先ですよ」

「そりゃ楽しみだ。で、俺は何をすればいいんで？」

軽く伸びをしてルトガーは言った。

「平民街にいる、ファムという黒髪の女性の周囲について調べてください」

そう言い、ヴィルヘルムスは機密保持の法術をかけた彼女についての資料を渡す。ルトガーはそれにざっと目を通すと空中に放り、資料は一瞬で煙と化した。

「ただの身辺調査ですが、裏に貴族がいます。それに上級精霊の気配があるので気付かれて消されないように」

ヴィルヘルムスの言葉にルトガーの目付きが変わった。

三日後、指定してあった時間にヴィルヘルムスが地下書庫で一人読書をしていると、音もなく書類を抱えたルトガーが現れた。

「いやあ、旦那の依頼、驚きましたぜ。お陰でいくつか精霊の結界にも遭遇できましたよ」

「それは珍しい。記録は？」

「とつてありますぜ」

「あとで提出しておいてください。それで、彼女が後見人がいない理由は何かわかりましたか？」

ヴィルヘルムスは本を閉じて立ち上がり、ルトガーは目を細めた。  
「旦那が気になってたのはそこですか」

「ええ」

「じゃあ俺がやっかいな精霊に追いかける必要はなかったわけですか」

やれやれと言いながらルトガーは最寄りの机の上に地図や資料を広げた。ヴィルヘルムスは近寄り、黙ってそれを覗き込む。

「後見人の件、調べましたぜ。この女性、貴族の誘いを断ってます」  
「貴族の名前は？」

ルトガーは黙って書類の一箇所を指し示す。

「俺より旦那のほうが詳しいんだろうが、ま、大物ですね」

ヴィルヘルムスが自分で調べても出てはこなかった名前だ。案の定、何十人という王位継承候補の一人である自分ではとうてい太刀打ち出来ない立場の相手だった。

「こいつに睨まれたせいで元々働いていた花屋を辞めさせられて、今は経営者同士が関わりある別の店で臨時雇い、アルバイトでやつです。店の正式な従業員として書類に名前が載るのがまずいらしいって訳で。後見人がつかないのもこの存在のせいですね」

「そうですか」

いくら貴族と平民の身分差があるといえど、白箔国の制度は人々のためにひととおり整えられている。この国で何年も暮らし、働いている人間に後見人がいないというのはおかしい話だった。

親類も後見人もいないということは身分を証明することができないのと同じ。図書館だけでなく、一般的な生活を送るのでも支障が出ているだろうに、まったくそんな素振りを見せず彼女は笑顔で過ごしていた。

「貴族の誘いというのは、愛人ということですか？」

「まあその類いですが、もつとろくでもないものだったようです。北の方の貴族は困う愛人の数で権力を誇示するってんで。まあ、個人向け娼館みたいなもんでしょう」

ルトガーの言葉に、思わず見知らぬ貴族のもとで無理やり組み敷かれ、泣き叫ぶファムの姿が脳裏に浮かんでくる。この国では一夫一妻が基本だが、貴族が配偶者以外の複数の恋人を持つのはよくあ

る話だ。だが実情についてまでヴィルヘルムスは知らなかった。  
周囲のランプが地下にも関わらず強風に吹かれたようにゆらいだ。

### 3 調査と貴族（後書き）

精霊のくだりは次回以降の説明になります。



普段はめったに参加しないのだが、ヴィルヘルムスは王宮で開かれる催しもののひとつに出てみることにした。王族や貴族達が交流するために開かれるそれは、高齢の国王があまり参加することがない分、勉強に支障が出ない範囲で王位継承候補者達も自由に参加することができる。

午後の日差しは温かく、何種類もの花が咲き乱れている西の庭園には多くの貴族があり、テーブルからめいめいにひとくちサイズの料理や菓子をつまみつつ、酒の入ったグラスを傾け話に華を咲かせている。そのなかにはヴィルヘルムスのライバルにあたる王位継承候補者達の顔もちらほらと存在している。彼らはこういった機会を利用して自身の売り込みにいそしんでいるのだ。

ヴィルヘルムスは会の始めに顔見知りの貴族や高官の何名かと挨拶と適当な雑談をこなすと、その後は会場を一望できるテーブル席に落ち着いた。そして風景を楽しむふりをしながら貴族達とその愛人を観察した。

夕食会などかしこまった席ではない、こういった昼間の屋外での催しものは参加できる人数も多いために愛人同伴の貴族も多い。

男女問わず、愛人はひと目でわかった。衣裳が派手なのだ。豪華な装飾品を身につけ、感情の見えない微笑みをする。貴族たちの権威を知らしめるにはいい宣伝塔になるのだろう。

足を組み、テーブルに頬杖をつきながらヴィルヘルムスは華やかな世界を眺めた。ひととおり観察した後は目の前の光景に興味がなくなり、気がつけば空を眺めていた。

半時ほどそうやって過ごす、ヴィルヘルムスは主催者に挨拶を

して早々に庭園を退出した。

「よお、ヴィルヘルムス。元気にしてつか？」

帰り道の途中で王宮の図書室へ寄ろうとしたところで、ヴィルヘルムスは声をかけられた。

「ジェスル。こんなところに何の用事ですか？」

かつてヴィルヘルムスが青嶺国に留学していた時に親しくなった青い髪の友人は、図書室につながる王宮の外廊下にいるには珍しい相手だった。

「お前を探してたんだよ。どうしたんだそんな気取った格好して」  
行儀悪く手すりに腰掛けていたジェスルは、面白そうにヴィルヘルムスの華やかな刺繍が施された上着を眺める。

「園遊会に出てみたんですよ」

「へえ。お前そんなに出るのか」

「ごく稀にですが」

「ふうん。ま、変わり者のお前も一応王位継承候補だもんな。俺んところではそういうのできないけどさ」

「どうです、“青嶺国の王子”の身分は？」

「ひっでーのなんの。本当にいきなり放り出しやがった。俺が何わめいてももう誰も見向きもしないんだぜ？ とりあえず身体動かせる仕事を探したんだが、国の騎士団は目茶苦茶出世しにくいらしいんで、結局大空騎士団に入ったんだ」

彼は去年十五歳になり、彼の国の王族制度の一環として、“青嶺国の王子”として扱われることになった。支援も援助もない生活に色々思い出すものがあるらしく、なにやら顔をしかめている。

「あそこは実力主義らしいですから自由にできるんじゃないですか」

「まあな。給料は低いが気楽でいいぜ。あちこち出かけられるし。」

今回この国に来たのも大空の仕事だ」

そう言うジェスルは背後の廊下の先を指さす。

「うちで発見された古書の写本を届けに来た。機甲術だったか？前にお前が依頼していたやつだ。で、ほれ」

ジェスルはさりげなく柱の陰にヴィルヘルムスを誘導すると、懷から紐で雑に束ねた紙の束を取り出す。写本の写しのようだ。

「ちゃっかりしてますね」

ヴィルヘルムスはそれを素早く受け取ると自分の懷にしまい、代わりにポケットから菓子が入っているような小さな紙の包みをジェスルに渡す。

「需要を把握してるだけだ。こんな大昔のわけわからん術の資料を欲しがるのなんてお前くらいだし。俺金欠だし。…しかしお前ほんと顔に出ないな。せつかくの俺からの贈り物に少しは嬉しそうな顔をしろよ」

ジェスルは不満そうな口調とは裏腹に、傍目からは世間話をしてるように見えるにこやかな表情でヴィルヘルムスの肩に手をかけてくる。

「嬉しいは嬉しいですよ。また期待しています」

ヴィルヘルムスにはこやかとは言えないが、いつもどおりの淡々とした調子で答える。

「あーあー、わかったよ。お前ってそういう奴だよな。で、それ何に使うんだ？」

「人工精霊に使おうかと。原理はわからなくても仕組みくらいなら応用できます」

「そんな事できるのか！ 完成したら見せてくれよ」

「ええ」

翌日は待ちに待ったファムとの約束の日だった。ヴィルヘルムスは前回と同じように鞆を持ったが、その中に結界を記録する道具も入れておいた。

「こんにちは」

「あ、ヴィルさん、こ、こんにちは！」

いつもの広場にファムはいた。ヴィルヘルムスは思わず駆け足になりそうなところを我慢し、落ち着いて見えるような足取りで近づく。淡い空色のワンピースが彼女の黒髪にとても似合っている。それを口にしたが、彼女のうわずった声の挨拶が気になった。彼女はなにやら背後を気にしているようだ。

「どうしたんですか？」

「なんでもないの！ えっと、今日は私、花を売らないの」

それを聞いてヴィルヘルムスは嬉しくなった。もしかしたら自分の為にわざわざ時間を作ってくれたのかもしれない。そう思うと腹の内がむずがゆくなる。

「それで、その、あのね実は…げっ」

落ち着かない様子のファムが背後に隠すように持っていたカゴを覗きこみ、表情を変える。

「げ？」

ファムの発した不思議な声と共に、ヴィルヘルムスの頭に衝撃と痛みが走った。

「ひい！ 何やってんのよアンタ！」

頭を抱えてうずくまるヴィルヘルムスの傍に悲鳴をあげながらファムが駆け寄ってくる。そして彼の頭上から何かを掴み上げた。

「…ナンデスカそれは」

「えっと、精霊…です」

ファムの右手に掴まれたそれはよくある民芸品の人形の姿をしていた。布でできており、子供の身代わりとして病や事故を肩代わりしてくれるという、古くからあるものだ。

だがそれは動いていた。ファムに背中を鷲掴みされて身動きがとれないらしく、短い手足をじたばたさせている。

「…そんな精霊見たことないので…」

こんな街中にいるために人間の作ったものに擬態しているのだろ

うか？

「そうなの？ この国じゃ珍しいのかしら。街の外だとたまに見かけるわよ？ 野原とか」

ヴィルヘルムスは頭痛と共に軽くめまいがした。

#### 4 精霊の加護 1（後書き）

民芸品の人形：飛騨高山のさるぼぼみたいなものをイメージしてます。あれ超かわいいと思うんだ。

## 5 精霊の加護 2

ヴィルヘルムスやファムの暮らす白箔国は周辺の国と比較しても精霊の研究が進んでいるといわれている。精霊術者の数も多いし、国で確認される精霊の数も種類も多い。

そしてヴィルヘルムスはそんな国の高等教育機関で精霊について学んだ。成績も良く飛び級もした。論文を書いたことすらある。だが…

ファムの手から解放されたその人形のような姿をした精霊は地面に降りると小さな足ですつくと立ち、なにもついていない顔をヴィルヘルムスに向ける。

「…こういった精霊を野原で見かけるのですか？」

民芸品が野を歩きまわるなんて、そんな事例いままで聞いたことがない。

「え、ええ。ハーブを探しに出かけた時とか、ぶらついているのを見かけるの。あの、頭大丈夫？」

ヴィルヘルムスの驚きをよそにファムは彼を心配して頭に触れてくる。その指先の感覚にヴィルヘルムスは安堵感と、今優先すべきものが何かを思い出した。

「痛みは引きました。ありがとうございます。それで、どうして精霊を連れていたのですか？」

ヴィルヘルムスは頭に触れていたファムの手を自然な流れでそつと触れ、軽く握ることに成功した。

「えっと、あのね、この精霊迷子になっちゃって、街で仲間を探しているらしいの」

ファムは返答しながら握られたままの手を見て首をかしげ、何度

か手を引こうとしたが、彼はファムを見つめたまま手を離さない。

「仲間を探す？」

ヴィルヘルムスが改めて精霊を見ると、なにやら小さな身体で訴えかけているようだ。短い手を振り、飛び跳ね、語りかけてきている。彼は無言で精霊を見つめながら精霊術の初歩である精霊と会話する術を発動してみるが、さっぱり分からなかった。ということは、人間と意思疎通できない三等級以下の精霊のはずだが…

「ファム、この精霊には精霊術でも会話できないようですが、どうやって意思疎通をしたのですか？」

「あなた精霊術が使えるの？　すごい！」

ファムは受け答えしながら結局手を外すことを諦めて会話を続けた。そのことにヴィルヘルムスは嬉しくなる。だが何事もない風を装い、そのまま表情を変えず話し続けた。

「ええ、多少はできます」

「あのね、私はいつもこうするの」

ファムは驚き、それから片手でカゴの中から黒い板と白い棒を取り出す。平民が初等教育で使う黒板と筆記棒のようだ。彼女はそれらを精霊に渡す。

「この人にもさっきと同じ説明をしてちょうだい」

精霊は小さな手でそれらを受け取ると一度ファムの方を見て、それから指もないのに器用に筆記棒をつかみ、黒板に何かを描きはじめる。

描きあがったのは三つの　だった。そしてそのうちの一つを叩き、次いで自分の身体を叩く。自分のことらしい。

「他に二体がいるということですか」

ヴィルヘルムスの言葉に精霊は一度飛びはねる。肯定のつもりらしい。それから今度は三つとも叩き、全身で空の一方方向を指し示す。「みなでどこかに向かおうとしていたみたいなの」

今度はファムが言う。精霊はまた飛び跳ね、それから自分の手で



黒板の線をこすって消そうとするので、ファムが横から布で黒板を綺麗にしてやる。そうして精霊は再び黒板に向き直った。

「今度は地図のようですね」

線だけで構成されているが、この街の区画の建物や道などがひととおり描かれているものだった。家の幅と道の幅比率からして、縮尺は市販の地図よりも正確かもしれない。

その二箇所に、精霊はぐりぐりと をつけた。

「ここにいますね」

「ええ。でも移動しているみたい。ここさっき描いてもらったのと違う場所だわ」

ファムは精霊の描いた地図を覗き込むと真剣な顔で言う。思がけず彼女の顔が近くなりヴィルヘルムスの心臓は鼓動を早めた。二人して小さな精霊の描いた地図を覗き込んでいるので、いつの間にか近くなっていたらしい。

「もしかして、一緒に探すつもりですか？」

もしかして今日仕事を休んだのもそのためなのだろうか？

「ええ」

そう言うファムは地面に立っていた精霊を掴むと、元のようにカゴの中に入れて上から布をかけた。

「野生の精霊でしょう？ わざわざあなたが手を貸さなくともそのうち自分で見つけ出せるのでは？」

ヴィルヘルムスの問いかけに、ファムはカゴを持ち直し、口を開いた。

「確かにそうなんだけどね…ヴィルさんも知ってるかもしれないけど、この街には精霊を一方的に捕まえて利用する貴族がいるのよ」

「確かにそういった貴族や組織の話は聞いたことがありますか？」  
「だから、見つけてあげようと思って。この子小さいから、捕まったらきつと分解されるか改造されちゃうわ」

そう言うファムはそつと布の上から精霊をなでる。

「それに一人ぼっちはさみしいのよ？ そのうち何とかするまで」

緒にいるわ」

下を向いていたファムは前を向き、笑顔を浮かべた。

「というわけで、この手、離してくれない？」

ずっと繋がれていた手を掲げ、苦笑しながらファムは言う。精霊が気になって忘れていたのでしょうか、そろそろ離して欲しいと。

「いいえ、離しません」

ヴィルヘルムスは言った。

まだ数回会っただけで、会話もそう多くはしていないが、ルトガ  
ーからの情報と、目の前の状況から彼は直感的に悟っていた。

このままではこの人はいつか貴族か精霊の騒動に巻き込まれて自  
分の手の届かない所へ連れていかれるだろう。確信を持ってヴィル  
ヘルムスはそう思った。そしてそんなことは絶対に避けたかった。

「私も同行します。精霊術ができるので、精霊探しの手伝いもでき  
ますよ」

「ええっと、一緒に探してくれるのは嬉しいけど、この手は？」

「探知術で必要なんです」

「そうなの？」

「そうです」

5 精霊の加護 2 (後書き)

もちろん嘘です。

## 6 精霊の加護 3

精霊の描いた地図とヴィルヘルムスの探知術もあって、仲間の精霊は半日経たず見つけることが出来た。

同じ民芸品の人形姿をした精霊が三体、ファムのカゴの中でひしめきあっている。動物と違い音も声も発さないので、ヴィルヘルムスにとって少々不気味だったがファムは気にする様子がなく、むしろ可愛がっているようだった。

「これくらい小さいと精霊も可愛いものね」

そう言つてカゴの中の三体の頭をかわるがわるなでる。精霊達もどこかうれしそうにファムの手を受け入れていた。

まだ昼前なので、ついでだからと、二人は精霊達が行きたがつていた方角に歩き進んでみることにした。

「おそらく城壁を出ることになりますね」

「そう、じゃあお弁当買いましょうよ。そこにサンドイッチの美味しいパン屋があるの」

手を繋いだままの状態に何も言わなくなったファムが笑顔で言う。二人はパン屋に入り、中で支払いをどうするかで一悶着あったが、結局サンドイッチはヴィルヘルムスが、飲み物とデザートのクッキーをファムが買うことで落ち着いた。

「こういうのは自分でお金を出したほうが好きなものを買えていいじゃない」

始めにヴィルヘルムスが全部自分が払うと言い張った事が不満らしく、ファムは口を尖らせながら精霊達の入っているカゴに詰め込んだ食料を見つめる。

「持ちますよ」

ヴィルヘルムスが繋いでいない方の手を差し出すが、ファムは力ゴを持ったままだ。

「途中で交代しましょ」

ヴィルヘルムスはそつとファムの顔をうかがう。機嫌を損ねたわけではないらしいが、どうもあまり彼に頼りたくはないように思えた。

行き先はわかっているので、二人は手を繋いだままだったがあまり会話なく歩く。

歩きながらヴィルヘルムスは考えた。

もしかしたらファムは貴族や権力者が嫌いなのかもしれない。これまで一方的に、散々な目に合わされてきた存在だ。

そしてもしかしたら彼が平民ではないことに気づいているのかもしれない。

正確にはヴィルヘルムスは王位継承候補者であり、現国王の養子だ。彼らは専用の建物で寮生活と、候補者としての教育をうけており、爵位はないが貴族階級に近い位置にいる。数年経って彼らの中から王位を継ぐ者が決定すると、即位した王以外はほとんどが国の要職に就くことになる。結果として大半以上が貴族になるが、彼自身はもしそうなった場合、自分がどう行動するかまだちゃんと考えていなかった。

ヴィルヘルムスは自分の身分について当分黙っていようと決めた。彼女に拒絶されるのが怖かった。

まだ日中なので城壁の門は開いており、発行された許可証を受け取って二人は外へ出た。許可証は出る際に必要なのではなく、夕方城壁の門が閉まった後に戻る場合に必要になる。

「こつちの方向で間違いないみたいね」

「一体どこへ行くのでしょうかね」

「さあ……でも、でもわくわくするわね」

小さな精霊達が指し示す方向はなだらかな丘がずっと続いており、負担なく歩いていけそうだった。空も晴れており、時折暖かな風が二人を追い越してゆく。

探知術の口実はもう意味をなしていなかったが、昼食を摂る時間になるまでヴィルヘルムスの手はずつとファムと繋がれたままだった。

「そういえば、ファムはずいぶんと精霊に詳しいんですね」

ちょうどいい場所にあつた切り株に座り、あまり食べ慣れない濃い味つけの揚げ物を挟んだサンドイッチを食べ終え、ヴィルヘルムスは気になっていたことを尋ねた。

「そう？　うち小さい頃から周りに精霊がよくいたから、ちよつと知ってることが多いだけだと思ふけど」

ファムはヴィルヘルムスの隣の切り株に座り、店から借りた水筒から金属製のカップにお茶を注ぎながら彼を見る。

「小さい頃からですか」

「うーん、あんまり気にしたことなかったけど、考えてみたらよく家に色んな精霊が来てたわ」

幼い頃の事を思い出しているのか、ファムはカップを両手で持ちながら空を見上げる。

「言葉を離す精霊もいたのですか？」

「ええ。人に似ていた姿のや、人と全くおんなじ姿のもいたわ。大体が言動がとぼけていたり、ずれてたからすぐに精霊だってわかったけど」

最近はあるまい現れないわねと、ファムは首をかしげて言う。

ヴィルヘルムスは彼女の話聞きながら内心驚いていた。人の姿をした精霊は確実に一等級以上だ。さらに“人に似ていた姿”というのは人間はめったに遭遇することがない古い種類の精霊で、等級も定まっていない。いまだにその存在が謎に包まれている。

「もしかしたら、死んだうちの両親の仕事が関係あるのかも。確か精霊に関わるものだったらしいから」

カップの中身をひとくち飲んで、ファムが言った。

「ご両親の？」

「うん」

「それは一体…」

興味をそそられたヴィルヘルムスが身を乗り出すようにして続けた。ようとした時、カゴの中で大人しくしていた精霊達が騒ぎ出した。それと共に、まばらに生えた木々がざわめくと共に轟音が響きわたり、周囲が突風に包まれる。

「な、何っこれ？」

突然の突風にファムが荷物が吹き飛ばされないよう抑えながら驚きの声をあげる。二人は強風の中で座っていられず、切り株から降りて地面へうずくまる。

這うようにしてヴィルヘルムスはファムに近寄り、風にあおられる黒髪をかき分けて彼女を守るように肩を抱く。そして感じるものがあり、彼は空を見上げた。

強風は吹き荒れているが空はどこまでも晴れ渡っており、あたたかそうな午後の光に満ちていた。そしてその中を何かの群れがゆったりと横切っていた。かなりの高度を飛んでいるようで一つ一つは指先よりも小さく、細部はよく見えないが大まかにだが様々な大きさや姿形をしているのがわかる。どうやら鳥や虫の群れではないようだ。

「あれは…もしや精霊？」

「ええ？ あんなに沢山いるのなんて、初めて見たわ！」

ヴィルヘルムスの声にファムも空を見上げて、吹き荒れる風にかき消されないように叫んで言う。

「もしかして…」

ヴィルヘルムスはそう言うときカゴの中で騒いでいた精霊達を外に

出した。三体とも威勢よく地面を駆け、突風にあおられるようにして空中に飛び出し、どんどん上空へ向かって飛んでいく。

「あの子達、あの群れに合流するつもりだったのね！」

豆粒よりも小さくなった精霊達は、上空の精霊の群れらしきものの所へ到達すると、そのまま川の流れのようにゆつくりとどこかへ向かって飛び去っていった。

精霊の群れが見えなくなるとだんだんと強風も弱くなり、しばらく経つと元の穏やかな丘に戻った。あたりは何事もなかったかのようになり、鳥の声さえ聞こえてきた。

しかしあたりの草花は折れ曲がり、地面には木の葉やファムの抱えていたカゴの中身が散らかっていることから先程の出来事が現実であったことがわかる。

「あれ：なんだったのかしら」

ファムは呆然とした様子でよろよろと切り株の上に座り直すと、風に煽られて前も後ろも分からない状態になっていた黒髪を一生懸命に手ぐしで整えはじめる。

ヴィルヘルムスは自身を落ち着けるためにゆつくりとした動きであたりに散った荷物を拾い集めつつ、先程見た光景を思い返す。

「精霊が集団で移動しているようでしたが……」

カゴに全てを戻し終わると、彼は精霊の集団が飛んできた方向を見た。

「あの方向には：緑閑国がありますね」

今更になってヴィルヘルムスはファムが保護していた小さな精霊の姿の特徴に気づいた。あの精霊達は皆くすんだ茶に近い赤色の身体をしていた。あれは緑閑国の精霊に当てはまる色だ。では緑閑国から来た精霊達だったのだろうか

群れの規模からいってもかなりの数の精霊がいたはずだ。まるで集団で移住するかのような規模だった。あの国で何か異変が起きているのだろうか？



「ぷふっ、あ、あはははは」

ヴィルヘルムスがじつと空の向こうを見つめて考え込んでいると、突然ファムが声を上げて笑い出した。見るとなにやら彼を見ながらお腹を押さえて笑っている。

「どうしました？」

「し、真剣な顔して、そ、その頭っ！ ふふふ」

涙目になりながらも笑い続けるファムが、苦勞しながらポケットから手鏡を取り出し、差し出してくる。大体予想はついていたが仕方なくヴィルヘルムスは受け取り、自分の顔を見た。

短めだがそこそ長さのある頭髮はてんでばらの方向を向いており、適当に切った藁束わいたばのような有様だった。手でなでつけ何とか戻そうとするがけっこんな時間突風に煽られ続けていたため、なかなか元に戻らない。何度整えても所々が飛び出してしまう。

「も、もどらない、なんて、あははは」

それがさらにファムの笑いのツボに入ったようで、咳き込みながらもさらに笑い続ける。あんまりに笑ったせいかく整えていた彼女の髪もばらけ始め、風に煽られた時より酷い状態になっているが、彼女は気にせず笑い続けていた。

「ふっ」

その光景に思わずヴィルヘルムスも吹き出してしまった。

「ふふ、はははは」

晴れ渡った青空の下、二人はしばらく笑い続けていた。

ようやく笑いが収まり、目元の涙を拭きながらファムが言った。

「あなたが声を上げて笑うの、初めて見た」

「そうですか？」

まだ余韻で笑いながらヴィルヘルムスは答えた。

「素敵な笑顔ね」

そう言っただけ彼女は嬉しそうに笑い、彼は今までで一番幸せな気持ち

ちになった。

「それじゃあ帰りましょうか…」

言葉が途切れ、一息つくとファムは立ち上がり、カゴを持ち上げて一歩先に歩き出す。

彼女が自分から離れたその瞬間、ヴィルヘルムスの身のうちに圧倒的な感情が押し寄せてきた。

「好きです」

ほとんど、彼の内側から自然に零れ落ちるかのように、言葉が出てきた。

## 7 草原の約束

思いがけず、勢いのままに出てきた言葉だったがヴィルヘルムスはこれ幸いとそのまま続けた。

「どうか私と付き合ってくださいませんか」

「あ、あの、ヴィルさん？」

先に歩き出そうとしていたファムはヴィルヘルムスの言葉に驚いて振り向いた姿勢のまま固まっていた。

ヴィルヘルムスはその顔に触れたくてたまらなくなったが、話を続けるために我慢した。

「いきなり、ど、どうしちゃったの？」

「どうもしてません」

「なんで私？ ふざけてるの？」

ファムは震えていた。それから一気に頬を赤らめ、泣きそうな顔になる。首をかしげながら笑おうとしているが、泣き顔に近い。

「ふざけていません。物凄く大真面目です」

ヴィルヘルムスが一步近づくと、ファムは一步後ずさる。

「だって、だって、あなた」

「ヴィルです」

さらに一步近づくと、また一步後ずさる。

「ヴィルさんは…」

「ヴィル、です」

彼女をまっすぐ見つめながら彼は強く言った。そう呼んで欲しかった。

「ヴィ、ヴィルは」

「私は私です。あなたもあなたでしょう？ ファム」

彼はゆっくりと、ファムと目を合わせたまま、だが確実に一歩ずつ距離をつめ、そして彼女をそつと腕の中に収めた。腰の後ろに手をあて、力を込めすぎないように慎重に引き寄せる。

「あなたの事が好きなんです。ファム、どうか恋人になってくれませんか」

彼女に落ち着いているように見えるように、震えそうになる声を必死に抑えながら彼は言う。

「もし嫌なら、この腕を振りほどいてください。そうすれば私は大人しくあなたの前から去ります。ただの他人に戻り、会うこともないでしょう」

「と、友達じゃだめなの？」

ファムはヴィルヘルムスの顔を見つめ、言う。

「駄目です。友人ではこうしてあなたの近くで、あなたに触れられない」

友人としてファムに対して一定の距離を保つ。それはヴィルヘルムスにとって耐えられそうにないことだった。それならばいつそ彼女から見えない距離まで引き下がり、遠くから見守りつつ改めて時を待つ事を選ぶ。

「さあ、どうしますか」

「うつ…」

ファムは下唇を噛み締めながら潤んだ瞳でヴィルヘルムスを見つめ、それから視線を彷徨わせ、触れるか触れないかどうかの距離にある彼の胸元と、自分の体との隙間を見つめる。

それはどのくらい時間だったのか分からないが、ヴィルヘルムスにとっては一生のうちで一番長く期待と不安を味わう時間だった。

最終的にファムはヴィルヘルムスの上着を掴み、額を彼の胸元へ押し付けた。

「…これは、受け入れてくれるということですか？」

「…」

「ファム？」

上から覗き込んだ彼女の耳は真っ赤だった。返事の代わりに上着をつかんだファムの手に入力が入る。

ヴィルヘルムスは安心と喜びに包まれながら彼女を深く抱きしめようとするが、その気配に気づいたのかファムは腕から抜け出すと、睨むかのようにまっすぐに彼を見つめる。

「い、いいい、いいわ！ 私、あ、あなたの恋人になってあげる！」  
ファムの顔は真っ赤で、声はうわずっていた。

「はい！」

対するヴィルヘルムスの返事は、彼自身も驚くほど明るく弾んだものだった。

「それで、約束をしましょ！」

そう言つとファムは目元に浮かんでいた涙を拭い、腕を組む。

「約束…ですか？」

「そうよ。お互いのどちらかが、もう無理だと思ったら別れること。その、事情とかそれぞれあるわけだし」

そう言いながら、ファムは驚きのあまり取り落としていたカゴを持ち上げ、再び歩き出す。ヴィルヘルムスはあわてて自分の鞆を拾い上げその後を追う。

「あなたが無理だと思うのはどういう時ですか？」

「い、忙しくなった時とか？ ほら、仕事で残業とかあるし」

「会えるまで待ちますよ」

彼女を待たせないよう、時間調整には全力をかけようと、彼は密かに自分に誓った。

「飽きちゃうとか？ 他に好きな相手ができたとか？」

「よそ見る暇なく、飽きさせないよう頑張ります」

ファムは早足で歩き続け、ヴィルヘルムスは必死に答える。お互い会話に夢中で余裕がなかったらしく、二人はいつの間にか帰る道を外れて何もない草原の真ん中に立っていた。

「な、なんでそつちばかり頑張る話になるのよ。あなたが私に飽きちゃう可能性だってあるんだから。その時はちゃんとやってよね？」  
ファムは振り返り口を尖らせヴィルヘルムスを軽く睨むが、その瞳はやさしさと、さみしさが含まれるものだった。

彼はたまらなくなつて、彼女に駆け寄ると今度こそ目一杯抱きしめた。

「あなたに飽きてしまう事なんてこの先ずっとあり得ません」  
ヴィルヘルムスは確信を持って言った。

会ったびに違う表情をして、その一瞬一瞬から目が離せなくなる人。いつもヴィルヘルムスに驚きと喜びを与えてくれる女性。彼にとって初めて目があつた瞬間から、彼女はただ一人の女性で、そしてまた自分が彼女のただ一人の男性になることを願った相手。

「愛しています。ファム」

そしてヴィルヘルムスはいつも触れたいと見つめていた彼女の唇に己のそれを寄せた。

## 7 草原の約束（後書き）

なんだかグッドエンディング。

後がいろいろあるのでアッサリくっついてもらいました。  
そして過去パートはもうすこし続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8911o/>

---

くろやみ国の女王

2011年11月27日22時32分発行